ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告66

富山城下町（とやまじょうかまち）遺跡主要部発掘調査報告書

— 西町南地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2014

西町南地区市街地再開発組合

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告66　富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書

正　誤　表

ページ・行	誤	正
目次・第５章・第１節	…（西町南地区再開発地区）…	…（西町南再開発地区）…
挿図目次・第73図	…から出土した出土した大型…	…から出土した大型…
挿図目次・第74図	…から出土した出土した大型…	…から出土した大型…
挿図目次・第83図	出土動物依存体	出土動物遺存体
挿表目次・第20表	測定資料及び処理	測定試料および
挿表目次・第38表	出土動物依存体集計表（貝類）	出土動物遺存体集計表（貝類）
挿表目次・第39表	出土動物依存体集計表（魚類）〔１〕	出土動物遺存体集計表（魚類）〔１〕
挿表目次・第40表	出土動物依存体集計表（魚類）〔２〕	出土動物遺存体集計表（魚類）〔２〕
挿表目次・第41表	出土動物依存体集計表（その他）	出土動物遺存体集計表（その他）
９ページ・13行目	…東側を試掘調査を実施し、…	…東側の試掘調査を実施し、…
10ページ・20行目	…PDF形式（X-1a;2001）で印刷所へ入稿し、…	…PDF形式（X-1a;2001）で入稿し、…
10ページ・36行目	一番街交差点…	一番町交差点…
11ページ・５行目	第Ⅲ層…（Hue10YR6/4）…	第Ⅲ層…（Hue10YR3/1）…
11ページ・第10図	Ⅱ　江戸時代整地層…シルト質細粒砂	Ⅱ　江戸時代整地層…細粒砂質シルト
12ページ・10行目	…宇野隆夫の分類…	…宇野隆夫氏の分類…
12ページ・39行目	…木製品（木簡、….	…木製品（木札、….
14ページ・14行目	ＳＥ03より古く、ＳＥ04・ＳＫ01…	ＳＥ03より古く、ＳＫ01…
14ページ・19行目	底板は0.64mである。	底板の直径は0.64mである。
14ページ・21行目	…下駄歯、樽、端材…	…下駄歯、樽、端材…
14ページ・27行目	井戸側は直径0.27m、…	井戸側は直径0.72m、…
14ページ・29行目	…木製品（木簡、….	…木製品（木札、….
14ページ・40行目	…ＳＤ01より古い。…	…ＳＤ01より新しい。…
16ページ・６行目	…、石製品（泥岩製砥石）、…	…、石製品（砂岩製砥石）、…
16ページ・11行目	…、石製品（緑色片岩製砥石）、…	…、石製品（砂岩製砥石）、…
20ページ・１行目	…木製品（木簡、….	…木製品（荷札、….
20ページ・16行目	…木製品（木簡、….	…木製品（木札、….
24ページ・１行目	…木製品（木簡、….	…木製品（木札、….
24ページ・５行目	ＳＤ02と同時期である。	ＳＤ01と同時期である。
27ページ・５行目	…〔大橋康二1989、九州陶磁学会〕…	…〔大橋康二1989、九州陶磁学会2000〕…
28ページ・５行目	23は青磁で龍泉窯の椀底部である	23は青磁で龍泉窯の椀底部である。
28ページ・22行目	102は乗燭の口縁部である。	102は秉燭の口縁部である。
34ページ・１行目	160は内外面におよび見込みに…	160は内外面および見込みに…
41ページ・３行目	…２文字をの記載する。	…２文字を記載する。
45ページ・29行目	294は段重である	294は段重である。
55ページ・19行目	ら蘆木と推測する。	ら簑木と推測する。
76ページ・第３表・102	乗燭	秉燭
84ページ・第15表・420	蘆木？	簑木？
84ページ・第15表・421	蘆木？	簑木？
84ページ・第15表・422	蘆木？	簑木？
84ページ・第15表・423	蘆木？	簑木？
84ページ・第15表・424	蘆木？	簑木？
151ページ・23行目	…詳細な編年的検討今後必要となる。	…詳細な編年的検討が今後必要となる。
報告書抄録 近世・主な遺物	…木製品（……木簡）、…	…木製品（……板材・木札）、…

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告66

富山城下町（とやまじょうかまち）遺跡主要部発掘調査報告書

— 西町南地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2014

西町南地区市街地再開発組合

富山市教育委員会

例　　言

1　本書は西町南地区再開発事業に伴う富山城下町遺跡主要部の発掘調査報告書である。

2　本調査は西町南地区再開発組合（理事長　河上彌一郎）の発注を受け、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理のもと、株式会社エイ・テックが実施した。

3　調査の概要は以下の通りである。

・試掘・工事立会　平成25年５月15日～同年６月５日

現 地 担 当 者　鹿島昌也、野垣好史、納屋内高史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）

・工事立会調査　平成25年５月24日～７月31日

監 理 担 当 者　野垣好史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター主任学芸員）

現地調査担当者　岡田一広

・現地発掘調査　平成25年７月１日～同年８月30日

・整　理　調　査　平成25年７月１日～平成26年７月15日

監 理 担 当 者　近藤顕子（富山市教育委員会埋蔵文化財センター主査学芸員）

現地調査担当者　岡田一広、後藤浩之（株式会社エイ・テック）

整理作業担当者　岡田一広、後藤浩之（株式会社エイ・テック）

4　現地調査から報告書の作成において、次の各氏より御指導・御協力を賜った。記して謝意を表します（順不同・敬称略）。

青山正昭、大川原竜一、大塚克史、木本秀樹、久世浩、久世洋子、小松愛子、坂口　悟
沢田岳志、志田孝二、鈴木景二、庄田知充、永井晃子、西井龍儀、久田正弘、藤田慎一
堀内秀樹、堀　宗夫、諸橋正輝
金沢市埋蔵文化財センター、東京大学埋蔵文化財調査室、富山市郷土博物館、富山市立図書館
有限会社岡本砺工業、清水建設・佐藤工業共同企業体

5　自然科学分析は株式会社パレオ・ラボ、納屋内高史に依頼し、その報文を第Ⅳ章に掲載した。

6　本書の執筆は第Ⅰ・Ⅱ章を鹿島、第Ⅲ章第４節の木製品を後藤、それ以外を岡田が行った。各々の文責は第Ⅰ～Ⅲ章は文末、第Ⅳ・Ⅴ章は文頭に記した。

7　本書の編集は近藤・岡田が担当した。

凡　　例

1　方位は座標北、水平水準は東京湾平均海面の海抜高である。

2　公共座標は平面直角座標、世界測地系（第Ⅶ系）を使用し、南北をＸ軸、東西をＹ軸とした。

3　遺構表記は以下の記号を用いた。

ＳＥ；井戸、ＳＫ；土坑、ＳＤ；溝、ＳＰ；ピット

4　土壌名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』（2003年版）に準拠している。

5　遺構実測図中の塗り表現は以下の通りである。

地山

6　遺物実測図中の塗り表現は以下の通りである。

〔土器類〕　油煙　朱彩・赤彩　青磁釉

〔木製品〕　焦げ目　朱彩・赤漆　黒漆

目　　次

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 5

第１節　地理的環境 …… 5
第２節　歴史的環境 …… 6

第Ⅲ章　調査の概要 …… 9

第１節　試掘・立会調査 …… 9
第２節　発掘調査の方法 …… 9
第３節　基本層序 …… 10
第４節　遺構 …… 12
第５節　遺物 …… 26

第Ⅳ章　自然科学分析 …… 87

第１節　はじめに …… 87
第２節　放射性炭素年代測定 …… 88
第３節　樹種同定・炭化樹種同定 …… 91
第４節　漆器の塗膜分析 …… 100
第５節　繊維状遺物同定 …… 105
第６節　大型植物遺体同定 …… 107
第７節　珪藻分析 …… 117
第８節　花粉分析とプラント・オパール分析 …… 123
第９節　寄生虫卵分析 …… 129
第10節　動物遺存体同定 …… 132
第11節　結語 …… 142

第Ⅴ章　総括 …… 144

第１節　富山城下町遺跡主要部（西町南地区再開発地区）出土木簡について …… 144
第２節　出土木簡に記された「久世伊平」について …… 146
第３節　まとめ …… 148

挿　図　目　次

第１図　昭和10年頃の宮市大丸百貨店（北から）…… 1
第２図　平成25年５月15日試掘（東から）…… 1
第３図　試掘・立会調査状況 …… 2
第４図　調査位置図（１／10,000）…… 3
第５図　遺跡保存箇所位置図（１／400）…… 3
第６図　立会調査位置図（１／400）…… 3
第７図　本発掘調査状況 …… 4
第８図　富山城下町遺跡主要部と周辺の遺跡（１／25,000）…… 7
第９図　グリッド配置図（１／500）…… 9
第10図　基本層序模式図（１／40）…… 11
第11図　ＳＥ01（１／40）…… 12
第12図　遺構全体図（１／200）…… 13
第13図　ＳＥ02・ＳＤ04（１／40）…… 15
第14図　ＳＥ03・04・ＳＫ01（１／40）…… 17
第15図　ＳＥ05・ＳＤ01・02〔１〕（１／50）…… 18
第16図　ＳＥ05・ＳＤ01・02〔２〕（１／40）…… 19
第17図　ＳＫ02～04・06・09（１／40）…… 21
第18図　ＳＫ05（１／25・１／40）…… 22
第19図　ＳＫ07・08・10・11（１／40）…… 23
第20図　ＳＤ03・05・06（１／40）…… 25
第21図　古代の土器類（１／３）…… 26
第22図　珠洲（１／３）…… 27
第23図　中国製陶磁器、土師器（１／３）…… 29
第24図　越中瀬戸〔１〕（１／３）…… 30
第25図　越中瀬戸〔２〕（１／３）…… 31
第26図　越中瀬戸〔３〕（１／３）…… 32
第27図　越中瀬戸〔４〕（１／３）…… 33
第28図　越中丸山（１／３）…… 34
第29図　伊万里〔１〕（１／３）…… 35
第30図　伊万里〔２〕（１／３）…… 36
第31図　伊万里〔３〕（１／３）…… 37
第32図　伊万里〔４〕（１／３）…… 38
第33図　伊万里〔５〕（１／３）…… 39
第34図　伊万里〔６〕（１／３）…… 40
第35図　唐津〔１〕（１／３）…… 42
第36図　唐津〔２〕（１／３・１／４）…… 43
第37図　京焼系、信楽（１／３）…… 44
第38図　瀬戸美濃〔１〕（１／３）…… 46
第39図　瀬戸美濃〔２〕、志野（１／３）…… 47
第40図　瓦質土器（１／４）…… 48
第41図　近代陶磁器（１／３）…… 49
第42図　土製品（１／２・１／３）…… 50
第43図　ガラス製品、石製品〔１〕（実大・１／３）…… 51
第44図　石製品〔２〕（１／３・１／６）…… 52
第45図　石製品〔３〕（１／２・１／４）…… 53
第46図　石製品〔４〕（１／10）…… 54
第47図　木製品〔１〕（１／３・１／４・１／６）…… 56
第48図　木製品〔２〕（１／３）…… 57
第49図　木製品〔３〕（１／３）…… 58
第50図　木製品〔４〕（１／３・１／６）…… 59
第51図　木製品〔５〕（１／３）…… 60

第52図　木製品〔6〕（1／6）…… 61
第53図　木製品〔7〕（1／3・1／4）…… 62
第54図　木製品〔8〕（実大・1／2・1／3）…… 63
第55図　木製品〔9〕（1／3・1／6）…… 64
第56図　木製品〔10〕（1／6・1／8）…… 65
第57図　木製品〔11〕（1／3・1／4）…… 66
第58図　木製品〔12〕（実大・1／2・1／3）…… 67
第59図　木製品〔13〕（1／2）…… 68
第60図　木製品〔14〕（1／2・1／3）…… 69
第61図　木製品〔15〕（1／10）…… 70
第62図　木製品〔16〕（1／10）…… 71
第63図　金属製品〔1〕（1／2・1／3）…… 72
第64図　金属製品〔2〕（実大・1／2）…… 73
第65図　暦年較正結果 …… 90
第66図　木製品および炭化材の顕微鏡写真〔1〕…… 97
第67図　木製品および炭化材の顕微鏡写真〔2〕…… 98
第68図　木製品および炭化材の顕微鏡写真〔3〕…… 99
第69図　漆器塗膜表面の赤外吸収スペクトル …… 102
第70図　漆製品の塗膜構造（a）と反射電子像（b）〔1〕…… 103
第71図　漆製品の塗膜構造（a）と反射電子像（b）〔2〕…… 104
第72図　富山城下町遺跡主要部出土の繊維状遺物の試料写真および光学顕微鏡写真 …… 106
第73図　富山城下町遺跡主要部から出土した出土した大型植物遺体〔1〕…… 115
第74図　富山城下町遺跡主要部から出土した出土した大型植物遺体〔2〕…… 116
第75図　堆積物中の珪藻化石分布図（主な分類群を表示）…… 121
第76図　堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真 …… 122
第77図　富山城下町遺跡主要部における花粉分布図〔1〕…… 124
第78図　富山城下町遺跡主要部における植物珪酸体分布図 …… 125
第79図　富山城下町遺跡主要部ＳＤ01から産出した花粉化石 …… 127
第80図　富山城下町遺跡主要部から産出した植物珪酸体 …… 128
第81図　富山城下町遺跡主要部における花粉分布図〔2〕…… 130
第82図　富山城下町遺跡主要部ＳＫ03から産出した寄生虫卵 …… 131
第83図　出土動物依存体 …… 141
第84図　明治時代と大正時代の富山西町古地図 …… 146
第85図　久世伊平に関する文字資料 …… 147
第86図　富山城下町遺跡主要部遺構変遷図（1／400）…… 149
第87図　井戸変遷図 …… 150

挿　表　目　次

第1表　土器類観察表〔1〕…… 74
第2表　土器類観察表〔2〕…… 75
第3表　土器類観察表〔3〕…… 76
第4表　土器類観察表〔4〕…… 77
第5表　土器類観察表〔5〕…… 78
第6表　土器類観察表〔6〕…… 79
第7表　土器類観察表〔7〕…… 80
第8表　土器類観察表〔8〕…… 81
第9表　土器類観察表〔9〕…… 82
第10表　土製品観察表 …… 82
第11表　ガラス製品観察表 …… 82
第12表　石製品観察表 …… 83
第13表　漆器（合子・椀）観察表 …… 83

第14表　木製品観察表〔1〕 …… 83
第15表　木製品観察表〔2〕 …… 84
第16表　木製品観察表〔3〕 …… 85
第17表　木製品観察表〔4〕 …… 86
第18表　金属製品観察表 …… 86
第19表　遺構別の分析資料一覧 …… 87
第20表　測定資料および処理 …… 88
第21表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 …… 89
第22表　器種別の樹種構成 …… 92
第23表　木製品の樹種同定結果 …… 96
第24表　炭化材の樹種同定結果 …… 96
第25表　分析対象一覧 …… 100
第26表　生漆の赤外吸収位置とその強度 …… 101
第27表　赤色塗膜層等のX線分析結果（mass%） …… 102
第28表　塗膜分析結果 …… 102
第29表　富山城下町遺跡主要部から出土した大型植物遺体〔1〕 …… 108
第30表　富山城下町遺跡主要部から出土した大型植物遺体〔2〕 …… 109
第31表　分析試料一覧 …… 117
第32表　堆積物中の珪藻化石産出表〔1〕 …… 119
第33表　堆積物中の珪藻化石産出表〔2〕 …… 120
第34表　分析試料一覧 …… 123
第35表　産出花粉胞子一覧 …… 124
第36表　試料1g当りのプラント・オパール個数 …… 125
第37表　寄生虫卵分析に用いた試量の計量値と寄生虫卵数 …… 129
第38表　出土動物依存体集計表（貝類） …… 138
第39表　出土動物依存体集計表（魚類）〔1〕 …… 139
第40表　出土動物依存体集計表（魚類）〔2〕 …… 140
第41表　出土動物依存体集計表（その他） …… 140
第42表　出土木簡一覧 …… 144

図　版　目　次

図版01　遺跡　米軍撮影空中写真
図版02　遺構　上層遺構全景（南西から）
　　上層遺構全景（上方から、上が北）
図版03　遺構　下層遺構全景（南西から）
　　下層遺構全景（上方から、上が北）
図版04　遺構　SE02土層（北から）
　　SE02完掘（北から）
　　SE02井戸側下段（北から）
　　SD04断面（西から）
　　SD04全景（南から）
　　SE03全景（南から）
　　SE04検出状況（北から）
　　SE04全景（南から）
図版05　遺構　SK03全景（南から）
　　SK03土層（南から）
　　SK05全景（東から）
　　SK05ザル出土状況（東から）
　　SD01全景（北から）
　　SD01土層（北から）
　　SE02・SD01土層（北から）
　　SD05全景（東から）
図版06　遺物　須恵器・青花・青磁・土師器・越中瀬戸
図版07　遺物　越中丸山・伊万里・唐津・京焼系・瀬戸美濃・瓦質土器
図版08　遺物　近代陶磁器類・土製品・ガラス製品
図版09　遺物　石製品
図版10　遺物　木製品〔1〕
図版11　遺物　木製品〔2〕
図版12　遺物　木製品〔3〕
図版13　遺物　木簡・赤外線撮影〔1〕
図版14　遺物　木簡・赤外線撮影〔2〕
図版15　遺物　金属製品

第Ⅰ章　調査の経過

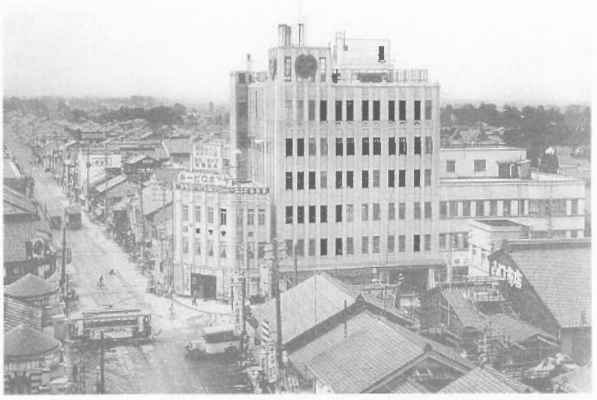
第１節　調査に至る経過

富山城下町遺跡主要部は、今回の富山市西町南地区第一種市街地再開発事業（以下、再開発事業と呼称）によって初めて確認された遺跡である。

平成22年１月に富山第一銀行が再開発事業地区で本店機能の整備を表明し、同月富山市が同地区での市立図書館本館、ガラス美術館等の整備を表明した。同年９月再開発事業の都市計画決定が告示され、平成24年２月に「西町南地区市街地再開発組合」（以下、再開発組合と呼称）の設立が認可された。同月、富山市都市再生整備課から事前協議を受けた。

富山市西町地内の再開発事業予定地は、埋蔵文化財包蔵地（総曲輪遺跡）に隣接した地区である。このことから都市再生整備課及び再開発事業事務局、設計コンサルタント（RIA･三四五共同企業体）、工事施工者（清水建設･佐藤工業共同企業体）、富山市教育委員会（以下市教委と略す）で協議した結果、着工後に遺跡の不時発見で工事が中断される事態を避けるため、既存の旧大和富山店（百貨店）地上部分撤去後の基礎撤去着手前に市教委埋蔵文化財センター職員立会いの下、基礎の深さと遺跡が所在していないかを確認するための試掘を行うことで合意に至った。

旧大和富山店は、昭和７年11月に木造３階建ての店舗（当時は宮市大丸）を新築、昭和９年12月に鉄筋コンクリート地上６階建ての店舗を増築、さらに昭和12年11月に地下１階地上８階建ての店舗を増築した。昭和９年に増築された６階建ての建物は、地下構造が無いことから基礎を支える杭以外の部分は、在来土が島状にそのまま残り、遺跡が所在している可能性が事前協議の中で指摘されていた。



第１図　昭和10年頃の宮市大丸百貨店（北から）
（写真提供；富山市郷土博物館）

平成25年５月15日、旧建物地上部分撤去後に試掘を実施した結果、基礎で囲われた在来土部分から江戸時代の遺構や近世の陶磁器・木製品などの遺物を確認した。この結果を受けて、引き続き在来土が残存する部分の試掘・工事立会調査を実施し、遺跡の所在状況を確認することとした。

あわせて、同年５月29日付けで、事業主体者である西町南地区市街地再開発組合（理事長：河上彌一郎）から文化財保護法第96条に基づく遺跡の発見届が提出された。

同年６月５日まで実施した試掘・工事立会で、工事対象面積1,948.43㎡のうち540㎡に遺跡の所在を確認した。厚さ1.0～1.5mの造成土の下に厚さ20～45cmの江戸時代の遺物包含層を確認

第２図　平成25年５月15日試掘（東から）

し、その下に江戸時代の穴や溝、井戸などの遺構を検出した。さらに、その下に戦国時代以前の遺物包含層があり、その下に戦国時代以前の遺構面を検出した。

出土遺物には平安時代の須恵器や室町～戦国時代の珠洲焼・中世土師器・越中瀬戸、肥前などの近世陶磁器・木製品（井戸枠・漆器・木簡など）等がある。

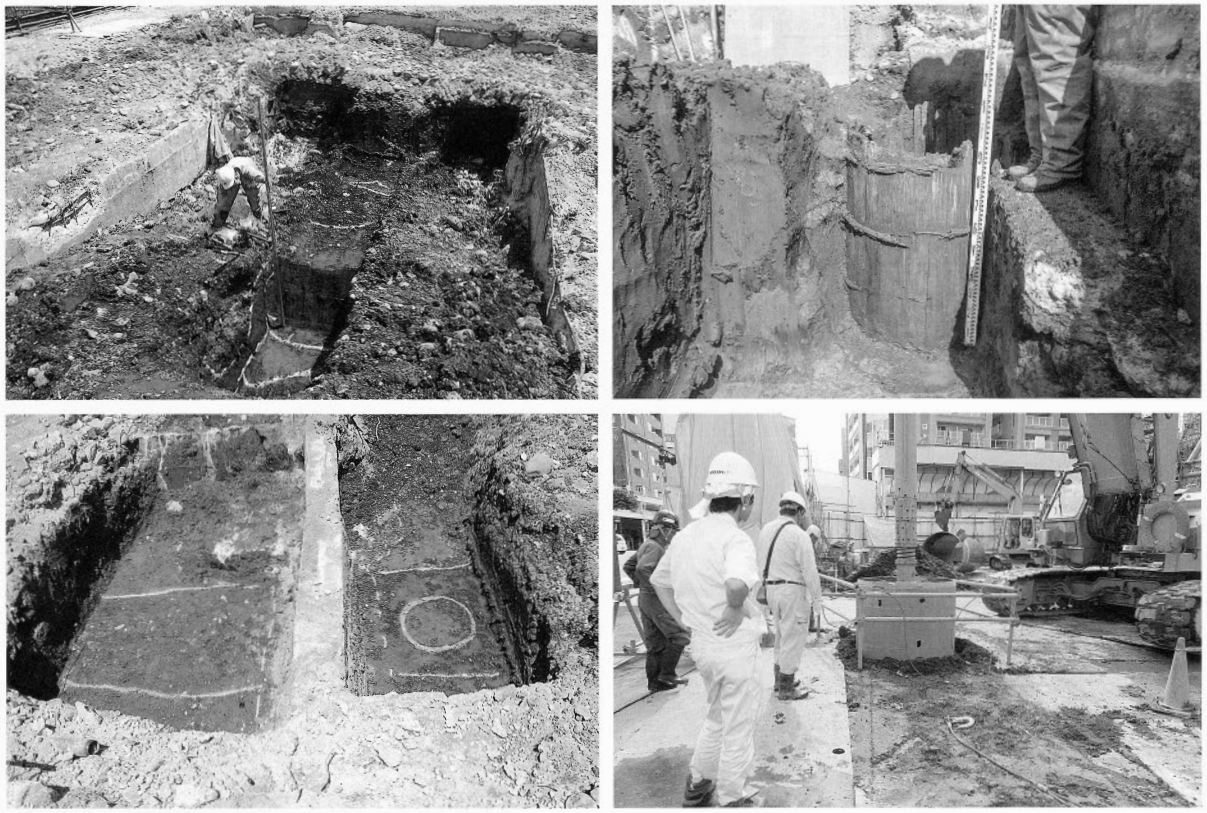
この結果を受けて、７月11日付けで埋蔵文化財包蔵地「（仮称）富山城下町遺跡主要部」（市No.2011048）の新規追加登録及び「総曲輪遺跡」の一部範囲変更を県教育委員会宛に通知した。包蔵地の範囲は、富山市西町、総曲輪３丁目、一番町、越前町、旅籠町、平吹町、桃井町にまたがる61,600㎡とした〔第８図〕。

①　工事立会調査

旧建物のコンクリート基礎撤去及び新建物建設に伴う改良杭打設が予定されていたため、市教委と再開発組合事務局が協議を重ねた結果、平成25年５月24日から７月31日までの内15日間、民間発掘会社に工事立会調査業務を委託することとした。調査は株式会社エイ・テックが受託し実施し、市教委が監理を行った。

旧建物のコンクリート基礎撤去に伴う工事立会調査では、江戸時代遺構面に溝や井戸を検出し、近世陶磁器類や木製品が出土した。あわせて下層に戦国時代以前の遺物包含層を確認した。

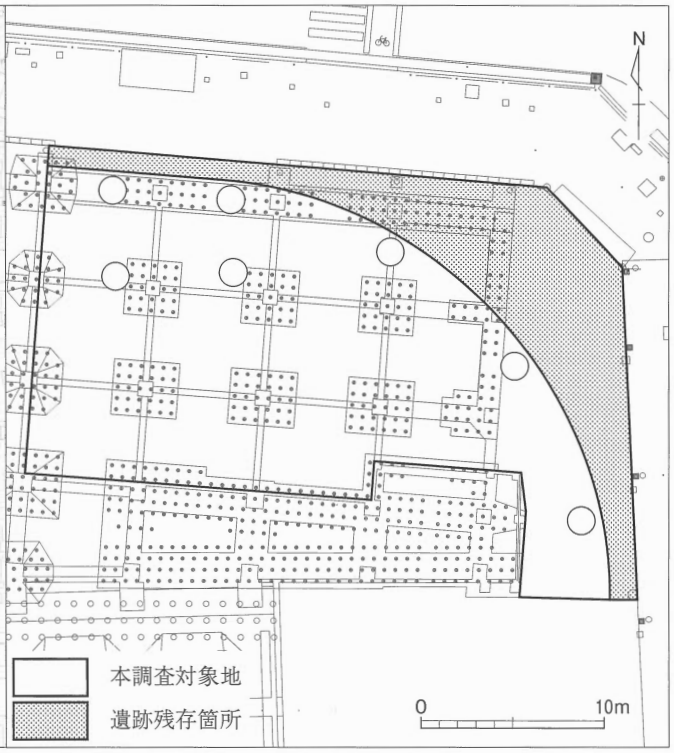
７本の改良杭打設に伴う工事立会調査では、杭の径が1.5mと狭いため面的な遺構の検出はできなかったが、近世陶磁器類や戦国以前の遺物包含層から中世土師器などが出土した。一部には１ｍを超



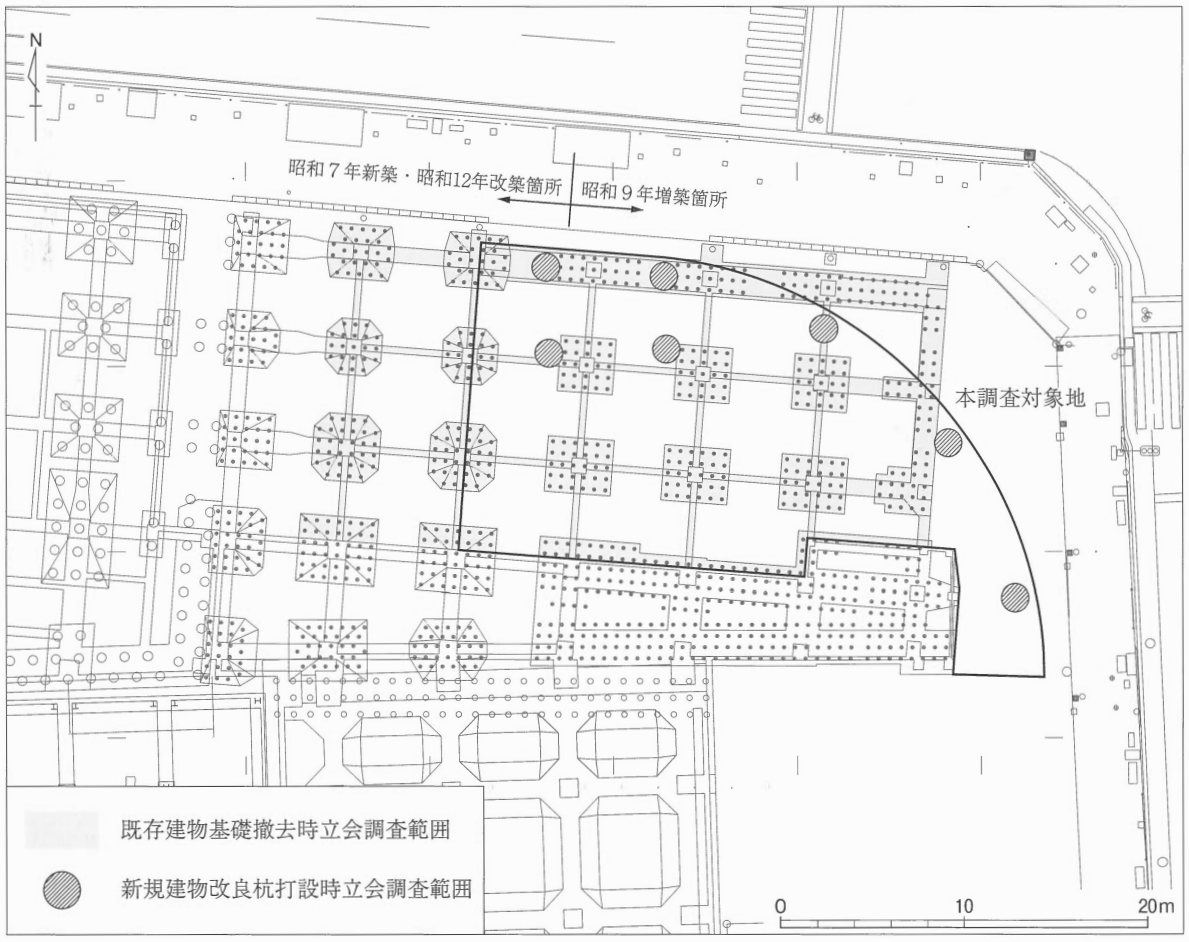
左上；遺構検出状況（試掘）
左下；遺構検出状況（立会調査）
右上；井戸ＳＥ01検出状況（立会調査）
右下；改良杭打設時立会調査

第３図　試掘・立会調査状況

第４図　調査位置図（１／10,000）



第５図　遺跡保存箇所位置図（１／400）



第６図　立会調査位置図（１／400）

える黒色土の堆積を確認し、溝などの遺構があることが推測された。

②　発掘調査

試掘・工事立会調査の結果を受けて、遺跡の所在が確認された540㎡のうち、歩道部分として保存される160㎡を除く380㎡が、再開発ビル建設に伴い破壊されることから、記録保存のための発掘調査を実施する必要が生じた。協議の結果、380㎡の面積を対象に民間発掘会社に委託して発掘調査を施行することで合意に至った。

平成25年６月５日付けで再開発組合理事長から埋蔵文化財発掘調査業務の監理依頼文が富山市教育委員会教育長宛に提出された。

再開発事業組合事務局において入札を実施し、株式会社エイ・テックが受託することとなった。発掘調査の方針などの合意事項について再開発事業組合及び株式会社エイ・テック、富山市教育委員会の三者で平成25年７月１日付けで協定を締結し、発掘調査に着手した。

発掘調査業務は、整理調査、出土遺物保存処理の期間も含め、平成25年７月１日から平成26年７月15日までの業務期間とした。

（鹿島）

左上；重機掘削状況
左下；遺構掘削状況
右上；下層遺構検出状況
右下；ラジコンヘリコプター撮影

第７図　本発掘調査状況

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

富山城は、富山市本丸地内、旧神通川と鼬川の合流点西側にあり、標高10mの自然堤防上に立地する。本丸や西ノ丸の位置する富山城址公園には、博物館や美術館が置かれ、公園内は富山市によって富山城址公園整備事業が進められている。その他の二ノ丸や三ノ丸、東出丸とその周辺の城下町一帯は、明治時代以降市街地化が進んでいる。

富山城の地盤は、西ノ丸北西で平成24年度に実施したボーリング調査で採取した試料土や立ち木のサンプルを分析した結果、約4,800年前の縄文時代中期以前から河川の氾濫による自然堆積を繰り返してきた湿地帯であったと推測された〔富山市教委ほか2012〕。

旧神通川本流は、江戸時代以前には現在の富山城跡北側を流れる松川や呉羽丘陵東麓を流れる井田川であったと考えられ、富山城西側から北側へ蛇行し東方向へ流れていた。東側は神通川の支流である鼬川が流れ、富山城は三方向を川で囲まれた要害の地に立地する平城であった。旧神通川は、蛇行していたため、洪水の被害が度々生じたことから、明治から昭和初期にかけて流れを直線的に変える馳越工事が行われた。この工事により、城の北側を流れていた河道は廃川地となって埋め立てられ、現在の県庁や市役所が建ち県の中心となった。旧河道は規模を縮小して、現在松川としてその名残をとどめている。

富山城下町は大きくは常願寺川扇状地に立地する。立山連峰や常願寺川水系からの伏流水が扇状地の扇端部に位置する富山城下町付近で湧水し、周辺の発掘調査でも多くの井戸跡が検出されている。神通川や熊野川右岸の富山市域の大部分は常願寺川地下水域である。

鼬川は常願寺川が水源となっているが、辰巳町２丁目付近から自然流路が意図的に変えられて南北方向に流れる。このことは、辰巳町より西側が江戸時代あるいはそれ以前に町屋形成もしくは城下町整備範囲に組み込まれた証となると理解される。

一方、城下町の南を画する四ッ谷川は富山市太郎丸付近に端を発し、北行して富山市星井町付近で西に折れ、冷川とともに松川に合流する。この四ッ谷川（四ッ屋川・芋田川・惣川とも記される）は、『万治年間富山旧市街図』には外郭防御線として土塁とともに描かれ、城下町の南の防御線として重視されていた。その川が江戸時代前期以前には星井町付近から西に折れず、北方向に流れていたことが県立富山高校の生徒達の調査で推測されていた〔國香1995〕。平成18年の総曲輪フェリオ地区や平成20～21年の市内電車環状線化に伴う平和通りの発掘調査によって、一番町交差点の東側で、南北方向の幅約20mの河川跡が埋められた遺構が確認された（北日本新聞2011年９月６日付１面『総曲輪に幅20mの川』）。この川の流れを変えることは、富山藩にとって重要な城下町の南の防御線となった。この四ッ谷川などの小河川の小高い自然堤防を利用し、富山城下町が形成されていったと推測される。

さらに、調査地に北面する現在の平和通りは江戸時代の北陸街道と重なり、西町・太田口通りを起点とする飛騨街道が交わる交通の要衝でもあった。海に面した越中の産物が神通川や鼬川を利用して富山城下町に集まり、これらの街道を通って飛騨方面や各地に運ばれた。富山城下町は、水陸交通の要衝に位置していたことがうかがえる。

（鹿島）

第２節　歴史的環境

古代以前

富山城や城下町の位置する富山市中心部は、明治以降の市街地化が進んでおり、江戸時代以前の様相は近年まではっきりしていなかった。

平成14年頃から富山城址公園整備事業や中心市街地再開発事業に先立ち実施された試掘調査等によって、現地表下40cm～100cmよりも下に江戸時代以前の遺跡が良好に残っている箇所が次々と見つかった。その中心は、江戸時代以降の富山城や城下町に関連する遺構や遺物であるが、場所によっては、縄文時代中期～中世期の遺物や遺構が確認された〔林寺1992〕。このため、平成22年に富山城・城下町の下層に広がる中世以前の遺跡を「総曲輪遺跡」として、江戸時代以降の「富山城跡」と区別し、『富山市遺跡地図』に登載された。

平成14年からの城址公園整備に伴う調査で、古代の遺物や遺構が見つかっており、中でも平成22年に富山城西ノ丸地区で「宅持」と墨書された奈良時代後期の須恵器が出土〔鹿島2011〕し注目を集めた。平成16年の西町・総曲輪地区市街地再開発事業地内の調査においても奈良～平安時代の須恵器や土師器の出土する遺構がみつかるなど、富山城・城下町の下層には、古代の集落や官衙関連遺跡があったことが明らかになりつつある。

中世

「富山」の地名の所見は南北朝期の応永５（1398）年５月の吉見詮頼寄進状で「越中国外山郷」と表記されている。また、同年12月の越中守護畠山基国遵行状に「越中国□□保内富山郷太田小次□入道跡」とあり、南北朝期の富山郷が太田保内に所属したことがわかる。富山郷の範囲は、鎌倉期の史料〔金沢文庫文書〕によると布瀬や赤田を含まず、西田地方の神明宮（現在の千石町６丁目の神明社）と東田地方の神明社（千歳神社）の間とされ、江戸時代の富山町の範囲と一致しているとの見方もある〔久保1996〕。その一方で田地方は元々は田畑であったところが町化したことから、ある時期までの富山は山王社（日枝神社）までであったとの意見もある〔加藤2006〕。近年、千石町遺跡の試掘調査で、室町期以降の中世集落の存在が推測された〔鹿島2013〕。今後の調査の蓄積によって中世富山郷の実態の解明が待たれる。

富山城を最初に築城したのは、越中守護代神保長職（『越登賀三州誌』によれば神保氏の家臣水越勝重）と伝わる。神保氏による中世富山城築城年代には諸説あるが、天文12（1543）年頃が有力である。その位置については、城と城下について描かれた往来物『富山之記』〔山田孝雄本〕の内容から、星井町以西に所在したとする説と現在の富山城の位置であったとする２説があった。近年の富山城跡の試掘調査で現在の城址公園に16世紀前半の堀など戦国期の城郭遺構、すなわち中世富山城が存在した可能性が高くなった〔富山市教委2004、加藤・古川2004〕。

永禄３（1560）年、上杉謙信の越中侵攻により、神保氏は増山城へと逃れた。その後、富山城は上杉氏、椎名氏、一向一揆らによる争奪の場となる。神保長職の後を継いで織田家の後押しを受けた神保長住の手により、天正６（1578）年富山城を神保氏が取り戻した。しかし、その長住は家臣が上杉氏に通じて幽閉され、富山城を奪われるが、かねてから北陸進出を企てていた織田信長が富山城を奪回し、その命で天正10年には佐々成政が富山城を治めることとなった。成政は、水害対策として常願寺川の馬瀬口に堤防「佐々堤」を築き、治水に努めた。富山城下の整備も進め、周囲に土塁や堀もめぐらせたようで、江戸期の富山城下の堀端町や土居原町などの町名は当時の総構えとの関連が指摘されている。

1．富山城下町遺跡主要部、2．総曲輪遺跡、3．富山城跡、4．千石町遺跡、5．相生町遺跡、6．大泉遺跡、7．長岡杉林遺跡
8．富山藩主前田家墓所、9．北代一万歩遺跡、10. 長岡新遺跡、11. 杉坂古墳群、12. 長慶寺古墳、13. 呉羽山古墳、14. 番神山横穴墓
15. 奥田神社遺跡、16. 窪本町遺跡、17. 山室西田遺跡、18. 今泉城跡

第８図　富山城下町遺跡主要部と周辺の遺跡（１／25,000）

本能寺の変後の天正13年には羽柴秀吉が大軍を率いて越中に出陣し、成政は降参し富山城は破却された。秀吉は成政に新川郡のみを安堵し、残り三郡は前田利長に与えた。

近世

近世の越中は加賀藩とその支藩富山藩により支配された。慶長２（1597）年に前田利長が入城したが慶長14年の大火で城下が焼失し、利長は高岡城に移った。寛永16（1639）年加賀藩より分藩され富山藩（10万石）が成立し、初代藩主前田利次が入った。利次は分藩の際、幕府から百塚での築城の許可を得ていたが、財政的に困難なため断念し、領地替えにより加賀藩領だった富山町を得て、寛文元（1661）年から富山城と城下町建設に着手した。

富山城は藩主御殿の本丸・二ノ丸・西ノ丸・東ノ出丸・家老の武家屋敷や蔵がある三ノ丸・総構からなる。延宝３（1675）年富山大火で類焼したが復旧され、嘉永２（1849）年には東ノ出丸に10代藩主利保の隠居所として千歳御殿が作られ薬草園も開かれた。武家屋敷は三ノ丸の他に外堀の外周や城下町の南西に集中させた。

寛文期の富山城の改修と並行して城下町の町割りも行われた。城の東部と南の北陸街道沿いに町屋（商人町と職人町）を配置し、南東部に新しく寺町を造成した。

北陸街道は、それまで城の北側を通っていたが、城の南西を迂回するルートになった。この際、城の南西の北陸街道沿いには人馬継立問屋や旅籠屋が置かれた旅籠町も新設された。今回の発掘調査区は、この旅籠町から東に向かい、越前町－一番町－二番町－西町－中町－東四十物町と続く北陸街道沿いの西町地内である。この西町には古くから藩の御触書や定書が掲示された高札場が設けられ、飛騨街道の起点にもなる交通の要衝でもあった。

越中と飛騨は古くから神通川をルートとして人的・物的にも多様の交流があった。この飛騨街道（「ブリ街道」とも呼ばれる）を通って、越中からは米・塩・酒・生魚・塩魚・干魚・鮨・貝・海藻などが運ばれ、飛騨からは材木・板などが運ばれた〔米原2001a〕。飛越国境の山間の村に運ばれた背景には、当時急速に開かれた吉野・長棟・片懸などの鉱山開発への物資の輸送によって始められたと考えられている。

富山藩分藩後の産業政策として、旧加賀藩時代の流通機構から脱却して、新たに富山城下中心の流通機構の整備を目指した。越中の産業は、地域の特性を生かした地場産業と諸国への行商に大別でき、行商としての富山売薬は現在に至るまで連綿と続く県の基幹産業となった。さらに前田利保（10代藩主）は天災が続く混乱の中、産物方役所を設け、殖産興業に力を入れた。越中丸山焼などの陶器生産や本草学の知識を生かした薬草の栽培事業などを振興した。

一方、町人文化として、富山城下町では、全国11座の一つとして幕府公認の常設の芝居小屋が設けられ、江戸や上方の役者による興業も行われた。加賀・越後・飛騨などの近隣諸国からの観客も多く富山の町は一大文化都市の景観を呈していたようである。

（鹿島）

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　試掘・立会調査

旧大和富山店の地下に布設しているコンクリート製の基礎を解体するにあたって、平成25年５月15日に富山市教育委員会が試掘を実施した。その結果、在来土を確認し、江戸時代の遺構・遺物が出土したため、５月17日以降に基礎を解体する際に富山市教育委員会が工事立会を実施することとした。富山市教育委員会が工事立会した実働は延べ６日である。

５月17日には井戸ＳＥ01を検出し、記録・取り上げを実施した。５月24日から立会調査を株式会社エイ・テックが受託し引き続き実施した。５月24日の立会調査では井戸ＳＥ02を検出し、影響しないように基礎の解体をした後埋め戻し、詳細調査を本発掘調査実施時にすることとした。解体工事に伴う立会調査は６月５日で完了した。

６月３日に富山市教育委員会が、旧大和富山店より東側を試掘調査を実施し、在来土および江戸時代の遺構・遺物を確認した。また、金屋石製の井戸ＳＥ03は現地表面で検出した。

上記の立会・試掘調査の結果から、西側の昭和７年に宮市大丸富山出張所（旧大和富山店の前身）として３階建ての建物を建築し、昭和12年に鉄筋コンクリート造りに改築した箇所は地階建設等に伴い造成しており遺構があまり遺存しておらず、昭和９年に増築した箇所および旧大和富山店より東側の箇所を本発掘調査対象地とした。

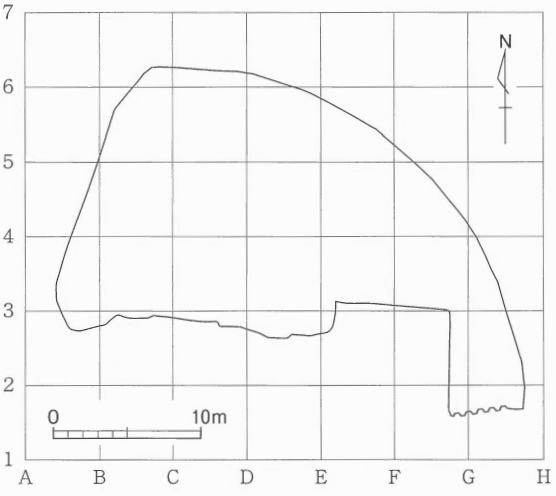
７月３日から本調査対象箇所で西町南地区再開発ビルの新築建物（以下、再開発ビル）に伴う７本の改良杭打設に伴う立会調査を実施した。株式会社エイ・テックが立会調査した実働は延べ14日間である。

第２節　発掘調査の方法

本発掘調査の調査区は、江戸時代の整地層である第Ⅱ層が確認された旧大和富山店の昭和９年度増築箇所より東側の西町南地区再開発ビル敷地内を対象とした。調査区の旧大和富山店の鉄筋コンクリート製基礎を除去し、調査区南側は既存建物のコンクリート製壁を再開発ビル建設にも利用するため残存する。調査区の東から北側にかけては工事施工者によりSMW工法による遮水性山留め壁が施工された。調査区南東側の残存している旧大和建物と遮水性山留め壁の間にシートパイルによる山留めを７月24日に実施した。

７月25日からシートパイル側より重機で表土掘削を実施した。重機掘削の排土はダンプカーにより場外へ搬出した。また、旧大和富山店の基礎除去後に埋め戻した土も同時に搬出し、８月３日に完了した。

グリッド杭は再開発ビル工事に伴う基準点（世界測地系）を元に設定し、座標系は世界測地系で平面直角座標系第Ⅶ系（原点は北緯36° 00′ 00″，



第９図　グリッド配置図（１／500）

東経137° 10′ 00″ ）に合わせた。グリッド杭は５ｍ間隔で南西側を基準とし、南北軸を数字、東西軸をアルファベットで表し、その交点で表記した。Ａ１の座標はＸ＝76,380、Ｙ＝4,330である。

発掘調査は、第Ⅱ層上面（上層）と地山である第Ⅳ層上面（下層）の２面調査を実施した。

上層遺構の調査は、７月30日から遺構検出・遺構掘削を順次実施した。８月10日に１回目のラジコンヘリコプターによる測量用俯瞰写真および全景を撮影した。

下層の調査のため、第Ⅱ層を８月20日にバックホウで除去し、引き続き古代から近世の遺物を包含する第Ⅲ層の掘削除去し、第Ⅳ層上面で下層遺構の検出を実施した。

ＳＫ05上面でザルを検出し、協議の結果、写真等の記録後発泡ウレタンで保護し土ごと取り上げ、保存処理を実施することとした。ザルの保存処理は、ザル及びその周辺の土をクリーニングした後、アクリル樹脂（パラロイドＢ72）を塗布した。

８月29日に２回目のラジコンヘリコプターによる測量用俯瞰写真および全景を撮影した。その後、井戸側取り上げ等の作業を実施し、８月30日にシートパイル撤去および道具等の搬出を実施し現地調査を終了した。

写真撮影は現地調査ではブローニー判（カラーリバーサルフィルム・白黒フィルム）、35㎜判フィルムカメラ（白黒フィルム）およびAPS-Cサイズの一眼レフデジタルカメラ（有効画素数1,230万画素）を使用した。遺物写真はデジタルパック式一眼レフカメラ（有効画素数2,130万画素）で撮影を実施した。

整理調査は現地発掘調査と同時に遺物洗浄、注記および各種台帳等作成を実施した。遺物は手実測し、報告書作成はAdobe® Criative Suite®でデジタルトレース・デジタル写真現像・レイアウト等を実施し印刷所にはPDF型式（X-1a;2001）で印刷所へ入稿し、平成26年３月31日に刊行した。

自然科学分析は、各遺構から土嚢袋２～10袋程度サンプリングし、この内花粉・珪藻・寄生虫卵・プラントオパール分析を実施するものはフィルムケースでサンプルを取り出し、それ以外の土壌はすべて、フローテーション法にて土壌洗浄した。この土壌洗浄によって確認した種実等の大型植物遺体同定、骨・貝殻等の動物遺体同定、炭化材の樹種同定をそれぞれ実施した。また、井戸の導水管である竹から放射性炭素年代測定、各種木製品の樹種同定、ＳＫ05から出土した繊維を微細物同定、漆器の塗膜分析を実施した。

木製品保存処理は糖アルコール含浸法で実施した。また、木簡等の墨書された木製品は、デジタルパック式一眼レフカメラ（有効画素数2,130万画素）で赤外線撮影を実施した。

金属製品保存処理は、表面の錆をクリーニングし脱塩処理した後アクリル樹脂（パラロイドＢ72）を減圧含浸した。

整理調査は保存処理の終了をもって平成26年７月15日に完了した。

第３節　基本層序

調査区は、標高約11.0ｍの沖積平野上に立地する。調査区は西町交差点の南西角に位置し、西側の一番街交差点方向に向かって低くなる。両交差点の比高差は約2.9ｍを測る。

旧大和富山店の基礎は、第Ⅱ層上面から矢板を打ち込み、第Ⅳ層上面まで土を除去した後、直径約20㎝、長さ約６ｍのマツ製の杭を打ち込み、その上にコンクリート製の柱および地中梁を構築する。この旧大和富山店の基礎の影響がない箇所で、第Ⅱ・Ⅲ層が確認された。また旧大和富山店建屋より東側は約１ｍの第Ⅰ層が堆積し、その下には第Ⅱ層が遺存する。

基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層；戦前～現代整地層　褐灰色砂質シルト（Hue10YR5/1）。

第Ⅱ層；江戸時代整地層　灰黄褐色細粒砂質シルト（Hue10YR4/2）。18世紀から19世紀にかけての整地層。

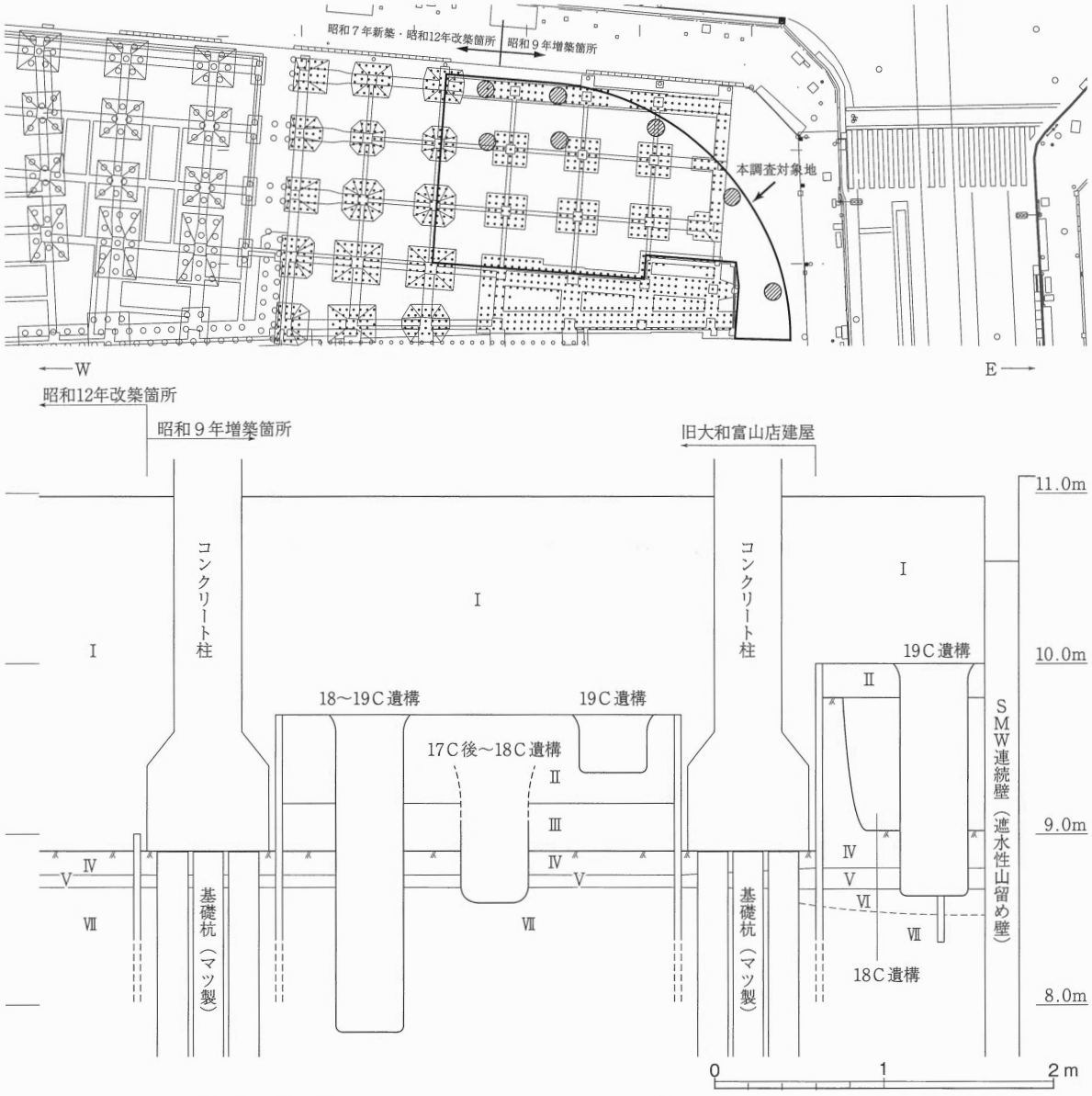
第Ⅲ層；遺物包含層　黒褐色細粒砂質シルト（Hue10YR6/4）。古代から江戸時代の遺物を含む。

第Ⅳ層；地山　灰白色細粒砂質シルト（Hue10YR7/1）。

第Ⅴ層；地山　黒褐色細粒砂質シルト（Hue10YR3/1）。

第Ⅵ層；地山　褐灰色粘土（10YR5/1）。旧大和富山店建屋を境に東側に堆積する。

第Ⅶ層；地山　灰白色細粒砂質シルト（10YR7/1）。帯水層で井戸はこの層まで掘り込む。



Ⅰ	戦前～現代整地層	10YR5/1　褐灰色砂質シルト	Ⅴ	地山	10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト
Ⅱ	江戸時代整地層	10YR4/2　灰黄褐色シルト質細粒砂	Ⅵ	地山	10YR5/1　褐灰色粘土
Ⅲ	遺物包含層	10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト（古代～江戸時代）	Ⅶ	地山	10YR7/1　灰白色細粒砂質シルト
Ⅳ	地山	10YR7/1　灰白色細粒砂質シルト			

第10図　基本層序模式図（１／40）

第４節　遺構

遺構検出は、第Ⅱ層上面（以下、上層）と第Ⅳ層上面（以下、下層）の２面調査を実施した。上層遺構は、旧大和富山店の跡地では基礎とその解体で破壊されず島状に残存する。それより東側では全面で検出した。下層遺構は約40cm堆積する第Ⅱ・Ⅲ層を除去した第Ⅳ層上面で検出した。第Ⅳ層上面は旧大和富山店の基礎杭の上面で、基礎杭の箇所とその打設の際に打ち込んだ矢板の内側は攪乱され、遺構は検出できなかった。

遺構は、井戸・土坑・溝・ピットを検出した。特に土坑には当初は井戸として利用し、その後、井戸側を取り去り廃棄土坑として転用したものもある。今回は、木製あるいは石製の井戸側があるものを井戸とし、廃棄土坑に転用したものは土坑として報告する。なお、井戸構造については宇野隆夫の分類〔宇野1982〕による。

１．上層遺構

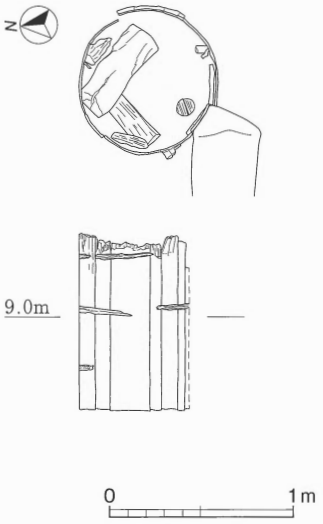
上層では、18世紀代から19世紀代にかけての遺構を検出した。

（１）井戸

ＳＥ01（第11図）

立会調査時、調査区の中央部、グリッド（C5・C6）区で検出した。井戸構造は桶積上げ井戸で、井戸側は直径0.76m、高さ0.94mである。旧大和富山店の基礎は当遺構を避けてコンクリート基礎を構築しており、旧大和富山店建設工事時に当遺構が確認されたものと推定できる。

出土遺物は、伊万里、京焼系、瀬戸美濃、瓦質土器、木製品（漆器合子・曲物底板・部材・用途不明品）がある。



第11図　ＳＥ01（１／40）

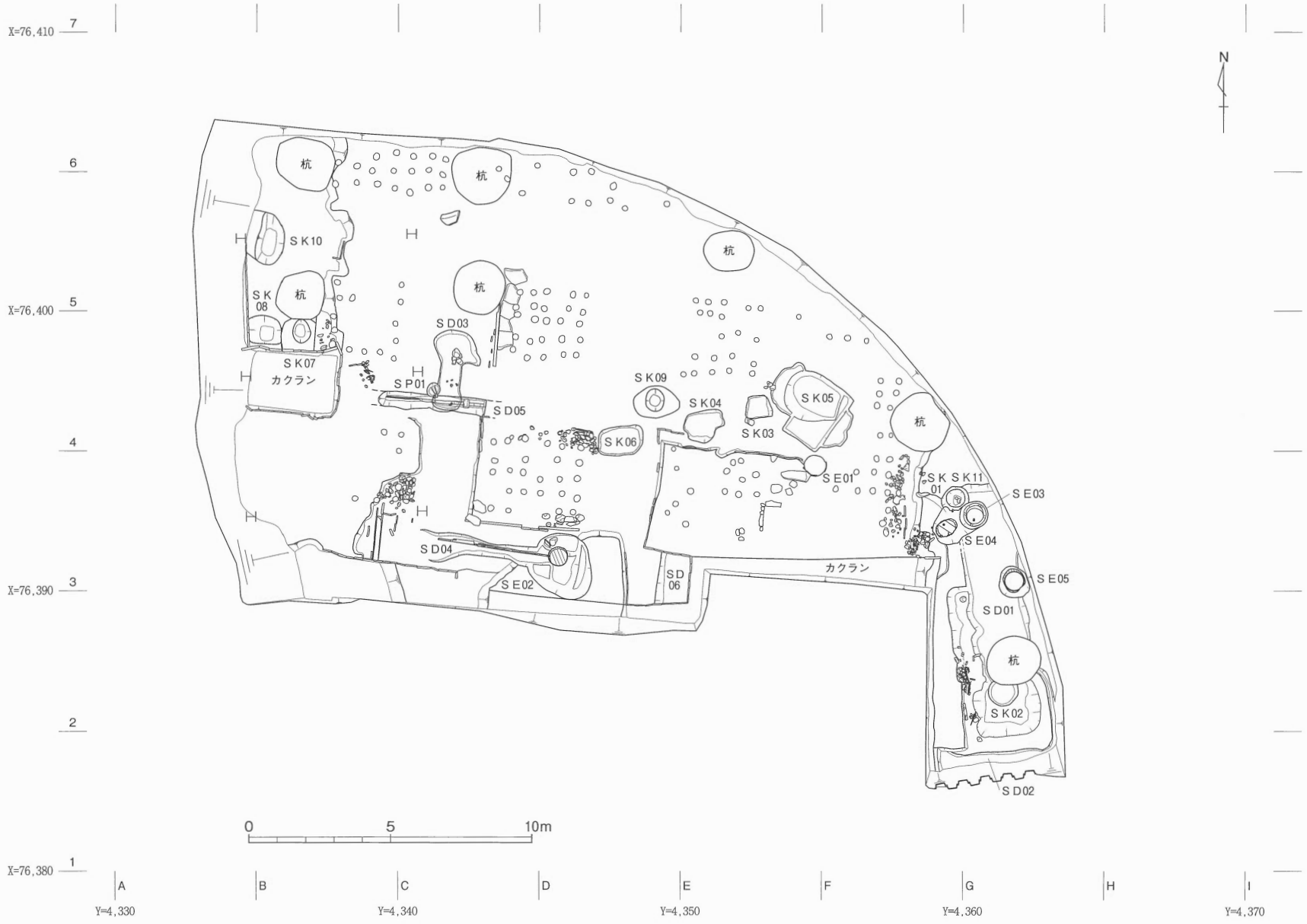
ＳＥ02（第13図）

調査区の南側、グリッド（C3・D3）区で検出した。井戸構造は２段の桶積上げ井戸で、竹製の導水管（ＳＤ04）が西側方向に延びる。

掘り方は平面形が円形で、規模が直径2.40m、深さ1.80mで第Ⅵ層まで掘削する。西側と東側を階段状に掘り込む。西側には、導水管設置後に埋め戻して設置したと推測される人頭大の石と板材で、簡易的な土留めをする。

井戸側は直径0.76m、組み合わせた高さは1.78mで上段の高さは0.72m、下段の高さは1.20mである。西側と南側の２箇所に導水用の穴が開く。西側の穴は緩く木製の栓がしてあり、この栓の位置まで褐灰色中粒砂（２層）が堆積し、それより上部は廃棄時に埋められた黒色細粒砂（１層）であることから、この栓は砂利等の混入を防ぐためのもので、導水穴まで砂が堆積したため井戸を廃棄されたと推測する。２層をすべて採取し土壌洗浄を実施した結果、植物・動物遺存体等を採取した（第Ⅳ章参照）。

出土遺物は、土師器、須恵器、珠洲、越中瀬戸、伊万里、唐津、瀬戸美濃、京焼系、信楽、不明炻器、瓦質土器、土製品（墨書陶器片、土人形）、石製品（粘板岩製硯、緑色凝灰岩製火鉢、砂岩製砥石、花崗岩製石臼、部品）、木製品（木簡、下駄、刷毛、杭、箸、刃物柄、漆器椀、合子、曲物、桶・樽類、底板、栓、柄杓柄、脚、楔、端材、部材、板材、棒状品、用途不明品）、金属製品（鉄製



第12図　遺構全体図（1／200）

釘、鉄製包丁、真鍮製針金、真鍮製鋲）、製鉄関連遺物（椀形滓、鉄滓、炉壁）がある。

ＳＥ03（第14図）

調査区の東側、グリッド（F3・G3）区で検出した。井戸構造は４段の緑色凝灰岩製井戸側積上げ井戸で、底には自噴用の竹製の導水管を垂直に埋設する。中央には鉄製の汲み上げ用パイプを設置する。ＳＥ04・ＳＫ11・ＳＤ01より新しい。

掘り方は平面形が円形で、直径1.04m、深さ2.40mである。第Ⅵ層まで掘削する。

井戸側は富山県砺波市金屋地内で産出する金屋石製で、最下層の４段目に底があり、それ以外は側のみで規格は統一である。直径0.84m、高さ0.60mである。内外面に鑿痕がある。

出土遺物は須恵器、越中瀬戸、越中丸山、伊万里、唐津、瀬戸美濃、瓦質土器、近代陶磁器類、土製品（土人形、タイル）、石製品（緑色凝灰岩製紡錘車）、ガラス製品（瓶、窓ガラス）、木製品（箸、刃物柄、下駄歯、曲物、桶・樽類、縄、端材、用途不明品）がある。

ＳＥ04（第14図）

調査区の東側、グリッド（F3・G3）区で検出した。井戸構造は１段以上の桶積上げ井戸で、底には自噴用の竹製の導水管を垂直に埋設する。ＳＥ03より古く、ＳＥ04・ＳＫ01・11・ＳＤ01より新しい。

掘り方は平面形が不定型で、規模が長軸1.60m以上、短軸1.37m、深さ1.44mで第Ⅵ層まで掘り込む。導水用竹筒は掘り込んで設置し、それより東側を階段状に掘り込む。

井戸側は上面は楕円形であるが、底板は円形であるため使用時に変形したと推定する。上端は長軸0.80m、短軸0.60mを測り、底板は0.64mである。

出土遺物は、土師器、珠洲、越中瀬戸、伊万里、京焼系、瀬戸美濃、瓦質土器、その他近世陶磁器類、土製品（土人形）、木製品（箸、漆器椀、下駄歯、樽、端材、底板、用途不明品）、金属製品（鉄製鎹、鉄製紡錘車、鉄製円盤、金銅製キセル）がある。

ＳＥ05（第15・16図）

調査区の東側、グリッド（G2・G3）区で検出した。井戸構造は３段以上の桶積上げ井戸である。ＳＤ01より新しい。東側の掘り方は既往の工事で一部消失する。

掘り方は平面形が円形で、規模が直径1.18m、深さ2.36m以上である。

井戸側は直径0.27m、組み合わせた高さは2.40m以上、１・２段目は高さ1.20mである。

出土遺物は、土師器、須恵器、越中瀬戸、伊万里、唐津、京焼系、瀬戸美濃、不明炻器、土製品（七厘）、石製品（凝灰岩製砥石）、木製品（木簡、杭、箸、菜箸、木錘、印鑑、下駄、漆器椀、曲物、桶・樽類、底板、脚、蓋、楔、部材、端材、用途不明品）、金属製品（鉄製釘、鉄製火箸、青銅製キセル）がある。

（２）土坑

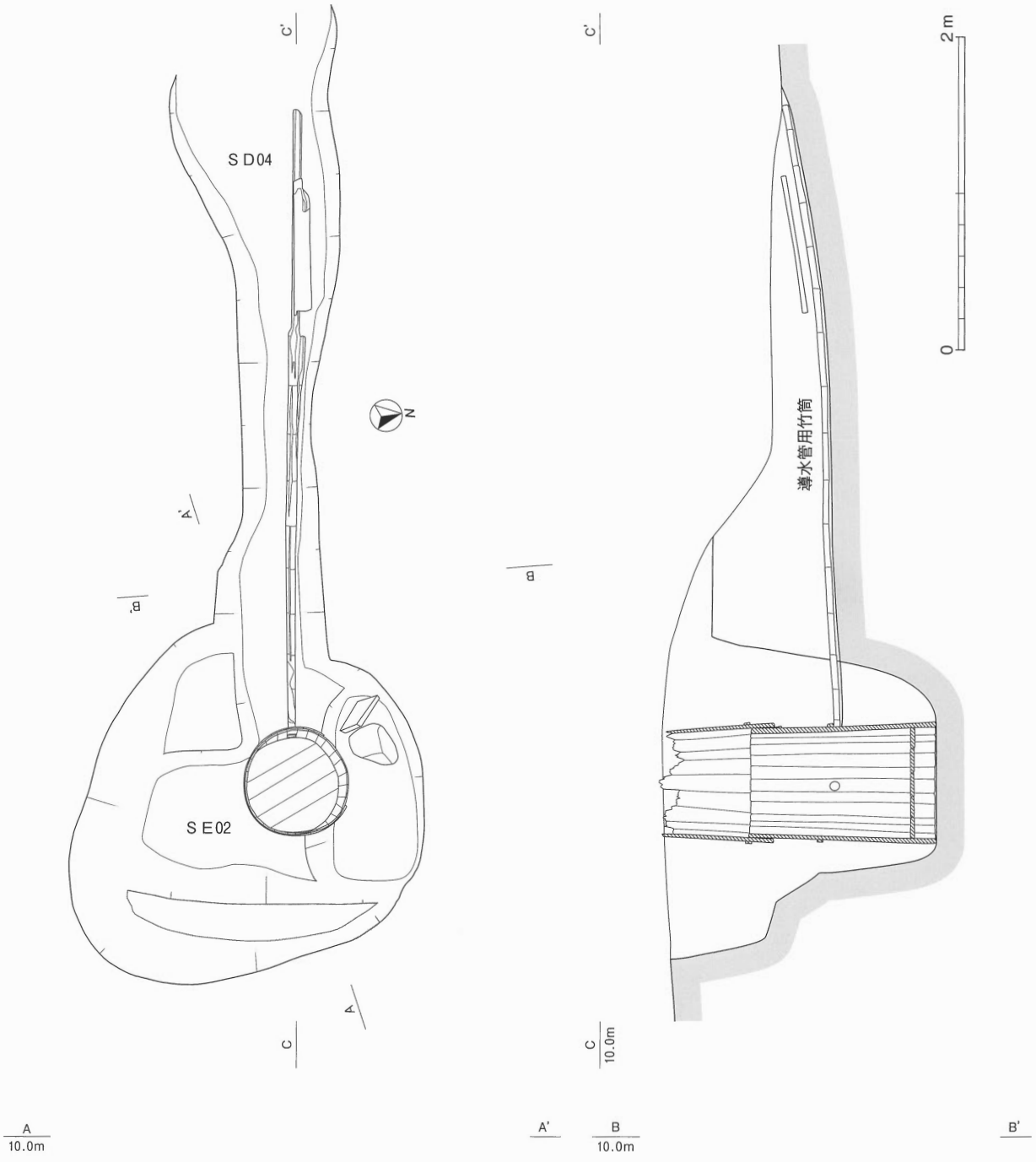
ＳＫ01（第14図）

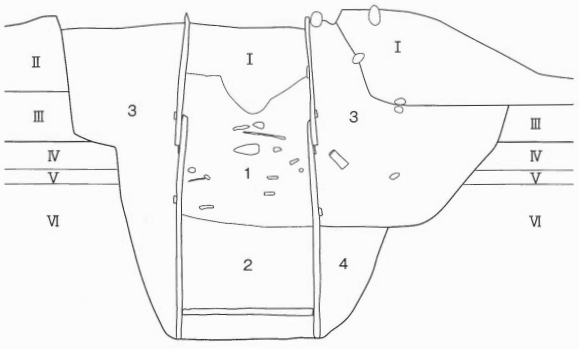
調査区の東側、グリッド（F3）区で検出した。ＳＥ04・ＳＫ11より古く、西半部は既往の工事で消失する。平面形は円形と推定でき、規模は長軸3.04m、短軸0.96m以上、深さ1.04mである。断面には掘り方と推定する層位（２～７層）があることから、井戸跡の可能性が高い。

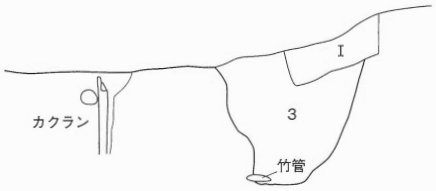
出土遺物は、土師器、越中丸山、伊万里、唐津、瀬戸美濃、瓦質土器がある。

ＳＫ02（第17図）

調査区の南東側、グリッド（G2）区で検出した。ＳＤ01より古い。北端部は、既往の工事で消失する。平面形は円形で、規模は1.05mで、深さは1.00m以上を測る。形状や深さから、井戸の可能性







SE02・SD04
1　10YR3/1　黒褐色細粒砂　φ３～10㎝の礫２％含む
2　10YR4/1　褐灰色中粒砂　黒褐色シルト20%、腐植土５％含む
3　10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト
4　10YR6/1　褐灰色粘土

第13図　ＳＥ02・ＳＤ04（１／40）

がある。遺物は出土していない。

ＳＫ03（第17図）

調査区の中央部、グリッド（E3）区で検出した。平面形は方形で、規模は長軸1.00m、短軸0.8m、深さ0.44mである。遺構内の土壌分析から寄生虫卵を検出し、トイレ遺構との結果を得た。

出土遺物は、土師器、越中瀬戸、伊万里、唐津、京焼系、石製品（泥岩製砥石）、木製品（籌木、栓、糸枠、下駄歯、用途不明品）、金属製品（鉄製釘）がある。

ＳＫ04（第17図）

調査区の中央部、グリッド（E3）区で検出した。平面形は不定形で、規模は長軸1.48m、短軸1.12m、深さ0.82mである。

出土遺物は、土師器、越中瀬戸、伊万里、唐津、瀬戸美濃、石製品（緑色片岩製砥石）、木製品（下駄、漆器椀、曲物、桶・樽類、用途不明品）がある。

ＳＫ11（第19図）

調査区の東側、グリッド（F3・G3）区で検出した。ＳＫ01・ＳＤ01より新しく、ＳＥ03・04より古い。井戸側を除去した後廃棄土坑としたもので、井戸側のタガが残存する。１層はシジミ貝等の動物遺存体を多量に含む（同定は第Ⅳ章第10節参照）。

掘り方は、平面形が円形で、直径1.00m、深さ0.80m以上で、井戸側は、直径0.64m、深さ0.80m以上である。

出土遺物は伊万里、唐津、信楽、瀬戸美濃（磁器・陶器）、ガラス製品（数珠玉）、木製品（木簡、数珠玉、箸、栓、下駄歯、曲物、桶・樽類、楔、端材）、金属製品（鉄製釘、銅銭）がある。

（３）溝

ＳＤ03（第20図）

調査区の西側、グリッド（C4）区で検出した。ＳＤ05より新く、ＳＰ01より古い。南北方向に延びる溝で、長さ2.84m、幅0.76～1.48m、深さ0.08～0.15mである。

出土遺物は、越中瀬戸、伊万里、唐津、瀬戸美濃、木製品（箸、杭、曲物、桶・樽類、端材、建築部材、用途不明品）がある。

（４）ピット

ＳＰ01（第20図）

調査区の西側、グリッド（C4）区で検出した。ＳＤ03・05より新しい。平面形は円形で、規模は直径0.48m、深さ0.08mである。

出土遺物は、土師器、越中瀬戸がある。

２．下層遺構

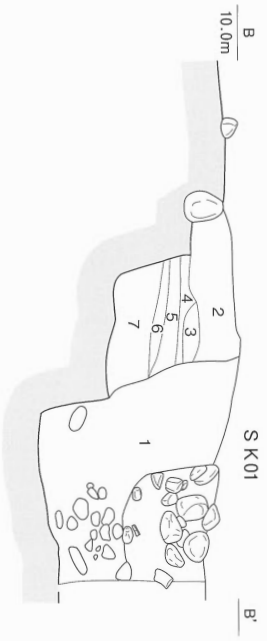
下層では、17世紀後半から18世紀代の遺構を検出した。また、既往の工事で上部を消失した19世紀後半の遺構もある。

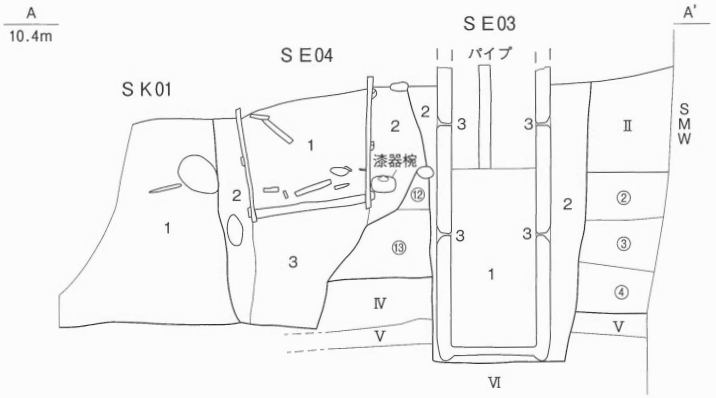
（１）土坑

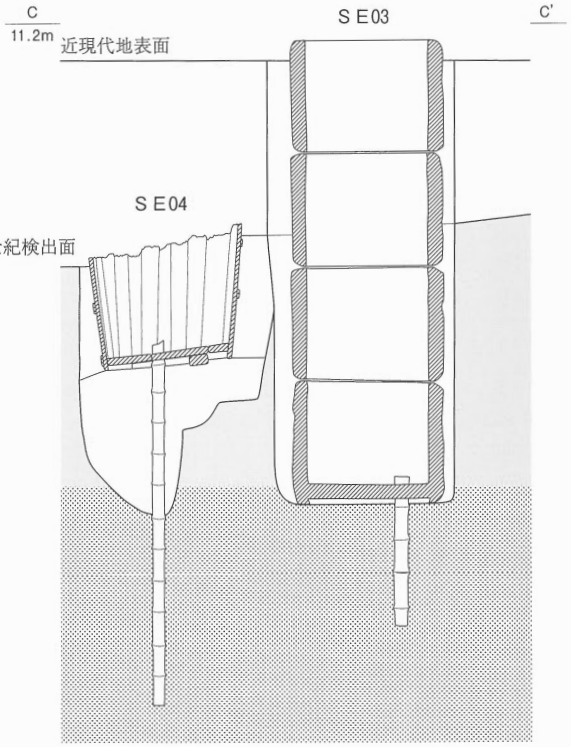
ＳＫ05（第18図）

調査区の中央部、グリッド（E4・F4）区で検出した。平面形は不定形で、規模は長軸3.16m、短軸2.40m、深さ1.40mである。覆土上面にザルが出土し、覆土中からも木製品が出土した。形状や深さ等から井戸跡の可能性が高い。

出土遺物は、土師器、越中瀬戸、伊万里、唐津、京焼系、瀬戸美濃、土製品（土人形）、石製品







SE03
1　10YR4/2　灰黄褐色中粒砂　φ10～50㎜大の礫30％含む
2　10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト　φ1～2㎜大の礫５％含む
3　10YR5/6　黄褐色粘土

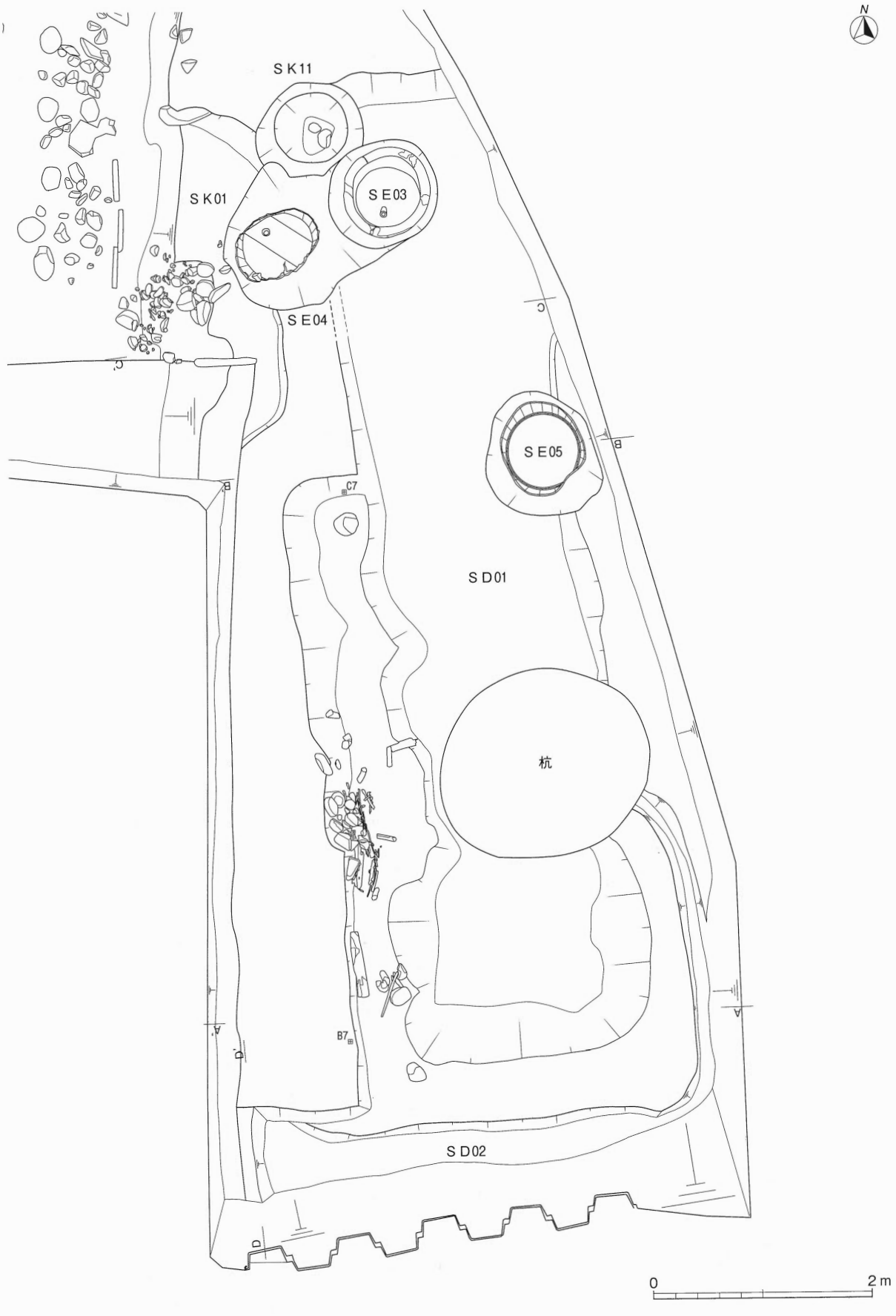
SE04
1　10YR3/1　黒褐色細粒砂　褐色中粒砂１％含む
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　灰黄褐色粘土５％含む
3　10YR4/1　褐灰色粘土質シルト　褐色中粒砂３％含む

SK01
1　10YR3/1　黒褐色シルト質細粒砂　褐灰色細粒砂５％、灰色粘土５％含む
2　10YR3/1　黒褐色シルト質細粒砂　炭化物３％含む
3　10YR2/1　黒色中粒砂
4　2.5Y3/1　黒褐色細粒砂
5　10YR3/1　黒褐色細粒砂　黄灰色細粒砂３％含む
6　10YR2/1　黒色細粒砂
7　10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト

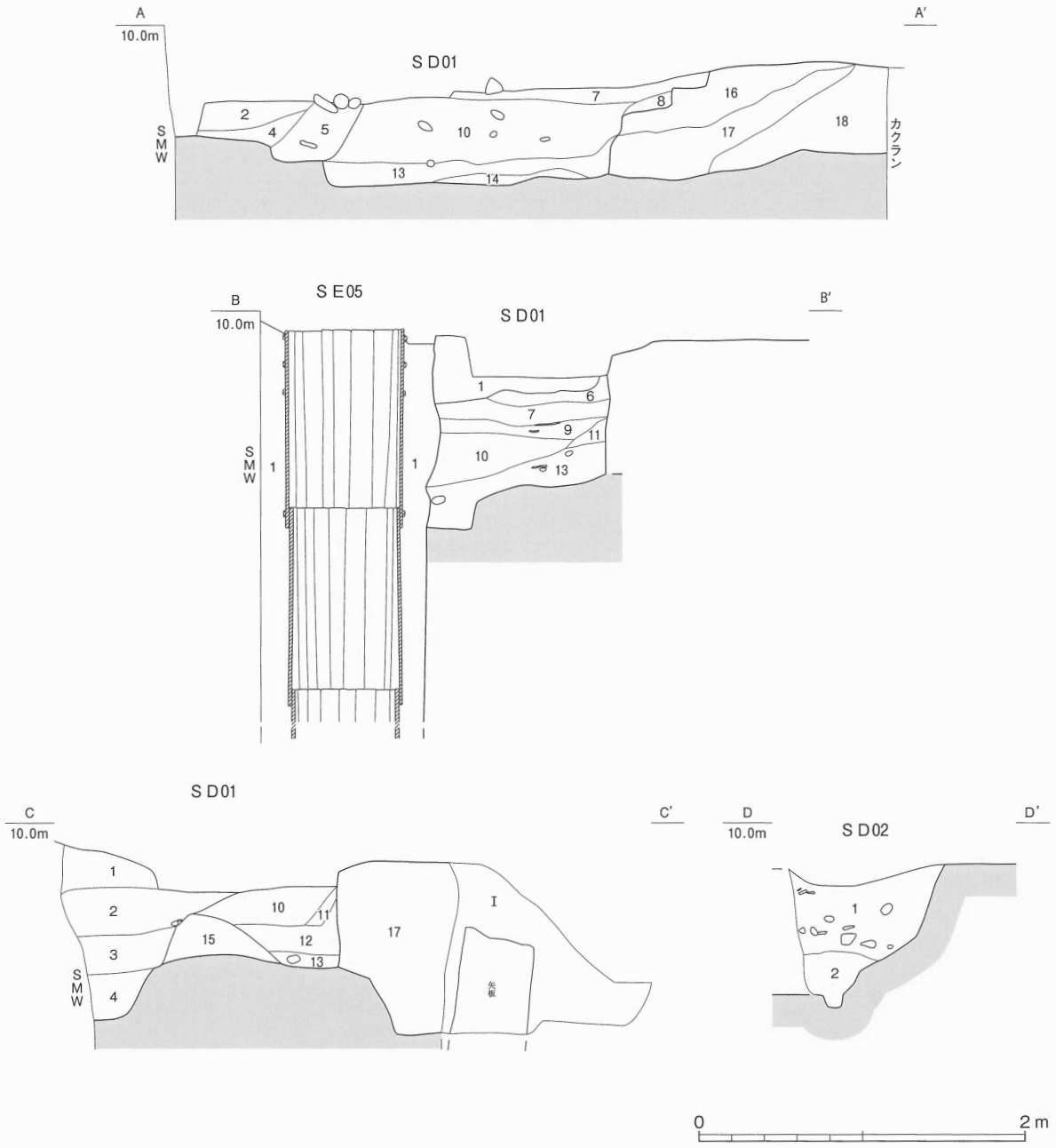
SD01
②　10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト
③　10YR2/1　黒色シルト質粘土　腐植土10％含む
④　10YR4/1　褐灰色細粒砂　３を５％含む
⑫　10YR4/1　褐灰色細粒砂
⑬　10YR2/1　黒色粘土　褐灰色粘土５％含む

0　2m

第14図　ＳＥ03・04・ＳＫ01（１／40）



第15図　ＳＥ05・ＳＤ01・02〔１〕（１／50）



S E05
1　10YR3/2　黒褐色細粒砂質シルト　褐灰色粘土10％含む
S D01
1　10YR3/2　黒褐色シルト質細粒砂
2　10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト
3　10YR2/1　黒色シルト質粘土　腐植土10％含む
4　10YR4/1　褐灰色細粒砂　3を５％含む
5　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト
6　10YR3/1　黒褐色シルト質細粒砂　焼土10％含む
7　10YR2/1　黒色粘土質シルト
8　10YR3/3　暗褐色細粒砂質シルト　褐灰色細粒砂５％含む
9　10YR2/1　黒色粘土質シルト
10　10YR2/2　黒褐色砂質シルト
11　10YR3/2　黒褐色シルト　にぶい黄褐色細粒砂10％含む
12　10YR4/1　褐灰色細粒砂
13　10YR2/1　黒色粘土　褐灰色粘土５％含む
14　10YR5/1　褐灰色細粒砂質シルト
15　10YR4/1　褐灰色シルト質粘土
S D01護岸整地
16　10YR7/1　灰白色粘土　黒褐色シルト30％含む。（上部は酸化により明黄褐色となる）
17　10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト　灰白色粘土10％含む
18　10YR5/1　褐灰色細粒砂質シルト
S D02
1　10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト
2　10YR2/1　黒色粘土質シルト

第16図　S E05・S D01・02〔2〕（1／40）

（珪化木製砥石）、木製品（木簡、箸、篦、下駄歯、箱、建築部材、曲物、桶・樽類、底板、脚、匙、柄、栓、糸枠、将棋駒、鍬形、ザル、楔、樹皮、竹、端材、用途不明品）、金属製品（鉄製釘、鉄製角金具、用途不明品、銅銭）がある。

ＳＫ06（第17図）

調査区の中央部、グリッド（D4）区で検出した。平面形は隅丸方形で、規模は長軸1.60m、短軸1.04m、深さ0.16mである。

出土遺物は、土師器、須恵器、珠洲、越中瀬戸、伊万里、唐津、京焼系、瀬戸美濃、瓦質土器、木製品（箸、菜箸、木錐、漆器椀、算盤玉、曲物、鍬形、篦？、蓋、底板、端材、用途不明品）、金属製品（鉄製釘、銅銭）がある。

ＳＫ07（第19図）

調査区の西側、グリッド（B4）区で検出した。遺構上部と遺構の東側、南側および北側は既往の工事で消失する。ＳＫ08より新しい。井戸側を除去した後廃棄土坑としたもので、井戸側のタガが壁面に残存する。半截した際に井戸底面から湧水がみられた。

掘り方は平面形が円形で、規模が直径1.20m以上、深さ2.80m、井戸側は直径0.66m、深さ2.80mである。

出土遺物は、越中瀬戸、越中丸山、伊万里、瀬戸美濃、不明炻器、近代陶磁器類、木製品（木簡、篦、杭、箸、漆器椀、下駄歯、曲物、桶・樽類、膳、端材、用途不明品）がある。

ＳＫ08（第19図）

調査区の西側、グリッド（A4・B4）区で検出した。遺構上部と遺構の西側は既往の工事で消失する。ＳＫ07より古い。平面形は円形で、規模は長軸1.12m、短軸1.00m、深さ0.60mである。

出土遺物は、越中瀬戸、瀬戸美濃、木製品（板材、棒材）がある。

ＳＫ09（第17図）

調査区の中央部、グリッド（D4）区で検出した。井戸側を除去した後廃棄土坑としたもので、井戸側のタガが壁面に残存する。

掘り方は、平面形が楕円形で、規模が長軸1.64m、短軸1.16m、深さ1.36m、井戸側は、直径0.80m、深さ1.36mである。廃棄の際の上面20cmは50～100mm大の礫で埋める。

出土遺物は、土師器、越中瀬戸、伊万里、唐津、木製品（楔、端材、用途不明品）がある。

ＳＫ10（第19図）

調査区の西側、グリッド（A5・B5）区で検出した。遺構の西側は既往の工事で消失する。平面形は円形で、規模は長軸1.76m、短軸1.32m以上、深さ1.28mである。形状や深さ等から井戸跡の可能性が高い。

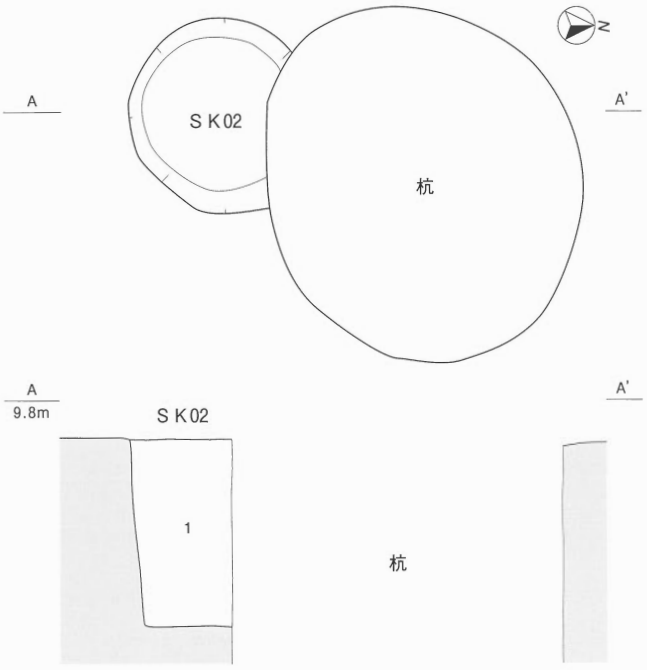
出土遺物は、土師器、珠洲、木製品（箸）がある。

（２）溝

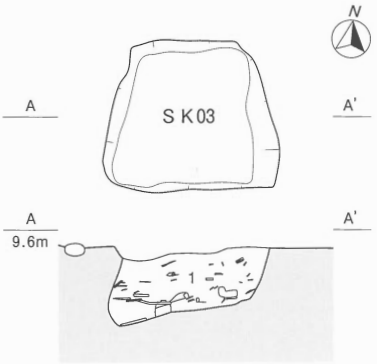
ＳＤ01（第15・16図）

調査区の南東側、グリッド（F2・F3・G1・G2・G3）区で検出した。ＳＥ03～05・ＳＫ02・11より古く、ＳＤ02と同時期である。また、既往の工事で一部消失する。南北方向に走る溝で、東側は調査区外に延びる。規模は、長さ9.35m、幅3.25m以上、深さ0.24～1.16mを測る。２時期に大きく分かれ、東側の方が新しい。西岸は版築構造により護岸がなされ、一部は木製の杭や板材で補強する。

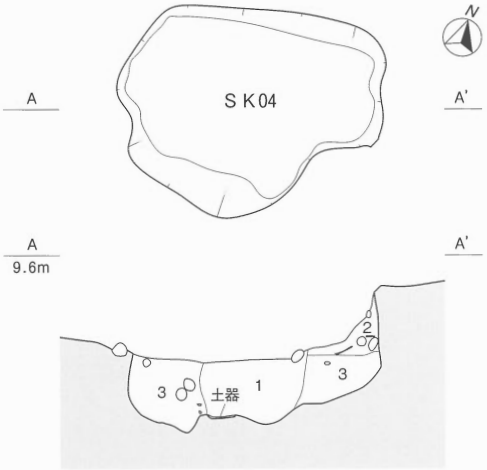
出土遺物は、土師器、須恵器、珠洲、青花、青磁、越中瀬戸、越中丸山、伊万里、唐津、京焼系、瀬戸美濃、志野、瓦質土器、土製品（鞴の羽口、面子）、石製品（砂岩製砥石、泥岩製砥石、凝灰岩



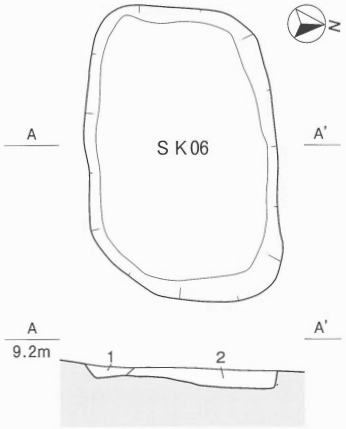
SK02
1　10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト



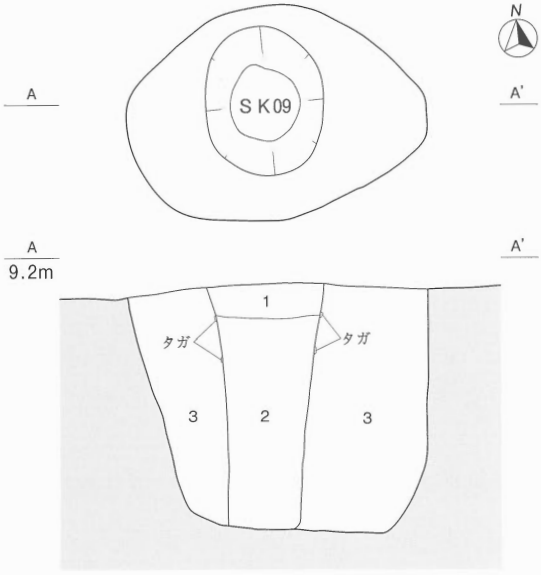
SK03
1　10YR2/1　黒色中粒砂　薄い板材30%含む



SK04
1　10YR2/1　黒色粘土質シルト
2　10YR3/1　黒褐色シルト質細粒砂　黄褐色粗砂15%を含む
3　10YR2/1　黒色粘土　灰色粘土5%含む

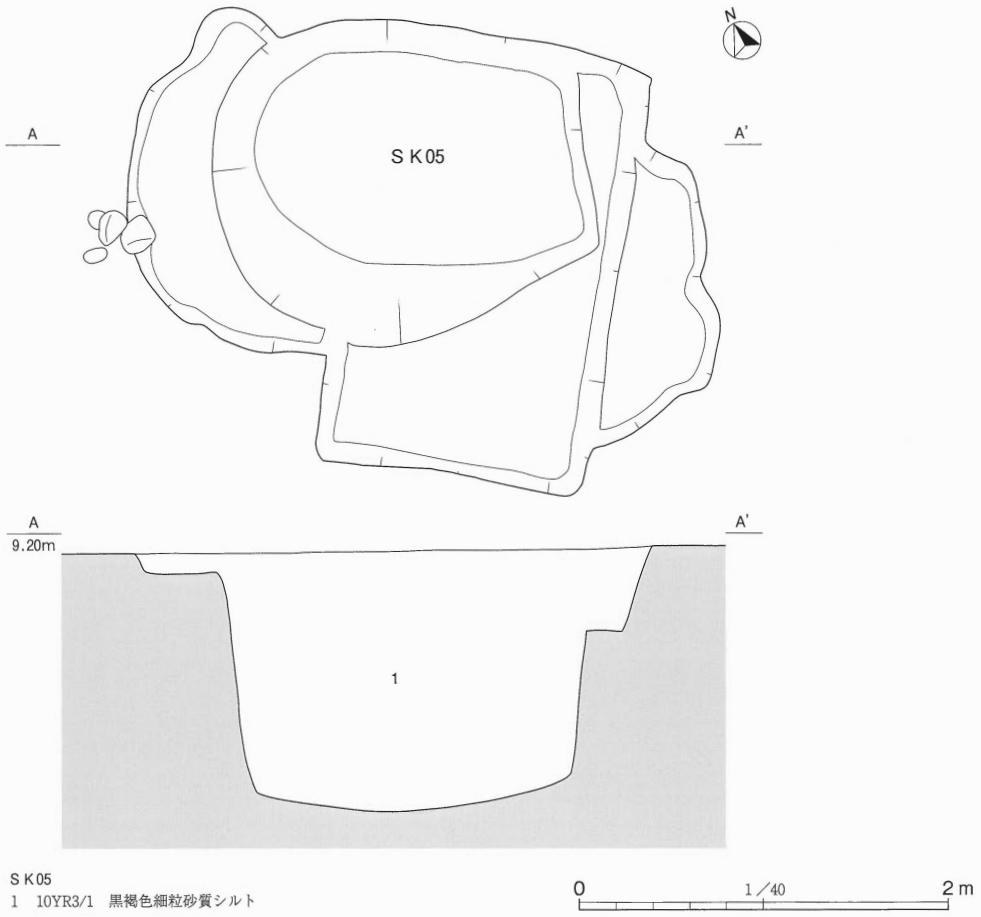


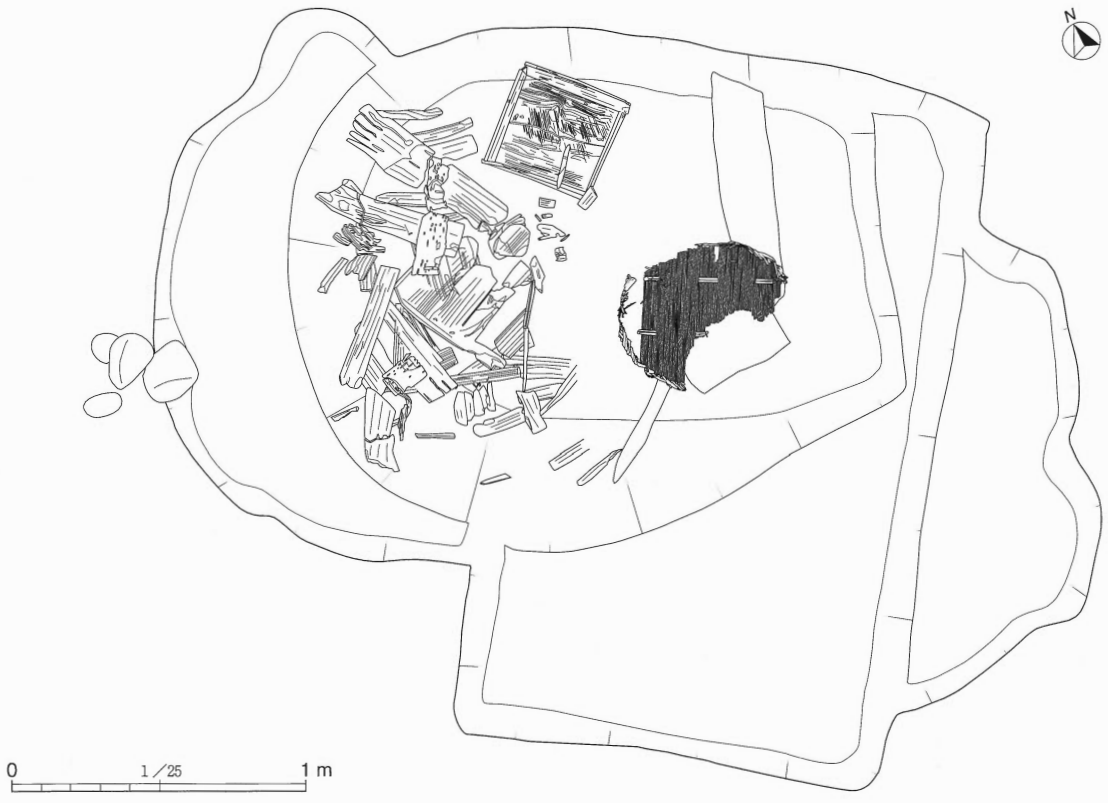
SK06
1　10YR4/1　褐灰色細粒砂
2　10YR2/1　黒色細粒砂質シルト



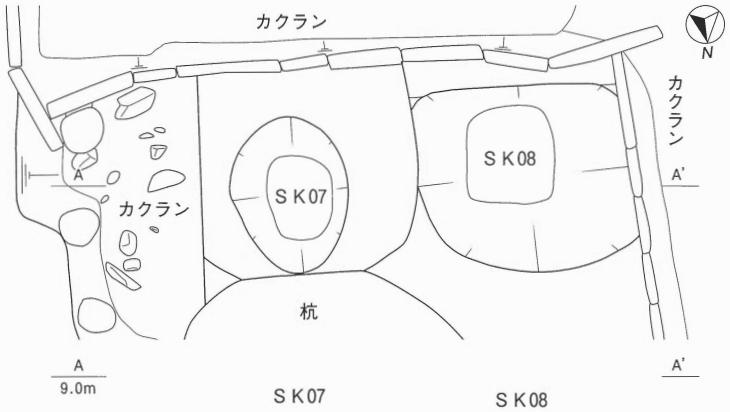
SK09
1　礫層　φ50～100㎜大
2　10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト
3　10YR4/1　褐灰色細粒砂　黒褐色シルトを10%含む

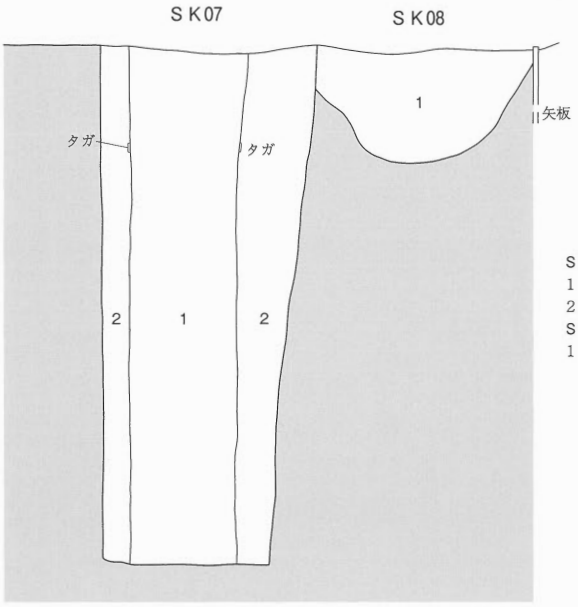
第17図　SK02～04・06・09（1／40）



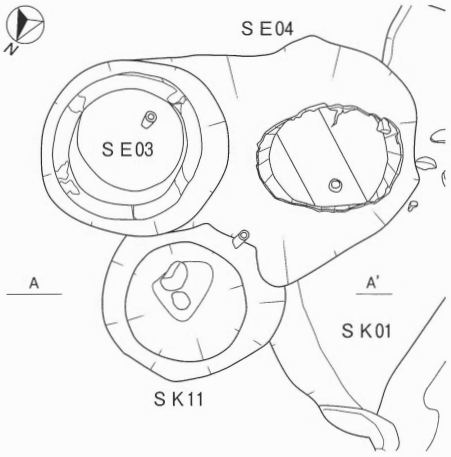


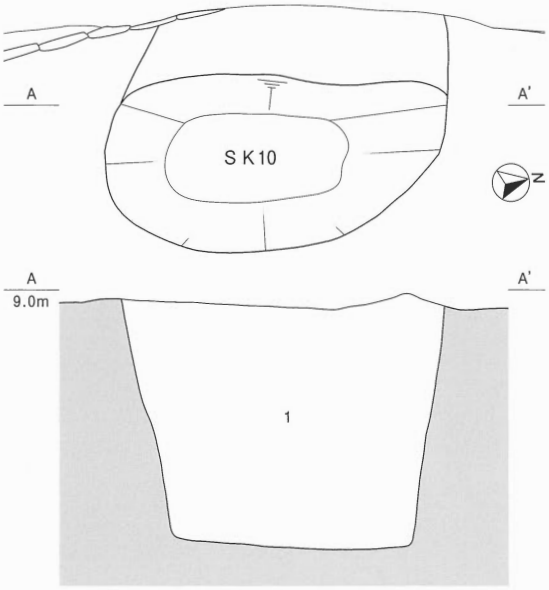
第18図　ＳＫ05（１／25・１／40）

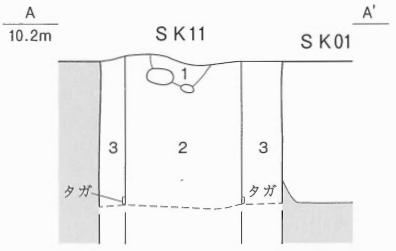




SK07
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト
2　10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト　褐灰色粘土15%含む
SK08
1　10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト　褐灰色粘土10%、黒色粘土５%含む







SK10
1　10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト　褐灰色粘土15%含む

SK11
1　10YR2/1　黒色シルト質細粒砂　シジミ貝等含む
2　10YR4/1　褐灰色シルト質細粒砂　黒褐色シルト５%含む
3　10YR4/1　褐灰色シルト質細粒砂　黒褐色シルト10%含む

第19図　SK07・08・10・11（1／40）

製硯、鉄石英製火打石）、木製品（木簡、杭、箸、菜箸、栓、漆器椀、下駄、下駄歯、曲物、桶・樽類、人形？、楔、灯台、切匙、糸枠横木、蓋、端材、建築部材、用途不明品）、金属製品（鉄製釘、鉄製鍋、金銅製キセル）がある。

ＳＤ02（第15・16図）

調査区の南東側、グリッド（F1・G1）区で検出した。ＳＤ02と同時期である。東西方向に延びる溝で、東側、西側および南側は調査区外に延びる。規模は、長さ3.85m以上、幅0.90m以上、深さ0.76m以上を測る。

出土遺物は、土師器、越中瀬戸、伊万里、唐津、瀬戸美濃、瓦質土器、木製品（箸・杭、曲物、桶・樽類、部材、端材、用途不明品）、金属製品（鉄製火箸）がある。

ＳＤ04

調査区の南側、グリッド（C3・D3）区で検出した。ＳＥ02の導水管である。竹製の導水管を埋設し、ＳＥ02を終点として西へ伸び、西側は既往の工事で消失する。規模は長さ4.08m以上、第Ⅱ層検出面からの深さ1.18mである。

出土遺物は、須恵器、越中瀬戸、伊万里、唐津、木製品（下駄歯、曲物、端材、用途不明品）がある。

ＳＤ05（第20図）

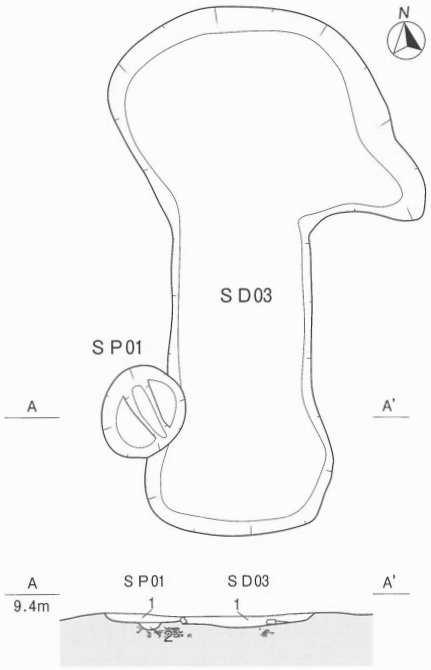
調査区の西側、グリッド（B4・C4）区で検出した。ＳＫ09・ＳＤ03・ＳＰ01より古い。また、既往の工事で西側および東側は消失する。東西方向に走る溝で、規模は、長さ3.80m以上、幅0.60m、深さ0.60mである。竹製の導水管を埋設する溝で、１箇所継手がある。導水管は水漏れ防止のため灰白色粘土にて被覆し埋設する。また、建物の基礎等で平面的に検出はできなかったが、ＳＤ05の東側延長線上のＳＫ09の掘り方で竹製の導水管の一部を検出した。ここまでの長さ含めると10.0m以上となる。

出土遺物は、土師器、伊万里、唐津、京焼系、不明炻器、木製品（箸、継手、曲物、桶・樽類）、金属製品（銅銭）がある。

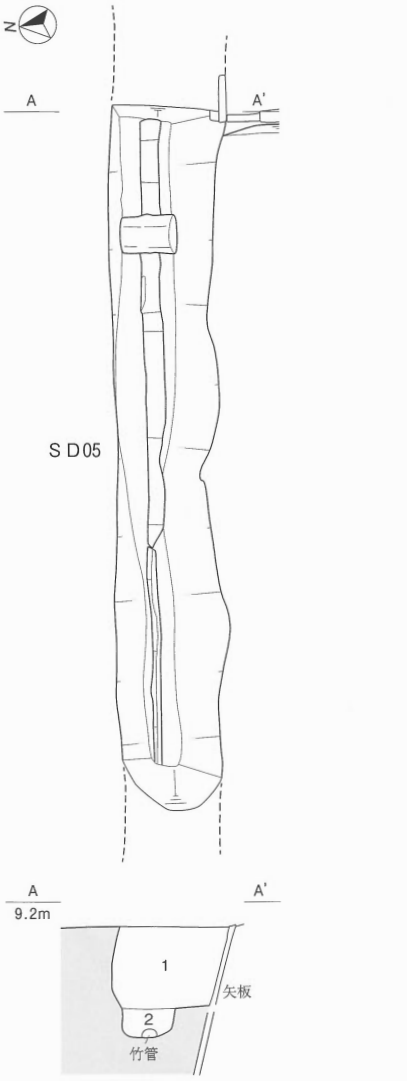
ＳＤ06（第20図）

調査区の西側、グリッド（D2・D3・E2・E3）区で検出した。東側、南側および北側は既往の工事で消失する。南北方向に走る溝で、規模は、長さ1.84m以上、幅1.14m以上、深さ0.48mである。

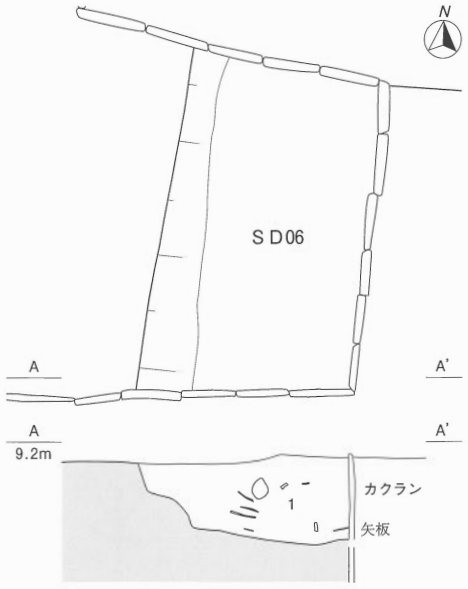
出土遺物は、土師器、越中瀬戸、伊万里、唐津、瀬戸美濃、志野、土製品（鞴の羽口）、木製品（箸、漆器椀、曲物、柄杓柄、用途不明品）がある。



SD03
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　植物質10%含む
SP01
1　10YR4/1　褐灰色細粒砂質シルト
2　10YR2/1　黒色粘土質シルト



SD05
1　10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト　灰白色粘土10%含む
2　10YR7/1　灰白色粘土



SD06
1　10YR3/1　黒褐色細粒砂質シルト

第20図　SD03・05・06（1／40）

第５節　遺物

１．古代・中世の遺物

富山城下町が成立する以前の遺物群である。古代の土器類は、西弘海氏の分類〔西1986〕、珠洲は吉岡康暢氏の分類〔吉岡1994〕に基づいた。

土師器（第21図）

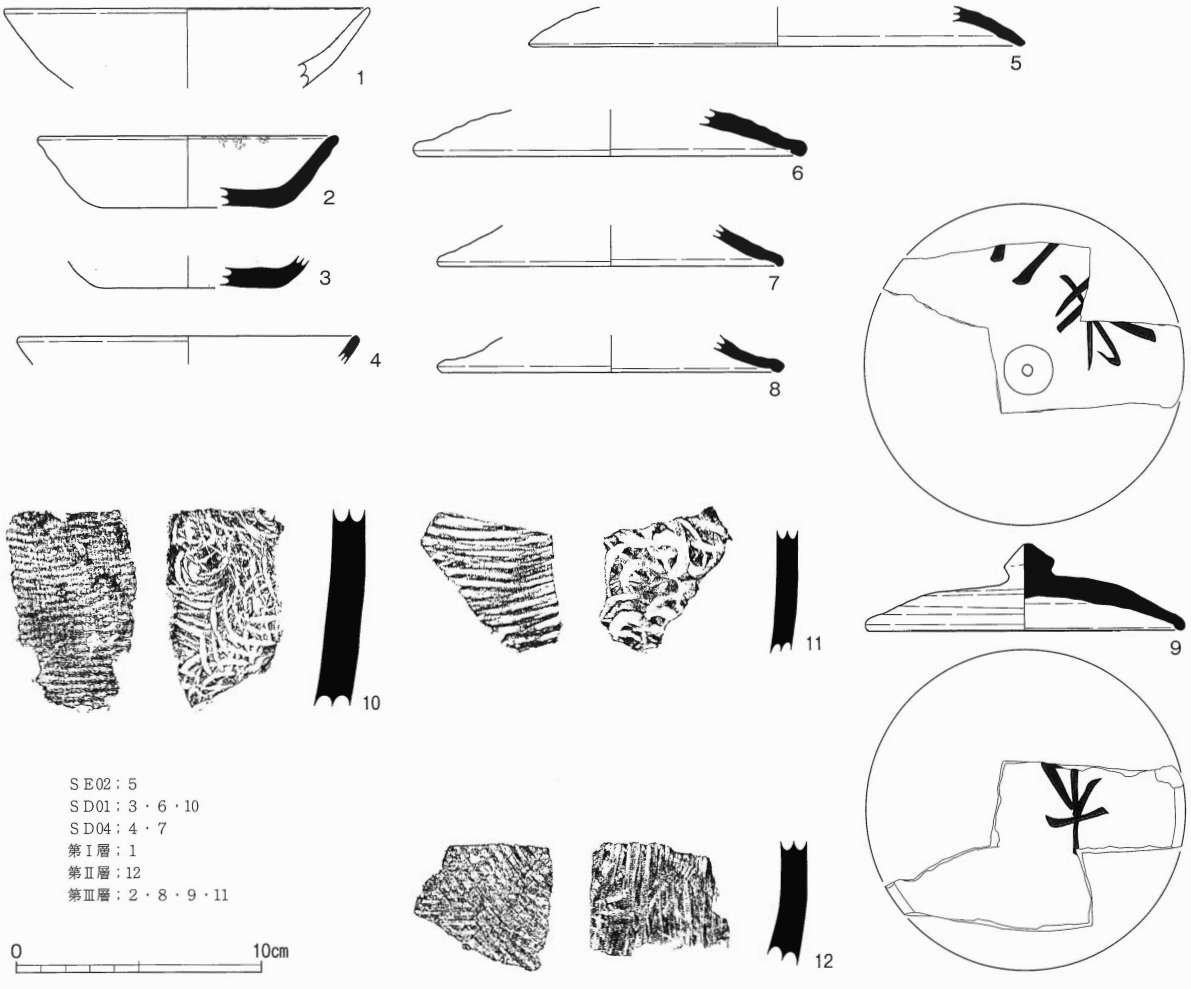
１は椀の口縁部である。

須恵器（第21図）

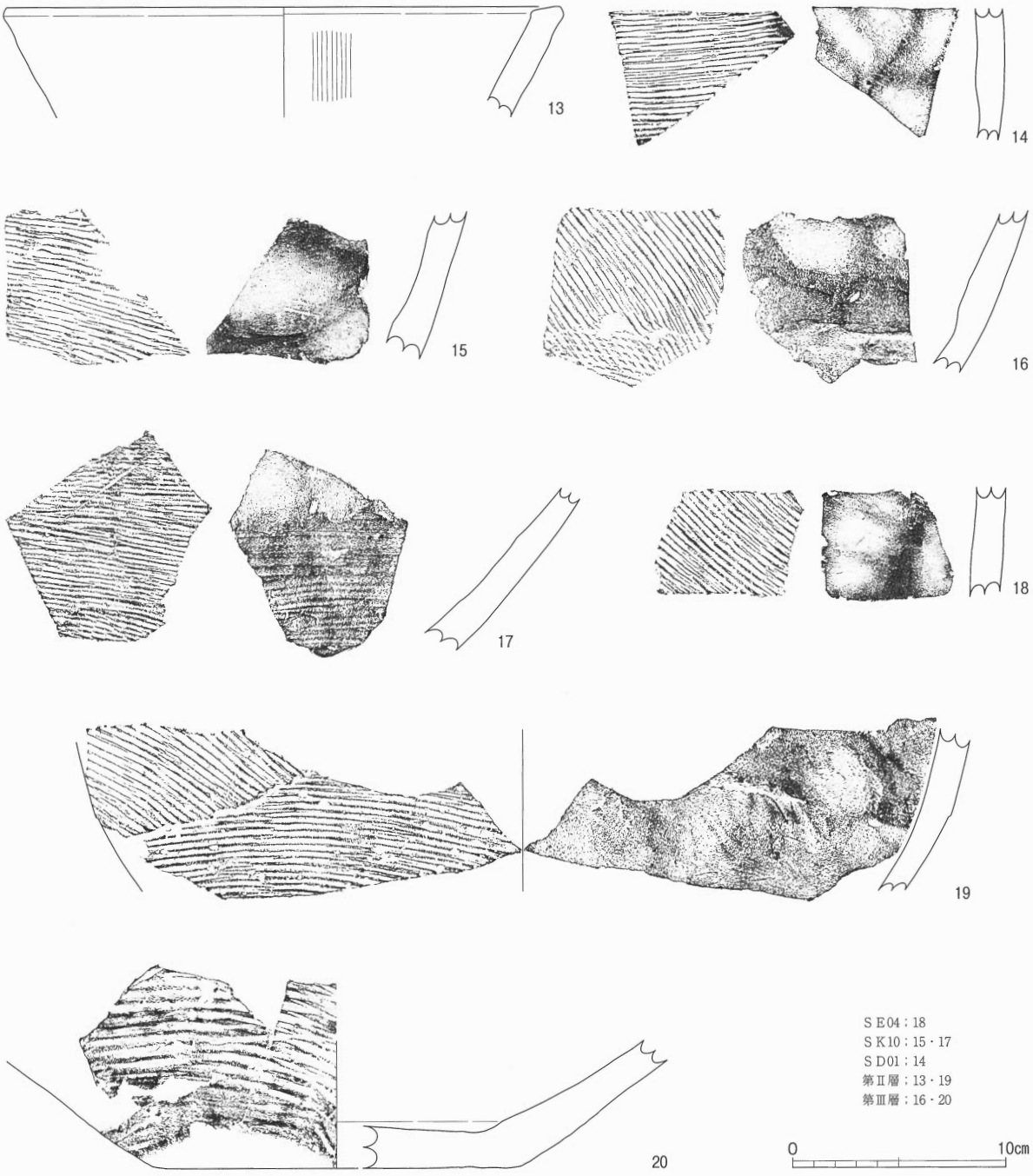
２・３は杯Ａである。２は口縁部に油煙が付着する。３は底部である。４は杯の口縁部である。全面に自然釉がかかる。５～９は杯Ｂ蓋である。７は外面に自然釉が付着する。９は表「□□（未ヵ）」裏「木」と墨書する。欠損部が大きいため複数字ある可能性がある。10～12は壺・甕類の胴部である。外面はタタキ、内面は同心円痕がある。

珠洲（第22図）

13は擂鉢の口縁部である。オロシ目は幅1.8cmに９条である。14～18は壺・甕類の胴部である。19は甕の胴下部である。20は甕の底部である。底部は離れ砂痕がある。



第21図　古代の土器類（１／３）



第22図　珠洲（1／3）

2．近世以降の遺物

富山城下町が成立してからの遺物群である。近世陶磁器類については東京都新宿区内藤町遺跡の分類〔新宿区内藤町遺跡調査会1992〕に基づき、各陶磁器類の編年は、越中瀬戸については宮田進一氏〔宮田1998〕・村上裕也氏〔富山市教育委員会2009〕、伊万里・唐津については大橋康二氏〔大橋1989、九州近世陶磁学会〕、京焼系・信楽については能芝勉氏〔京都市埋蔵文化財研究所2004〕・畑中英二氏〔畑中2003・2007〕、瀬戸美濃については藤沢良祐氏〔瀬戸市史編纂委員会1998〕に基づいた。木製品については東京都新宿区行元寺跡の分類〔新宿区生涯学習財団2003〕に基づいた。

中国製陶磁器（第23図）

21・22は青花である。21は景徳鎮の端反形の大椀である。内面に龍の染付を施す。時期は16世紀である。焼継ぎを施すことから19世紀まで伝世する。高台内部は朱書きがあり、その一部に「村井」と記されていることから焼継ぎ師名と推測する。22は漳州窯の小椀蓋である。内外面に染付を施す。時期は16世紀である。被熱を受ける。23は青磁で龍泉窯の椀底部である

土師器（第23図）

24～52は非ロクロ調整の土師器皿である。内面はナデ調整、口縁部はヨコナデにより口縁部外面に面取りし、底部外面は指圧での整形以外は無調整である。26・34・36～38・47・50は油煙が付着する。38は底面に籾痕がある。47・48・51は19世紀、それ以外は18世紀のものである。52はミニチュアである。53はロクロ成形の土師器皿である。口縁部内面に３条の沈線を施す。内外面に赤漆状の塗膜がある。口縁部に油煙が付着する。

越中瀬戸（第24～27図）

54～65は素焼きの皿である。ロクロ調整で底部は回転糸切りである。56～58は油煙が付着する。

66・67は椀類である。いずれも端反形の小椀である。内外面は鉄釉施釉する。

68～103は皿類である。68は丸形の中皿である。69・70は五寸皿である。69は端反形である。70は平形で見込みに印花文を施す。71～96は小皿である。73・74・80・95は丸形である。74は灰釉と鉄釉の掛分で見込みに印花文を施す。95は印花文を施す。72・82・83・85・87～89・93は平形である。81・96は平形無高台である。底面は回転糸切りである。76～79・84・90～92は端反形である。76・78・79は高台内部に墨書を施す。欠損部が多く文字は１字と推測できるが不明である。92は印花文を施す。94は端反形無高台である。86は折縁形である。71・75は輪花である。71は「丸に大」を押印する。97は平形の極小皿で底部は回転糸切りである。98～100は皿の底部である。99は「大吉」を押印する。101は灯明受皿である。102は乗燭の口縁部である。103は水盤の口縁部で、すっぽん口形である。

104～119は鉢類である。104～107は段重である。105は印花文を施す。108は片口で、口縁下注口筒形である。内外面に灰釉を施釉する。109は猪口である。110・111は鉢形容器である。112・113は火入である。113は底面を焼成後穿孔する。114は火鉢である。115～119は擂鉢である。115～117は口縁部外面に縁帯を作るものである。118は口縁部内面の突帯をもつものである。119は口縁部を折り返すものである。

120～125は壺類である。120～122は小壺である。123～125は壺の口縁部である。

126・127は瓶類である。いずれも小瓶の底部で、回転糸切りである。

128は蓋である。天蓋部は回転糸切りである。

越中丸山（第28図）

129・130は椀類である。いずれも腰張形で、129は銅緑釉を、130は褐釉を流し掛けする。

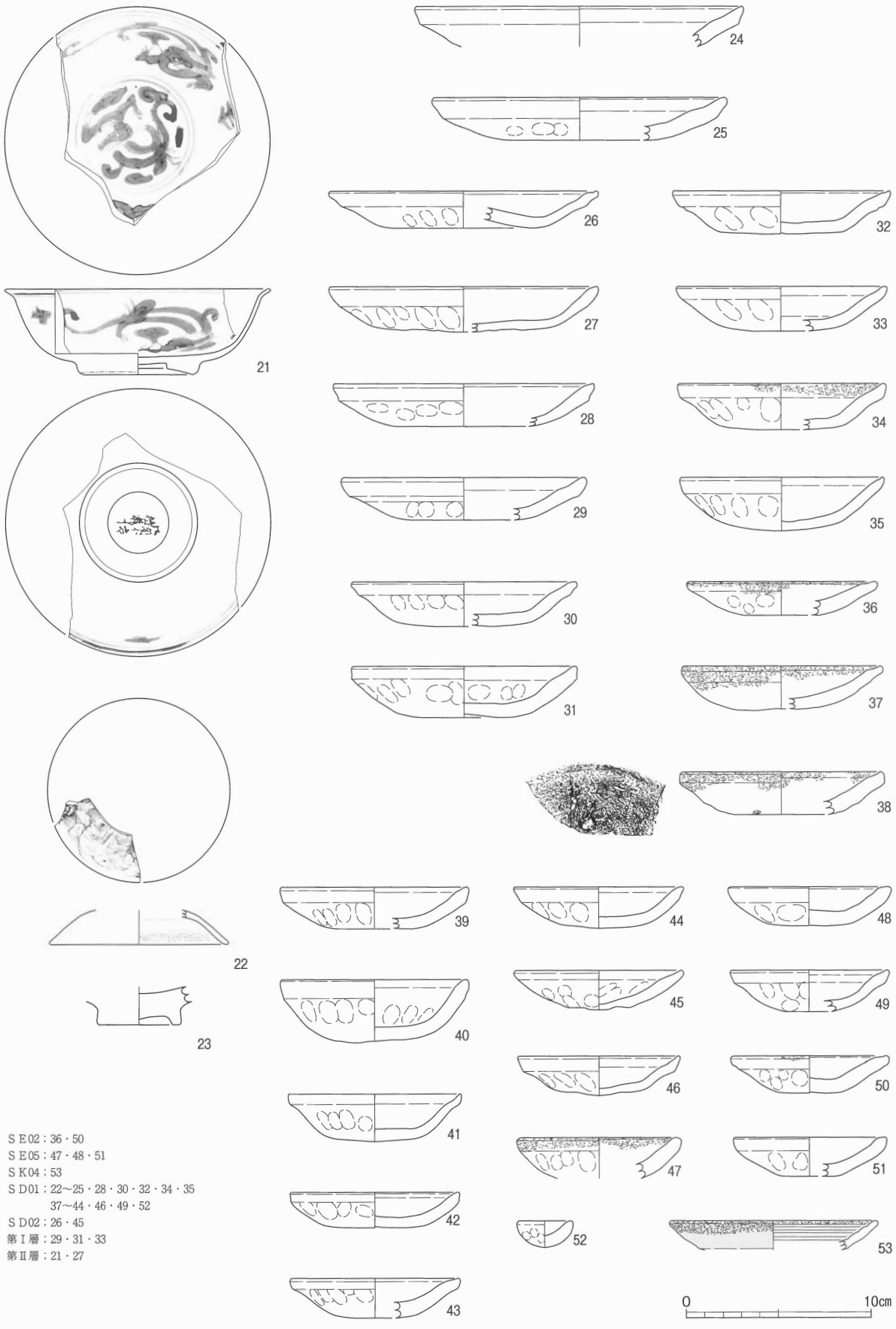
131は皿類である。131は磁器の丸形の小皿である。口縁部は玉縁である。呉須染付を施し、内面は葡萄文、底面は「富貴長春」の銘がある。

132は鉢類である。丸形の中鉢で口縁部は折湾である。内面は黒漆を塗膜する。

133・134は壺類である。133は肩衝形の口縁部で、胴部は縦位の沈線文を施す。内外面は長石釉、口縁部は灰釉を施す。134は胴部である。透明釉を施し、一部トルコ青釉を施す。

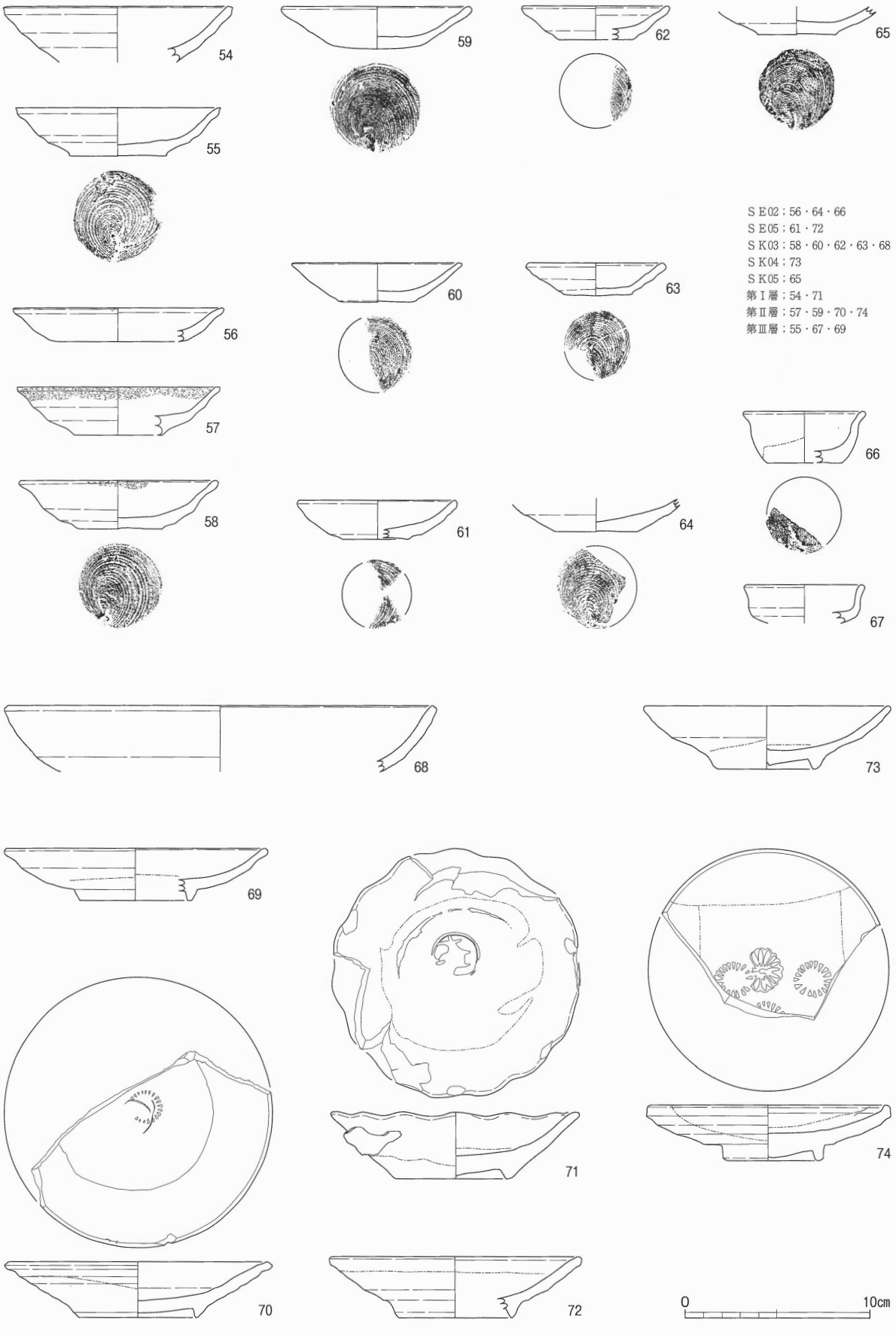
伊万里（第29～34図）

135～168は椀類である。135～144は中椀、145～162は小椀である。138・150・162は丸形である。138・162は外面に呉須染付を施す。150は内外面に呉須染付を施す。145～149・151・153・154・158

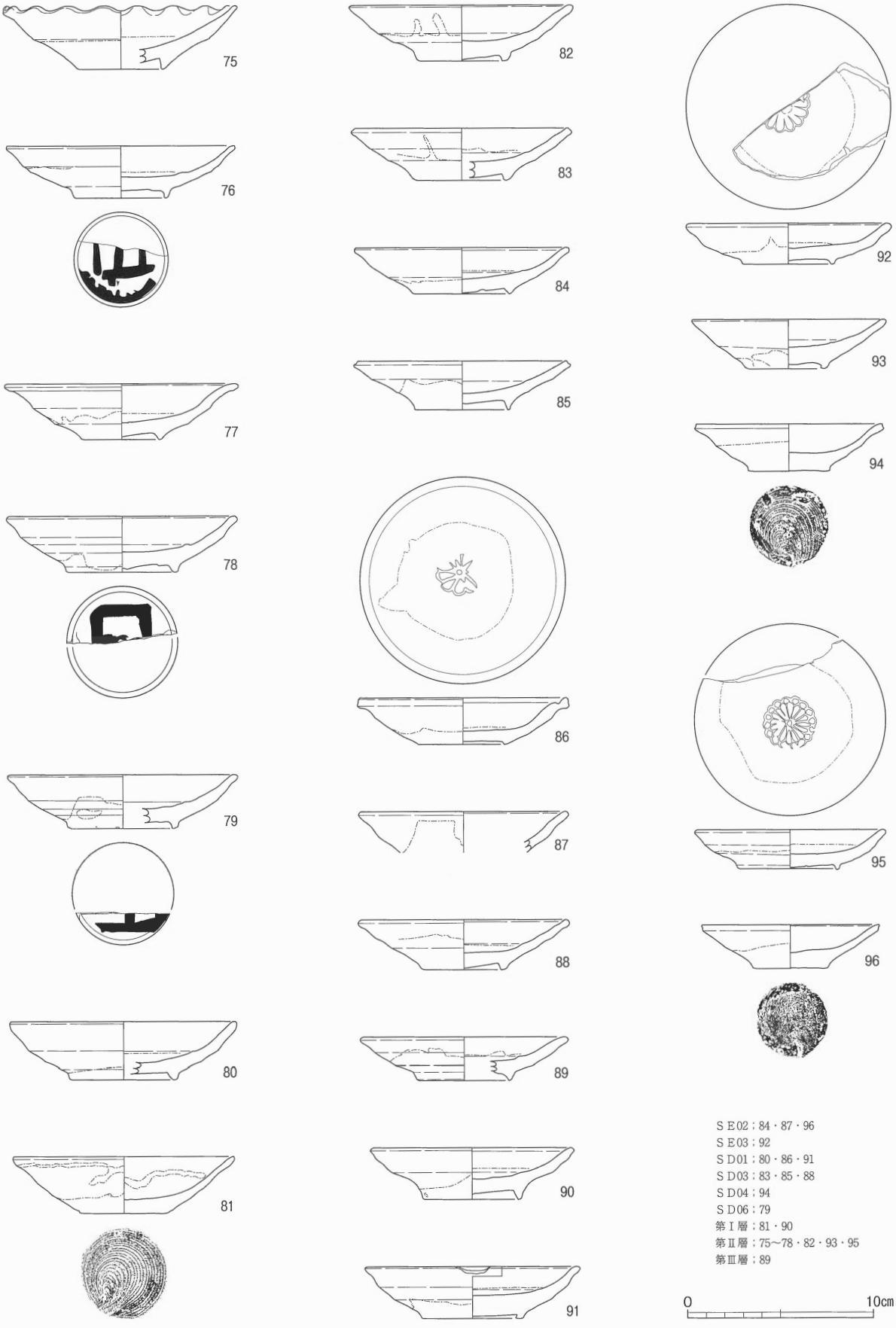


SE02：36・50
SE05：47・48・51
SK04：53
SD01：22～25・28・30・32・34・35
　　37～44・46・49・52
SD02：26・45
第Ⅰ層：29・31・33
第Ⅱ層：21・27

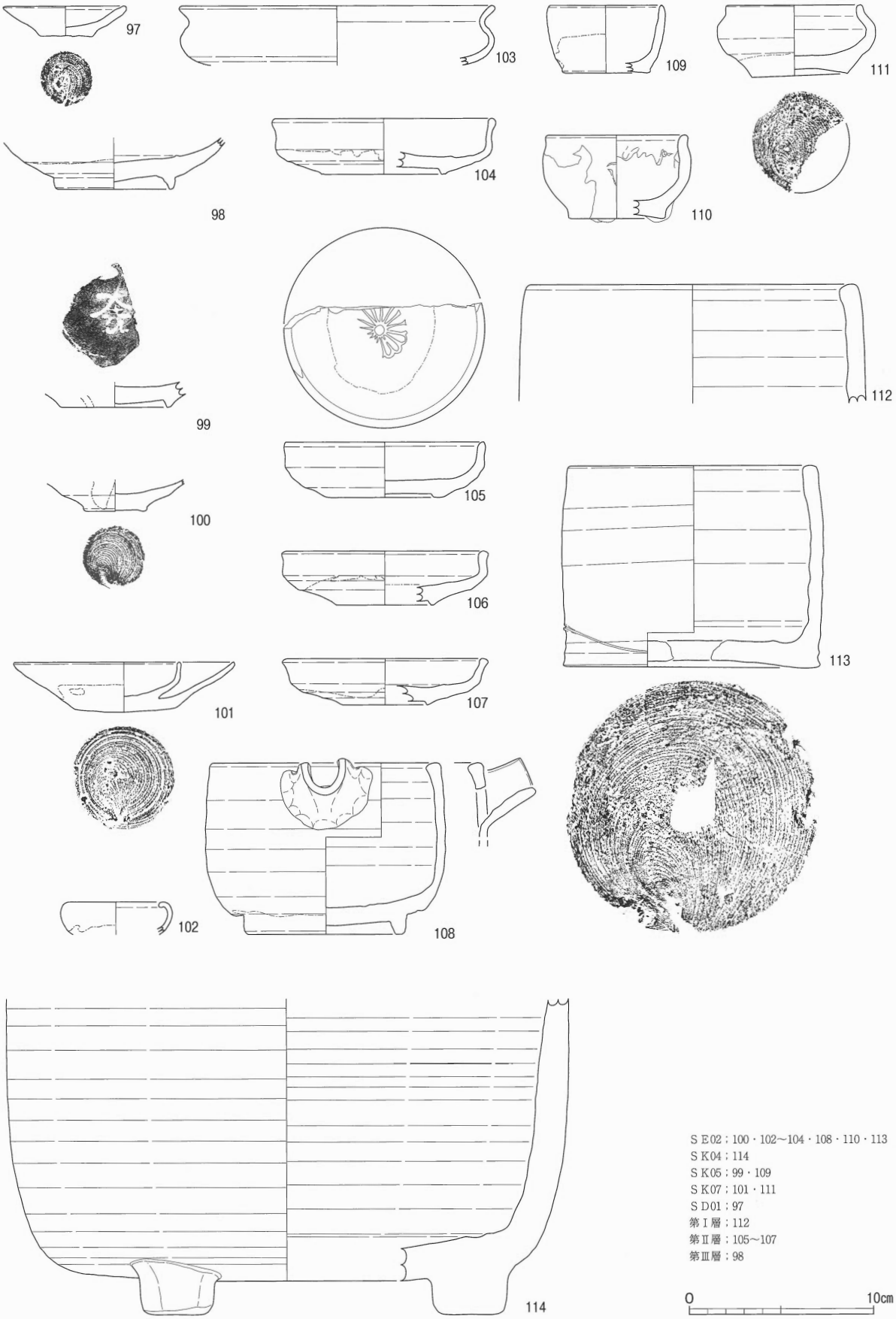
第23図　中国製陶磁器、土師器（1／3）



第24図　越中瀬戸〔1〕（1／3）



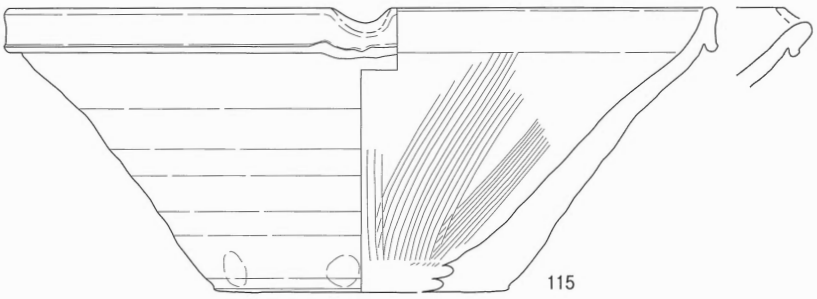
第25図　越中瀬戸〔2〕（1／3）

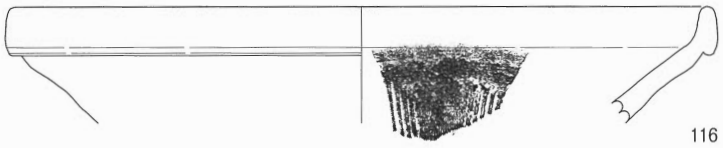


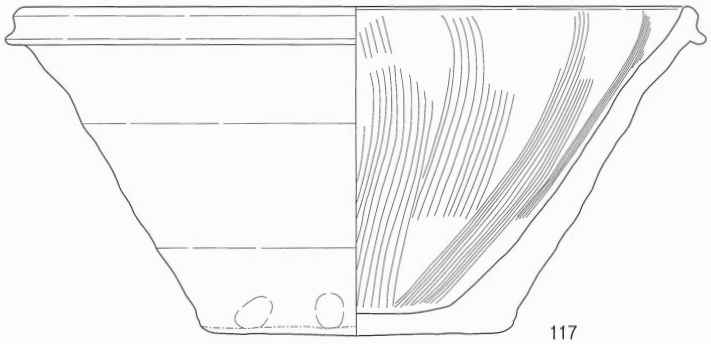
SE02；100・102～104・108・110・113
SK04；114
SK05；99・109
SK07；101・111
SD01；97
第Ⅰ層；112
第Ⅱ層；105～107
第Ⅲ層；98

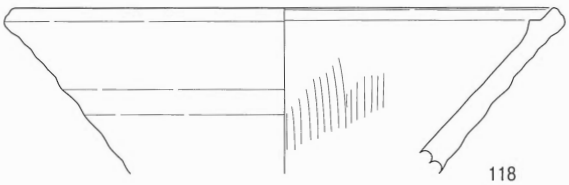
0 10cm

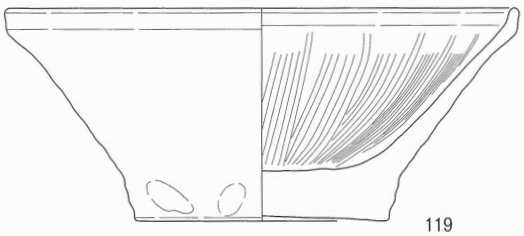
第26図　越中瀬戸〔3〕（1／3）

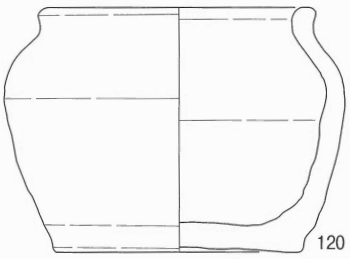

115

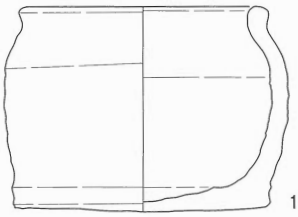

116

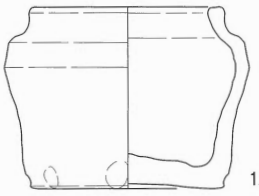

117

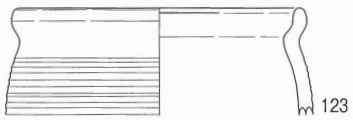

118

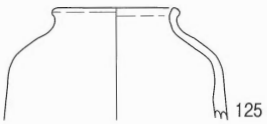

119

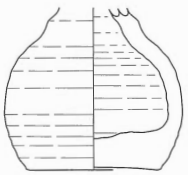

120

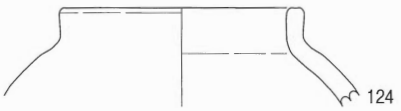

121

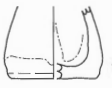

122


123


125


126

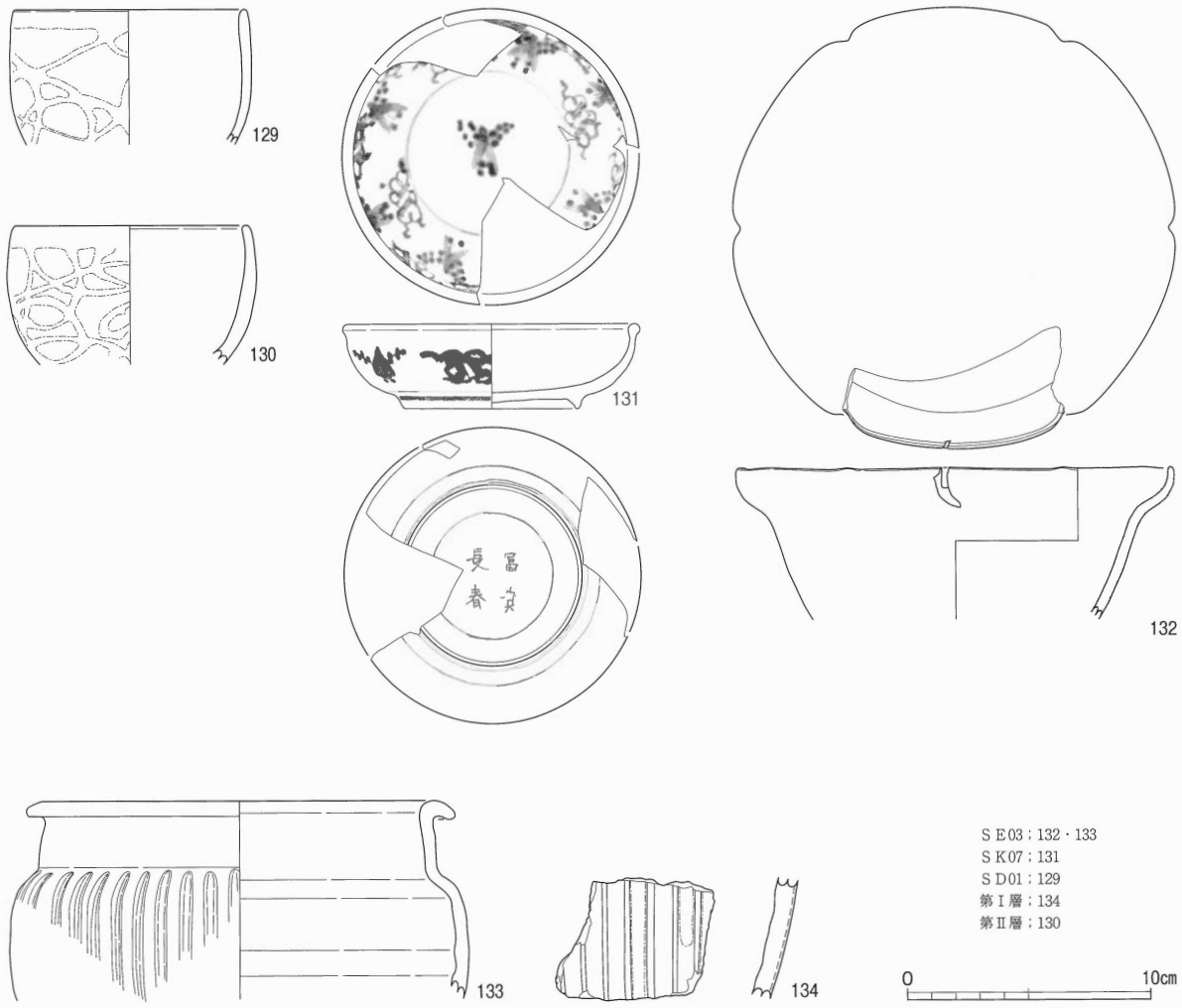

124


127

128

SE02：115・119
SK05：118・120・124～126
SK06：116
SK07：121・122
SD01：123
SD03：127
SD04：128
第Ⅱ層：117

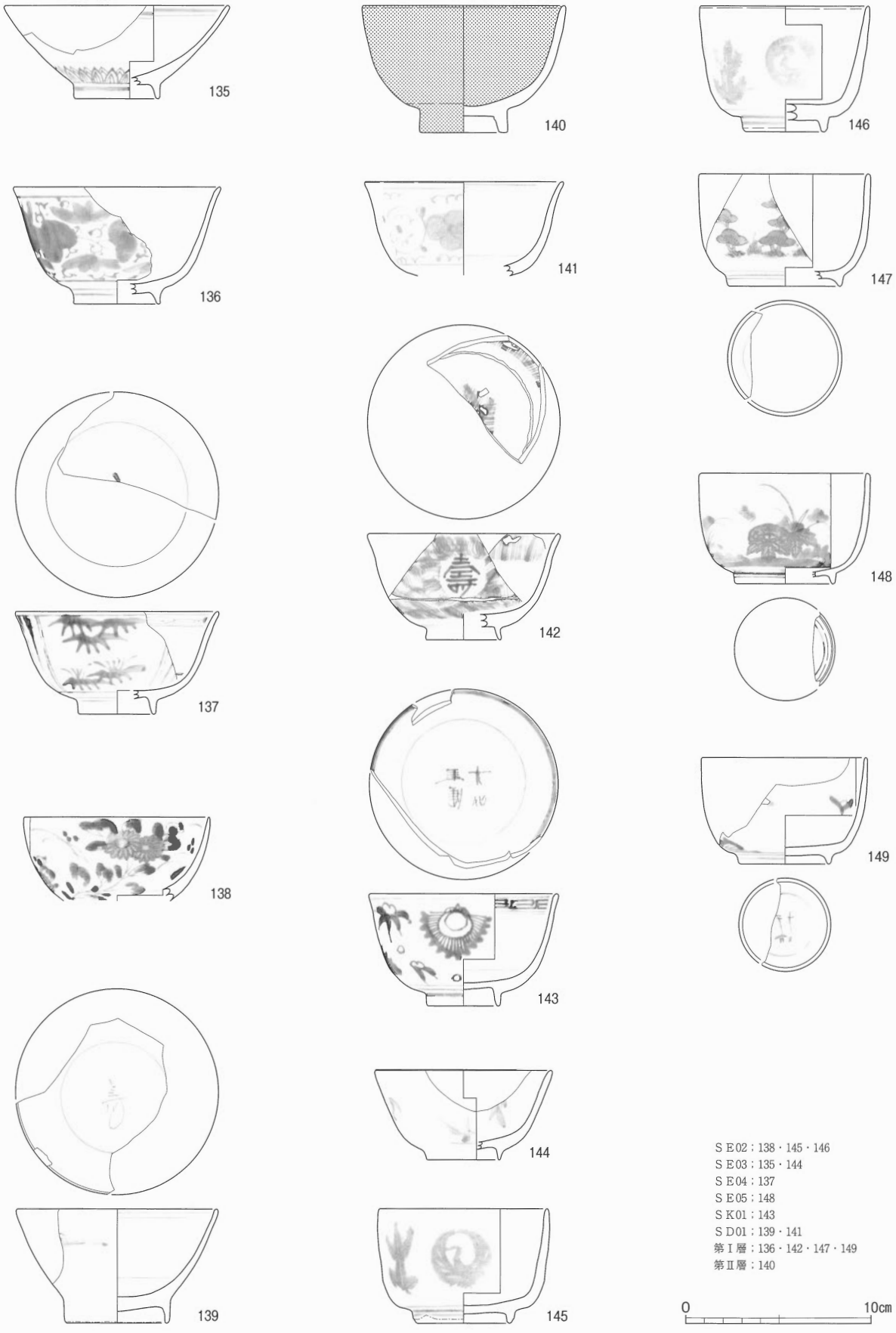
第27図　越中瀬戸〔4〕（1／3）



第28図　越中丸山（1／3）

～160は腰張形である。145・146・159はコンニャク印判である。160は内外面におよび見込みに呉須染付を施す。その他は外面にのみ呉須染付を施す。149・154は底面に崩し大明年製がある。140は呉器形である。内外面に青磁釉を施す。139は広東形である。内外面に呉須染付を施し、見込みに「寿」銘を施す。135は平形である。内外面に呉須染付を施す。136・137・141～143・152・161・163は端反形である。137・141～143・152は内外面に、136・161・163は外面に呉須染付を施す。142は類例から外面に「福禄寿」と記載すると推測する。143は見込みに崩し成化年製がある。144は杉形である。155・156は半筒形である。155は内外面に呉須染付を施す。外面は蛸唐草文である。156は外面に青磁釉、内面に呉須染付を施す。164・165は底部である。164は高台内部に崩し大明年製がある。166～168は紅猪口である。いずれも菊花形で、型押しである。168は外面に花弁を施す。いずれも時期は17世紀末～18世紀前半である。

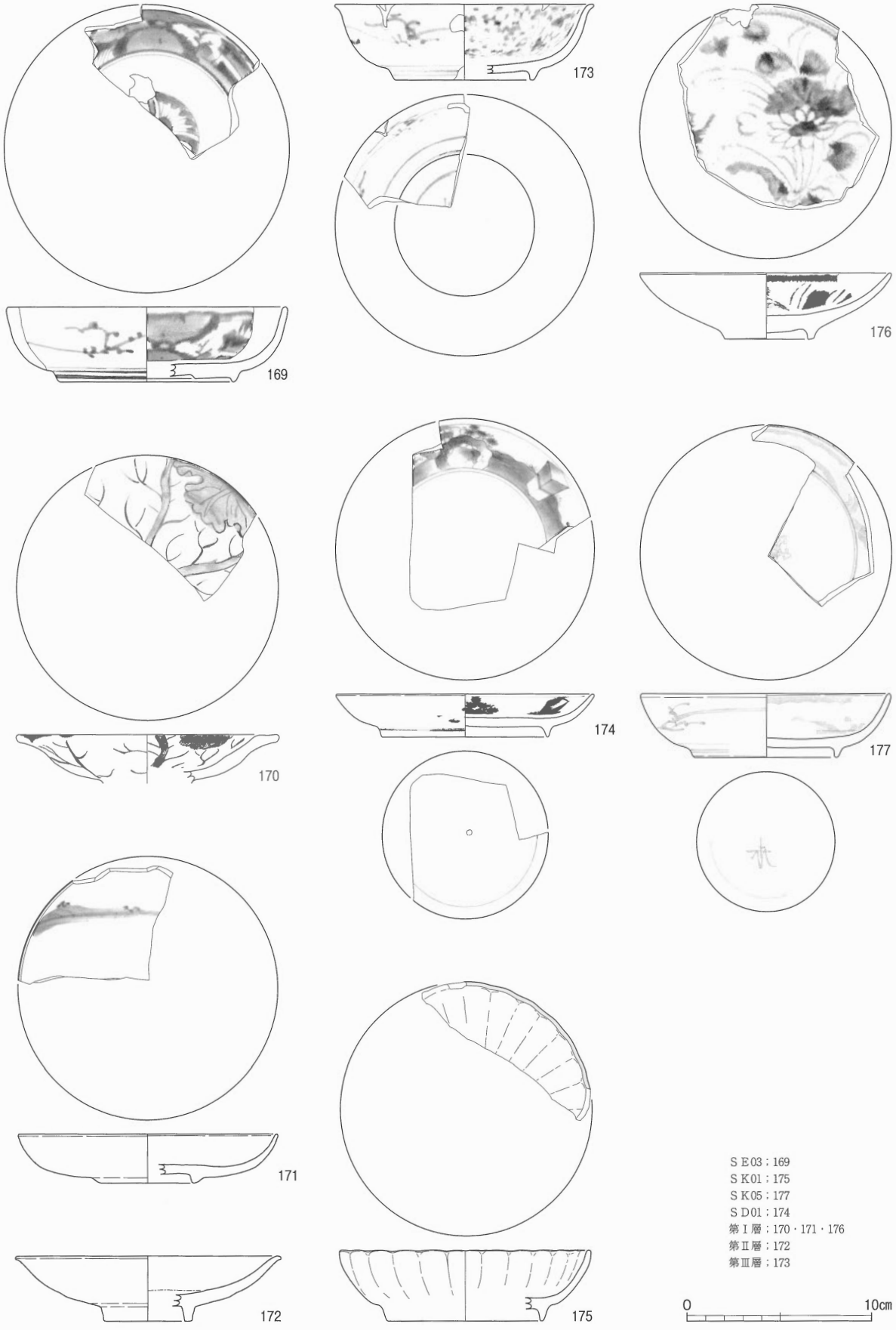
169～187は皿類である。169～175は五寸皿、176～183は小皿、184は極小皿である。169・174・176・177・180・182は丸形である。176・180は内面に、それ以外は内外面に呉須染付を施す。178は平形である。内面に呉須染付を施す。172・173・179・181は端反形である。172は蛇ノ目釉剥ぎを施す。173・181は内外面に、179は内面に呉須染付を施す。170は折縁形である。内面に呉須染付を施す。171は盤形である。内面に呉須染付を施す。175・183・184は輪花である。いずれも口紅である。185～187は皿の底部である。


135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
SE02：138・145・146
SE03：135・144
SE04：137
SE05：148
SK01：143
SD01：139・141
第Ⅰ層：136・142・147・149
第Ⅱ層：140
0
10cm

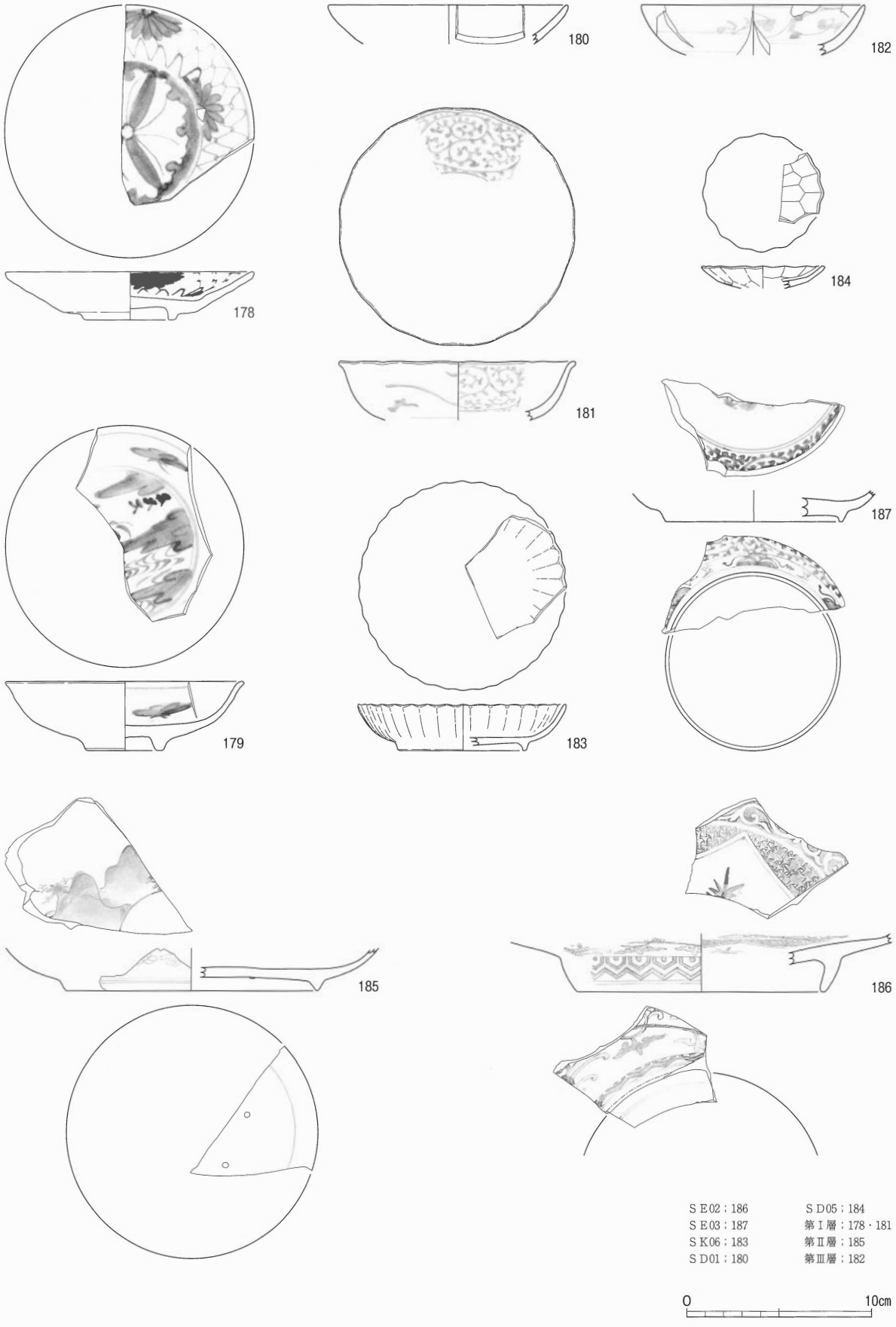
第29図　伊万里〔1〕（1／3）

150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
SE01：160・165
SE02：150・159
SK01：162
SK03：153・161・163
SK07：151・164
SD01：157
第Ⅰ層：154～156・158・167
第Ⅱ層：152・166
第Ⅲ層：168
0
10cm

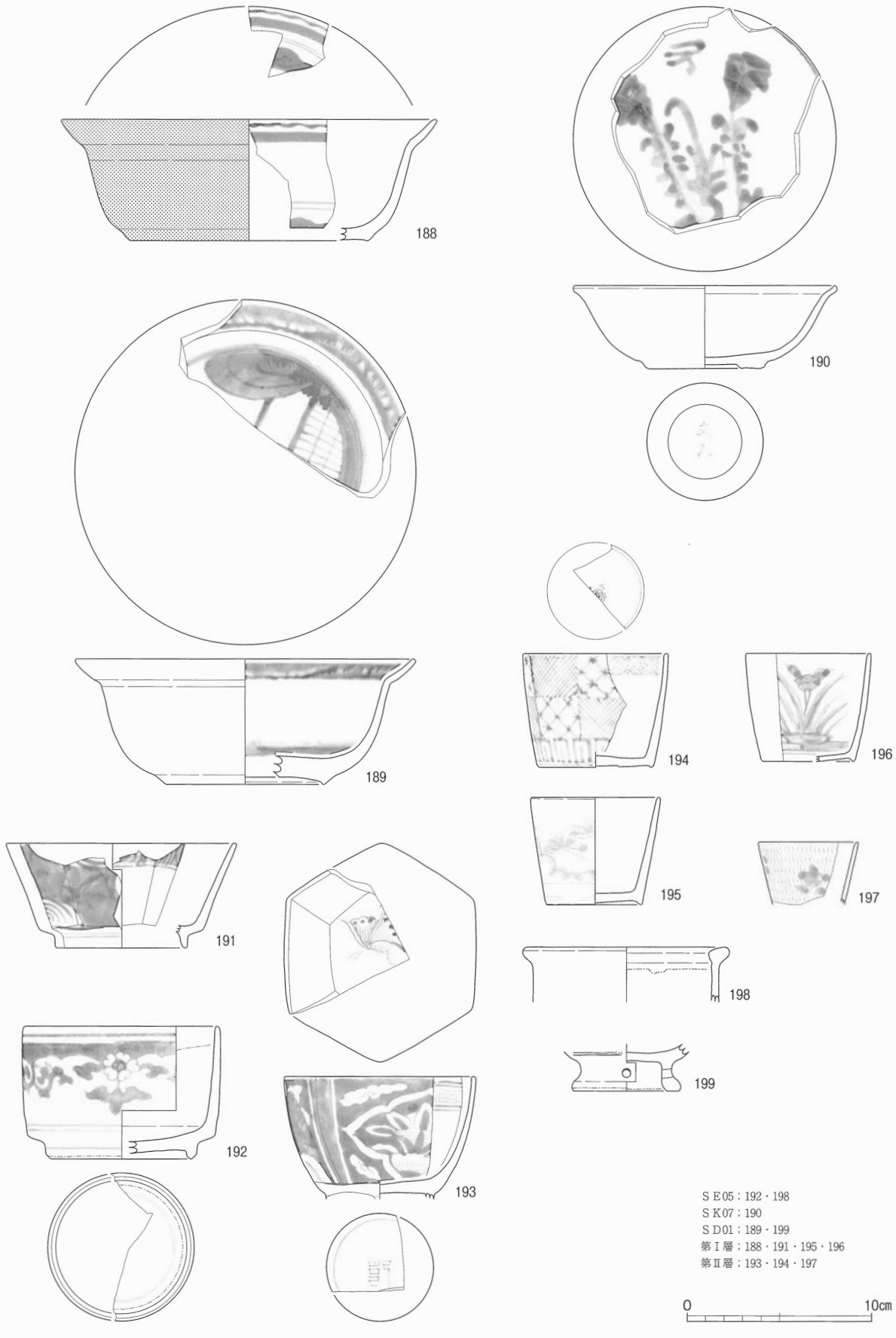
第30図　伊万里〔2〕（1／3）


169
173
176
170
174
177
171
175
172
SE03：169
SK01：175
SK05：177
SD01：174
第Ⅰ層：170・171・176
第Ⅱ層：172
第Ⅲ層：173
0
10cm

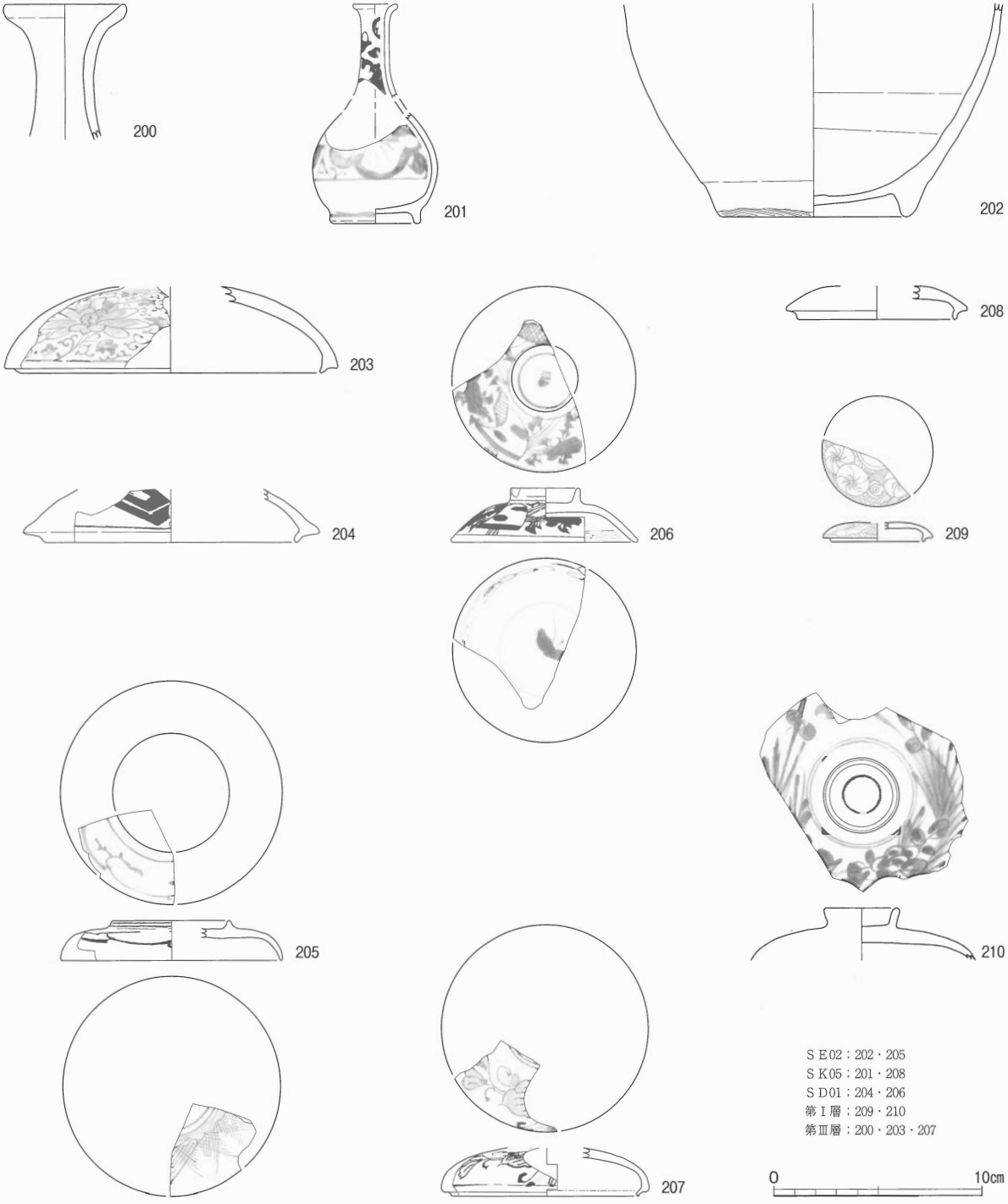
第31図　伊万里〔3〕（1／3）


178
180
181
182
184
179
183
187
185
186
SE02：186
SE03：187
SK06：183
SD01：180
SD05：184
第Ⅰ層：178・181
第Ⅱ層：185
第Ⅲ層：182
0
10cm

第32図　伊万里〔4〕（1／3）


188
190
189
194
196
191
195
197
198
192
193
199
SE05：192・198
SK07：190
SD01：189・199
第Ⅰ層：188・191・195・196
第Ⅱ層：193・194・197
0
10cm

第33図　伊万里〔5〕（1／3）


200
201
202
203
204
206
208
209
205
207
210
SE02：202・205
SK05：201・208
SD01：204・206
第Ⅰ層：209・210
第Ⅲ層：200・203・207
0
10cm

第34図　伊万里〔6〕（1／3）

188～199は鉢類である。188～191は中鉢、192・193は小鉢である。188～190・193は腰張形である。188・189は折縁で内面に呉須染付を施す。190は漆継ぎをしてあり、高台内部に朱墨で継ぎ師名と推測する２文字をの記載する。193は六角で内外面に呉須染付を施す。見込みは揚羽蝶文である。191は腰折形で、八角で内外面に呉須染付を施す。192は蓋物で半筒形である。外面に呉須染付、口縁部内面に錆釉を施釉する。194～197は猪口である。いずれも桶形である。194は蛇ノ目凹形高台である。外面に呉須染付で石畳文を施す。195・196は腰輪高台である。外面に呉須染付を施す。197は猪口の口縁部である。外面に呉須染付を施す。198・199は香炉である。198は口縁部、199は底部で、いずれも青磁釉を施釉する。

200～202は瓶類である。200は口縁部である。201は端反辣韮形小瓶で、クリ底である。外面に牡丹唐草文を施す。202は大瓶の底部である。

203～210は蓋である。205は中椀蓋である。内外面に呉須染付を施す。203・204は蓋物蓋である。外面に呉須染付を施す。206は小椀蓋である。内外面に呉須染付を施す。207～209は合子蓋である。207・209は外面に呉須染付を施す。

唐津（第35・36図）

211～218は椀類である。211～216は中椀である。217・218は小椀である。211・212は丸形である。213～216・218は腰張形である。213～215は白泥の轆轤刷毛目である。216は陶胎染付である。217は半筒形である。内外面に鉄釉を施釉する。

219～225は皿類である。219は中皿である。220～225は小皿である。219・220・223・224は丸形である。219は内面に蛇ノ目釉剥ぎを施し、鉄絵を描く。220・224は陶胎染付で蛇ノ目釉剥ぎを施す。225は平形である。222は端反形である。221は折縁形である。

226～231は鉢類である。226・227・231は大鉢である。228は中鉢である。いずれも浅丸形である。226・227は折縁で文様は白泥の刷毛目である。230は底部である。内面は蛇ノ目釉剥ぎを施し、銅緑釉を施釉する。231は三島手の底部である。229は片口で、口縁帯下注口の丸形である。内外面は白泥の轆轤刷毛目である。

232～234は甕である。232・233は同一個体と推測する。大甕で、口縁部を折返し肥厚するハンズーガメである。234は中甕で口縁部を縁折りし肩がやや張る。

京焼系（第37図）

235～242は椀類である。いずれも小椀である。235・237・240は半球形である。いずれも緑釉で施文する。236・238・239は腰張形である。236は外面に呉須染付を施す。241・242は底部である。高台内部に落款印がある。

243は皿類で、灯明受皿である。

244・245は鉢類である。244は浅丸形の中鉢である。内面は鉄絵を施す。245は鬢盥である。幅は推定13.3cmである。

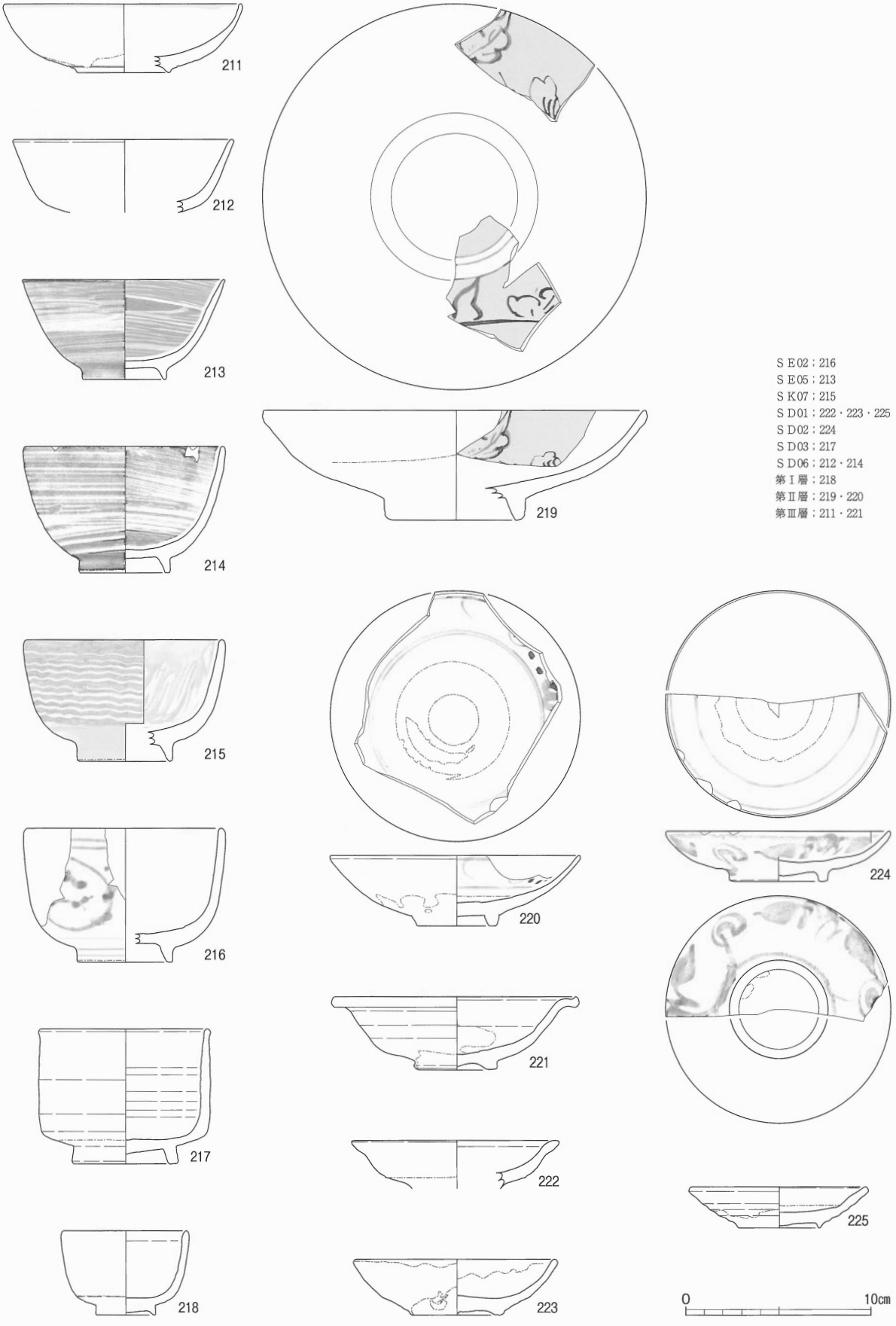
246・247は瓶類である。246は髪油壺の底部である。底面は回転糸切りである。247は徳利である。

248は急須の口縁部である。外面は呉須染付を施す。

信楽（第37図）

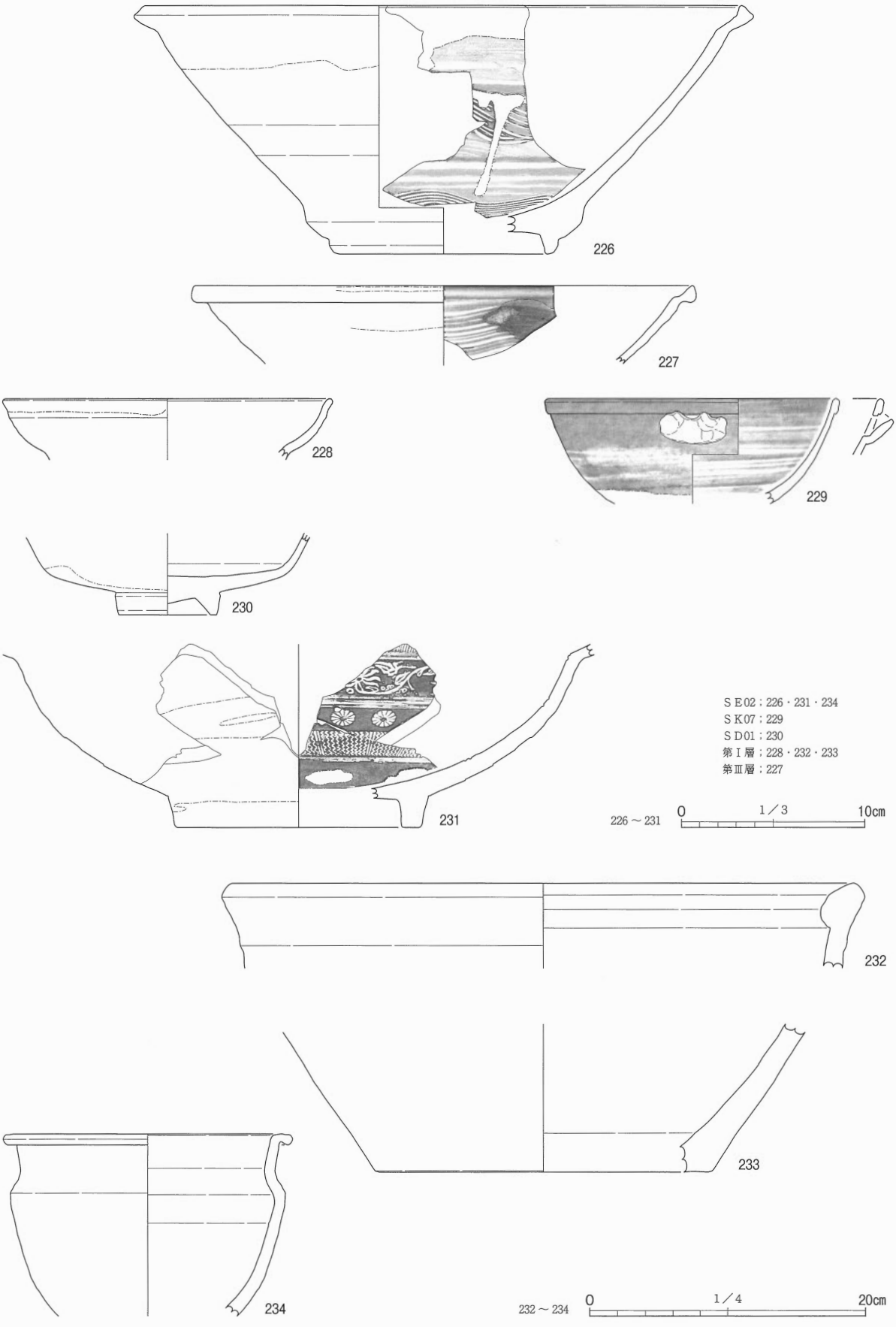
249は腰張形の中椀である。内外面に飴釉を施釉する。

250～254は皿類である。250・251は灯明皿である。内面および口縁部外面に鉛透明釉を施釉する。251は内面に３条の沈線を施し、その延長線上の口縁部外面に油煙が付着することから、この沈線に合わせて灯心を置いたと推測する。252～254は灯明受皿である。252は炮器である。253・254は内面

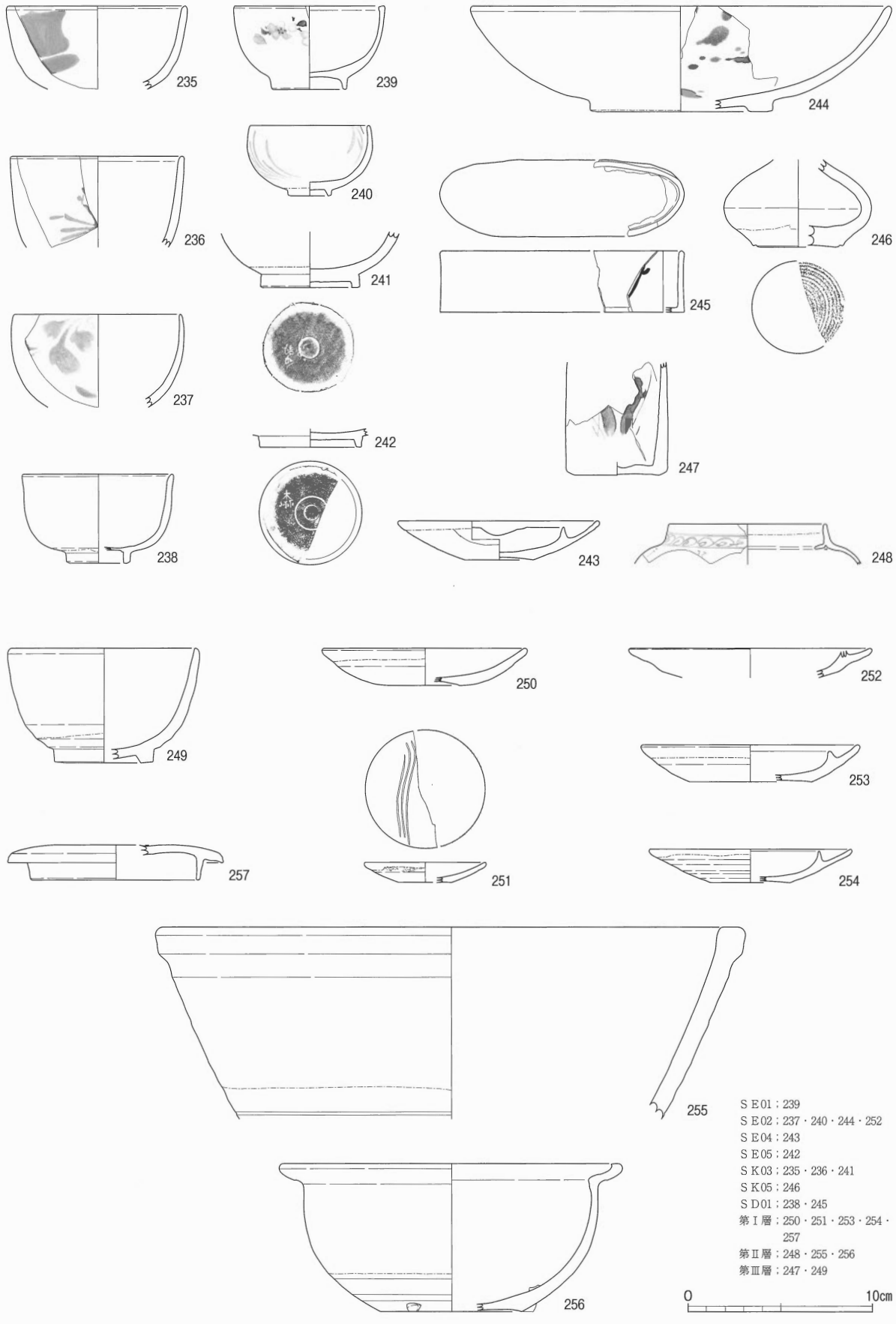


SE02：216
SE05：213
SK07：215
SD01：222・223・225
SD02：224
SD03：217
SD06：212・214
第Ⅰ層：218
第Ⅱ層：219・220
第Ⅲ層：211・221

第35図　唐津〔1〕（1／3）



第36図　唐津〔2〕（1／3・1／4）



第37図　京焼系、信楽（1／3）

および口縁部外面に鉛透明釉を施釉する。

255は練鉢である。内面および口縁部外面に灰釉を施釉する。

256は腰折三足の土鍋である。内面および外面胴上部は鉄釉を施釉し、胴下部は露胎する。

257は蓋物蓋である。内外面に灰釉を施釉する。

瀬戸美濃（第38・39図）

258～267は椀類である。258・259は磁器である。いずれも端反形で内外面に呉須染付を施す。260～267は陶器である。260～264は中椀である。265・266は小椀である。265は腰張形である。内外面に飴釉を施釉し、外面に鉄絵を描く。261は甕形である。内面および口縁部外面は灰釉を施釉し、底部外面は露胎する。262・263は天目形である。いずれも飴釉を施釉する。266は腰折形である。内外面に灰釉を施す。260は拳骨形である。内外面は鉄釉を施釉する。264は轆轤挙骨形である。内外面は灰釉を施釉し、外面に鉄絵を描く。

268～279は皿類である。268・269は磁器である。268は盤形の小皿である。内外面は呉須染付を施す。269は稜皿形の小皿で、型打整形で、見込みは字模様の形押文である。270～279は陶器である。270・271は五寸皿である。272～278は小皿である。271～273・277は丸形である。271は灰釉を施釉する。272は無高台で底部は回転糸切りである。273はいわゆる太白手で、陶胎染付である。内面は呉須染付を施す。277は見込みに印花文を施す。275は平形である。見込みに胎土目が残る。274・276は折縁形である。274は灰釉を施釉する。276は鉄釉と灰釉を掛合する。270は盤形である。型打整形で、内外面に灰釉を施釉する。278は稜皿形である。見込みに文字（「福」ヵ）を押印する。279は方形ないし長方形の皿である。外面に鉄釉を施した後、斜格子文の釉剥ぎを施す。

280～285は鉢類である。280は浅丸形の中椀である。口縁部は折湾である。281は口縁切込筒形の片口である。内外面に灰釉を施釉する。282は鉢類の口縁部である。283は植木鉢の底部である。獣脚が３箇所付く。284・285は香炉である。284は無三足半筒形である。285は半筒形の口縁部で、縦位の沈線を施す。

286～289は瓶類である。286は瓶類の口縁部である。287は中～大瓶の頸部から胴上部にかけてのものである。288・289は小瓶である。

290は土瓶蓋である。

志野（第39図）

291・292は皿類である。291は折縁形の大皿である。292は稜花で小皿である。

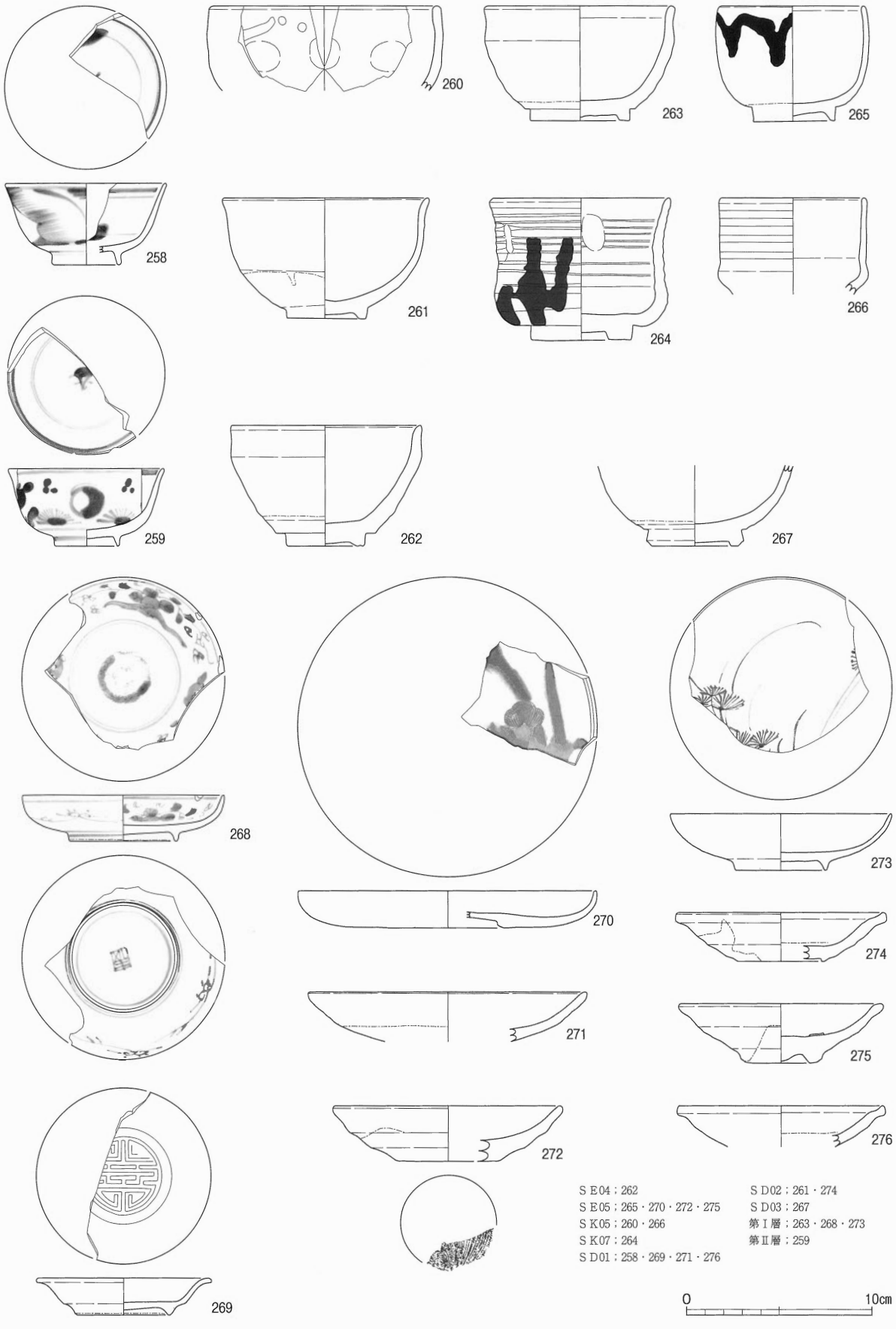
293・294は鉢類である。293は端反腰張形の猪口である。294は段重である

瓦質土器（第40図）

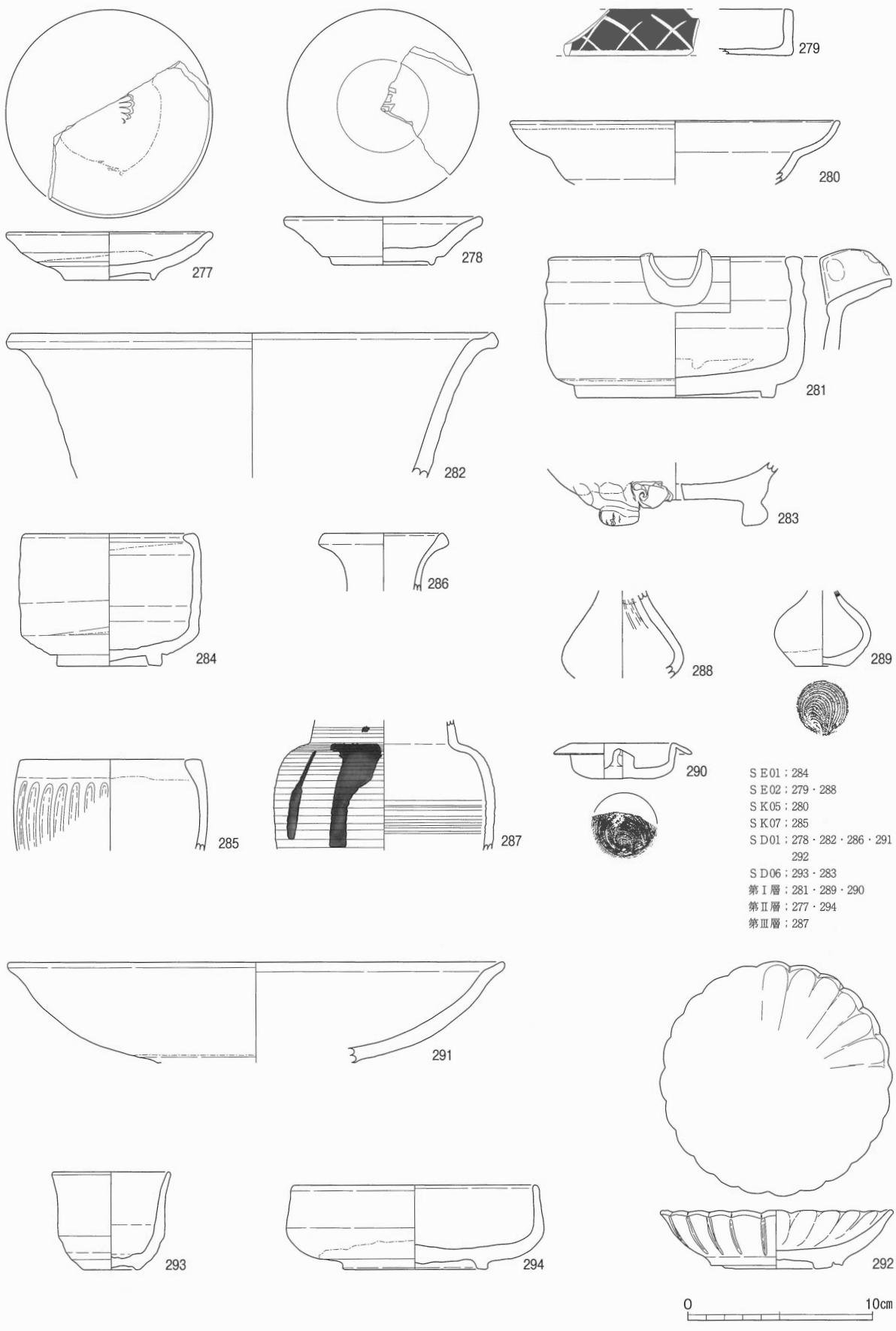
295は風炉である。口縁部外面に印花文を施す。296は火入である。297～300は火鉢である。297・298は口縁内肥厚形である。297は口唇部に木の葉文を施す。胴部は縄タタキ後ナデを施す。298は口縁部である。299・300は底部である。299は円形の三足が付き、底面に「×」の線刻がある。300は方形の三足が付く。301は火消し壺である。２箇所の把手がある。302は火消し壺蓋である。303は七厘のさなである。

近代陶磁器（第41図）

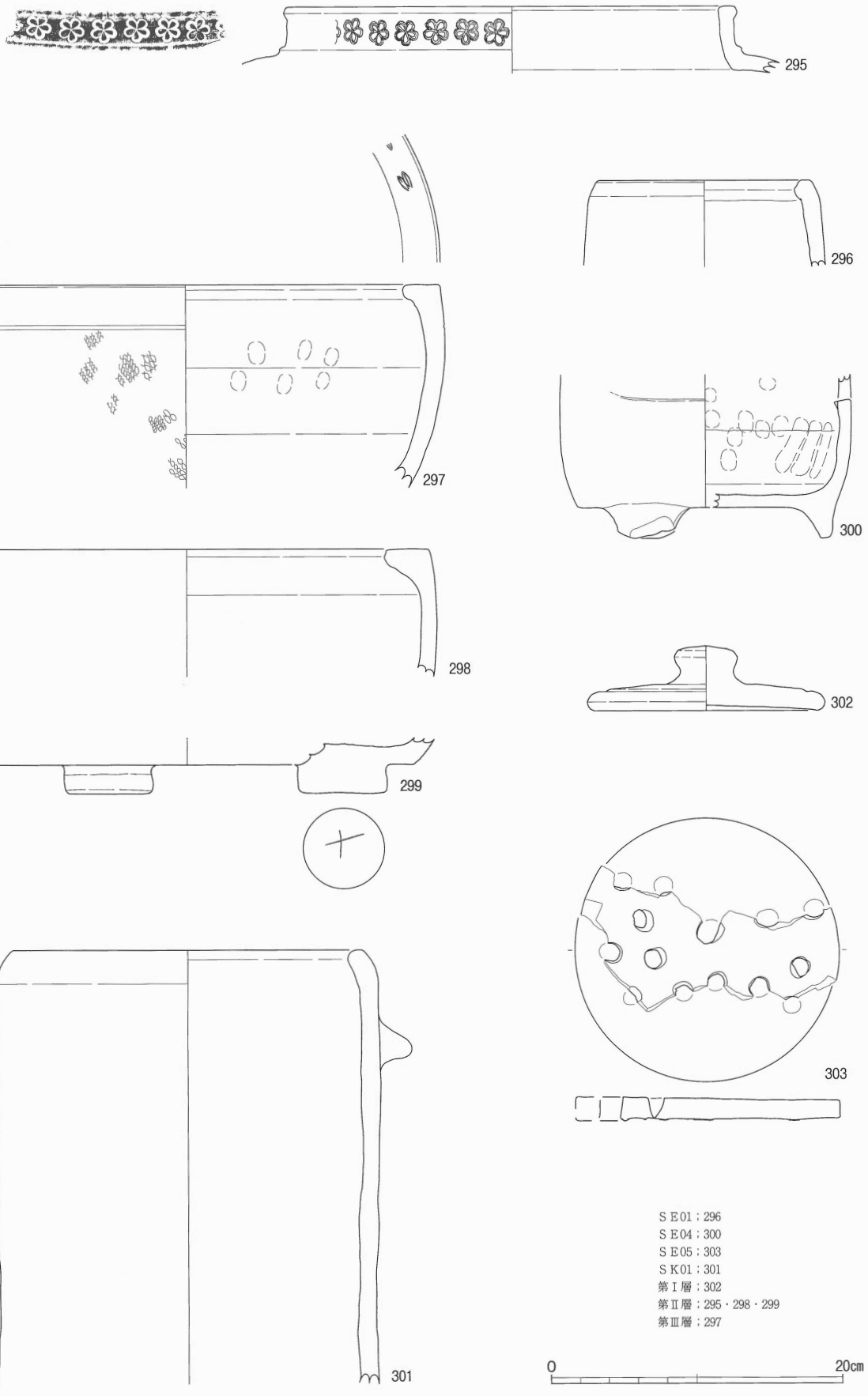
304は九谷の筒形の小椀で、外面に色絵の花文を施す。305は伊万里の端反形の薄手酒杯である。外面に「陶磁器卸問屋」「太田商会」とあり、大正14年に発行した『大日本職業別明細圖之内』によると現在の富山市総曲輪３丁目に「太田陶器店」があり、この太田陶器店を指していると推測する。306は瀬戸美濃の盤口形の仏花瓶である。307・308は土師質の水注である。



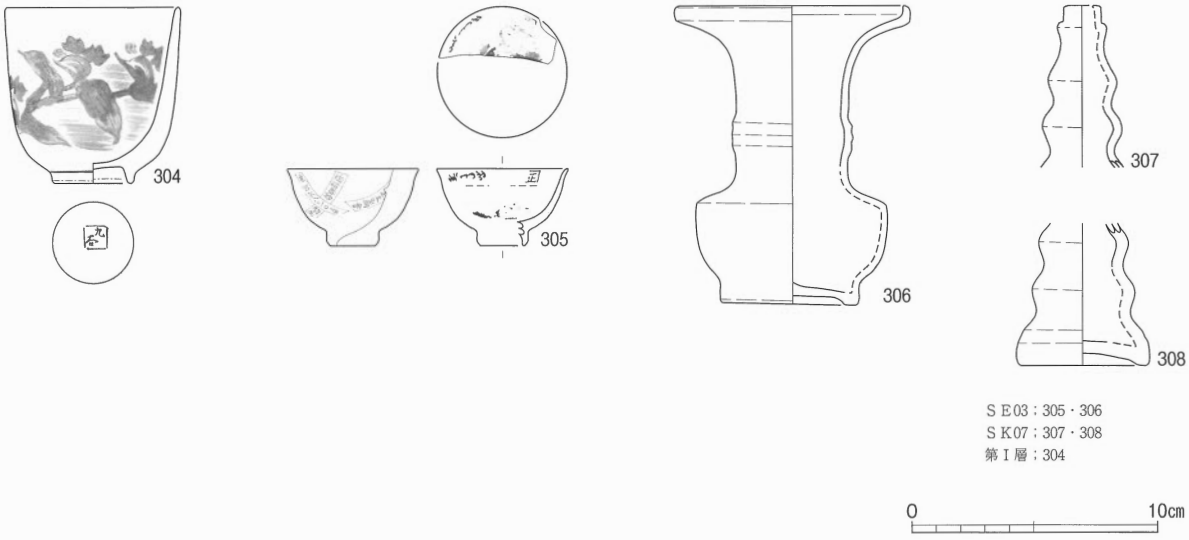
第38図　瀬戸美濃〔1〕（1／3）



第39図　瀬戸美濃〔2〕、志野（1／3）


295
296
297
298
299
300
301
302
303
SE01：296
SE04：300
SE05：303
SK01：301
第Ⅰ層：302
第Ⅱ層：295・298・299
第Ⅲ層：297
0
20cm

第40図　瓦質土器（1／4）



第41図　近代陶磁器（１／３）

土製品（第42図）

309は土錘である。310・311は鞴の羽口である。310は炉側端部で溶着滓が付着する。312は墨書陶器片で全面研磨する。表面は「小車見仙」と墨書する。313～315は面子で、陶磁器を打ち欠く。313は唐津である。314・315は瀬戸美濃である。316～319は土人形である。316は西行法師像である。317は地蔵菩薩像か。318・319は同一のものである。320～324はミニチュアである。320は鳥形である。321・322は箒である。一部胡粉が残存する。323は三方である。324は瓢箪形である。

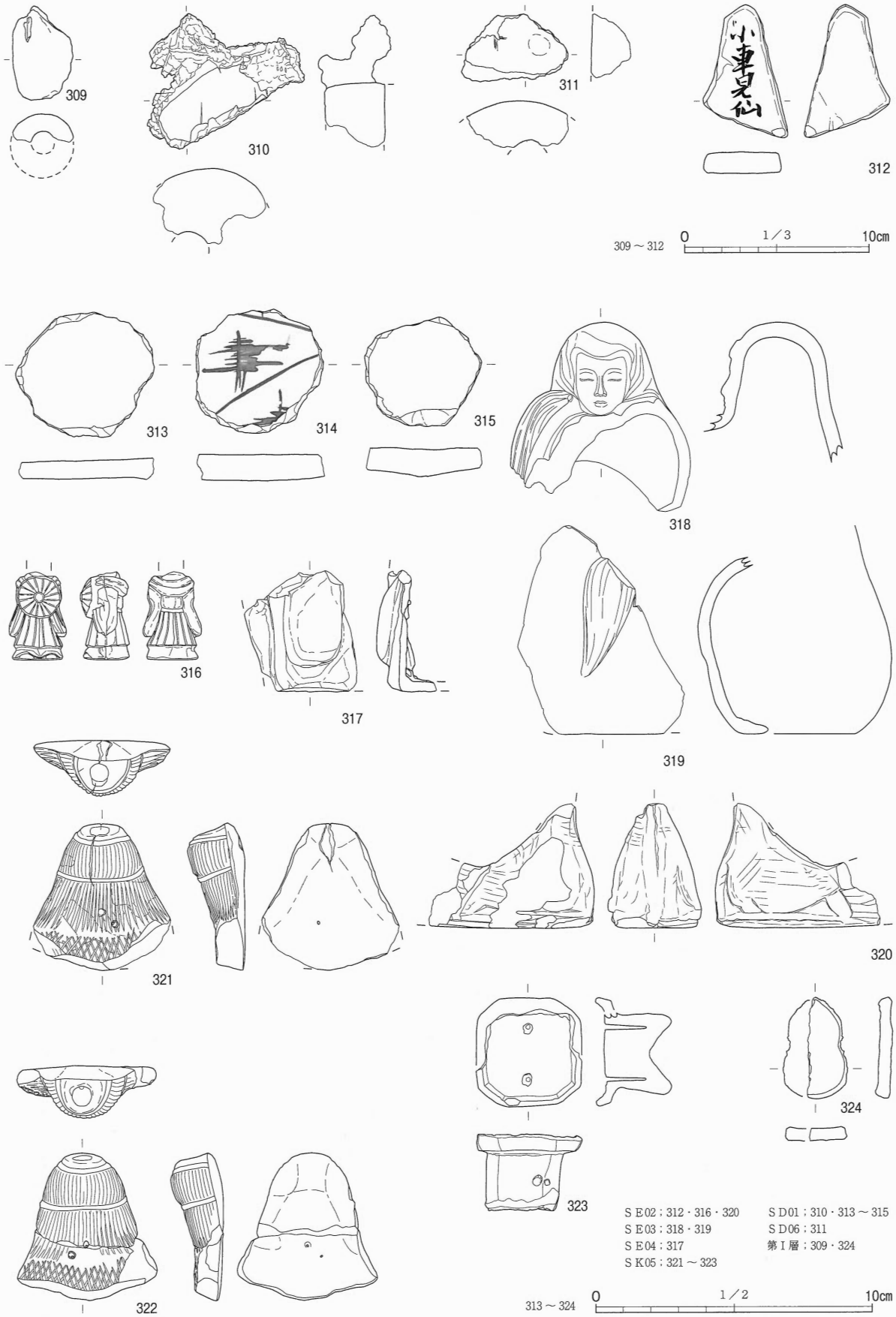
ガラス製品（第43図）

325～327はガラス瓶である。いずれもＳＥ03出土である。325・326は丸形の瓶である。325はコルク栓があり、赤色の内容物が少量残存する。327は薬瓶で、「神薬」「株式会社師天堂」と目盛りを陽刻する。神薬は置き薬として置かれ、株式会社師天堂は富山市星井町に所在した製薬企業である〔富山縣賣薬同業組合1943〕。328・329はU字状のガラス管で、内部に黒インク状の内容物が付着する。いずれもＳＥ03出土である。330は数珠玉である。ＳＫ11出土である。木製の数珠玉も同遺構から出土しており、同一のものの可能性がある。長軸0.6cm、幅0.4cm、重量0.2ｇである。

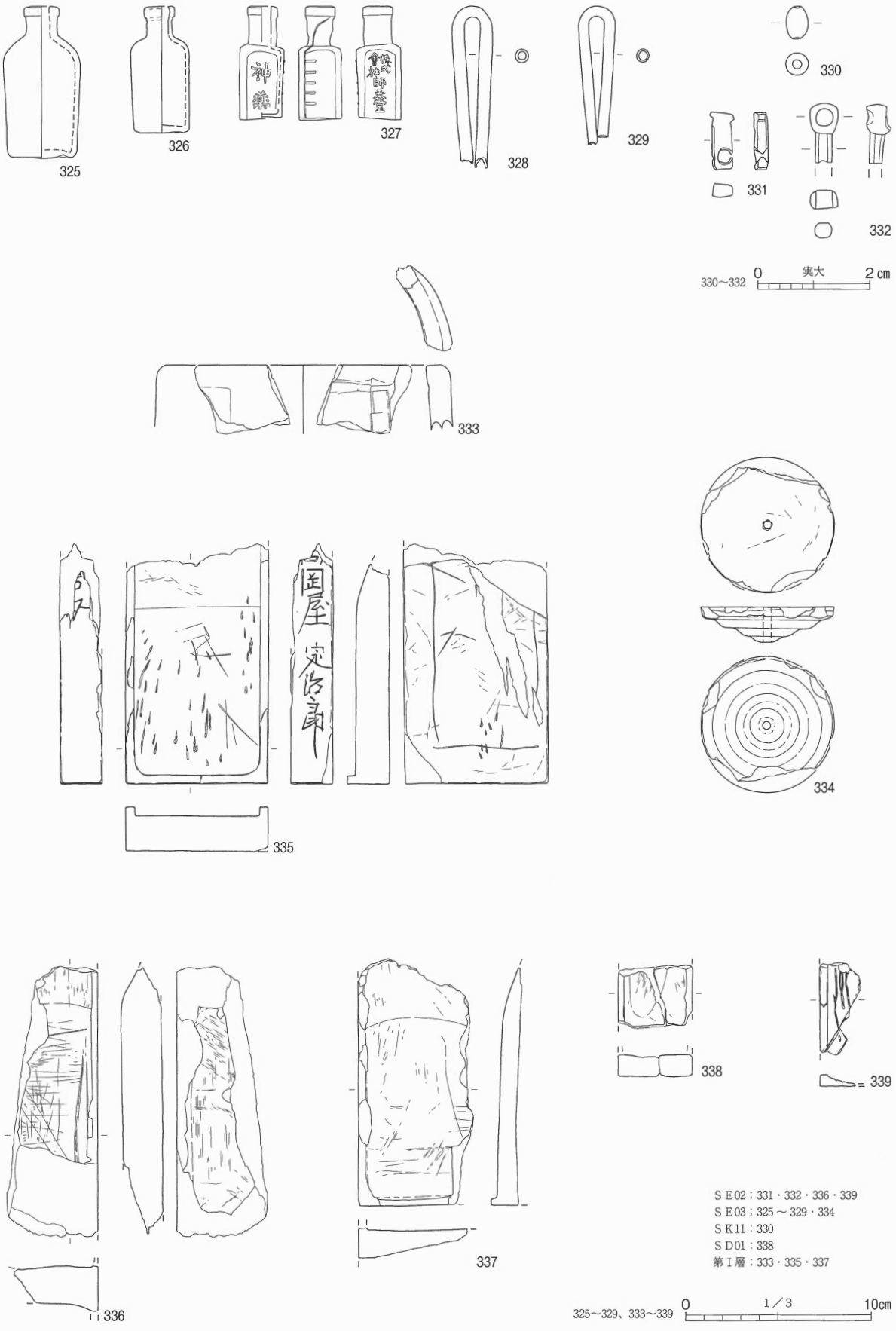
石製品（第43～46図）

331・332は小形の部品である。331は頂部は丁字状になり、下部は１箇所穿孔がある。粘板岩製である。332は上部は１箇所穿孔し、下部は欠損するが１箇所穿孔する。継手か。玉髄製である。333は滑石製石鍋を温石に転用したものである。334は緑色凝灰岩製紡錘車である。335～339は硯である。335～337・339は粘板岩製、338は凝灰岩製である。335は海の一部が欠損する。左側面に「□□」、右側面に「□（高ヵ）岡屋定治郎」の線刻がある。336は右半分の海と陸の一部が残存したものである。337は左半部の陸と海の一部で、裏面は欠損する。338は持ち運び用である。339は陸の一部である。340～346は砥石である。340～344・346は砂岩製、345は珪化木製である。347は花崗岩製石臼の下臼である。348は砂岩製台石である。349は鉄石英製火打石である。350は緑色凝灰岩製火鉢である。351・352は珪藻土製行火である。353・354は金屋石製井戸側である。ＳＥ03に設置する。鏨で調整した後平鑿で成型する。

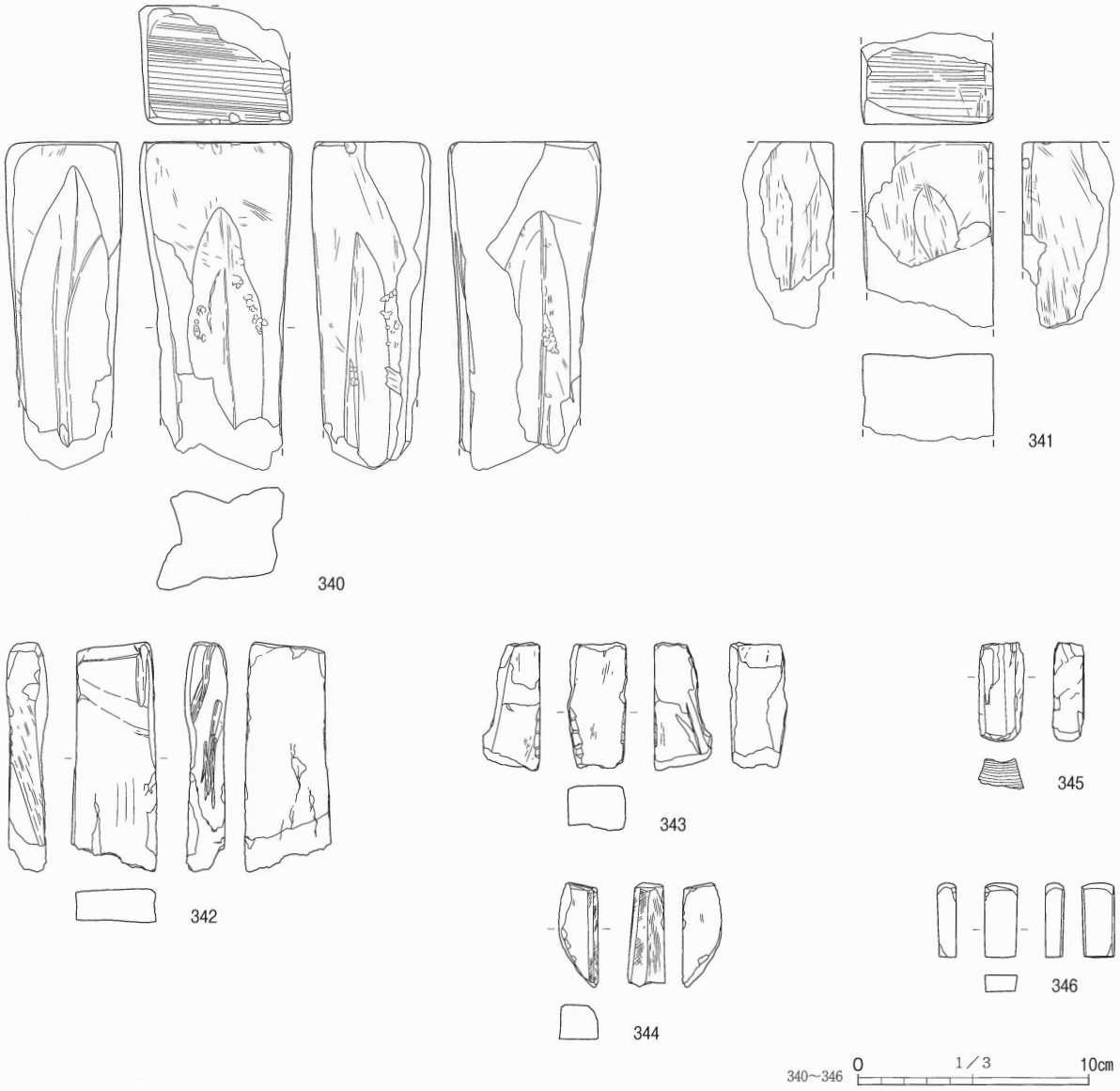
（岡田）

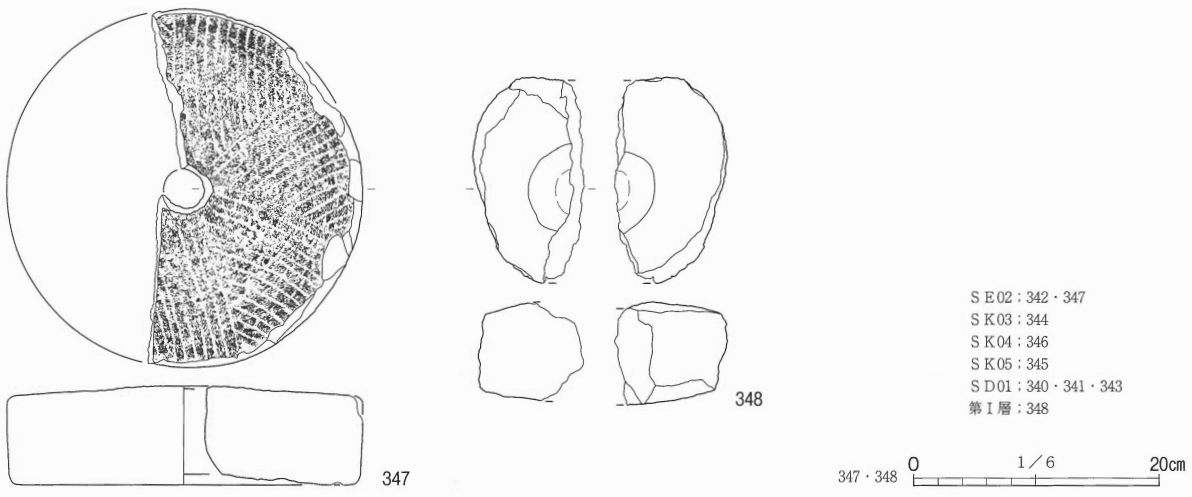


第42図　土製品（1／2・1／3）

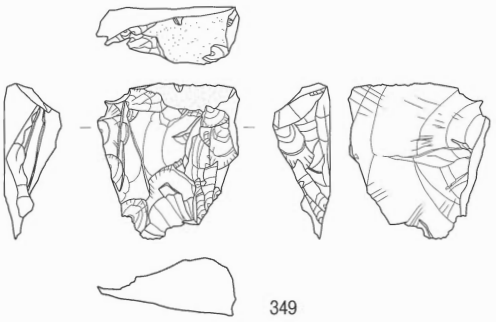


第43図　ガラス製品、石製品〔1〕（実大・１／３）

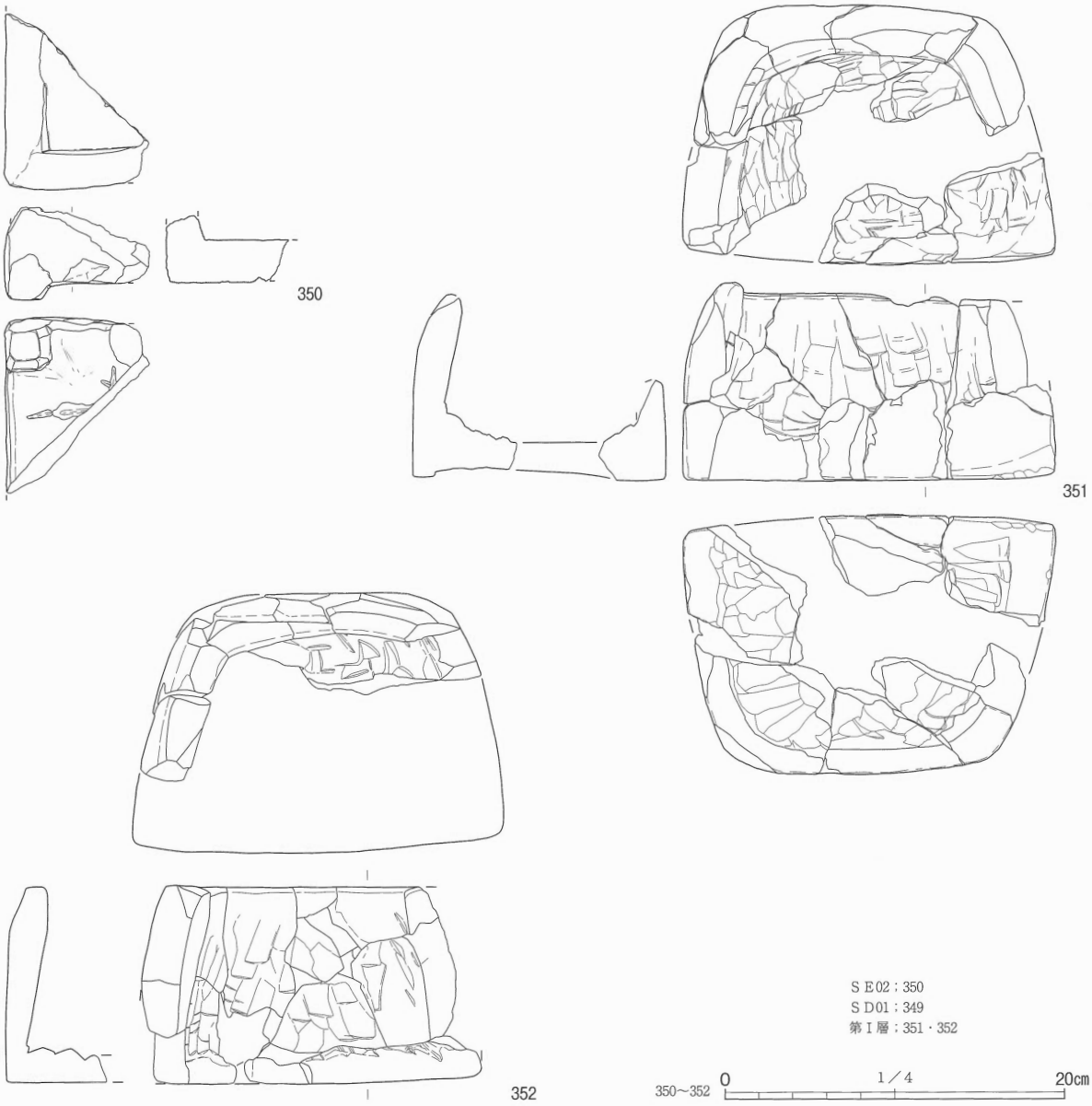




第44図　石製品〔2〕（1／3・1／6）



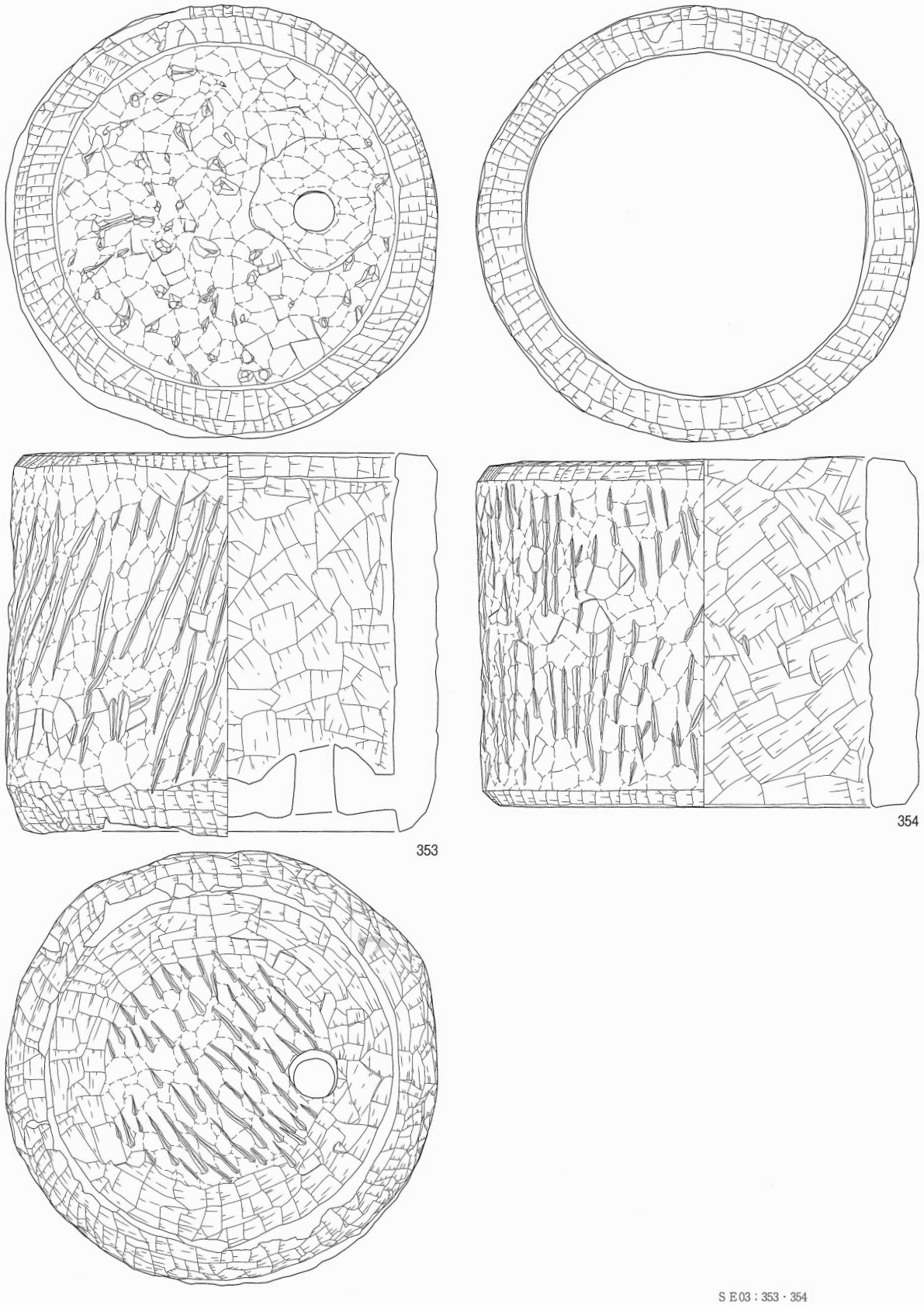
349 0 1／2 10cm



S E02：350
S D01：349
第Ⅰ層：351・352

350～352 0 1／4 20cm

第45図　石製品〔3〕（1／2・1／4）



第46図　石製品〔4〕（1／10）

木製品（第47～62図）

木製品は約2,300点出土しており、主な製品のみを図示した。

355～371は漆製品である。355は合子である。全面黒漆塗りである。357～362は漆器椀である。356は全面黒漆塗り、見込みと外面の文様は赤漆塗りである。357～359は外面黒漆、内面赤漆、外面の文様は赤漆塗りである。360・361は全面赤漆塗りである。362は全面黒漆塗りである。363・364は蓋である。全面黒漆塗りである。365は底板である。全面黒漆塗り、一部炭化する。366は膳の底板である。表面赤漆、裏面黒漆塗りである。367～371は脚である。367～369は全面黒漆塗りである。370・371は同一個体の脚である。表面赤漆、裏面黒漆塗りである。

372～380は箸である。379・380は頭部を片面に向かって鋭角に切り落とす天削げの加工を施す。381は匙である。382は切匙である。384は刷毛である。下部に黒漆を塗る。385は糸枠の横木である。386・387は糸枠の枠木である。388は木錘である。389・390は刃物の柄である。391～396は蓋である。392・395は綴じていた樹皮が一部残る。398～401は底板である。398は側面に木釘孔が残る。402～404は桶の側板である。405・406は柄杓の柄である。407は曲物である。408・409は曲物の側板である。410・411は栓である。412は箱である。底板と左右の側板に鋸痕が残る。側板を底面から、脚を内面から鉄釘で留め、底面下側中央に脚とは別材を脚と鉄釘で留める。

413～417は下駄である。413～415は連歯下駄である。414は台上面上部前歯部分に鉄釘が残る。416は刳下駄である。417は露卯下駄である。台上面下部に文様を線刻する。418・419は下駄の歯である。

420～424は棒材である。すべてＳＫ03から出土し、土壌分析からトイレ遺構の可能性が高いことから躊木と推測する。

425は算盤玉である。孔を除き全面朱塗りである。426は将棋の駒である。金将の文字を黒漆で書く。427は人形と推測する。429は鏃形である。430は鍬形である。柄孔の上に木釘が残る。

431～442は数珠玉である。側面は赤漆塗りである。ＳＫ11から出土しており、同遺構からガラス製の数珠玉１個もあることから、同一品となるの可能性がある。

443～448は楔である。449～454は不明部材である。455は脚である。左側に木釘が残る。456は灯台である。

457～463は建築部材である。457は敷居の端材である。458は上部に鉄釘が残る。459は竹製の導水管の継手である。孔の内部にパッキンの役割をする縄が残存する。460・461はホゾとホゾ孔が残る。463は杭である。464・465は護岸構築材である。

466～499は用途不明品である。470は上部に鉄釘が残る。473・474は墨痕が残る。477は下端に鉄釘が残る。479は上下に4箇所孔が残る。480は表面に当り痕が残る。482は表面に円形の切り込みと孔が残る。490は上部に墨書きの線が残る。492は鉄製の部材を鉄釘で留める。497は表面と側面に黒漆が残る。

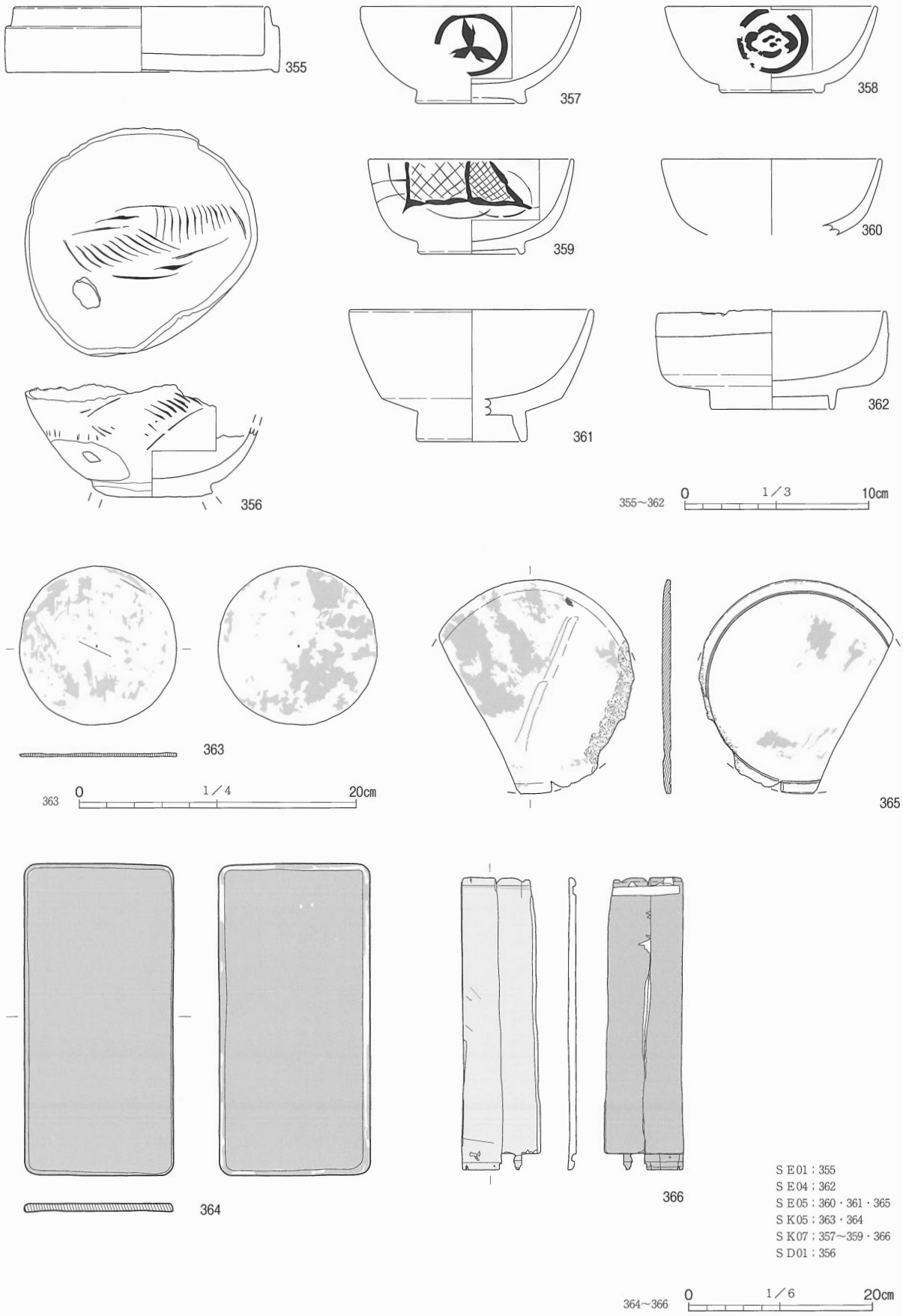
500は印鑑である。印面には富の字が彫られている。印側の中央に孔をあける。

501～503は荷札である。501・502は上部に、503は中央左側に孔をあける。

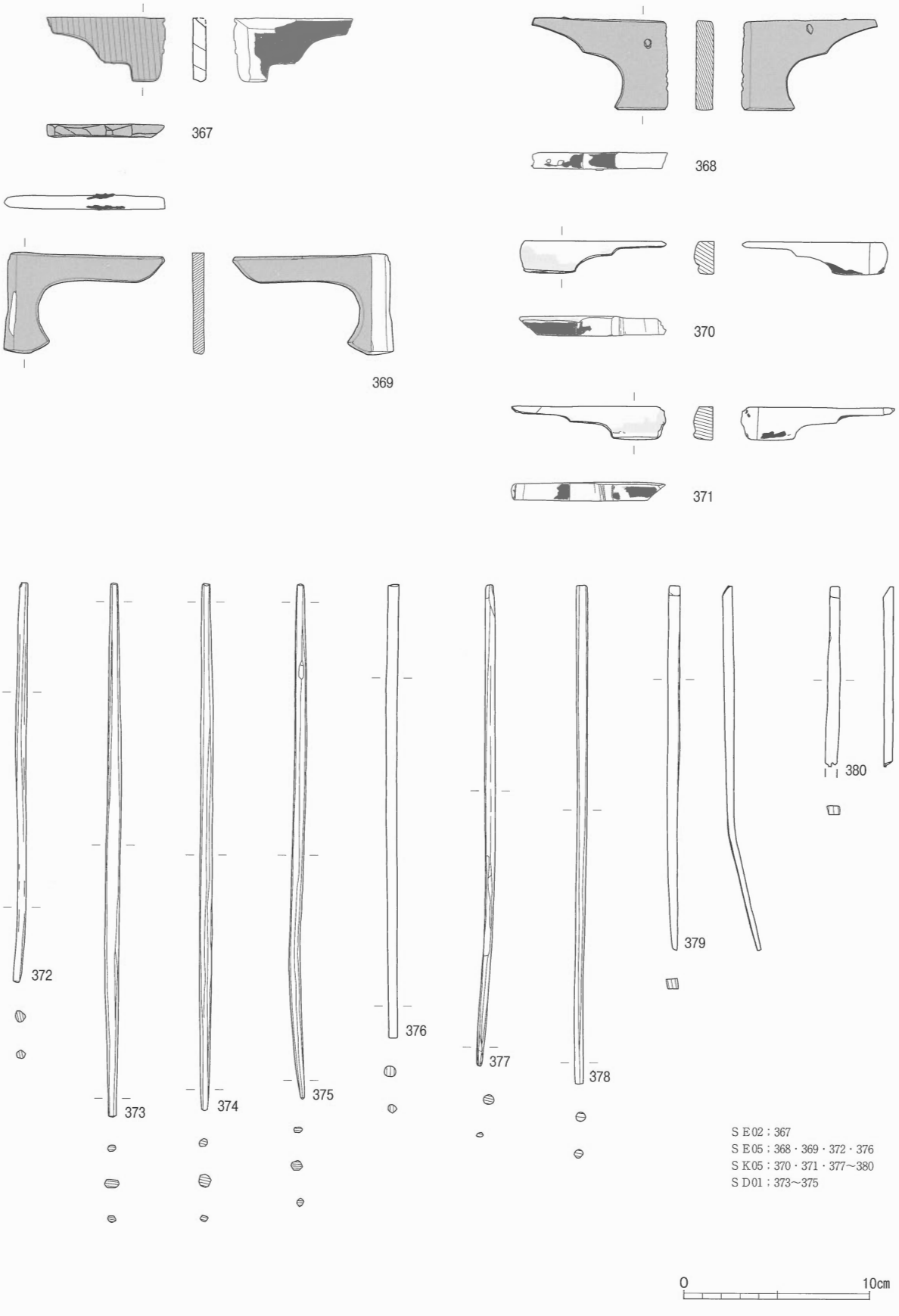
504～512は墨書の残る板材である。509は罫書をして墨で四角を書く。点状に焦げが残る。510は印を消すように朱書きが残る。512は表面に墨書と刃物痕が残る。513～515は蓋である。514は桟蓋である。裏面の上下部に4箇所の釘孔と下部に桟の当り痕が残る。515は桶蓋である。表面に焼印が残る。

516は井戸桶である。２段組みの井戸桶で底板を持つ。上段は一部既往の工事で欠失している。上段には１段、下段には２段タガが残る。下段は２枚の側板に孔があいており、１枚に栓が刺さる。

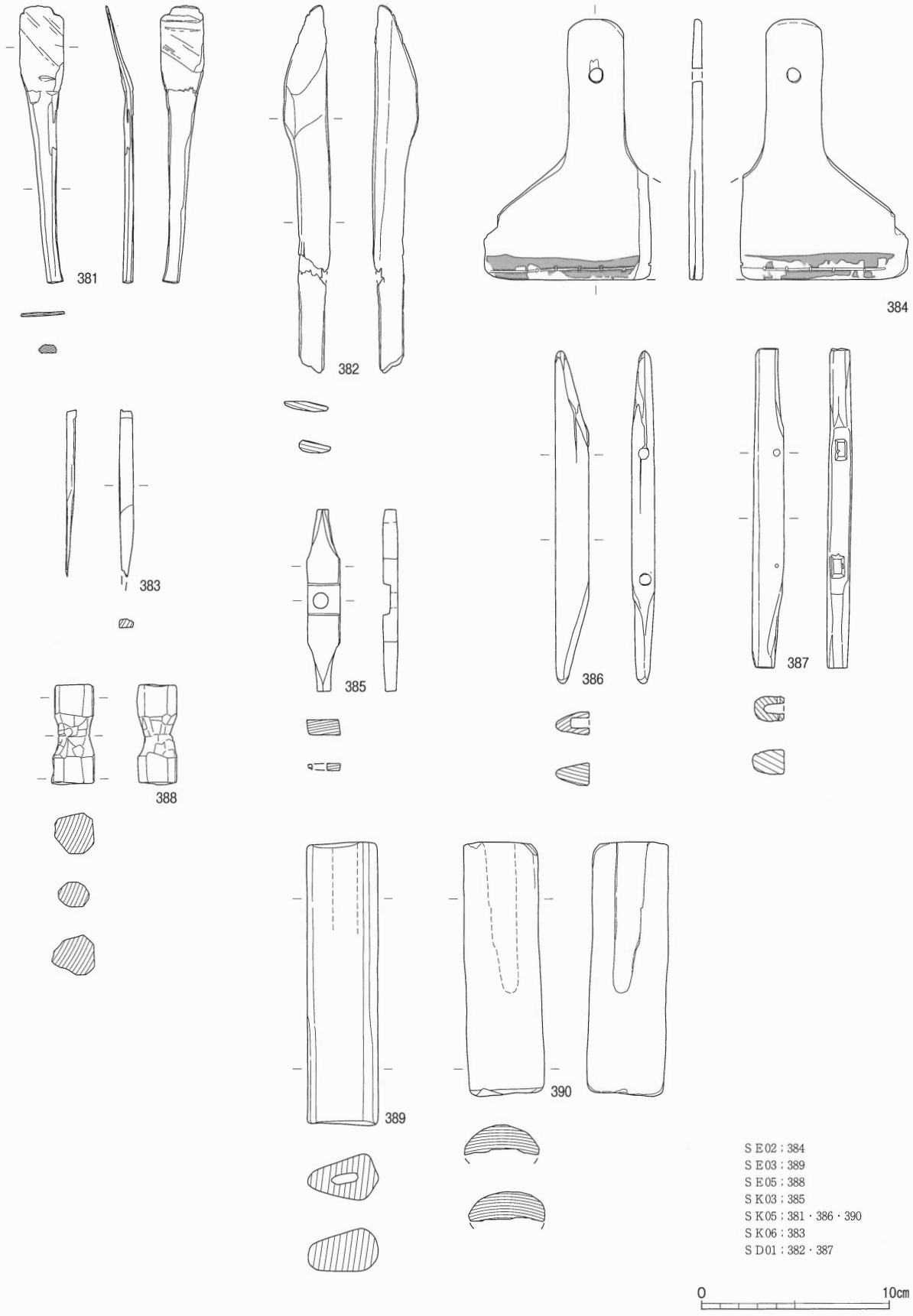
（後藤）



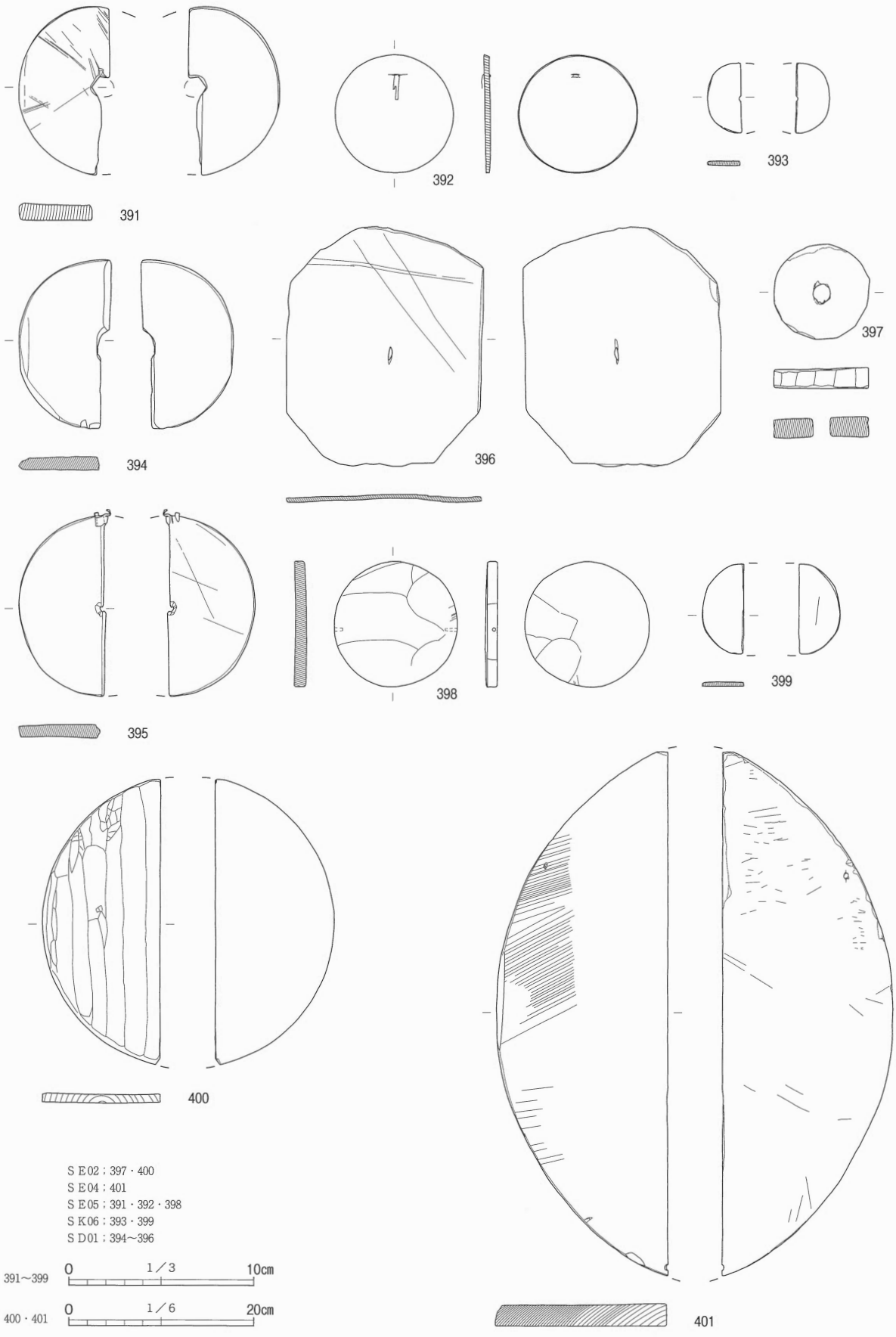
第47図　木製品〔1〕（1／3・1／4・1／6）


367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
SE02：367
SE05：368・369・372・376
SK05：370・371・377～380
SD01：373～375
0
10cm

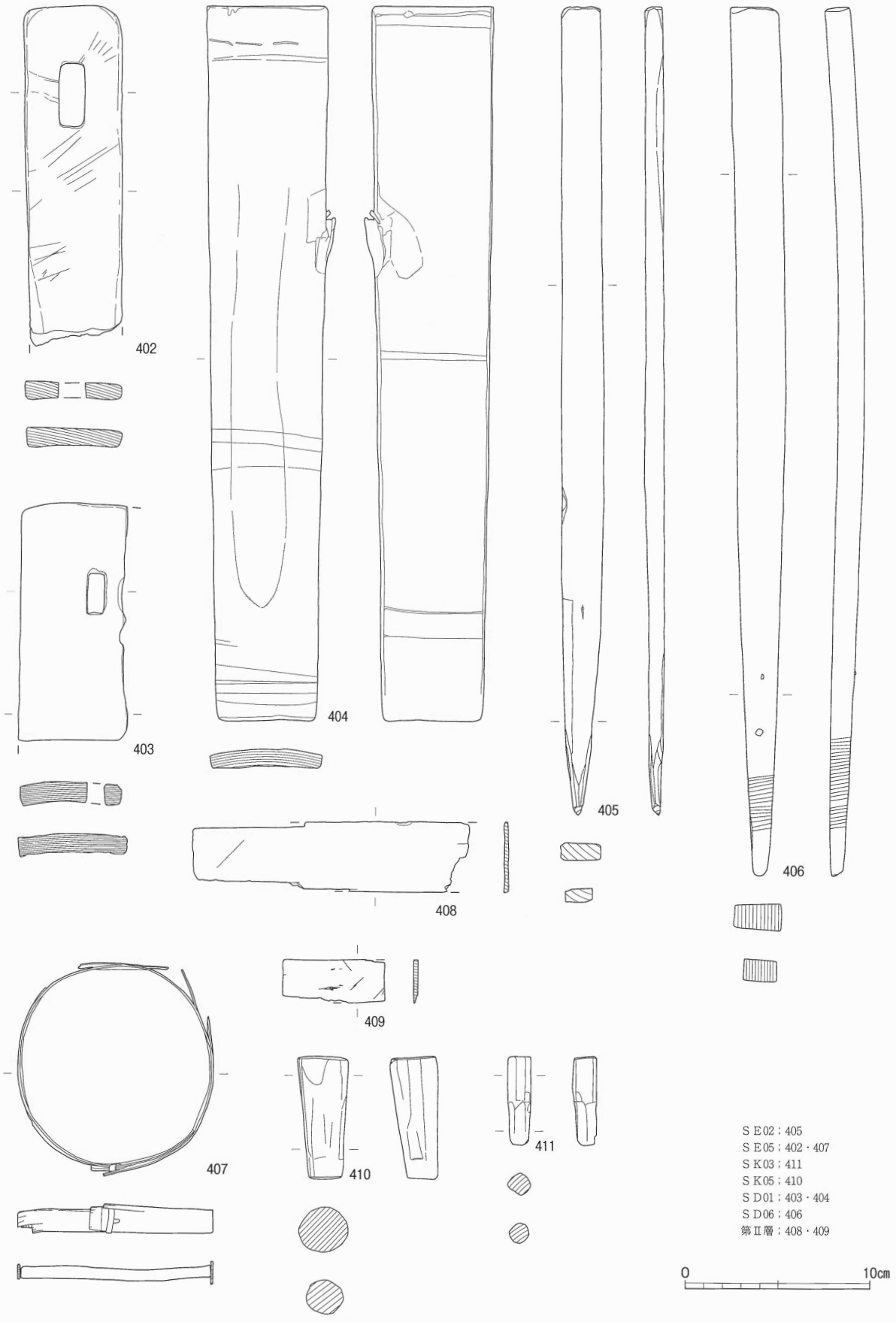
第48図　木製品〔2〕（1／3）


381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
SE02：384
SE03：389
SE05：388
SK03：385
SK05：381・386・390
SK06：383
SD01：382・387
0
10cm

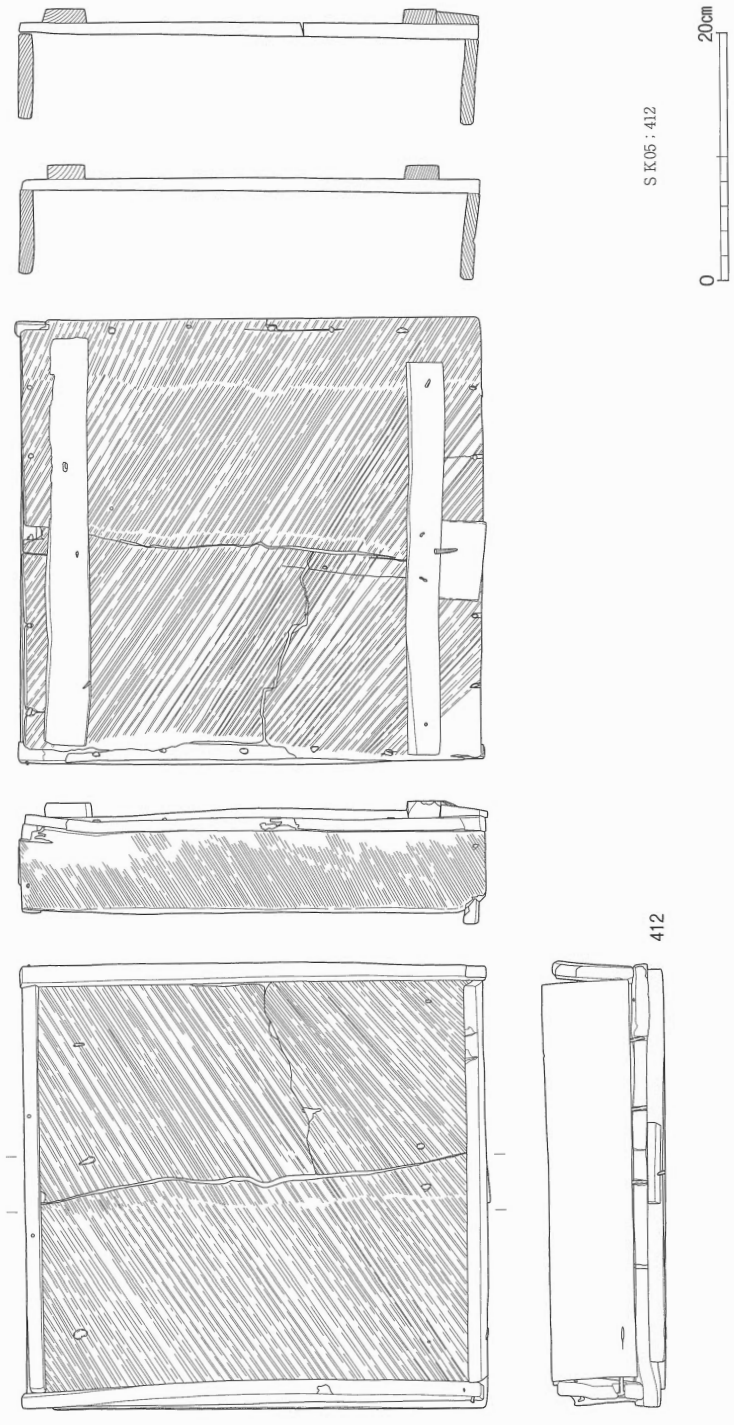
第49図　木製品〔3〕（1／3）



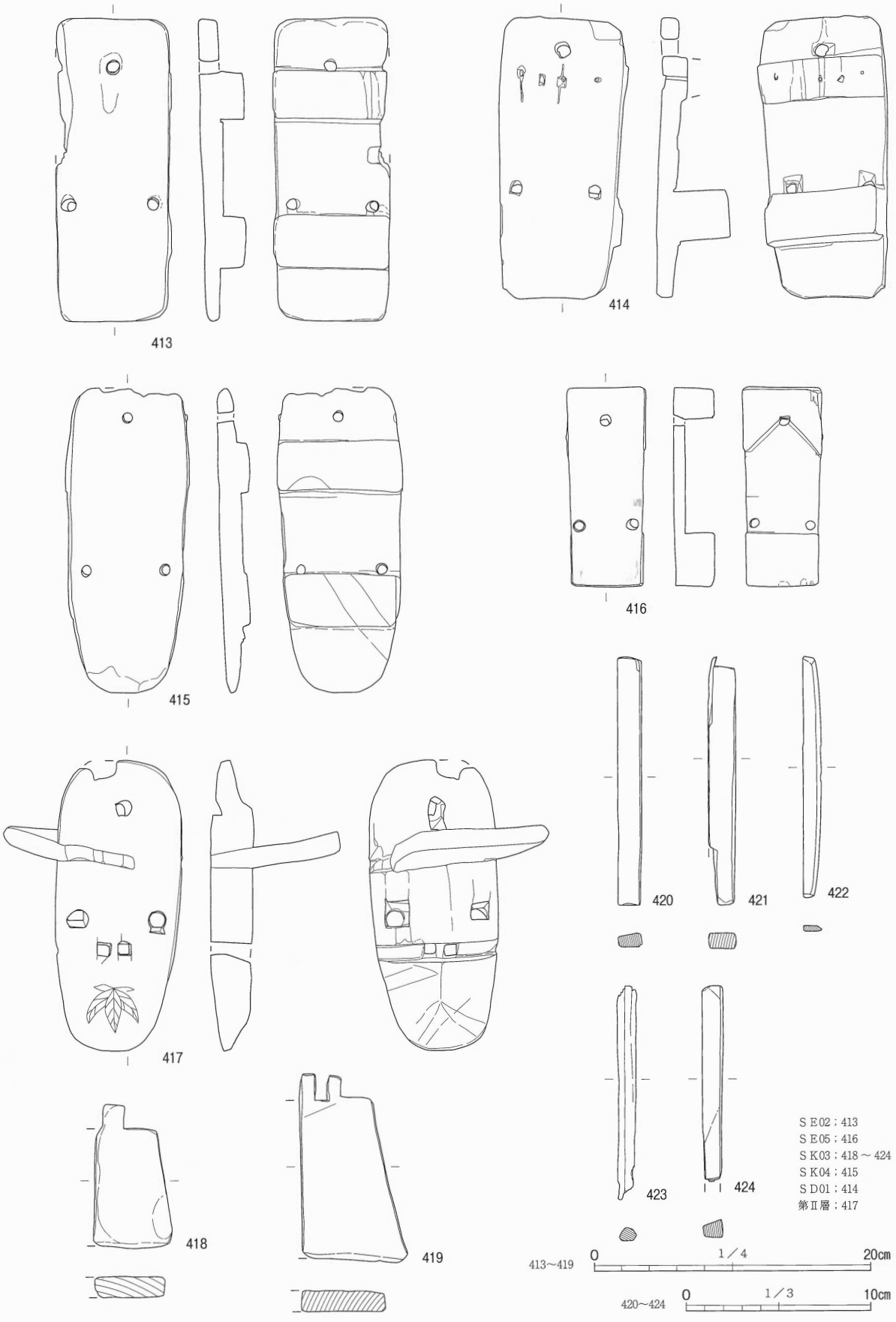
第50図　木製品〔4〕（1／3・1／6）


402
403
404
405
406
408
409
407
410
411
SE02：405
SE05：402・407
SK03：411
SK05：410
SD01：403・404
SD06：406
第Ⅱ層：408・409
0
10cm

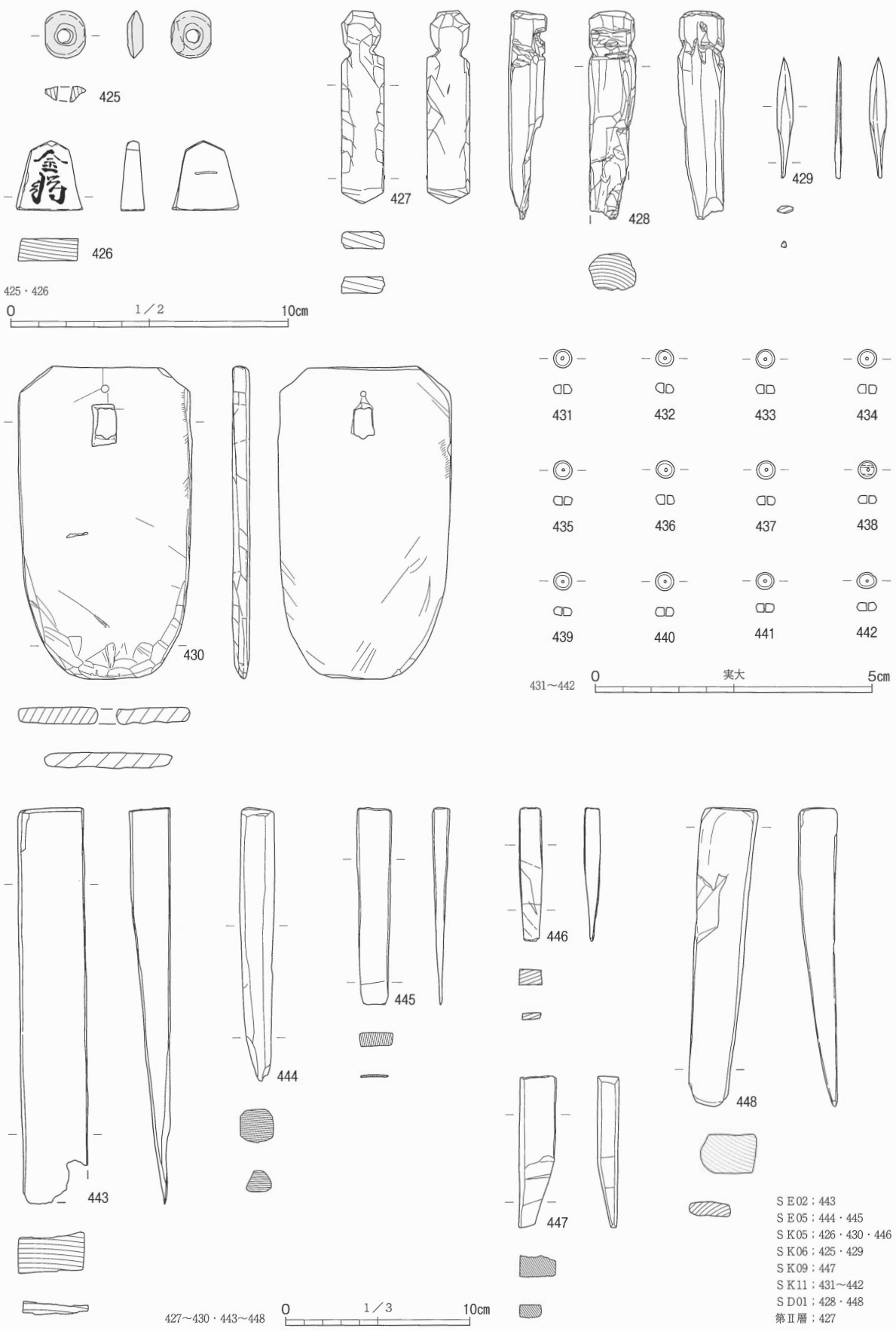
第51図　木製品〔5〕（1／3）



第52図　木製品〔6〕（1／6）

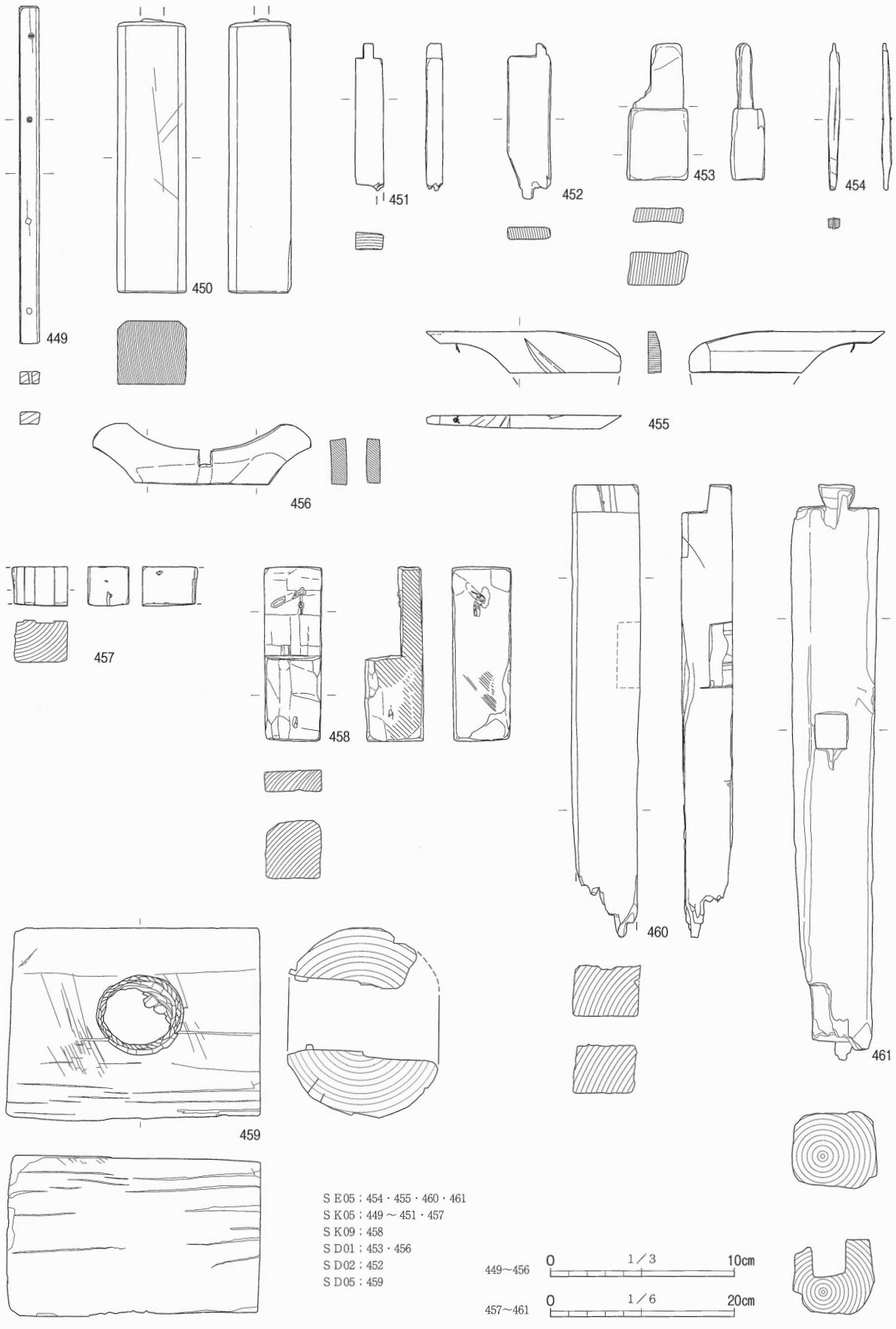


第53図　木製品〔7〕（1／3・1／4）

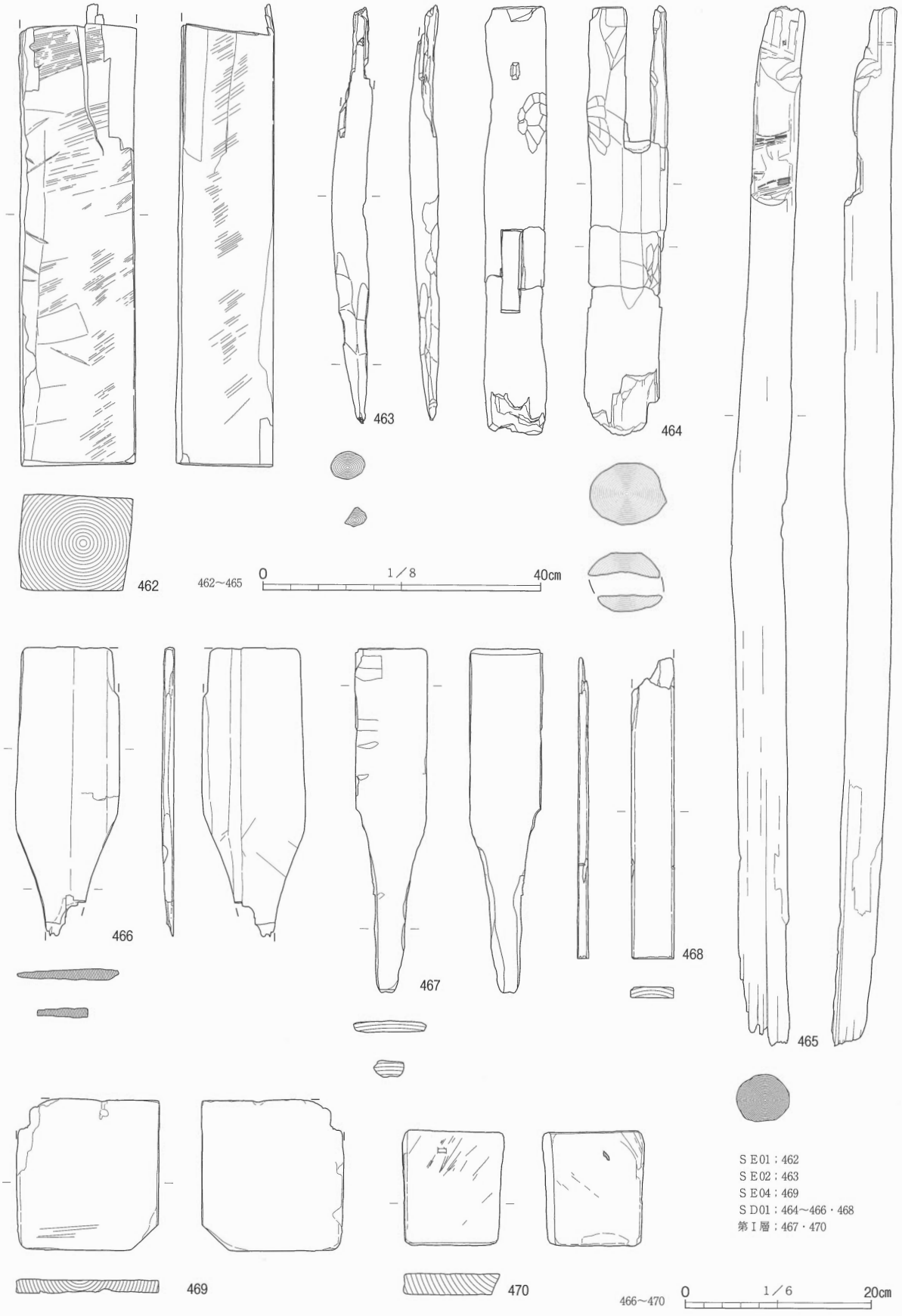


SE02：443
SE05：444・445
SK05：426・430・446
SK06：425・429
SK09：447
SK11：431～442
SD01：428・448
第Ⅱ層：427

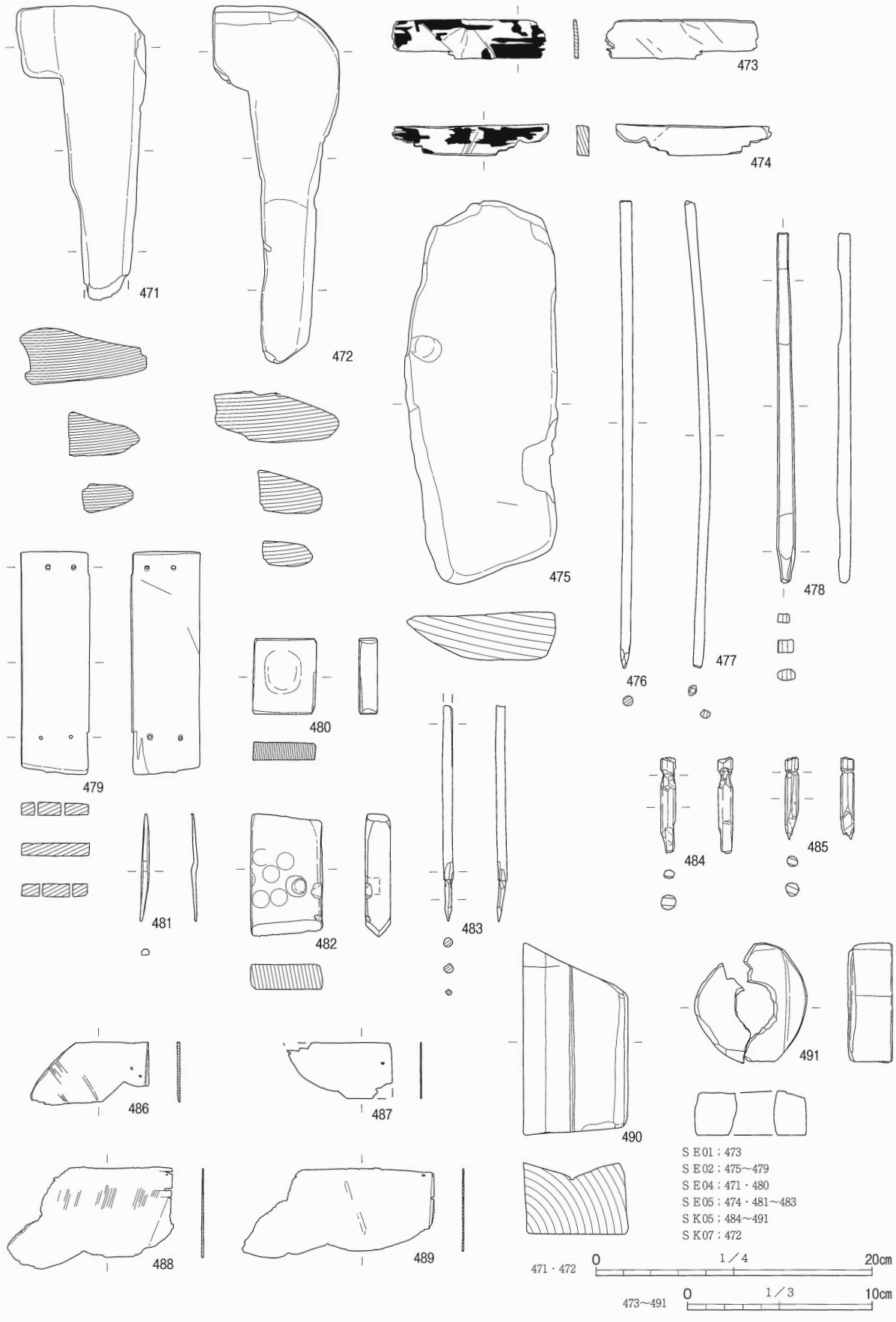
第54図　木製品〔8〕（実大・1／2・1／3）



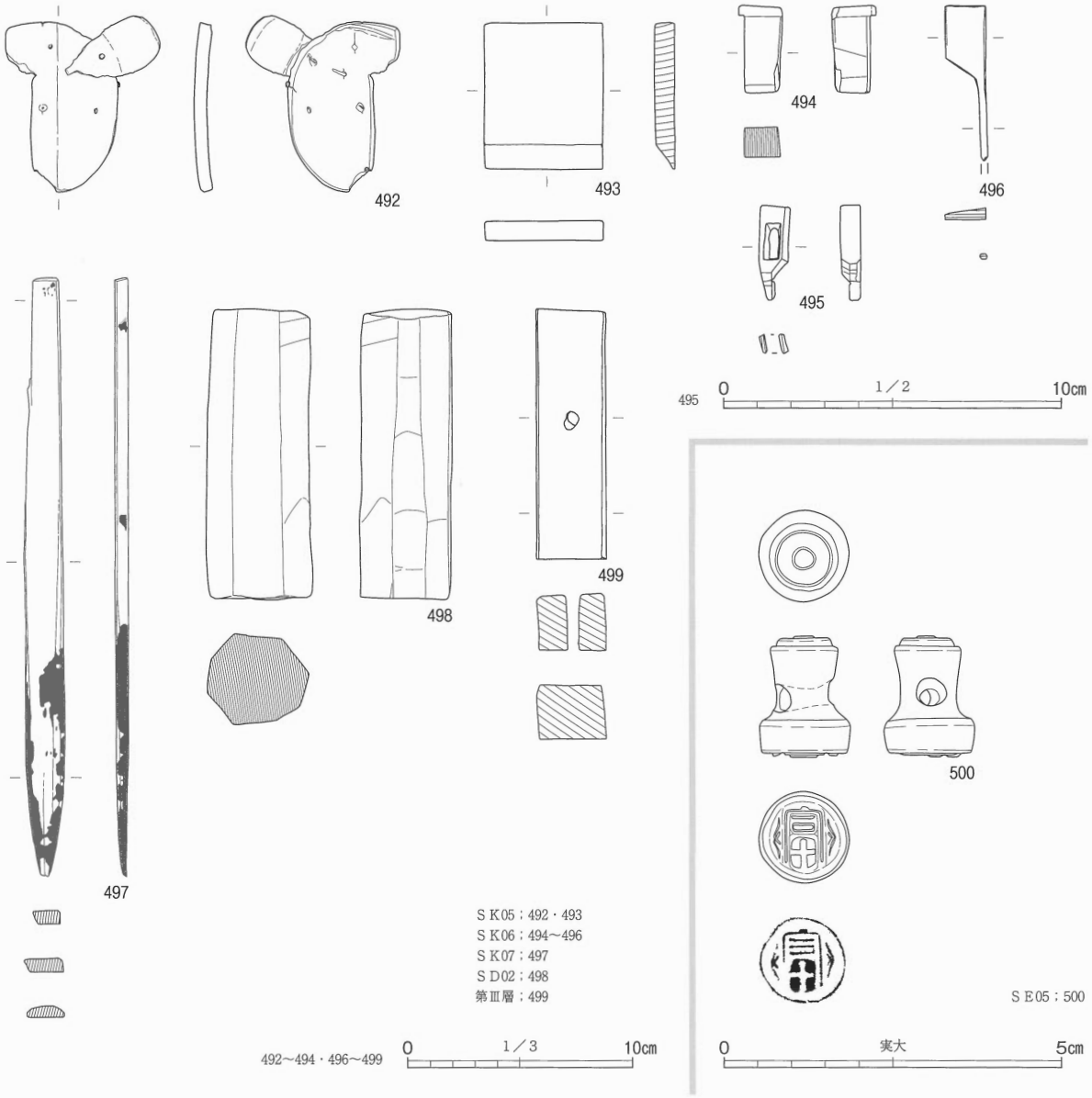
第55図　木製品〔9〕（1／3・1／6）



第56図　木製品〔10〕（1／6・1／8）



第57図　木製品〔11〕（1／3・1／4）



第58図　木製品〔12〕（実大・１／２・１／３）

金属製品（第63・64図）

517は鉄製鍋である。口縁部は縁折れする。518は包丁である。柄には墨書があり「□□」で１文字目は金偏である。519・520は鉄製火箸である。519は両端が尖る。520は両端欠損し一部に木質部が残る。521は鉄製紡錘車である。522は鉄製円盤である。２箇所穿孔する。523～538は鉄製釘である。523はさっぱ釘である。木樋など水利施設に用いる。524～537は頭巻釘である。524～526は頭を丸めてないもの、531は頭部を欠損、それ以外は丸める。538は角釘である。539・540は鉄製鎹である。

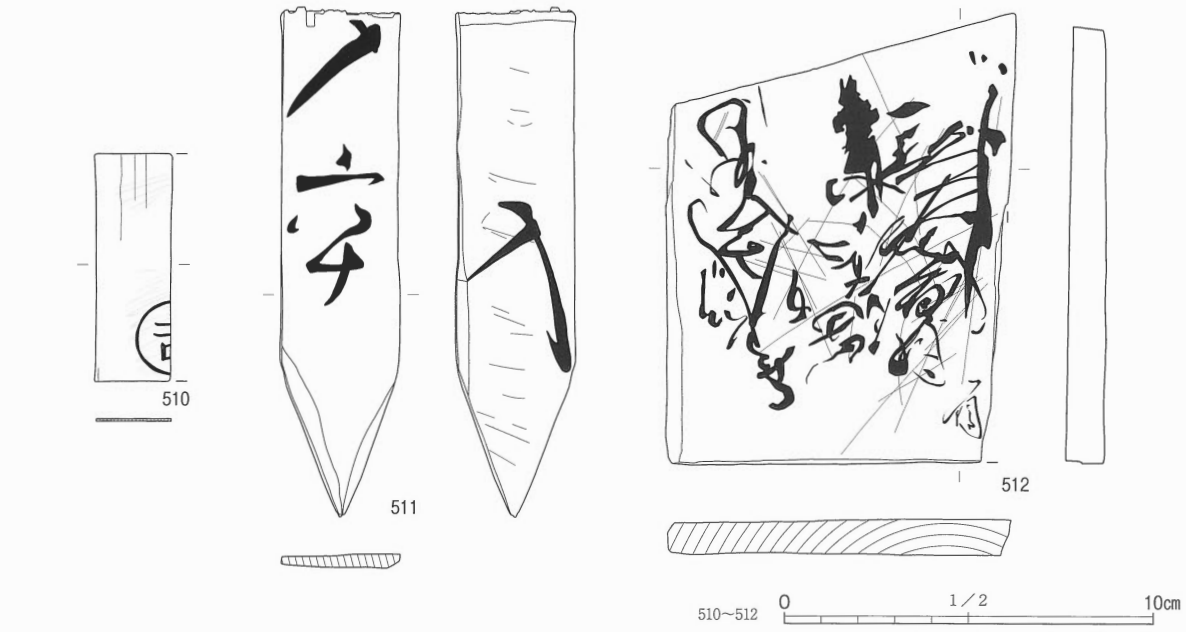
542～544は金銅製キセルである。いずれも雁首である。形状から542は17世紀末～18世紀前半、543・544は18世紀末～19世紀前半に位置付けできる。

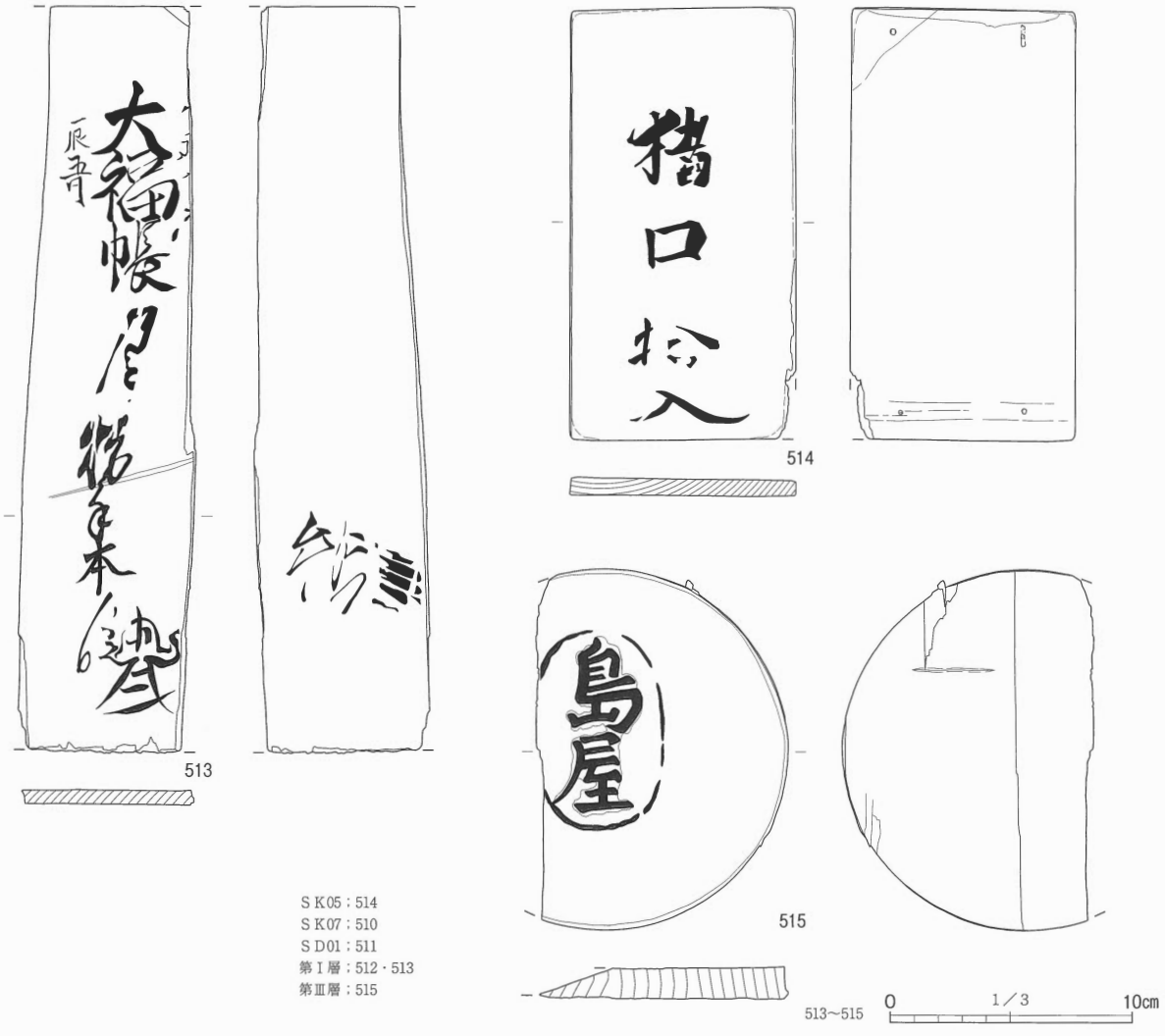
545～549は銅銭である。545は元豊通宝（初鋳1078年）の篆書体である。546・547は新寛永通宝である。546は背文が「足」で足尾製（初鋳1741年）である。547は背文が「元」で大坂高津新地製（初鋳1741年）である。548・549は新寛永通宝の四文銭（初鋳1769年）である。背文は青灰波である。550・551は真鍮製針金である。552は真鍮製鋲である。（岡田）

SE02：504
SE05：505～509
SK05：501
SK11：502
試掘1T：503

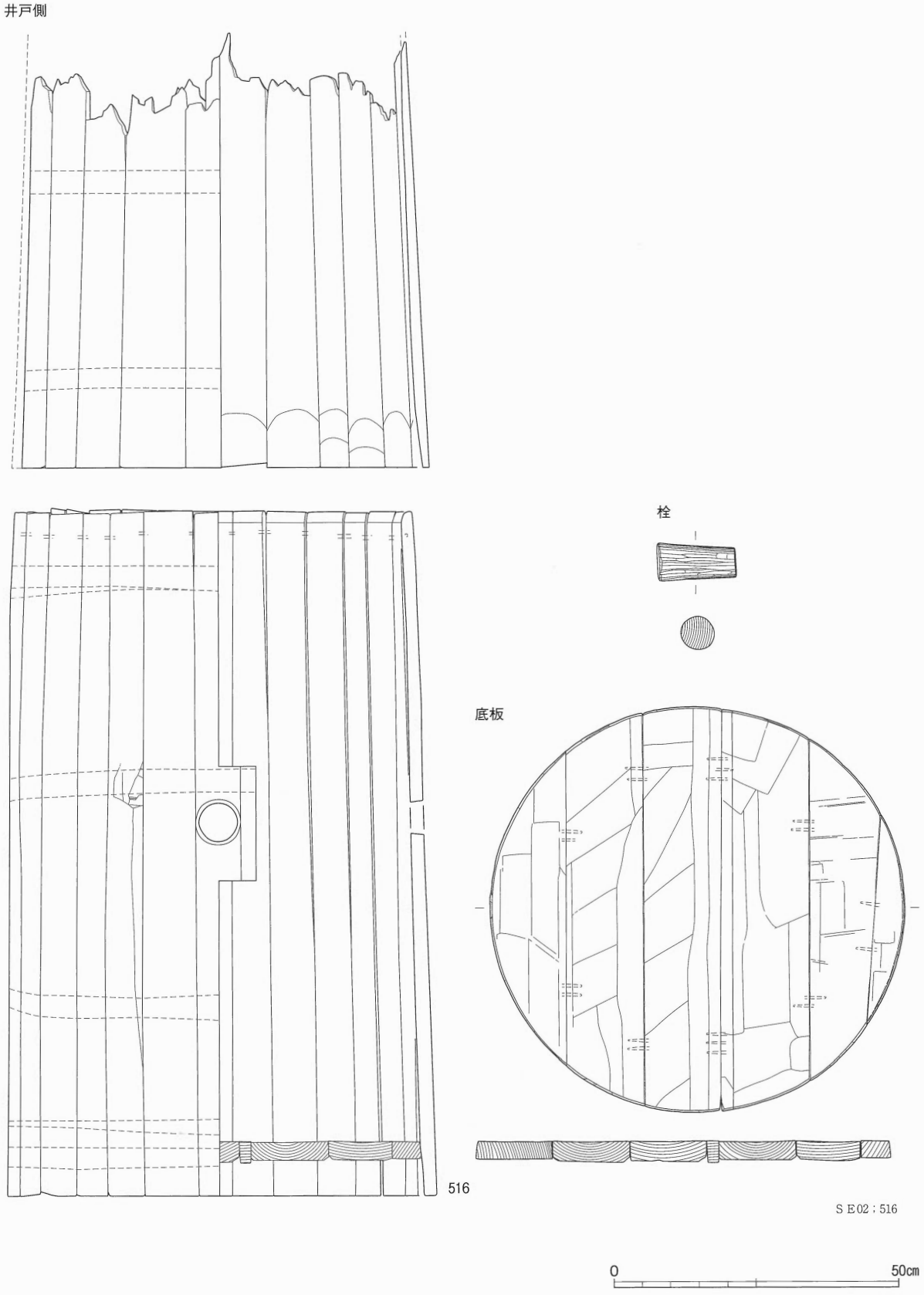
0 10cm

第59図　木製品〔13〕（1／2）

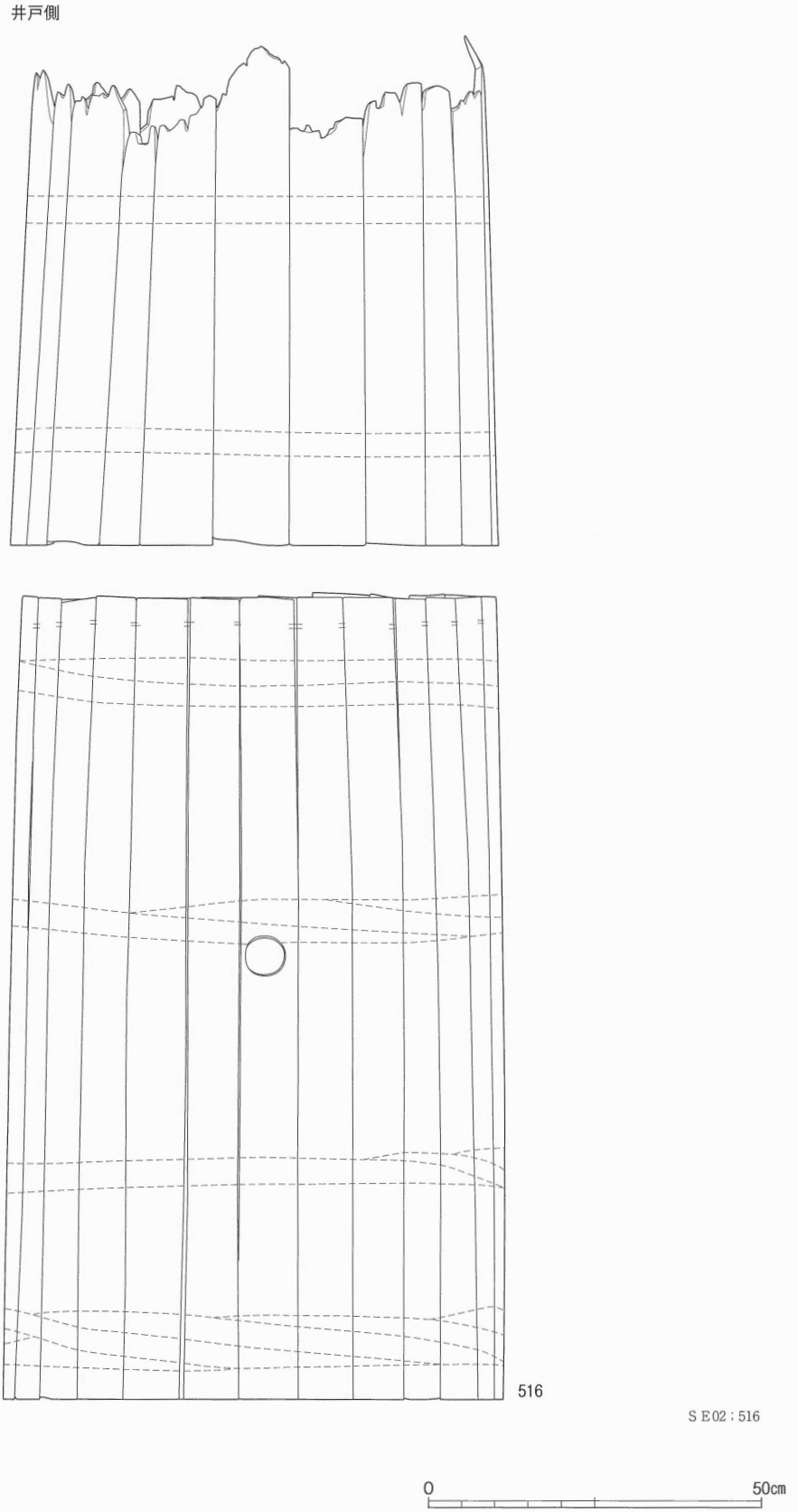




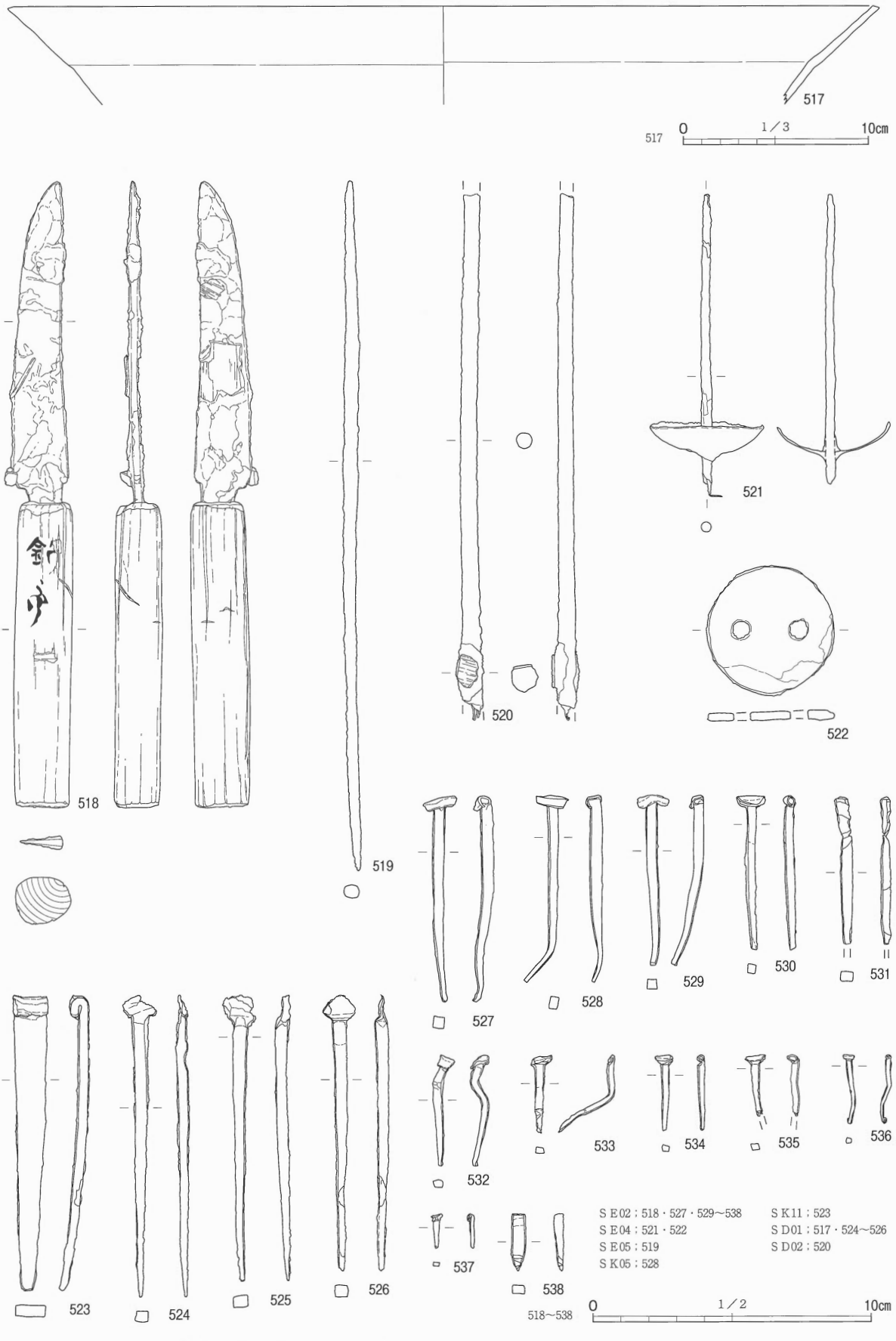
第60図　木製品〔14〕（1／2・1／3）



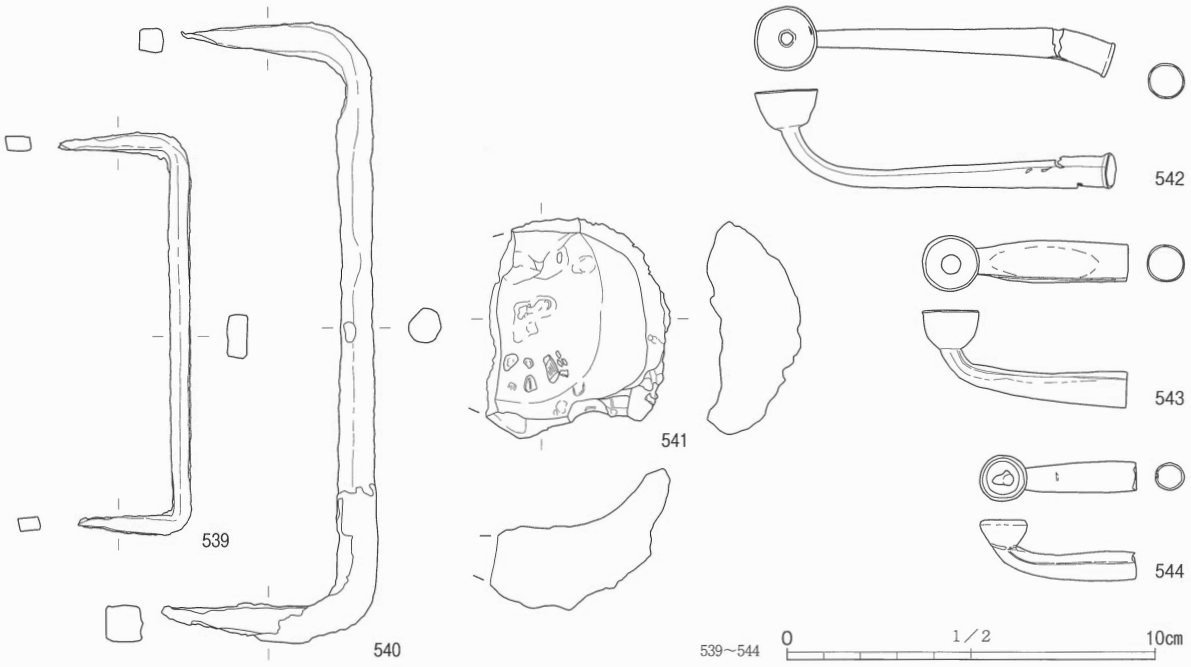
第61図　木製品〔15〕（1／10）

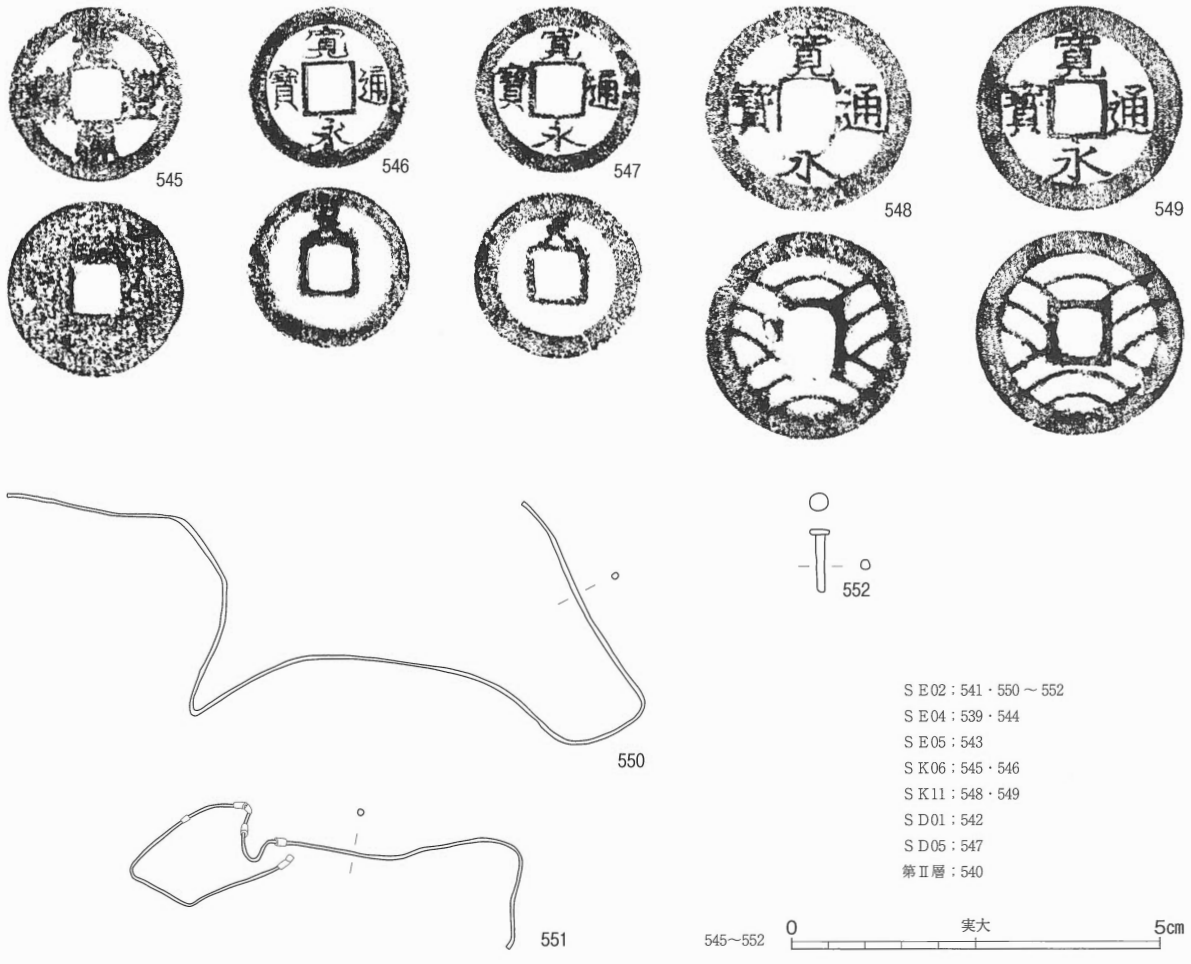


第62図　木製品〔16〕（1／10）



第63図　金属製品〔1〕（1／2・1／3）





第64図　金属製品〔2〕（実大・1／2）

番号	遺構名 グリッド	層位	種別	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	釉	調整	残存率	備考
1	試掘1T	第Ⅰ層	土師器	椀	14.8	(3.2)	－	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色		ロクロ	口縁部 0.8/12	
2	C4	第Ⅲ層	須恵器	杯A	12.0	2.9	6.8	密	良	10YR6/1 褐灰色		ロクロ	口縁部 1.1/12	口縁部に油煙付着。
3	SD01		須恵器	杯A	－	(1.3)	7.5	密	良	10YR5/1 褐灰色		ロクロ	底部 1.8/12	底部。
4	SD04		須恵器	杯	13.7	(1.2)	－	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		ロクロ	口縁部 0.9/12	自然釉付着。
5	SE02	掘方	須恵器	杯B蓋	19.8	(1.6)	－	密	良	10YR5/1 褐灰色		ロクロ	口縁部 0.8/12	
6	SD01		須恵器	杯B蓋	15.4	(1.9)	－	密	良	5Y7/1 灰白色		ロクロ	口縁部 1.6/12	
7	SD04		須恵器	杯B蓋	13.7	(1.7)	－	やや密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色		ロクロ	口縁部 1.1/12	自然釉付着。
8	C5	第Ⅲ層	須恵器	杯B蓋	13.6	(1.4)	－	密	良	N5/0 灰色		ロクロ	口縁部 0.5/12	
9	C4・D5	第Ⅲ層	須恵器	杯B蓋	12.7	3.5	－	密	良	10YR5/1 褐灰色		ロクロ	口縁部 1.4/12	墨書　表「□□（未ヵ）」、裏「木」。
10	SD01		須恵器	壺・甕類	－	(7.9)	－	密	良	7.5Y6/1 灰色		タタキ	－	
11	C4	第Ⅲ層	須恵器	壺・甕類	－	(4.9)	－	密	やや良	10YR6/2 灰黄褐色		タタキ	－	
12	C4	第Ⅱ層	須恵器	壺・甕類	－	(5.0)	－	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		タタキ	－	
13	C4	第Ⅱ層	珠洲	擂鉢	26.0	(5.1)	－	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色		ロクロ	口縁部 0.7/12	オロシ目幅1.8cmに9条。
14	SD01		珠洲	壺・甕類	－	(6.1)	－	密	良	5B4/1 暗青灰色		タタキ	－	
15	SK10		珠洲	壺・甕類	－	(6.9)	－	密	良	5B5/1 青灰色		タタキ	－	
16	B5	第Ⅲ層	珠洲	壺・甕類	－	(7.5)	－	密	良	5B4/1 暗青灰色		タタキ	－	
17	SK10		珠洲	壺・甕類	－	(7.5)	－	密	良	10G5/1 青灰色		タタキ	－	
18	SE04		珠洲	壺・甕類	－	(5.0)	－	密	良	5B4/1 暗青灰色		タタキ	－	
19	C4	第Ⅱ層	珠洲	甕	－	(7.5)	－	密	良	5BG4/1 暗青灰色		タタキ	－	
20	(立)⑨	第Ⅲ層	珠洲	甕	－	(5.9)	15.8	密	良	5BG5/1 青灰色		タタキ	底部 2.8/12	底部。離れ砂痕あり。
21	G3	第Ⅱ層	青花 磁器	大椀 端反形	14.2	4.6	5.9	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.9/12	景徳鎮。呉須染付。焼継ぎ。底面に焼継ぎ師の朱書あり。
22	SD01		青花 磁器	小椀蓋	9.6	(1.9)	－	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.0/12	漳州窯。呉須染付。
23	SD01		青磁 磁器	椀	－	(2.0)	4.4	密	良	10YR8/1 灰白色	青磁釉	ロクロ	底部 8.8/12	龍泉窯。底部。
24	SD01		土師器	灯明皿	17.6	(2.2)	－	密	良	10YR7/2 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 2.5/12	
25	SD01		土師器	灯明皿	15.6	2.3	8.4	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 2.0/12	
26	SD02		土師器	灯明皿	14.4	2.5	9.0	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		非ロクロ	口縁部 2.0/12	内面全体に油煙付着。
27	C3	第Ⅱ層	土師器	灯明皿	14.4	2.4	9.7	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 2.5/12	
28	SD01		土師器	灯明皿	14.0	(2.3)	－	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		非ロクロ	口縁部 2.3/12	
29	G2	第Ⅰ層	土師器	灯明皿	13.0	2.3	5.4	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		非ロクロ	口縁部 3.0/12	
30	SD01		土師器	灯明皿	12.0	2.4	7.2	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		非ロクロ	口縁部 1.8/12	
31	G2	第Ⅰ層	土師器	灯明皿	12.0	2.8	4.3	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		非ロクロ	口縁部 3.9/12	
32	SD01		土師器	灯明皿	10.8	2.3	6.6	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 4.0/12	
33	G2	第Ⅰ層	土師器	灯明皿	11.2	2.4	3.0	密	良	7.5YR6/6 橙色		非ロクロ	口縁部 5.1/12	
34	SD01		土師器	灯明皿	11.0	2.6	7.0	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		非ロクロ	口縁部 4.8/12	口縁部に油煙付着。
35	SD01		土師器	灯明皿	10.8	2.9	6.3	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		非ロクロ	口縁部 10.1/12	
36	SE02		土師器	灯明皿	10.8	1.8	4.0	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 1.2/12	口縁部に油煙付着。
37	SD01		土師器	灯明皿	10.6	2.4	5.2	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 7.0/12	口縁部に油煙付着。

第１表　土器類観察表〔１〕

番号	遺構名 グリッド	層位	種別	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	釉	調整	残存率	備考
38	SD01		土師器	灯明皿	10.6	2.3	5.1	密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 3.0/12	口縁部に油煙付着。底部に糸切痕。
39	SD01		土師器	灯明皿	10.0	2.3	4.1	密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 3.3/12	
40	SD01		土師器	灯明皿	9.9	3.3	6.0	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 7.0/12	
41	SD01		土師器	灯明皿	9.3	2.6	4.0	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 4.5/12	
42	SD01		土師器	灯明皿	9.0	1.9	5.2	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		非ロクロ	口縁部 5.0/12	
43	SD01		土師器	灯明皿	9.0	2.1	2.2	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		非ロクロ	口縁部 3.5/12	
44	SD01		土師器	灯明皿	9.0	2.2	4.7	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		非ロクロ	口縁部 11.0/12	
45	SD02		土師器	灯明皿	9.0	2.1	3.2	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 2.2/12	
46	SD01		土師器	灯明皿	8.7	2.1	4.6	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 5.8/12	
47	SE05		土師器	灯明皿	8.4	(2.2)	－	密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 1.5/12	口縁部に油煙付着。
48	SE05		土師器	灯明皿	8.4	2.1	4.6	密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 0.7/12	
49	SD01		土師器	灯明皿	8.4	2.2	2.4	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 3.0/12	
50	SE02	掘方	土師器	灯明皿	8.2	2.0	3.2	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色		非ロクロ	口縁部 3.0/12	口縁部に油煙付着。
51	SE05		土師器	灯明皿	8.0	2.1	3.6	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		非ロクロ	口縁部 1.5/12	
52	SD01		土師器	灯明皿	2.8	1.4	－	密	良	10YR4/1 褐灰色		非ロクロ	口縁部 2.0/12	
53	SK04		土師器	灯明皿	11.0	(1.6)	－	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色		ロクロ	口縁部 0.9/12	内外面に赤漆塗り。油煙付着。
54	E4	第Ⅰ層	越中瀬戸 陶器	灯明皿 平形無高台	12.0	(3.0)	－	密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色		ロクロ	口縁部 2.1/12	素焼。
55	E4	第Ⅲ層	越中瀬戸 陶器	灯明皿 端反形無高台	11.0	2.6	5.3	密	良	5YR5/6 明赤褐色		ロクロ 回転糸切り	口縁部 3.8/12	素焼。
56	SE02	掘方	越中瀬戸 陶器	灯明皿 端反形無高台	10.9	1.8	6.5	密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色		ロクロ	口縁部 1.9/12	素焼。口縁部外面に油煙付着。
57	F3	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	灯明皿 端反形無高台	10.8	2.5	4.8	密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色		ロクロ 回転糸切り	口縁部 2.2/12	素焼。口縁部に油煙付着。
58	SK03		越中瀬戸 陶器	灯明皿 端反形無高台	10.6	2.6	4.8	密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色		ロクロ 回転糸切り	口縁部 12.0／12	素焼。口縁部に油煙付着。
59	G5	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	灯明皿 平形無高台	10.0	2.3	4.8	密	良	10YR8/2 灰白色		ロクロ 回転糸切り	口縁部 1.4/12	素焼。
60	SK03		越中瀬戸 陶器	灯明皿 平形無高台	8.8	2.1	2.2	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色		ロクロ 回転糸切り	口縁部 1.0/12	素焼。
61	SE05		越中瀬戸 陶器	灯明皿 平形無高台	8.4	2.1	3.6	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色		ロクロ 回転糸切り	口縁部 5.0/12	素焼。
62	SK03		越中瀬戸 陶器	灯明皿 平形無高台	7.8	1.8	4.0	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		ロクロ 回転糸切り	口縁部 3.0/12	素焼。
63	SK03		越中瀬戸 陶器	灯明皿 平形無高台	7.2	1.9	3.8	密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色		ロクロ 回転糸切り	口縁部 7.0/12	素焼。
64	SE02	掘方	越中瀬戸 陶器	灯明皿 平形無高台	－	(1.8)	4.4	密	良	10YR7/2 にぶい黄橙色		ロクロ 回転糸切り	底部 6.0/12	素焼。底部。
65	SK05		越中瀬戸 陶器	灯明皿 平形無高台	－	(1.5)	4.2	密	良	5YR5/6 明赤褐色		ロクロ 回転糸切り	底部 12.0/12	素焼。底部。
66	SE02	掘方	越中瀬戸 陶器	小椀 端反形	6.2	2.8	4.0	密	良	7.5YR5/6 明褐色	鉄釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 1.0/12	
67	C3	第Ⅲ層	越中瀬戸 陶器	小椀 端反形	6.1	(2.1)	－	密	良	7.5YR5/4 にぶい褐色	鉄釉	ロクロ	口縁部 1.1/12	
68	SK03		越中瀬戸 陶器	中皿 丸形	23.0	(3.7)	－	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	
69	C5	第Ⅲ層	越中瀬戸 陶器	五寸皿 端反形	14.0	2.8	6.0	密	良	10YR6/2 灰黄褐色	鉄釉	ロクロ	口縁部 1.8/12	
70	E5	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	五寸皿 平形	14.0	3.0	6.3	密	良	10YR8/3 浅黄橙色	灰釉	ロクロ	口縁部 5.0/12	見込みに印花文。
71	（立）㉟	第Ⅰ層	越中瀬戸 陶器	小皿 輪花	13.5	3.6	6.4	密	良	7.5YR7/4 にぶい橙色	灰釉	ロクロ	口縁部 7.2/12	見込みに「丸に大」印。
72	SE05		越中瀬戸 陶器	小皿 平形	13.2	3.3	6.0	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	
73	SK04		越中瀬戸 陶器	小皿 丸形	13.0	3.4	5.4	密	良	7.5YR7/4 にぶい橙色	錆釉	ロクロ	口縁部 1.1/12	
74	（立）㉑	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	小皿 丸形	12.6	3.0	4.9	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	鉄釉灰釉 掛合	ロクロ	口縁部 4.2/12	見込みに印花文。

第２表　土器類観察表〔２〕

番号	遺構名 グリッド	層位	種別	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	釉	調整	残存率	備考
75	C3	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	小皿 輪花	12.3	3.4	4.5	密	良	10YR7/1 灰白色	鉛釉	ロクロ	口縁部 4.0/12	
76	C4	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	小皿 端反形	12.3	2.8	4.8	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	藁灰釉	ロクロ	口縁部 1.1/12	高台内面に墨書。
77	D5	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	小皿 端反形	12.2	3.0	4.0	密	良	5YR5/8 明赤褐色	藁灰釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	
78	C4	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	小皿 端反形	12.2	3.0	5.7	密	良	5YR4/8 赤褐色	鉄釉 藁灰釉	ロクロ	口縁部 5.2/12	高台内面に墨書。
79	SD06		越中瀬戸 陶器	小皿 端反形	12.0	2.9	5.5	密	良	7.5YR5/8 明褐色	灰釉	ロクロ	口縁部 4.0/12	高台内面に墨書。
80	SD01		越中瀬戸 陶器	小皿 丸形	12.0	3.1	4.8	密	良	7.5YR6/6 橙色	灰釉	ロクロ	口縁部 2.5/12	
81	（立）④	第Ⅰ層	越中瀬戸 陶器	小皿 平形無高台	11.9	3.1	4.9	密	良	7.5YR7/4 にぶい橙色	鉄釉 藁灰釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 9.0/12	
82	C4	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	小皿 平形	11.6	3.0	4.6	密	良	10YR5/4 にぶい黄橙色	藁灰釉	ロクロ	口縁部 11.5/12	
83	SD03		越中瀬戸 陶器	小皿 平形	11.4	2.8	4.8	密	良	10Y6/4 にぶい黄橙色	灰釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	
84	SE02		越中瀬戸 陶器	小皿 端反形	11.2	2.5	5.1	密	良	10YR5/4 にぶい黄褐色	鉄釉	ロクロ	口縁部 0.4/12	
85	SD03		越中瀬戸 陶器	小皿 平形	11.2	2.6	4.2	密	良	10YR6/6 明黄褐色	藁灰釉	ロクロ	口縁部 3.5/12	
86	SD01		越中瀬戸 陶器	小皿 折縁形	11.1	2.5	4.1	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	藁灰釉	ロクロ	口縁部 12.0/12	見込みに印花文。露胎部分にスス付着。
87	SE02	掘方	越中瀬戸 陶器	小皿 平形	11.0	(2.2)	–	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ	口縁部 3.0/12	
88	SD03		越中瀬戸 陶器	小皿 平形	11.0	2.7	4.0	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ	口縁部 2.8/12	
89	D3	第Ⅲ層	越中瀬戸 陶器	小皿 平形	10.8	2.3	5.1	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	灰釉	ロクロ	口縁部 4.5/12	
90	（立）㊳	第Ⅰ層	越中瀬戸 陶器	小皿 端反形	10.6	2.8	5.0	密	良	7.5YR6/8 橙色	藁灰釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	
91	SD01		越中瀬戸 陶器	小皿 端反形	10.6	2.5	5.0	密	良	5YR5/4 にぶい赤褐色	鉄釉	ロクロ	口縁部 3.5/12	
92	SE03		越中瀬戸 陶器	小皿 端反形	10.5	2.2	4.7	密	良	10YR8/3 浅黄橙色	灰釉	ロクロ	口縁部 0.8/12	見込みに印花文。
93	C4	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	小皿 平形	10.2	2.7	4.0	密	良	7.5YR7/4 にぶい橙色	錆釉	ロクロ	口縁部 4.4/12	
94	SD04		越中瀬戸 陶器	小皿 端反形無高台	10.0	2.6	4.4	密	良	10YR7/1 灰白色	鉄釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 6.2/12	
95	C4	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	小皿 丸形	9.9	2.2	3.2	密	良	7.5YR7/3 にぶい橙色	鉄釉	ロクロ	口縁部 8.8/12	見込みに印花文。
96	SE02		越中瀬戸 陶器	小皿 平形無高台	9.5	2.4	4.0	密	良	10YR7/2 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 1.4/12	
97	SD01		越中瀬戸 陶器	極小皿 平形無高台	6.3	1.7	3.0	密	良	10YR5/3 にぶい黄褐色	鉄釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 12.0/12	
98	C3	第Ⅲ層	越中瀬戸 陶器	Ⅲ	–	(2.8)	6.0	密	良	10YR5/4 にぶい赤褐色	鉛釉	ロクロ	底部 12.0/12	底部。
99	SK05		越中瀬戸 陶器	Ⅲ	–	(1.4)	5.6	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	鉄釉 藁灰釉	ロクロ	底部 3.0/12	底部。見込みに「大吉」印。
100	SE02		越中瀬戸 陶器	Ⅲ	–	(1.7)	3.0	密	良	5YR4/4 にぶい赤褐色	鉄釉	ロクロ 回転糸切り	底部 12.0/12	底部。
101	SK07		越中瀬戸 陶器	灯明受皿	11.9	2.7	5.4	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 3.0/12	
102	SE02		越中瀬戸 陶器	乗燭	5.1	(2.3)	–	密	良	5YR5/3 にぶい赤褐色	鉄釉	ロクロ	口縁部 2.5/12	
103	SE02	掘方	越中瀬戸 陶器	水盤 すっぽん口形	16.7	(3.2)	–	密	良	10Y6/1 灰色	鉄釉	ロクロ	口縁部 0.7/12	
104	SE02	掘方	越中瀬戸 陶器	段重 腰部無加工	11.6	3.0	3.3	密	良	10Y6/1 灰色	鉛釉	ロクロ	口縁部 2.0/12	
105	（立）㉕	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	段重 腰部無加工	10.6	3.0	6.4	密	良	10YR6/6 橙色	鉄釉	ロクロ	口縁部 5.5/12	見込みに印花文。
106	G4	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	段重 腰部無加工	10.6	2.9	5.2	密	良	10YR7/2 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ	口縁部 4.5/12	
107	C4	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	段重 腰部無加工	10.4	2.5	4.6	密	良	10YR6/1 褐灰色	灰釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	
108	SE02		越中瀬戸 陶器	片口	11.9	9.3	8.3	密	良	10YR7/1 灰白色	灰釉	ロクロ	口縁部 7.0/12	
109	SK05		越中瀬戸 陶器	猪口 桶形	6.0	3.7	4.8	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 4.0/12	
110	SE02	掘方	越中瀬戸 陶器	鉢形容器 端反形無高台	7.4	4.5	5.2	密	良	10YR6/1 褐灰色	鉄釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 3.0/12	外面被熱。
111	SK07		越中瀬戸 陶器	鉢形容器 すっぽん口形	7.2	3.9	5.7	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	錆釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 7.5/12	

第3表　土器類観察表〔3〕

番号	遺構名 グリッド	層位	種別	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	釉	調整	残存率	備考
112	E4	第Ⅰ層	越中瀬戸 陶器	火入 半筒形	17.4	(6.4)	－	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色		ロクロ	口縁部 1.1/12	素焼。
113	ＳＥ02		越中瀬戸 陶器	火入 半筒形	12.6	10.9	13.9	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	錆釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 11.5/12	底部穿孔。
114	ＳＫ04		越中瀬戸 陶器	火鉢	－	(17.0)	24.8	密	良	10YR8/2 灰白色	鉄釉	ロクロ 三足貼付	底部 3.0/12	底部。
115	ＳＥ02		越中瀬戸 陶器	擂鉢 口縁外帯形	28.6	11.5	12.0	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 1.1/12	オロシ目幅3.4cmに13条。
116	ＳＫ06		越中瀬戸 陶器	擂鉢 口縁外帯形	28.2	(4.7)	－	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	錆釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	
117	（立）⑨	第Ⅱ層	越中瀬戸 陶器	擂鉢 口縁外帯形	27.0	13.3	11.4	密	良	10YR8/4 浅黄橙色	錆釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 3.1/12	オロシ目幅2.8cmに11条。
118	ＳＫ05		越中瀬戸 陶器	擂鉢 口縁内突帯	22.0	(6.7)	－	密	良	10YR7/2 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ	口縁部 1.5/12	オロシ目幅2.4cmに９条。
119	ＳＥ02	掘方	越中瀬戸 陶器	擂鉢 口縁無装飾	20.6	8.6	10.2	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	錆釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 1.9/12	オロシ目幅1.6cmに７条。
120	ＳＫ05		越中瀬戸 陶器	小壺 胴丸形	10.2	9.9	10.0	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	錆釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 12.0/12	
121	ＳＫ07		越中瀬戸 陶器	小壺 胴丸形	9.4	8.3	10.2	密	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 9.0/12	
122	ＳＫ07		越中瀬戸 陶器	小壺 胴丸形	7.5	7.4	7.9	やや密	良	10YR5/2 灰黄褐色	鉄釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 3.2/12	
123	ＳＤ01		越中瀬戸 陶器	壺	11.6	(4.3)	－	密	良	10YR6/1 褐灰色	鉄釉	ロクロ	口縁部 1.9/12	
124	ＳＫ05		越中瀬戸 陶器	壺	9.6	(4.0)	－	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	錆釉	ロクロ	口縁部 2.0/12	
125	ＳＫ05		越中瀬戸 陶器	壺	4.7	(4.5)	－	密	良	5Y6/1 灰色	鉄釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	
126	ＳＫ05		越中瀬戸 陶器	小瓶	－	(6.6)	5.2	密	良	10YR7/2 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ 回転糸切り	底部 4.0/12	底部。
127	ＳＤ03		越中瀬戸 陶器	小瓶	－	(2.9)	3.3	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ 回転糸切り	底部 5.0/12	底部。
128	ＳＤ04		越中瀬戸 陶器	蓋	11.6	(1.7)	－	密	良	10YR5/1 褐灰色	鉄釉	回転糸切り ロクロ	口縁部 2.9/12	
129	ＳＤ01		越中丸山 陶器	中椀 腰張形	9.6	(5.5)	－	密	良	10YR6/1 褐灰色	銅緑釉	ロクロ	口縁部 1.8/12	
130	E3	第Ⅱ層	越中丸山 陶器	中椀 腰張形	9.6	(5.7)	－	密	良	10YR6/1 褐灰色	褐釉	ロクロ	口縁部 2.3/12	
131	ＳＫ07		越中丸山 磁器	小皿 丸形	11.7	3.5	7.1	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 7.0/12	呉須染付、内面葡萄文。高台内「富貴長春」銘。
132	ＳＥ03	掘方	越中丸山 陶器	中鉢 丸形折湾	17.7	(6.2)	－	密	良	10YR7/2 にぶい黄橙色	長石釉	ロクロ	口縁部 2.8/12	内面黒漆塗り。
133	ＳＥ03		越中丸山 陶器	壺 肩衝形	16.0	(8.1)	－	密	良	7.5YR7/4 にぶい橙色	灰釉 長石釉	ロクロ	口縁部 4.0/12	
134	G2	第Ⅰ層	越中丸山 陶器	壺	－	(5.0)	－	密	良	10YR7/1 灰白色	透明釉 トルコ青釉	ロクロ	－	
135	ＳＥ03		伊万里 磁器	中椀 平形	12.0	5.0	4.5	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.8/12	呉須染付。
136	G2	第Ⅰ層	伊万里 磁器	中椀 端反形	11.1	6.3	4.6	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.1/12	呉須染付。
137	ＳＥ04		伊万里 磁器	中椀 端反形	11.0	5.5	4.0	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 3.1/12	呉須染付。
138	ＳＥ02	掘方	伊万里 磁器	中椀 丸形	10.0	(4.5)	－	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 4.8/12	呉須染付。
139	ＳＤ01		伊万里 磁器	中椀 広東形	10.8	6.1	5.4	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.8/12	呉須染付。見込みに「寿」。
140	C3	第Ⅱ層	伊万里 磁器	中椀 呉器形	10.8	6.8	4.7	密	良	10YR8/1 灰白色	青磁釉	ロクロ	口縁部 0.5/12	
141	ＳＤ01		伊万里 磁器	中椀 端反形	10.8	(5.0)	－	密	良	N8/0 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.8/12	呉須染付。
142	（立）⑤	第Ⅰ層	伊万里 磁器	中椀 端反形	10.2	5.7	2.0	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 0.1/12	呉須染付。焼継ぎ。
143	ＳＫ01		伊万里 磁器	中椀 端反形	10.0	6.0	4.0	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 4.1/12	呉須染付。見込みに「崩し成化年製」銘。
144	ＳＥ03	掘方	伊万里 磁器	中椀 杉形	9.4	4.8	3.8	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.9/12	呉須染付。
145	ＳＥ02	掘方	伊万里 磁器	小椀 腰張形	9.0	6.1	5.0	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.6/12	呉須染付。コンニャク印判。
146	ＳＥ02	掘方	伊万里 磁器	小椀 腰張形	9.0	6.7	4.3	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 5.6/12	呉須染付。コンニャク印判。
147	G3	第Ⅰ層	伊万里 磁器	小椀 腰張形	9.0	6.0	6.0	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 0.5/12	呉須染付。
148	ＳＥ05		伊万里 磁器	小椀 腰張形	9.0	5.9	5.2	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 5.3/12	呉須染付。

第４表　土器類観察表〔４〕

番号	遺構名 グリッド	層位	種別	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	釉	調整	残存率	備考
149	G3	第Ⅰ層	伊万里 磁器	小椀 腰張形	8.8	5.7	4.8	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 0.3/12	呉須染付。高台内に「崩し大明年製」銘。
150	SE02		伊万里 磁器	小椀 丸形	8.7	5.5	3.3	密	良	N8/0 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	呉須染付。
151	SK07		伊万里 磁器	小椀 腰張形	8.6	5.4	5.0	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 3.6/12	呉須染付。底部に銘。
152	（立）⑤	第Ⅱ層	伊万里 磁器	小椀 端反形	8.5	4.0	2.8	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.0/12	呉須染付。
153	SK03		伊万里 磁器	小椀 腰張形	8.0	(4.5)	－	密	やや不良	10YR8/2 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.0/12	呉須染付。
154	G2	第Ⅰ層	伊万里 磁器	小椀 腰張形	8.0	5.6	4.8	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 4.0/12	呉須染付。高台内に「崩し大明年製」銘。
155	E4	第Ⅰ層	伊万里 磁器	小椀 半筒形	8.0	5.9	3.6	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.2/12	呉須染付。
156	E4	第Ⅰ層	伊万里 磁器	小椀 半筒形	8.0	(5.5)	－	密	良	10YR8/1 灰白色	青磁釉 透明釉	ロクロ	口縁部 1.5/12	呉須染付。
157	SD01		伊万里 磁器	小椀 腰張形	7.8	5.6	3.0	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.5/12	呉須染付。
158	F4	第Ⅰ層	伊万里 磁器	小椀 腰張形	7.7	5.7	4.8	密	良	N8/0 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.8/12	呉須染付。
159	SE02	掘方	伊万里 磁器	小椀 腰張形	7.4	4.5	3.5	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 3.0/12	呉須染付。コンニャク印判。
160	SE01		伊万里 磁器	小椀 腰張形	7.4	(3.6)	－	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	呉須染付。
161	SK03		伊万里 磁器	小椀 端反形	7.4	(3.6)	－	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.5/12	呉須染付。
162	SK01		伊万里 磁器	小椀 丸形	6.9	4.9	3.0	密	良	10YR8/1 灰 白色	透明釉	ロクロ	口縁部 9.8/12	呉須染付。
163	SK03		伊万里 磁器	小椀 端反形	6.9	4.5	3.2	密	良	10YR8/1 灰 白色	透明釉	ロクロ	口縁部 3.0/12	呉須染付。
164	SK07		伊万里 磁器	椀	－	(3.1)	4.0	密	良	10YR8/1 灰 白色	透明釉	ロクロ	底部 12.0/12	底部。呉須染付。高台内に「崩し大明年製」銘。
165	SE01		伊万里 磁器	椀	－	(2.5)	3.0	密	良	10YR8/1 灰 白色	透明釉	ロクロ	底部 12.0/12	底部。見込みに五弁花。
166	G3	第Ⅱ層	伊万里 磁器	紅猪口 菊花形	5.0	(1.1)	－	密	良	10YR8/1 灰 白色	透明釉	型押	口縁部 2.0/12	
167	G2	第Ⅰ層	伊万里 磁器	紅猪口 菊花形	4.8	1.5	1.3	密	良	10YR8/1 灰 白色	透明釉	型押	口縁部 5.0/12	
168	D4	第Ⅲ層	伊万里 磁器	紅猪口 菊花形	4.4	2.3	2.2	密	良	10YR8/1 灰 白色	透明釉	型押	口縁部 5.0/12	
169	SE03		伊万里 磁器	五寸皿 丸形	15.0	4.0	9.4	密	良	10YR8/1 灰 白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.9/12	蛇ノ目凹形高台。呉須染付。
170	G2	第Ⅰ層	伊万里 磁器	五寸皿 折縁形	14.0	(2.6)	－	密	良	10YR8/1 灰 白色	透明釉	ロクロ	口縁部 3.0/12	呉須染付。
171	（立）⑰	第Ⅰ層	伊万里 磁器	五寸皿 盤形	14.0	2.6	5.0	密	良	10YR8/1 灰 白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.5/12	呉須染付。
172	（立）⑥	第Ⅱ層	伊万里 磁器	五寸皿 端反形	14.0	3.5	4.8	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 4.5/12	蛇ノ目釉剥ぎ。
173	C3	第Ⅲ層	伊万里 磁器	五寸皿 端反形	13.8	4.1	7.5	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.0/12	呉須染付。
174	SD01		伊万里 磁器	五寸皿 丸形	13.8	2.3	9.0	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 3.0/12	呉須染付。
175	SK01		伊万里 磁器	五寸皿 輪花	13.6	3.8	8.4	密	良	N8/0 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 3.2/12	口紅。
176	A3	第Ⅰ層	伊万里 磁器	小皿 丸形	13.5	3.6	4.9	密	やや不良	5Y8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.0/12	呉須染付。
177	SK05		伊万里 磁器	小皿 丸形	13.4	3.4	7.5	密	良	N8/0 灰白	透明釉	ロクロ	口縁部 1.5/12	呉須染付。見込み五弁花。高台内銘あり。
178	F3	第Ⅰ層	伊万里 磁器	小皿 平形	13.4	2.6	4.8	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 3.2/12	呉須染付。
179	D4	第Ⅲ層	伊万里 磁器	小皿 端反形	12.8	3.7	4.4	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.5/12	呉須染付。
180	SD01		伊万里 磁器	小皿 丸形	12.8	(2.1)	－	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	呉須染付。
181	試掘1T	第Ⅰ層	伊万里 磁器	小皿 端反形	12.6	(3.2)	－	密	良	N8/0 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.8/12	呉須染付。
182	C3	第Ⅲ層	伊万里 磁器	小皿 丸形	12.0	(2.7)	－	密	良	10YR7/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.0/12	呉須染付。
183	SK06		伊万里 磁器	小皿 輪花	11.2	2.5	6.5	密	良	N8/0 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	口紅。
184	SD05		伊万里 磁器	極小皿 輪花	6.4	(1.2)	－	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	型押	口縁部 2.0/12	口紅。
185	C4	第Ⅱ層	伊万里 磁器	大皿	－	(2.3)	13.6	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	底部 2.0/12	底部。呉須染付。針（2）。

第５表　土器類観察表〔５〕

番号	遺構名 グリッド	層位	種別	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	釉	調整	残存率	備考
186	SE02	掘方	伊万里 磁器	大皿	－	(3.1)	13.0	密	良	N8/0 灰白色	透明釉	ロクロ	底部 2.5/12	底部。呉須染付。
187	SE03		伊万里 磁器	大皿	－	(1.7)	9.4	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	底部 4.1/12	底部。呉須染付。
188	F4	第Ⅰ層	伊万里 磁器	中鉢 腰張形底広	20.2	6.5	12.8	密	良	10YR8/1 灰白色	青磁釉 透明釉	ロクロ	口縁部 0.8/12	呉須染付。
189	SD01		伊万里 磁器	中鉢 腰張形底広	18.4	6.7	8.6	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.3/12	呉須染付。
190	SK07		伊万里 磁器	中鉢 腰張形底広	14.0	4.5	6.0	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	呉須染付。漆継ぎ。高台内に朱墨で継師名あり。
191	G2	第Ⅰ層	伊万里 磁器	中鉢 腰折形	12.4	5.6	7.0	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 0.1/12	呉須染付。八角。
192	SE05		伊万里 磁器	蓋物 半筒形	10.4	7.1	7.6	密	良	10YR8/1 灰 白色	透明釉 錆釉	ロクロ	口縁部 5.7/12	呉須染付。
193	D3	第Ⅱ層	伊万里 磁器	小鉢 腰張形底広	10.2	(6.6)	－		良	10YR8/1 灰 白色	透明釉	ロクロ	口縁部 3.0/12	呉須染付。焼継ぎ。六角。見込みは揚羽蝶文。高台内に銘あり。
194	立㉔	第Ⅱ層	伊万里 磁器	猪口 桶形	7.8	6.1	5.9	密	良	N8/0 灰白 色	透明釉	ロクロ	口縁部 4.0/12	呉須染付。蛇ノ目凹形高台。
195	F4	第Ⅰ層	伊万里 磁器	猪口 桶形	6.8	5.8	5.0	密	良	N8/0 灰白	透明釉	ロクロ	口縁部 3.5/12	呉須染付。
196	G2	第Ⅰ層	伊万里 磁器	猪口 桶形	6.6	5.8	5.0	密	良	10YR8/1 灰 白色	透明釉	ロクロ	口縁部 3.0/12	呉須染付。
197	G3	第Ⅱ層	伊万里 磁器	猪口 桶形	5.4	(3.3)	－	密	良	10YR8/1 灰 白色	透明釉	ロクロ	口縁部 5.0/12	呉須染付。
198	SE05		伊万里 磁器	香炉	10.6	(3.0)	－	密	良	10YR8/1 灰 白色	青磁釉	ロクロ	口縁部 4.1/12	
199	SD01		伊万里 磁器	香炉	－	(2.5)	5.6	密	良	10YR8/1 灰 白色	青磁釉	ロクロ	底部 2.0/12	底部。焼継ぎ。
200	E4・F4	第Ⅲ層	伊万里 磁器	瓶	5.6	(6.5)	－	密	良	10YR8/1 灰 白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.8/12	
201	SK05		伊万里 磁器	小瓶 端反辣韮形	2.0	10.5	4.1	密	良	N8/0 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 12.0/12	呉須染付。クリ底。
202	SE02	掘方	伊万里 磁器	大瓶	－	(10.2)	8.7	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	底部 12.0/12	底部。
203	(立) ④	第Ⅲ層	伊万里 磁器	蓋物蓋	14.4	(4.1)	－	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.2/12	呉須染付。
204	SD01		伊万里 磁器	蓋物蓋	12.0	(2.6)	－	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.5/12	呉須染付。
205	SE02		伊万里 磁器	中椀蓋	10.6	1.9	－	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 1.2/12	呉須染付。被熱。
206	SD01		伊万里 磁器	小椀蓋	8.8	2.6	－	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 3.4/12	呉須染付。
207	(立) ④	第Ⅲ層	伊万里 磁器	合子蓋	8.8	(2.3)	－	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.0/12	呉須染付。
208	SK05		伊万里 磁器	合子蓋	7.4	(1.6)	－	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 4.3/12	
209	E4	第Ⅰ層	伊万里 磁器	合子蓋	4.4	(0.9)	－	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 4.0/12	呉須染付。
210	(立) ⑦	第Ⅰ層	伊万里 磁器	蓋	－	(2.5)	－	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	－	呉須染付。
211	C3	第Ⅲ層	唐津 陶器	中椀 丸形	12.8	3.7	4.9	密	良	5YR5/4 にぶい赤褐色	灰釉 藁灰釉	ロクロ	口縁部 0.8/12	
212	SD06		唐津 陶器	中椀 丸形	11.8	(4.0)	－	密	良	2.5YR4/2 灰赤色	鉄釉	ロクロ	口縁部 0.6/12	
213	SE05		唐津 陶器	中椀 腰張形	10.9	5.4	4.4	密	良	10YR7/1 灰白色	灰釉	ロクロ	口縁部 4.0/12	白泥轆轤刷毛目。
214	SD06		唐津 陶器	中椀 腰張形	10.7	6.8	4.9	密	良	7.5YR6/4 にぶい橙色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.0/12	白泥轆轤刷毛目。
215	SK07		唐津 陶器	中椀 腰張形	10.6	6.6	4.9	密	良	5YR4/6 赤褐色	灰釉	ロクロ	口縁部 4.9/12	白泥轆轤刷毛目。
216	SE02		唐津 陶器	中椀 腰張形	10.6	7.2	5.2	密	良	10YR6/1 褐灰色	透明釉	ロクロ	口縁部 0.5/12	陶胎染付。
217	SD03		唐津 陶器	小椀 半筒形	9.0	7.3	5.6	密	良	5Y4/1 灰色	鉄釉	ロクロ	口縁部 1.0／12	
218	G3	第Ⅰ層	唐津 陶器	小椀 腰張形	6.7	4.6	3.2	密	良	10G4/1 暗緑灰色	鉄釉	ロクロ	口縁部 4.0/12	
219	C4	第Ⅱ層	唐津 陶器	中皿 丸形	20.6	5.9	6.5	密	良	10YR3/4 暗赤褐色	透明釉 錆釉	ロクロ	口縁部 0.9/12	蛇ノ目釉剥ぎ。鉄絵。
220	C4	第Ⅱ層	唐津 陶器	小皿 丸形	13.4	3.8	4.2	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	藁灰釉	ロクロ	口縁部 0.8/12	蛇ノ目釉剥ぎ。陶胎染付。
221	C3	第Ⅲ層	唐津 陶器	小皿 折縁形	13.0	3.9	4.3	密	良	5YR5/6 明赤褐色	灰釉	ロクロ	口縁部 2.0/12	
222	SD01		唐津 陶器	小皿 端反形	10.8	(2.6)	－	密	良	10YR6/1 褐灰色	藁灰釉	ロクロ	口縁部 4.0/12	

第６表　土器類観察表〔６〕

番号	遺構名 グリッド	層位	種別	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	釉	調整	残存率	備考
223	SD01		唐津 陶器	小皿 丸形	10.7	3.0	4.7	密	良	5YR4/4 にぶい赤褐色	藁灰釉	ロクロ	口縁部 2.5/12	
224	SD02		唐津 陶器	小皿 丸形	12.1	2.7	4.6	密	良	5YR6/6 橙色	藁灰釉	ロクロ	口縁部 5.8/12	見込みに蛇ノ目釉剥ぎ。陶胎染付。
225	SD01		唐津 陶器	小皿 平形	9.4	2.2	4.2	密	良	10GY4/1 暗緑灰色	鉄釉	ロクロ	口縁部 3.5/12	
226	SE02		唐津 陶器	大鉢 浅丸形	32.4	13.4	11.2	密	良	2.5YR4/6 赤褐色	鉄釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	白泥羽毛目文。
227	C3	第Ⅲ層	唐津 陶器	大鉢 浅丸形	27.0	(4.2)	－	密	良	5YR4/4 にぶい赤褐色	鉄釉 灰釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	白泥羽毛目文。
228	E4	第Ⅰ層	唐津 陶器	中鉢 浅丸形	17.6	(3.3)	－	密	良	10YR7/2 灰黄褐色	銅緑釉 灰釉	ロクロ	口縁部 1.2/12	
229	SK07		唐津 陶器	片口 口縁帯下注口	15.6	(5.7)	－	密	良	5YR4/3 にぶい赤褐色	透明釉	ロクロ	口縁部 7.2/12	白泥櫛幅刷毛目。
230	SD01		唐津 陶器	大鉢 浅丸形	－	(4.4)	5.4	密	良	10YR6/1 褐灰色	銅緑釉 灰釉	ロクロ	底部 12.0/12	底部。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。
231	SE02	掘方	唐津 陶器	大鉢 浅丸形	－	(9.9)	13.1	密	良	5YR6/4 にぶい橙色	灰釉 鉄釉	ロクロ	底部 4.5/12	底部。三島手。白泥象眼。見込み目あり。
232	（立）⑫	第Ⅰ層	唐津 陶器	大甕	45.0	(16.7)	23.8	密	良	5YR5/6 明赤褐色	鉄釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	ハンズーガメ。口縁部。233と同一。
233	（立）⑫	第Ⅰ層	唐津 陶器	大甕	45.0	(16.7)	23.8	密	良	5YR5/6 明赤褐色	鉄釉	ロクロ	底部 1.0/12	ハンズーガメ。底部。232と同一。
234	SE02		唐津 陶器	中甕 頸部切立形	19.4	(13.1)	－	密	良	7.5R4/1 暗赤灰色	鉄釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	
235	SK03		京焼系 陶器	小椀 半球形	9.6	(4.5)	－	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ	口縁部 1.9/12	緑釉施文。
236	SK03		京焼系 陶器	小椀 腰張形	9.2	(4.9)	－	密	良	10YR6/2 灰黄褐色	灰釉	ロクロ	口縁部 1.6/12	呉須染付。
237	SE02		京焼系 陶器	小椀 半球形	9.0	(5.0)	－	密	良	10YR8/2 灰白色	灰釉	ロクロ	口縁部 1.5/12	緑釉施文。
238	SD01		京焼系 陶器	小椀 腰張形	8.0	4.8	3.0	密	良	7.5YR6/6 橙色	鉄釉	ロクロ	口縁部 3.0/12	
239	SE01		京焼系 陶器	小椀 腰張形	8.1	4.5	1.9	密	良	10YR7/1 灰白色	灰釉	ロクロ	口縁部 4.8/12	
240	SE02		京焼系 陶器	小椀 半球形	6.4	3.8	2.0	密	良	10YR6/1 褐灰色	灰釉	ロクロ	口縁部 4.6/12	緑釉施文。
241	SK03		京焼系 陶器	椀	－	(3.0)	5.4	密	良	10YR8/2 灰白色	灰釉	ロクロ	底部 12.0/12	底部。高台内落款印。
242	SE05		京焼系 陶器	椀	－	(1.0)	5.4	密	良	10YR8/2 灰白色	灰釉	ロクロ	底部 6.5/12	底部。高台内落款印。
243	SE04	掘方	京焼系 陶器	灯明受皿 油溝半月状	10.7	2.1	3.7	密	良	10YR7/2 にぶい黄橙色	鉛透明釉	ロクロ	口縁部 4.3/12	
244	SE02	掘方	京焼系 陶器	中鉢 浅丸形	22.6	5.7	9.2.	やや密	良	10YR8/1 灰白色	灰釉	ロクロ	口縁部 1.8/12	鉄絵。
245	SD01		京焼系 陶器	鬢盥 浅め	(4.95)	4.2	3.3	密	良	10YR7/1 灰白色	灰釉	紐造り	－	推定幅13.3cm。
246	SK05		京焼系 陶器	髪油壺	－	(4.7)	4.8	密	良	2.5Y7/3 浅黄色	灰釉	ロクロ 回転糸切り	底部 4.0/12	底部。
247	C3	第Ⅲ層	京焼系 陶器	燭徳利	－	(6.1)	4.6	密	良	5YR5/4 にぶい赤褐色	灰釉	ロクロ	底部 7.0/12	底部。
248	E3	第Ⅱ層	京焼系 陶器	急須	8.4	(2.2)	－	密	良	10YR5/2 灰黄褐色	透明釉	ロクロ	口縁部 2.0/12	呉須染付。
249	D3	第Ⅲ層	信楽 陶器	中椀 腰張形	10.0	6.2	5.3	密	良	10YR8/1 灰白色	飴釉	ロクロ	口縁部 3.5/12	
250	G3	第Ⅰ層	信楽 陶器	灯明皿	10.8	2.0	3.7	密	良	10YR8/1 灰白色	鉛透明釉	ロクロ	口縁部 1.9/12	
251	G2	第Ⅰ層	信楽 陶器	灯明皿	6.4	1.1	2.8	密	良	10YR8/1 灰白色	鉛透明釉	ロクロ	口縁部 5.9/12	口縁部に油煙付着。
252	SE02	掘方	信楽 炻器	灯明受皿 油溝半月状	13.0	(1.6)	－	密	良	10R3/3 暗赤褐色	焼締め	ロクロ	口縁部 1.0/12	油煙付着。
253	G2	第Ⅰ層	信楽 陶器	灯明受皿	11.6	2.0	6.6	密	良	10YR5/1 褐灰色	鉛透明釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	
254	G2	第Ⅰ層	信楽 陶器	灯明受皿	10.9	1.8	4.2	密	良	10YR8/1 灰白色	鉛透明釉	ロクロ	口縁部 2.8／12	
255	E4	第Ⅱ層	信楽 陶器	練鉢	30.2	(10.4)	－	やや密	良	10YR5/2 灰黄褐色	灰釉	ロクロ	口縁部 2.5/12	
256	E4	第Ⅱ層	信楽 陶器	土鍋 腰折三足	18.0	8.0	7.6	密	良	10YR6/4 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ	口縁部 1.8/12	
257	E4	第Ⅰ層	信楽 陶器	蓋物蓋	9.0	(1.9)	－	密	良	10YR6/1 褐灰色	灰釉	ロクロ	口縁部 3.8/12	
258	SD01		瀬戸美濃 磁器	小椀 端反形	8.7	4.4	3.6	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 3.5/12	呉須染付。
259	A4	第Ⅱ層	瀬戸美濃 磁器	小椀 端反形	8.4	4.2	3.4	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 4.1/12	呉須染付。

第７表　土器類観察表〔７〕

番号	遺構名 グリッド	層位	種別	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	釉	調整	残存率	備考
260	SK05		瀬戸美濃 陶器	中椀 掌骨形	12.0	(4.6)	−	密	良	5Y7/1 灰白色	鉄釉	ロクロ	口縁部 1.1/12	
261	SD02		瀬戸美濃 陶器	中椀 變形	11.0	6.5	4.3	密	良	10YR7/1 灰白色	灰釉	ロクロ	口縁部 6.0/12	
262	SE04		瀬戸美濃 陶器	中椀 天目形	10.2	6.5	4.0	密	良	10YR7/1 灰白色	飴釉	ロクロ	口縁部 4.0/12	
263	G3	第Ⅰ層	瀬戸美濃 陶器	中椀 天目形	10.0	6.2	5.2	密	良	10YR7/1 灰白色	飴釉	ロクロ	口縁部 1.0/12	
264	SK07		瀬戸美濃 陶器	中椀 輪花掌骨形	9.6	7.7	5.4	密	良	10YR7/1 灰白色	灰釉 鉄釉	ロクロ	口縁部 7.0/12	鉄絵。
265	SE05		瀬戸美濃 陶器	小椀 腰張形	7.6	6.3	4.3	密	良	10YR5/1 褐灰色	飴釉	ロクロ	口縁部 8.0/12	鉄絵。
266	SK05		瀬戸美濃 陶器	小椀 腰折形	7.6	(5.2)	−	密	良	10YR7/1 灰白色	灰釉	ロクロ	口縁部 2.5/12	
267	SD03		瀬戸美濃 陶器	椀	−	(4.4)	4.6	密	良	7.5Y7/1 灰白色	鉄釉	ロクロ	底部 12.0/12	底部。
268	(立)⑫	第Ⅰ層	瀬戸美濃 磁器	小皿 盤形	10.9	2.5	5.8	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 4.3/12	呉須染付。
269	SD01		瀬戸美濃 磁器	小皿 稜皿形	9.2	2.0	5.0	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	型打	口縁部 6.0/12	見込みに形押文。
270	SE05		瀬戸美濃 陶器	五寸皿 盤形	16.0	2.0	6.1	密	良	10YR7/1 灰白色	灰釉	型打	口縁部 0.8/12	
271	SD01		瀬戸美濃 陶器	五寸皿 丸形	14.8	(2.7)	−	密	良	10YR5/2 灰黄褐色	灰釉	ロクロ	口縁部 0.9/12	
272	SE05		瀬戸美濃 陶器	小皿 丸形無高台	12.0	3.0	5.2	密	良	7.5Y7/1 灰白色	灰釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 6.1/12	
273	試掘1T	第Ⅰ層	瀬戸美濃 陶器	小皿 丸形	11.9	3.1	4.8	密	良	10YR8/1 灰白色	白泥 透明釉	ロクロ	口縁部 3.0/12	陶胎染付。
274	SD02		瀬戸美濃 陶器	小皿 折縁形	11.0	2.6	4.5	密	良	10YR7/1 灰白色	灰釉	ロクロ	口縁部 4.2/12	
275	SE05		瀬戸美濃 陶器	小皿 平形	10.8	3.2	4.2	密	良	10YR6/1 褐灰色	灰釉	ロクロ	口縁部 3.0/12	見込みに重ね積み痕。
276	SD01		瀬戸美濃 陶器	小皿 折縁形	11.0	(2.2)	−	密	良	10YR7/1 灰白色	灰釉 鉄釉	ロクロ	口縁部 1.5/12	
277	C4	第Ⅱ層	瀬戸美濃 陶器	小皿 丸形	10.8	2.6	4.7	密	良	7.5Y6/1 灰色	灰釉	ロクロ	口縁部 4.8/12	見込みに印花文。
278	SD01		瀬戸美濃 陶器	小皿 稜皿形	10.4	2.6	5.3	密	良	10YR8/2 灰白色	灰釉	ロクロ	口縁部 2.0/12	見込みに「福ヵ」印。
279	SE02	掘方	瀬戸美濃 陶器	皿 方形or長方形	−	2.5	−	密	良	10YR8/1 灰白色	白色釉 鉄釉	紐造り	−	外面に釉剥ぎで斜格子文。
280	SK05		瀬戸美濃 陶器	中椀 浅丸形	17.6	(3.5)	−	密	良	7.5YR6/3 にぶい褐色	灰釉 薫灰釉	ロクロ	口縁部 2.0/12	
281	E4	第Ⅰ層	瀬戸美濃 陶器	片口 口縁切込筒形	12.8	8.0	10.6	密	良	10YR7/1 灰白色	灰釉	ロクロ	口縁部 2.5/12	
282	SD01		瀬戸美濃 陶器	鉢	26.0	(7.7)	−	密	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	鉄釉	ロクロ	口縁部 0.7/12	
283	SK06		瀬戸美濃 陶器	植木鉢	−	(3.4)	8.5	密	良	2.5Y7/4 浅黄色	灰釉	ロクロ	底部 4.0/12	底部。獣脚3足。
284	SE01		瀬戸美濃 陶器	香炉 無三足半筒形	9.0	7.1	5.5	密	良	10YR8/1 灰白色	灰釉	ロクロ	口縁部 6.1/12	
285	SK07		瀬戸美濃 陶器	香炉 半筒形	8.1	(4.9)	−	密	良	N8/0 灰白色	青磁釉	ロクロ	口縁部 3.8/12	
286	SD01		瀬戸美濃 陶器	瓶	6.4	(3.1)	−	密	良	10YR5/1 褐灰色	鉄釉	ロクロ	口縁部 6.4/12	
287	C3	第Ⅲ層	瀬戸美濃 陶器	瓶	−	(7.0)	−	密	良	10YR8/1 灰白色	灰釉	ロクロ	−	頸部～胴上部。鉄絵。
288	SE02	掘方	瀬戸美濃 陶器	小瓶	−	(4.7)	−	密	良	10YR6/1 褐灰色	灰釉	ロクロ	−	胴部。
289	F4	第Ⅰ層	瀬戸美濃 陶器	小瓶	−	(4.1)	2.9	密	良	10YR8/1 灰白色	灰釉	ロクロ 回転糸切り	底部 12.0/12	底部。
290	G2	第Ⅰ層	瀬戸美濃 陶器	土瓶蓋	7.5	1.9	−	密	良	10YR8/1 灰白色	飴釉	ロクロ 回転糸切り	口縁部 2.0/12	
291	SD01		志野 陶器	大皿 折縁形	26.8	(5.4)	−	密	良	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石釉	ロクロ	口縁部 1.1/12	
292	SD01		志野 陶器	小皿 稜花	12.4	3.2	7.0	密	良	10YR7/2 にぶい黄橙色	長石釉	ロクロ	口縁部 2.8/12	
293	SD06		志野 陶器	猪口 端反腰張形	6.2	5.3	2.7	密	良	10YR7/1 灰白色	長石釉	ロクロ	口縁部 0.8/12	
294	C4	第Ⅱ層	志野 陶器	段重 腰部無加工	13.0	4.6	7.6	密	良	2.5Y7/1 灰白色	長石釉	ロクロ	口縁部 3.1/12	
295	G3	第Ⅱ層	瓦質土器	風炉	30.2	(4.6)	−	密	良	10YR8/3 浅黄橙色	黒色処理	紐造り	口縁部 1.8/12	印花文。
296	SE01		瓦質土器	火入 半筒形	14.4	(5.9)	−	密	良	10YR7/1 灰白色	黒色処理	ロクロ	口縁部 7.1/12	

第8表　土器類観察表〔8〕

番号	遺構名 グリッド	層位	種別	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	釉	調整	残存率	備考
297	A3	第Ⅲ層	瓦質土器	火鉢 口縁内肥厚形	34.4	(13.9)	－	密	良	10YR6/2 灰黄褐色	黒色処理	組造り 縄タタキ	口縁部 1.2/12	
298	B4	第Ⅱ層	瓦質土器	火鉢 口縁内肥厚形	33.0	(8.7)	－	密	良	10YR7/1 灰白色	黒色処理	組造り	口縁部 1.3/12	
299	(立) ⑨	第Ⅱ層	瓦質土器	火鉢	－	(3.8)	31.0	密	良	10YR7/1 灰白色	黒色処理	組造り	底部 1.1/12	底部。丸形三足。足裏面に×線刻。
300	SE04		瓦質土器	火鉢	－	(11.2)	16.0	密	良	10YR8/1 灰白色	黒色処理	組造り	底部 3.0/12	底部。方形三足。
301	SK01	掘方	瓦質土器	火消し壺	23.9	(29.6)	－	密	良	10YR8/2 灰白色	黒色処理	組造り	口縁部 6.5/12	把手２箇所。
302	G3	第Ⅰ層	瓦質土器	火消し壺蓋	15.3	4.4	－	密	良	10YR7/1 灰白色	黒色処理	ロクロ	口縁部 0.5/12	
303	SE05		七厘	さな	18.0	1.60	－	密	良	10YR6/2 灰黄褐色		組造り	－	
304	(立) ⑪	第Ⅰ層	九谷 磁器	小椀 筒形	7.0	7.1	3.1	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 11.0/12	色絵。高台内「九谷」銘。
305	SE03		伊万里 磁器	薄手酒杯	5.3	3.1	1.8	密	良	10YR8/1 灰白色	透明釉	ロクロ	口縁部 3.0/12	呉須染付。外面「陶磁器卸問屋」「電話弐八三〇番」「（屋号）太田商会」銘。
306	SE03		瀬戸美濃 磁器	仏花瓶 盤口形	9.1	12.1	5.4	密	良	10YR8/1 灰白色	鉄釉	ロクロ	口縁部 11.0/12	
307	SK07		陶器	水注	1.0	(6.6)	－	密	良	10YR8/1 灰白色		型押	口縁部 12.0/12	口縁部。
308	SK07		陶器	水注	－	(5.8)	5.1	密	良	10YR8/1 灰白色		型押	底部 12.0/12	底部。

第９表　土器類観察表〔９〕

番号	遺構名 グリッド	層位	種類	法量（cm・g） 最大長	最大幅	最大厚	重量	色調	備考
309	G3	Ⅰ層	土錘	5.1	3.5	－	20.8	10YR7/3　にぶい黄橙色	
310	SD01		轆の羽口	7.3	8.5	－	129.6	10YR6/2　灰黄褐色	胎土にスサ含む。
311	SD06		轆の羽口	3.7	5.7	－	38.8	10YR8/1　灰白色	胎土にスサ含む。
312	SE02		墨書陶器片	7.2	4.2	1.1	40.7	10YR6/2　灰黄褐色	陶器片で、全面研磨する。「小車見仙」と墨書。
313	SD01		面子	4.5	5.1	0.8	22.0	10YR3/3　暗褐色	打欠き。唐津。
314	SD01		面子	4.5	4.7	1.0	30.1	10YR8/1　灰白色	打欠き。瀬戸美濃。鉄絵。
315	SD01		面子	4.9	4.2	1.0	21.3	5BG7/1　明青灰色	打欠き。瀬戸美濃。
316	SE02		土人形 西行法師像	3.2	2.1	1.9	9.5	10YR7/3　にぶい黄橙色	頭部欠損。
317	SE04		土人形 地蔵菩薩像？	4.4	4.1	0.7	11.5	10YR8/1　灰白色	
318	SE03		土人形	6.8	6.5	0.6	48.6	10YR7/1　灰白色	319と同一。
319	SE03		土人形	7.5	6.0	0.5	27.9	10YR7/1　灰白色	318と同一。
320	SE02	掘方	土人形 鳥形	6.0	3.4	4.5	52.3	10YR7/2　にぶい黄橙色	頭部欠損。
321	SK05		土人形 箒	5.3	5.0	2.6	30.9	10YR6/3　にぶい黄橙色	胎土に雲母含む。胡粉が一部残存。
322	SK05		土人形 箒	5.3	5.1	1.8	29.2	10YR7/1　灰白色	胎土に雲母含む。胡粉が一部残存。
323	SK05		土人形 三方	3.5	3.8	2.8	27.1	10YR6/4　にぶい黄褐色	
324	E4	Ⅰ層	土人形 瓢箪形	3.7	1.4	0.5	3.2	10YR8/1　灰白色	

第10表　土製品観察表

番号	遺構名 グリッド	層位	材質	種類	法量（cm・g） 最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
325	SE03		透明ガラス	瓶 丸形	8.1	4.2	4.2	52.8	コルク栓あり。赤色溶液残存。
326	SE03		透明ガラス	瓶 丸形	6.8	3.1	3.1	35.9	
327	SE03		青色ガラス	瓶 角形	6.1	2.4	2.4	24.2	口径1.0cm。外面にエンボスで「神薬」「株式会社師天堂」の文字と目盛りがエンボスする。
328	SE03		透明ガラス	ガラス管	8.7	2.2		11.3	管径0.7cm。内面にタール状の付着物。
329	SE03		透明ガラス	ガラス管	8.7	2.2		11.3	管径0.7cm。内面にタール状の付着物。
330	SK11		透明ガラス	数珠玉	0.6	0.4	0.4	0.2	木製数珠玉と出土。

第11表　ガラス製品観察表

番号	遺構名 グリッド	層位	石材	種類	法量（cm）				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
331	ＳＥ02		粘板岩	部品	1.1	0.4	0.3	0.2	継手。
332	ＳＥ02		玉髄	部品	1.1	0.5	0.4	0.1	継手。下部欠損。
333		Ⅰ層	滑石	石鍋	口径 14.9	器高 (3.5)	底径 －	25.3	温石に転用。
334	ＳＥ03		緑色凝灰岩	紡錘車	径 7.3	1.9		67.0	
335		Ⅰ層	粘板岩	硯	12.9	7.8	2.3	369.9	右側面「□（高ヵ）岡屋定治郎」、左側面「□□」。
336	ＳＥ02		粘板岩	硯	14.5	4.9	2.5	241.9	
337		Ⅰ層	粘板岩	硯	13.3	6.2	2.6	188.2	
338	ＳＤ01		凝灰岩	硯	3.4	4.0	1.2	22.9	
339	ＳＥ02	掘方	粘板岩	硯	5.0	2.2	0.6	5.4	
340	ＳＤ01		砂岩	砥石	14.1	6.6	5.1	603.4	
341	ＳＤ01		砂岩	砥石	8.0	5.8	3.8	285.4	
342	ＳＥ02		砂岩	砥石	9.9	3.8	1.8	87.1	
343	ＳＤ01		砂岩	砥石	5.5	2.5	2.5	42.2	
344	ＳＫ03		砂岩	砥石	4.5	1.7	1.6	15.8	
345	ＳＫ05		珪化木	砥石	4.3	2.0	1.3	15.3	
346	ＳＫ04		砂岩	砥石	3.2	1.4	0.8	6.5	
347	ＳＥ02	砂層	花崗岩	石臼	径 29.0		7.4	5.0	6分画、下臼。
348		Ⅰ層	安山岩	台石	16.7	9.1	7.9	1,414.1	
349	ＳＤ01		鉄石英	火打石	4.2	3.8	1.6	19.9	
350	ＳＥ02		緑色凝灰岩	火鉢	8.6	10.3	5.4	259.1	
351		Ⅰ層	珪藻土	行火	11.6	22.0	15.2	1,015.4	
352		Ⅰ層	珪藻土	行火	11.6	20.1	10.9	505.3	
353	ＳＥ03		金屋石（緑色凝灰岩）	井戸	全高 66.8	径 75.8			
354	ＳＥ03		金屋石（緑色凝灰岩）	井戸	全高 61.0	径 77.4			

第12表　石製品観察表

番号	遺構名 グリッド	層位	器種 器形	樹種	木取り	法量（cm）			備考
						口径	器高	底径	
355	ＳＥ01		合子	広葉樹	横木取り	13.7	3.6	14.7	全面黒漆塗り。
356	ＳＤ01		椀 腰丸椀	ブナ属	横木取り		(6.1)		全面黒漆塗り、文様は赤漆塗り。　見込みと外面に文様あり。
357	ＳＫ07		椀 腰丸椀	広葉樹	横木取り	11.7	5.3	5.7	外面黒漆塗り、内面・文様は赤漆塗り。
358	ＳＫ07		椀 腰丸椀	広葉樹	横木取り	11.2	4.7	5.4	外面黒漆塗り、内面・文様「木瓜」は赤漆塗り。
359	ＳＫ07		椀 腰丸椀	ブナ属	横木取り	11.0	5.2	5.4	外面黒漆塗り、内面・文様は赤漆塗り。
360	ＳＥ05		椀 腰丸椀	広葉樹	横木取り	11.8	(4.1)		全面赤漆塗り。
361	ＳＥ05		椀 一文字腰椀	ブナ属	横木取り	13.1	7.2	5.8	全面赤漆塗り。
362	ＳＥ04	掘方	椀 平椀	トチノキ	横木取り	12.3	5.4	6.6	全面黒漆塗り。

第13表　漆器（合子・椀）観察表

番号	遺構名 グリッド	層位	器種 器形	樹種	木取り	法量（cm）				備考
						長さ	幅	厚さ	径	
363	ＳＫ05		蓋	針葉樹	柾目		0.3		11.5	全面黒漆塗り。
364	ＳＫ05		蓋	針葉樹？	柾目	22.5	10.8	0.6		全面黒漆塗り。
365	ＳＥ05		底板	スギ	板目			0.9	23.1	全面黒漆塗り。一部炭化している。
366	ＳＫ07		膳	ヒノキ	追柾目	31.6	0.9	8.6		表面赤漆、裏面黒漆塗り。
367	ＳＥ02		脚	針葉樹	柾目	5.7	3.0	0.6		全面黒漆塗り。
368	ＳＥ05		脚	針葉樹	板目	6.5	4.4	0.8		全面黒漆塗り。
369	ＳＥ05		脚	針葉樹	柾目	7.7	4.8	0.8		全面黒漆塗り。
370	ＳＫ05		脚	針葉樹	芯無削り出し	7.0	1.6	1.0		表面赤漆、裏面黒漆塗り。371と同一個体の部材。
371	ＳＫ05		脚	ヒノキ	芯無削り出し	7.4	1.6	0.9		表面赤漆、裏面黒漆塗り。370と同一個体の部材。
372	ＳＥ05		箸	針葉樹	芯無削り出し	21.4			0.6	
373	ＳＤ01		箸	針葉樹	芯無削り出し	28.5	0.8	0.5		
374	ＳＤ01		箸	針葉樹	芯無削り出し	18.1	0.7	0.7		
375	ＳＤ01		箸	スギ	芯無削り出し	17.5			0.6	
376	ＳＥ05		箸	針葉樹	芯無削り出し	24.2			0.6	
377	ＳＫ05		箸	針葉樹	芯無削り出し	25.7	0.6	0.5		
378	ＳＫ05		箸	針葉樹	芯無削り出し	26.6			0.7	
379	ＳＫ05		箸	針葉樹	芯無削り出し	19.5	0.7	0.6		頭部を斜めに切り落とす天削げの加工を施す。
380	ＳＫ05		箸	スギ	芯無削り出し	9.6	0.6	0.5		頭部を斜めに切り落とす天削げの加工を施す。

第14表　木製品観察表〔１〕

番号	遺構名 グリッド	層位	器種 器形	樹種	木取り	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	径	備考
381	SK05		匙	針葉樹	芯無削り出し	14.7	2.4	0.5		
382	SD01		切匙	針葉樹？	板目	19.5	2.3	0.6		
383	SK06		篦？	針葉樹	柾目	8.8	0.7	0.5		
384	SE02		刷毛	ヒノキ	追柾目	14.8	8.9	0.8		下部に黒漆を塗る。
385	SK03		糸枠横木	針葉樹	芯無削り出し	9.6	1.8	0.8		
386	SK05		糸枠枠木	針葉樹	芯無削り出し	17.6	1.8	1.2		
387	SD01		糸枠枠木	針葉樹	芯無削り出し	17.1	1.7	1.4		横木を留める木釘が残る。
388	SE05		木錘	ツガ属	芯無削り出し	5.3	2.4	2.2		
389	SE03	掘方	柄	針葉樹	芯無削り出し	10.0	2.5	1.6		
390	SK05		柄	スギ	芯無削り出し	13.4	3.5	1.6		
391	SE05		蓋	針葉樹	柾目	9.0	4.9	0.9		
392	SE05		蓋	針葉樹	柾目			0.3	6.4	緩じていた樹皮が一部残る。
393	SK06		蓋	針葉樹	柾目	3.7	1.8	0.3		
394	SD01		蓋	針葉樹	柾目	9.1	5.0	0.7		
395	SD01		蓋	針葉樹	柾目	10.0	4.6	0.7		緩じていた樹皮が一部残る。
396	SD01		蓋	針葉樹	柾目	12.8	10.6	0.2		
397	SE02		用途不明	針葉樹	柾目			1.0	5.2	
398	SE05		底板	針葉樹	柾目			0.6	6.7	側面に木釘孔が残る。
399	SK06		底板	針葉樹	柾目	4.8	2.2	0.2		
400	SE02	掘方	底板	針葉樹	板目	30.5	12.9	1.1		
401	SE04		底板	針葉樹	追柾目	56.1	18.4	2.4		
402	SE05		桶側板	針葉樹	板目	18.4	5.3	1.1		
403	SD01		桶側板	針葉樹	板目	12.9	5.8	1.1		
404	SD01		桶側板	スギ	板目	35.9	6.5	1.5		
405	SE02		柄杓柄	針葉樹	角材	43.5	2.3	1.0		
406	SD06		柄杓柄	針葉樹	角材	46.8	2.6	1.5		
407	SE05		曲物	側板　針葉樹 底板　針葉樹	側板　柾目 底板　柾目	11.5	10.6	1.5		前面一箇所で側板を樹皮で留める。
408	（立）⑦	第Ⅱ層	曲物側板	針葉樹	柾目	3.7	14.9	0.3		
409	（立）⑦	第Ⅱ層	曲物側板	針葉樹	柾目	2.4	5.6	2.3		
410	SK05		栓	スギ	芯無削り出し	6.6			2.8	
411	SK03		栓	針葉樹	芯無削り出し	4.7			1.3	
412	SK05		箱	スギ	追柾目	38.2	36.0	10.0		底板と左右の側板に鋸痕が残る。
413	SE02		下駄	イヌガヤ	板目	21.8	8.4	3.3		連歯下駄。
414	SD01		下駄	広葉樹	板目	20.3	9.2	5.3		連歯下駄。台上面上部前歯部分に鉄釘が残る。
415	SK04		下駄	広葉樹	柾目	21.9	9.0	2.3		連歯下駄。
416	SE05		下駄	ヒノキ	板目	14.4	5.8	2.9		朝下駄。
417	（立）⑫	Ⅱ層	下駄	台　ミズキ 歯　ブナ属	台　板目 歯　板目	20.9	12.9	8.4		露卯下駄。台上面下部に文様を線刻する。
418	SK03		下駄の歯	広葉樹	板目	10.4	5.1	1.6		
419	SK03		下駄の歯	広葉樹	板目	13.6	6.0	1.5		
420	SK03		蹲木？	針葉樹	角材	13.4	1.3	0.8		
421	SK03		蹲木？	針葉樹	角材	13.4	1.5	0.8		
422	SK03		蹲木？	針葉樹	柾目	13.0	1.0	0.3		
423	SK03		蹲木？	針葉樹	芯無削り出し	11.5	1.0	0.7		
424	SK03		蹲木？	針葉樹	角材	10.6	1.1	1.0		
425	SK06		算盤玉	広葉樹？	芯無削り出し			0.6	1.7	孔を除き全面朱塗り。
426	SK05		将棋の駒	広葉樹	板目	2.5	2.4	0.9		金将の文字を黒漆で書く。
427	G3	Ⅱ層	人形？	針葉樹	板目	10.3	2.3	0.9		
428	SD01		人形？	針葉樹	芯無削り出し	11.2	2.6	2.0		
429	SK06		鏃形	針葉樹	芯無削り出し	6.5	6.8	0.4		
430	SK05		鍬形	スギ	板目	16.8	9.4	0.9		柄孔の上に木釘が残る。
431	SK11		数珠玉	モチノキ属	削り出し			0.2	0.4	側面赤漆塗り。
432	SK11		数珠玉	モチノキ属	削り出し			0.2	0.4	側面赤漆塗り。
433	SK11		数珠玉	モチノキ属	削り出し			0.2	0.4	側面赤漆塗り。
434	SK11		数珠玉	モチノキ属	削り出し			0.2	0.4	側面赤漆塗り。
435	SK11		数珠玉	モチノキ属	削り出し			0.2	0.4	側面赤漆塗り。
436	SK11		数珠玉	モチノキ属	削り出し			0.2	0.4	側面赤漆塗り。
437	SK11		数珠玉	モチノキ属	削り出し			0.2	0.4	側面赤漆塗り。
438	SK11		数珠玉	モチノキ属	削り出し			0.2	0.4	側面赤漆塗り。
439	SK11		数珠玉	モチノキ属	削り出し			0.2	0.4	側面赤漆塗り。
440	SK11		数珠玉	モチノキ属	削り出し			0.2	0.4	側面赤漆塗り。
441	SK11		数珠玉	モチノキ属	削り出し			0.2	0.4	側面赤漆塗り。
442	SK11		数珠玉	モチノキ属	削り出し			0.2	0.4	側面赤漆塗り。
443	SE02		楔	針葉樹	角材	21.2	3.6	2.3		
444	SE05		楔	広葉樹？	芯無削り出し	14.7	1.9	1.8		
445	SE05		楔	針葉樹	角材	10.5	1.9	0.9		
446	SK05		楔	広葉樹？	角材	7.2	1.3	0.9		
447	SK09		楔	針葉樹	角材	8.1	1.9	1.2		
448	SD01		楔	クリ	角材	16.0	2.1	3.2		
449	SK05		部材	針葉樹	角材	18.2	1.1	0.7		４箇所に孔、下部に２箇所別材が残る。
450	SK05		部材	針葉樹	角材	14.8	3.8	3.4		
451	SK05		部材	針葉樹	角材	7.9	1.5	1.0		
452	SD02		部材	針葉樹	柾目	8.4	2.4	0.7		

第15表　木製品観察表〔２〕

番号	遺構名 グリッド	層位	器種 器形	樹種	木取り	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	径	備考
453	ＳＤ01		部材	針葉樹	柾目	7.4	3.4	1.8		
454	ＳＥ05		部材	針葉樹	角材	7.9	0.6	0.5		
455	ＳＥ05		脚	広葉樹	柾目	10.6	2.3	0.7		左側に木釘が残る。
456	ＳＤ01		灯台	針葉樹	柾目	11.9	3.3	0.8		
457	ＳＫ05		敷居端材	ヒノキ	角材	4.2	5.9	4.5		側面に釘孔が残る。
458	ＳＫ09		建築部材	広葉樹	角材	18.8	6.4	6.3		上部に鉄釘が残る。
459	ＳＤ05		継手	広葉樹	芯持削り出し	27.6			20.7	孔の内部に縄が残る。
460	ＳＥ05		建築部材	針葉樹	角材	48.7	7.5	5.5		上部にホゾ、中央にホゾ孔が残る。
461	ＳＥ05		建築部材	広葉樹？	芯持削り出し	61.9	9.5	8.3		上下部にホゾ、中央にホゾ孔が残る。
462	ＳＥ01		建築部材	広葉樹	芯持削り出し	66.0	16.6	13.7		
463	ＳＥ02		杭	広葉樹	芯持丸木	59.4			4.9	
464	ＳＤ01		護岸構築材	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	61.1			10.9	上部・中部にホゾ孔が残る。
465	ＳＤ01		護岸構築材	広葉樹	芯持丸木	148.2	7.6	6.9		上部に孔が残る。
466	ＳＤ01		用途不明	針葉樹	柾目	30.9	11.2	1.2		
467	試掘１Ｔ	第Ⅰ層	用途不明	広葉樹？	板目	36.8	7.8	1.3		
468	ＳＤ01		用途不明	針葉樹	板目	32.1	4.7	1.2		
469	ＳＥ04		用途不明	針葉樹	板目	16.2	15.4	1.5		
470	（立）⑥	第Ⅰ層	用途不明	広葉樹	追柾目	12.4	11.0	2.3		上部に鉄釘が残る。
471	ＳＥ04		用途不明	広葉樹	芯無削り出し	21.2	9.4	4.0		
472	ＳＫ07		用途不明	広葉樹	芯無削り出し	25.8	9.2	3.6		
473	ＳＥ01		用途不明	針葉樹	柾目	8.3	2.2	0.2		
474	ＳＥ05		用途不明	針葉樹	追柾目	8.5	1.7	0.7		墨痕。
475	ＳＥ02		用途不明	広葉樹	芯無削り出し	20.8	8.2	2.6		墨痕。
476	ＳＥ02		用途不明	針葉樹	芯無削り出し	25.3			0.6	上面に朱が残る。
477	ＳＥ02		用途不明	針葉樹	芯無削り出し	25.3			0.6	下面に鉄釘が残る。
478	ＳＥ02		用途不明	針葉樹	角材	19.0	1.0	0.8		
479	ＳＥ02	掘方	用途不明	針葉樹	追柾目	12.1	3.7	0.7		上下に4箇所孔が残る。
480	ＳＥ04		用途不明	針葉樹	柾目	4.1	3.6	1.0		表面に当り痕が残る。
481	ＳＥ05		用途不明	竹		5.8	0.4	0.3		
482	ＳＥ05		用途不明	広葉樹	柾目	6.7	4.0	1.4		表面に円形の切り込みと孔が残る。
483	ＳＥ05	掘方	用途不明	ヒノキ	芯無削り出し	11.7			0.6	
484	ＳＫ05		用途不明	針葉樹	芯無削り出し	3.5	0.6	0.6		
485	ＳＫ05		用途不明	針葉樹	芯無削り出し	3.0	0.5	0.5		
486	ＳＫ05		用途不明	針葉樹	柾目	6.5	3.2	0.2		
487	ＳＫ05		用途不明	針葉樹	柾目	5.7	3.0	0.5		
488	ＳＫ05		用途不明	針葉樹	柾目	9.0	4.8	0.1		
489	ＳＫ05		用途不明	針葉樹	柾目	10.4	4.5	0.2		
490	ＳＫ05		用途不明	針葉樹	角材	10.4	5.7	3.9		上部に墨書きの線が残る。
491	ＳＫ05		用途不明	針葉樹	芯持削り出し			2.4	6.5	
492	ＳＫ05		用途不明	針葉樹？	板目	7.8	6.9	0.6		鉄製の部材を鉄釘で留める。
493	ＳＫ05		用途不明	針葉樹	柾目	6.5	5.3	0.9		
494	ＳＫ06		用途不明	針葉樹	角材	3.9	1.9	1.3		
495	ＳＫ06		用途不明	針葉樹	芯無削り出し	2.8	0.9	0.6		
496	ＳＫ06		用途不明	針葉樹	芯無削り出し	6.8	1.9	0.5		
497	ＳＫ07		用途不明	針葉樹	柾目	26.4	1.8	0.6		表面と側面に黒漆が残る。
498	ＳＤ02		用途不明	針葉樹	芯無削り出し	12.7	4.8	4.0		
499	E4	第Ⅲ層	用途不明	針葉樹	角材	11.0	3.1	2.5		中央に孔が残る。
500	ＳＥ05		印鑑	広葉樹？		1.8	1.4			印面には富の字が彫られている。印側の中央に孔をあける。
501	ＳＫ05		荷札	針葉樹	柾目	10.6	3.8	0.7		・「卯十一月廿一日 弐貫百十文ヵ 中村屋与三兵衛 五石之内」
502	ＳＫ11	掘方	荷札	針葉樹	板目	12.1	3.5	0.7		・「富山□□ □□□□□」 ・「□□□」
503	試掘１Ｔ		荷札	広葉樹	柾目	12.9	5.6	0.5		・「富山西町 久世伊平様 㐂与」
504	ＳＥ02		板材	針葉樹	柾目	15.9	4.0	0.6		・×□× ・×□×
505	ＳＥ05		板材	針葉樹	柾目	13.8	5.3	0.3		・「□□ □富□ □□　」 ・「□ □□□□ □□□」
506	ＳＥ05		板材	針葉樹	柾目	10.6	1.4	0.2		・「□□□」
507	ＳＥ05		板材	針葉樹	柾目	19.0	1.6	0.2		・「□」
508	ＳＥ05		板材	針葉樹	柾目	8.8	1.6	0.7		・「□」 ・「□」
509	ＳＥ05		板材	針葉樹	柾目	6.9	2.5	0.3		罫書をして墨で四角を書く。点状に焦げが残る。 ・「 □□ □
510	ＳＫ07		板材	針葉樹	柾目	6.2	2.1	0.5		印を消すように朱書きが残る。「丸に吉」カ

第16表　木製品観察表〔３〕

番号	遺構名 グリッド	層位	器種 器形	樹種	木取り	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	径	備考
511	ＳＤ01		板材	針葉樹	柾目	13.8	3.3	0.4		・「□　六十」 ・「入」
512	（立）③	第Ⅰ層	板材	針葉樹	板目	12.2	9.6	1.0		「匚コ」
513	（立）⑥	第Ⅰ層	蓋	針葉樹	板目	10.8	7.2	0.6		・「匚コ 大福帳　勝手本より　□（絵画ヵ） 辰五月」 ・「匚コ」
514	ＳＫ05		桟蓋	針葉樹	板目	17.9	9.4	0.8		裏面の上下部に４箇所の釘孔と下部に桟の当り痕が残る。 「猪口　拾入」
515	Ｅ4・Ｆ4	Ⅲ層	蓋	針葉樹	柾目			1.4	14.9	表面に焼印「島屋」
516	ＳＥ02		井戸側上段			76.0			73.5	一部既往の工事で欠失。タガ１段残る。
	ＳＥ02		井戸側下段			120.2			75.4	２枚の側板に孔があいており、１枚に栓が刺さる。タガ２段残る。
	ＳＥ02		底板					4.1	73.0	６枚の板材を20本の木釘で繋ぐ。
	ＳＥ02		栓	針葉樹	芯無削り出し	13.9			6.6	

第17表　木製品観察表〔４〕

番号	遺構名 グリッド	層位	材質	種類	法量（cm・g） 最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
517	ＳＤ01		鉄	鍋	口径　46.3	器高　(5.3)	底径　－		口縁部残存率　0.5/12.0。
518	ＳＥ02		鉄	包丁	22.4	2.5	1.7	31.8	柄は針葉樹、割材削り出し。墨書あり「□□」。
519	ＳＥ05		鉄	火箸	24.7	0.5	－	20.1	
520	ＳＤ02		鉄	火箸	18.8	1.0	0.6	26.5	
521	ＳＥ04		鉄	紡錘車	10.8	4.1	－	9.7	
522	ＳＥ04		鉄	円盤	4.7	4.6	0.4	31.6	
523	ＳＫ11	掘方	鉄	釘	10.6	1.3	0.5	15.3	
524	ＳＤ01		鉄	釘	10.8	1.2	0.4	6.0	
525	ＳＤ01		鉄	釘	10.2	1.2	0.5	6.5	
526	ＳＤ01		鉄	釘	9.9	1.2	0.5	6.7	
527	ＳＥ02	掘方	鉄	釘	7.4	1.2	0.5	5.6	
528	ＳＫ05		鉄	釘	6.7	0.4	0.5	4.1	
529	ＳＥ02	掘方	鉄	釘	6.1	1.2	0.4	4.5	
530	ＳＥ02		鉄	釘	5.5	1.1	0.4	2.5	
531	ＳＥ02	掘方	鉄	釘	5.3	0.5	0.4	2.6	
532	ＳＥ02		鉄	釘	4.0	0.6	0.3	1.6	
533	ＳＥ02		鉄	釘	2.8	0.8	0.3	0.9	
534	ＳＥ02		鉄	釘	2.7	0.7	0.3	0.5	
535	ＳＥ02	掘方	鉄	釘	2.2	0.8	0.3	0.6	
536	ＳＥ02		鉄	釘	2.5	0.4	0.2	0.3	
537	ＳＥ02		鉄	釘	1.3	0.4	0.3	0.1	
538	ＳＥ02		鉄	釘	2.1	0.5	0.3	1.2	
539	ＳＥ04		鉄	鏃	10.9	3.7	1.2	51.8	
540	C4	第Ⅱ層	鉄	鏃	16.7	5.9	1.0	114.8	
541	ＳＥ02		鉄滓	椀型滓	6.0	5.0	3.8	118.9	
542	ＳＤ01		金銅	キセル	9.8	高さ　2.7		7.6	火皿径1.7cm、小口径0.9cm。
543	ＳＥ05		金銅	キセル	5.6	高さ　2.7		8.4	火皿径1.6cm、小口径1.0cm。
544	ＳＥ04		金銅	キセル	4.3	高さ　1.7		5.5	火皿径1.3cm、小口径0.8cm。
545	ＳＫ06		銅	銅銭	径　2.4			2.8	元豊通寶　篆書体。初鋳1078年。
546	ＳＫ06		銅	銅銭	径　2.2			2.3	新寛永通寶。背文足。初鋳1741年。
547	ＳＤ05		銅	銅銭	径　2.3			2.3	新寛永通寶。背文元。初鋳1741年。
548	ＳＫ11	掘方	銅	銅銭	径　2.8			3.6	新寛永通寶四文銭。背文11波青海波。初鋳1769年。
549	ＳＫ11	掘方	銅	銅銭	径　2.8			5.3	新寛永通寶四文銭。背文11波青海波。初鋳1769年。
550	ＳＥ02		真鍮	針金	17.7			0.5	径0.8mm。
551	ＳＥ02		真鍮	針金	13.0			0.2	径0.5mm。
552	ＳＥ02		真鍮	鋲	8.5			0.1	鋲頭径2.0mm。軸部径1.0mm。

第18表　金属製品観察表

第Ⅳ章　自然科学分析

第１節　はじめに

岡田一広（株式会社エイ・テック）、黒沼保子（株式会社パレオ・ラボ）

富山市に所在する富山城下町遺跡主要部の調査では、18世紀以降の井戸や溝、土坑などが検出された。

古環境を復元するために、花粉分析と珪藻分析を地山；基本層序Ⅴ層、井戸ＳＥ02、溝ＳＤ01、土坑ＳＫ05、植物珪酸体分析を地山；基本層序Ⅴ層、溝ＳＤ01、大型植物遺体分析を溝ＳＤ01、井戸ＳＥ02～05、旧井戸ＳＫ11、土坑ＳＫ03～07で実施した。また、トイレ遺構か確認するため土坑ＳＫ03・04で寄生虫卵分析を実施した。

遺物の分析では、年代を調べるため、溝ＳＤ05と井戸ＳＥ02の導水管に用いられたタケ材について放射性炭素年代測定を行った。木材利用傾向を調べるために、溝ＳＤ01、井戸ＳＥ02・04・05、旧井戸ＳＫ05・07・11、包含層から出土した木製品と炭化材の樹種同定を行い、溝ＳＤ01と井戸ＳＥ04・05、旧井戸ＳＫ07から出土した漆器や漆塗り木製品については、樹種同定と平行して塗膜分析も行った。また、ＳＫ05から出土した繊維状遺物について、素材同定を行った。

各遺構の土壌洗浄から検出した貝殻や骨等の動物遺存体について種類同定を実施した。

各遺構の時期は、溝ＳＤ05は17後半～18世紀、溝ＳＤ01・02と井戸ＳＥ02、ＳＫ05・06は18世紀、井戸ＳＥ04・05は19世紀、旧井戸ＳＫ11、土坑ＳＫ03・04は18～19世紀、土坑ＳＫ07と井戸ＳＥ03は19～20世紀、と推測し、包含層は古代、中世および近世遺物を含む。

遺構名	種別	時期	分析項目									
			AMS	木製品樹種同定	炭化材樹種同定	漆塗膜	繊維状遺物同定	種実同定	寄生虫卵同定	プラントオパール	花粉分析	動物遺体同定
ＳＤ01	溝	18世紀		○	○	○		○		○	○	○
ＳＤ02	溝	18世紀										○
ＳＤ05	溝	17世紀後半～18世紀	○									
ＳＥ02	井戸	18世紀前半	○	○	○			○			○	○
ＳＥ03	井戸	19世紀後半～20世紀						○				○
ＳＥ04	井戸	19世紀		○		○		○				
ＳＥ05	井戸	19世紀		○		○		○				○
ＳＫ03	土坑	18～19世紀						○	○			○
ＳＫ04	土坑	18～19世紀						○	○			○
ＳＫ05	土坑（旧井戸）	18世紀		○	○		○	○			○	○
ＳＫ06	土坑	18世紀						○				○
ＳＫ07	土坑（旧井戸）	19～20世紀		○		○		○				○
ＳＫ11	土坑（旧井戸）	18世紀～19世紀		○	○			○				○
包含層	江戸～近代堆積層			○								○
第Ⅴ層	基本層序（地山）									○	○	

第19表　遺構別の分析資料一覧

第２節　放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボＡＭＳ年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・黒沼保子

１．試料と方法

試料は、井戸ＳＥ02の導水管と溝ＳＤ05から出土した導水管の計２点で、いずれもタケ亜科製であった。発掘時の所見では、ＳＥ02は18世紀前半、ＳＤ05は17世紀後半～18世紀と推測されている。

測定試料の情報、調製データは第20表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトＡＭＳ：ＮＥＣ製 1.5ＳＤＨ）を用いて測定した。得られた^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}Ｃ年代、暦年代を算出した。

２．結果

第21表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}Ｃ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}Ｃ年代を、第65図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}Ｃ年代はＡＤ1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}Ｃ年代（yrBP）の算出には、^{14}Ｃの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}Ｃ年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}Ｃ年代がその^{14}Ｃ年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}Ｃ濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}Ｃ年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}Ｃ濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Ｃの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}Ｃ年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}Ｃ年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}Ｃ年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-25938	遺構：ＳＥ02	種類：タケ亜科 器種：導水管 試料の部位：稈 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-25939	遺構：ＳＤ05	種類：タケ亜科 器種：導水管 試料の部位：稈 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）

第20表　測定試料および処理

	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-25938 遺構：SE02	-30.62±0.20	190±18	190±20	1666AD(16.7%)1680AD 1764AD(23.5%)1785AD 1794AD(6.2%)1801AD 1939AD(21.8%)...	1661AD(20.1%)1684AD 1736AD(52.0%)1806AD 1934AD(23.3%)...
PLD-25939 遺構：SD05	-30.19±0.18	102±18	100±20	1697AD(26.2%)1726AD 1815AD(18.8%)1836AD 1845AD(1.9%)1848AD 1877AD(13.2%)1892AD 1908AD(8.1%)1917AD	1690AD(26.7%)1730AD 1810AD(68.7%)1925AD

第21表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

3．考察

SE02の試料（PLD-25938）は、2σ暦年代範囲（確率95.4%）が1661-1684 cal AD(20.1%)、1736-1806 cal AD(52.0%)および1934 cal AD以降(23.3%)で、これは17世紀後半あるいは18世紀前半～19世紀初頭あるいは20世紀前半以降であった。

SD05の試料は、2σ暦年代範囲（確率95.4%）が1690-1730 cal AD(26.7%)と1810-1925 cal AD(68.7%)で、これは17世紀末～18世紀前半あるいは19世紀初頭～20世紀前半であった。

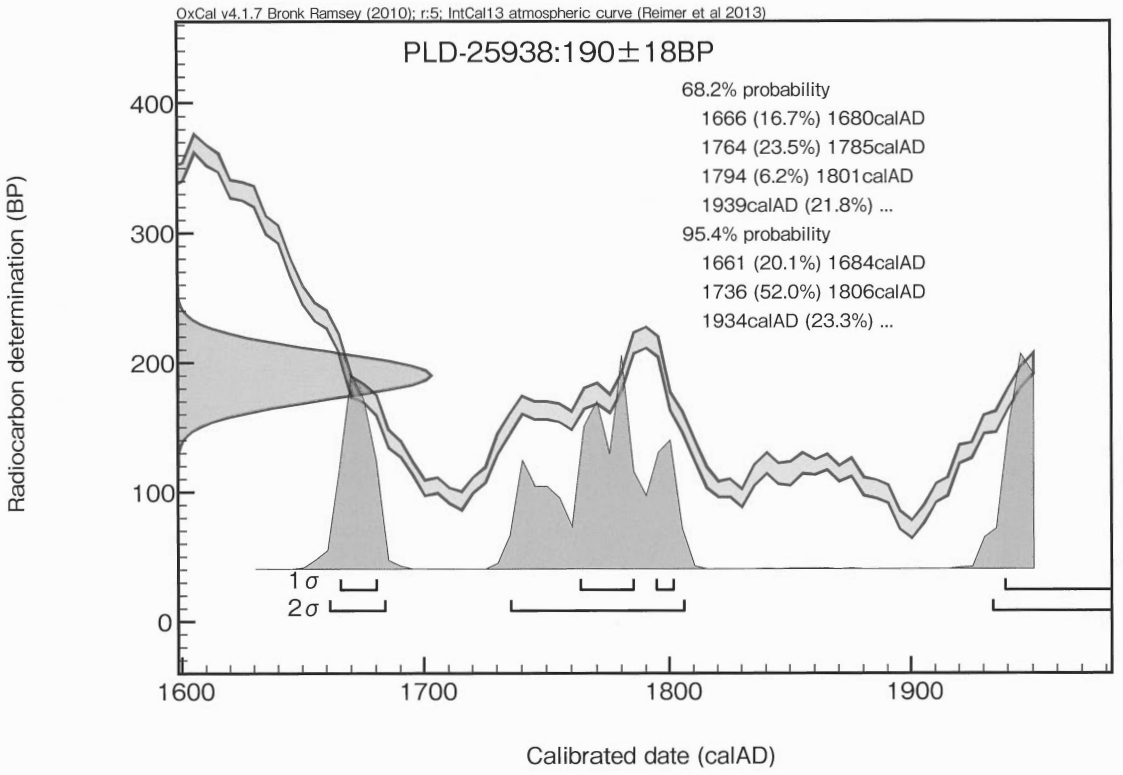
2試料とも江戸時代前期から近現代の暦年代に相当し、発掘調査時の所見とも矛盾しない。しかし、較正曲線が平坦な範囲にあたるため、これ以上の暦年代の絞り込みは行えなかった。較正曲線が平坦な年代域で暦年代を絞り込むためには、数十年以上の年輪を有する材を用いてウィグルマッチングを行うのが有効である。

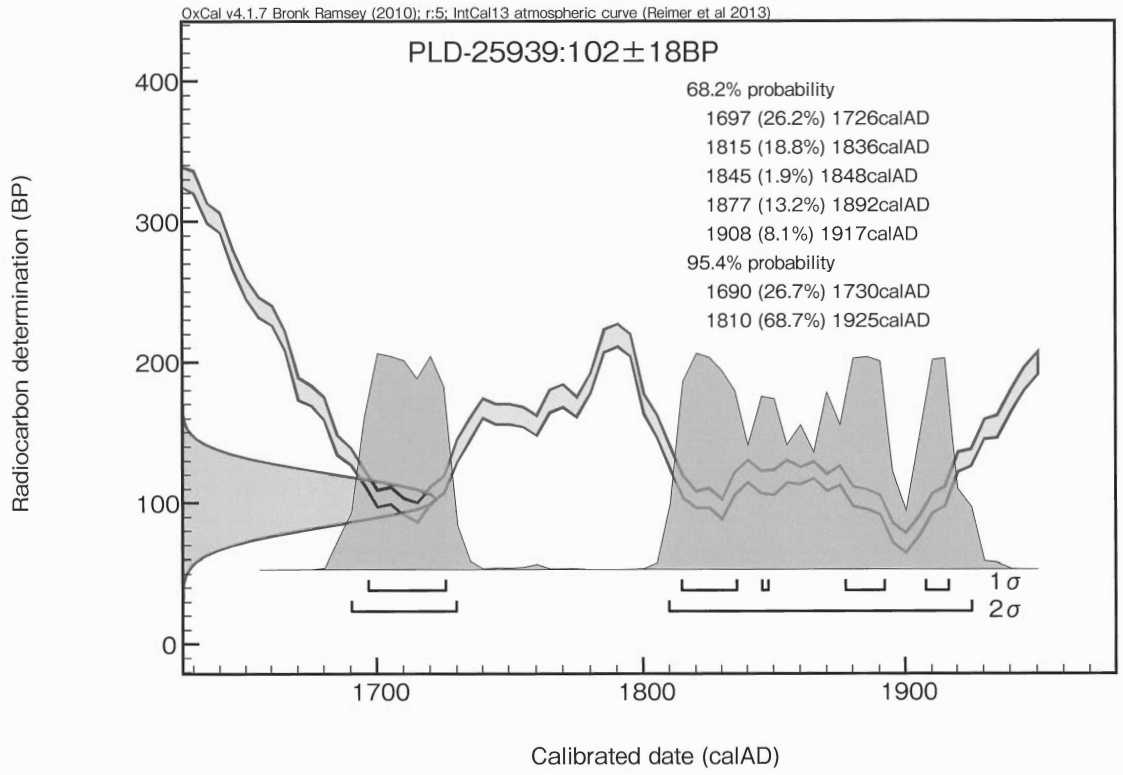
引用文献・参考文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3-20，日本第四紀学会.

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.


OxCal v4.1.7 Bronk Ramsey (2010); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)
PLD-25938:190±18BP
68.2% probability
1666 (16.7%) 1680calAD
1764 (23.5%) 1785calAD
1794 (6.2%) 1801calAD
1939calAD (21.8%) ...
95.4% probability
1661 (20.1%) 1684calAD
1736 (52.0%) 1806calAD
1934calAD (23.3%) ...
1σ
2σ
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)


OxCal v4.1.7 Bronk Ramsey (2010); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)
PLD-25939:102±18BP
68.2% probability
1697 (26.2%) 1726calAD
1815 (18.8%) 1836calAD
1845 (1.9%) 1848calAD
1877 (13.2%) 1892calAD
1908 (8.1%) 1917calAD
95.4% probability
1690 (26.7%) 1730calAD
1810 (68.7%) 1925calAD
1σ
2σ
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)

第65図　暦年較正結果

第３節　樹種同定・炭化樹種同定

黒沼　保子（株式会社パレオ・ラボ）

１．試料と方法

試料は、溝ＳＤ01、井戸ＳＥ02・04・05、元井戸の廃棄土坑ＳＫ05・07・11、包含層から出土した木製品と炭化材である。

木製品は、木取りを確認した後、剃刀を用いて３断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察および同定し、写真撮影を行った。

炭化材は、目視と実体顕微鏡を用いて、木取りの確認と径および年輪数の計測を行った。その後、カミソリまたは手で３断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出したが、硬い試料は金槌で割って破断面を出した。直径１cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定し、イオンスパッタで金コーティングを施した後、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製　VE-9800）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

２．結果

木製品は、針葉樹のマツ属複維管束亜属とツガ属、スギ、ヒノキ、イヌガヤの５分類群、広葉樹はクリとブナ属、ミズキ、トチノキ、モチノキ属の５分類群の、合計10分類群が確認された。

木製品の結果一覧を第23表に示す。部材はマツ属複維管束亜属であった。木錘はツガ属であった。刃物柄と桶側板、底板、箱、箸、栓、鍬形木製品はスギであった。刷毛と刳下駄、膳、脚、敷居端材、用途不明の製品はヒノキであった。連歯下駄はイヌガヤであった。広葉樹では、楔はクリであった。露卯下駄の台はミズキ、歯はブナ属であった。椀はブナ属とトチノキであった。数珠はモチノキ属であった。

炭化材は、広葉樹のクマシデ属クマシデ節（以下クマシデ節と呼ぶ）とクリ、コナラ属コナラ節（以下コナラ節と呼ぶ）、シキミ、フサザクラ、カエデ属、ツツジ属の７分類群が確認された。

炭化材の結果一覧を第24表に示す。ＳＤ01ではクリとクマシデ節、ＳＥ02ではシキミとフサザクラ、コナラ節、ＳＫ05ではカエデ属とブナ属、ＳＫ11ではコナラ節とツツジ属が確認された。また、木取りはクリとシキミ、ツツジ属が芯持丸木、クマシデ節とフサザクラ、ブナ属は割材？であった。コナラ節はみかん割りと破片、カエデ属は半割とみかん割りがみられた。芯持丸木および半割は直径４cm以下であり、みかん割り材や割材の残存径は３cm以下であった。

以下に、木製品と炭化材について同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真と走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

（１）マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　第66図　1c（部材）

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹であるが、製品を壊する危険があるため、横断面と接線断面は採取していない。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、靱性は大である。

（２）ツガ属　*Tsuga*　マツ科　第66図　2b-2c（木錘）

仮道管、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹であるが、製品を壊する危険があるため、横断面は

採取していない。放射組織の上下に放射仮道管があり、有縁壁孔対によって確認することができる。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で１分野に２～４個存在する。

ツガ属は暖帯から福島県以南の温帯に生育する常緑高木で、ツガとコメツガがある。材はやや強い程度で耐朽性・保存性は中庸、割裂および乾燥は容易である。

（３）スギ　*Cryptomeria japonica*（L.f.）D.Don　スギ科　第66図　3a-3c（箸380）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、１分野に通常２個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

（４）ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa*（Siebold et Zucc.）Endl.　ヒノキ科　第66図　4a-4c（刳下駄）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、１分野に２個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性および耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

（５）イヌガヤ　*Cephalotaxus harringtonia*（Knight ex Forbes）K. Koch　イヌガヤ科　第66図　5b-5c（連歯下駄）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹であるが、製品を壊する危険があるため、横断面は採取していない。仮道管は薄壁で、晩材部の幅は非常に狭い。樹脂細胞は早材・晩材を通じて均等に分布する。放射組織は単列で２～５細胞高、分野壁孔はトウヒ型で１分野に１～２個存在する。仮道管にらせん肥厚がある。

	工具			紡織具	服飾具(下駄)				容器						食事具		調度	建築材		部材	その他				
分類群	楔	刷毛	刃物柄	木槌	連歯下駄	露卯下駄歯	露卯下駄台	刳下駄	桶側板	底板	箱	膳	椀	箸	脚	栓	敷居端材	部材	鍬形木製品	数珠	用途不明	炭化材	計
マツ属複維管束亜属																		1				1	1
ツガ属				1																			1
スギ			1						1	1	1			2		1			1				8
ヒノキ		1						1				1			1		1				2		7
イヌガヤ					1																		1
クマシデ属クマシデ節																						1	1
クリ	1																					1	2
ブナ属						1							3									1	5
コナラ属コナラ節																						2	2
シキミ																						1	1
フサザクラ																						1	1
カエデ属																						2	2
トチノキ													1										1
モチノキ属																				1			1
ミズキ							1																1
ツツジ属																						1	1
計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	2	10	36

第22表　器種別の樹種構成

イヌガヤは岩手県以南の暖帯から温帯に生育する常緑の低木または小高木である。材は堅硬および緻密である。

（6）クマシデ属クマシデ節　*Carpinus* sect. *Distegocarpus*　カバノキ科　第66図　6a-6c（炭化材2）

やや小型から中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。道管の穿孔は10段程度の階段状である。軸方向柔組織は晩材部で1列幅の接線状となる。放射組織は同性で、1～3列幅、集合放射組織がみられる。

クマシデ節は本州・四国・九州・朝鮮などの温帯から暖帯に分布する落葉中高木で、クマシデとサワシバがある。材は重硬で靱性があり、割裂しにくい。

（7）クリ　*Castanea crenata* Siebold et Zucc.　ブナ科　第66・67図　7a-7c（楔）

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で主に単列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

（8）ブナ属　*Fagus*　ブナ科　第67図　8a-8c（露卯下駄：歯）

小型で単独の道管が密に分布し、晩材部ではやや径を減ずる散孔材である。道管の穿孔は単一のものと階段状の2種類がある。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、2～数列のもの、広放射組織の3種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は、堅硬および緻密で、靱性があるが保存性は低い。

（9）コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　第67図　9a-9c（炭化材5）

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

（10）シキミ　*Illicium religiosum* Siebold et Zucc.　シキミ科　第67図　10a-10c（炭化材3）

小型で角張った道管がほぼ単独で分布する散孔材で、年輪のはじめに道管が1列に配列する傾向がある。道管の穿孔は40段以上の階段状である。放射組織は1～3列幅で異性である。

シキミは暖帯に分布する常緑の小高木もしくは低木である。材はやや重硬で、粘り気がある。

（11）フサザクラ　*Euptelea polyandra* Siebold et Zucc.　フサザクラ科　第67図　11a-11c（炭化材4）

小型の道管がほぼ単独で密に分布する散孔材で、晩材部でやや小型化する。道管の穿孔は40段以上の階段状である。放射組織は6～10列幅程度の異性で、細胞高は1㎜以上ある。

フサザクラは温帯から暖帯上部に分布する落葉高木である。谷筋に多く生育し、痩せ地にもよく生える。樹皮はサクラに似る。材はやや重硬で割れにくいが脆い。

（12）カエデ属　*Acer*　カエデ科　第67図　12a-12c（炭化材6）

径が中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。横断面において木部繊維の壁厚の違いによる雲紋状の模様がみられる。道管の穿孔は単一で、道管壁にはらせん肥厚

がみられる。放射組織はほぼ同性で、１～５列幅である。

カエデ属は主に温帯に分布する落葉高木で、オオモミジやハウチワカエデ、イタヤカエデなど26種ある。材は全体的に緻密で靱性がある。

（13）トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　トチノキ科　第68図　13a-13c（椀362）

やや小型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列で、すべて平伏細胞で構成される同性である。接線断面において放射組織は層界状に配列する。

トチノキは温帯から暖帯に分布する落葉高木で、やや湿り気のある肥沃な土地の深い谷間や中腹の緩傾斜地によく生育する。材は柔らかく緻密であるが、保存性は低い。

（14）モチノキ属　*Ilex*　モチノキ科　第68図　14a-14c（数珠）

小型の道管が放射方向に数個複合して分布する散孔材である。道管の穿孔は20～40段程度の階段状である。放射組織は１～４列幅で、異性である。

モチノキ属は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木または低木である。日本には23種があるが、大きく常緑性のモチノキ亜属と落葉性のウメモドキ亜属に分けられる。材は、全体的に重硬および強靱である。

（15）ミズキ　*Swida controversa*（Hemsl. ex Prain）Soják　ミズキ科　第68図　15a-15c（露卯下駄：台）

小型の道管が、単独もしくは数個複合して分布する散孔材である。道管の穿孔は20段程度の階段状である。放射組織は縁辺部に方形もしくは直立細胞が２～４程度ある異性で、細胞幅は５列程度である。

ミズキは落葉中高木で、亜寒帯から温帯に広く分布する。材はやや硬いが、加工は比較的容易である。

（16）ツツジ属　*Rhododendron*　ツツジ科　第68図　16a-16c（炭化材10）

小型で角張った道管が、ほぼ単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は20段程度の階段状である。道管相互壁孔は階段状となる。放射組織は単列と５～10列幅の２種類からなる異性で、単列部は接線断面においてレンズ状を呈する。

ツツジ属は熱帯から寒帯まで幅広く分布し、樹形も低木から高木まである常緑もしくは落葉の広葉樹である。ツツジ亜属やシャクナゲ亜属などを含む約50種がある。

３．考察

器種別の樹種構成を第22表に示す。木製品では、漆器と下駄、楔、数珠は広葉樹であったが、それ以外はすべて針葉樹であり、スギとヒノキが多く確認された。

刃物柄と桶側板、底板、箱、箸、栓、鍬形木製品はスギ、刷毛と刳下駄、膳、脚、敷居端材、用途不明の製品はヒノキであった。スギとヒノキは軽軟な材であり、木理直通で加工が容易である〔平井1996〕。桶側板や底板、箱などの容器では比較的スギが多く、刷毛や下駄、台の脚など器具材には比較的ヒノキが多く利用されている。

部材はマツ属複維管束亜属、ツガ属は木錘で確認された。マツ属複維管束亜属とツガ属は、針葉樹の中では比較的重厚な部類である。また、楔で確認された広葉樹のクリも重硬な材である。

下駄は、中世以降は全国的に多様な樹種が用いられる傾向があり、北陸地方でもスギやモクレン属、ブナ属などが比較的多くみられるが、多様な樹種が確認されている〔伊東・山田2012〕。今回の同定

では、刳り下駄はヒノキ、連歯下駄はイヌガヤ、露卯下駄の台はミズキ、歯はブナ属であった。イヌガヤは比較的重硬な材で、東京都の溜池遺跡でも確認されているが〔伊東・山田2012〕、小高木もしくは低木の樹木が多いため、弓や器具材など小型の製品以外ではあまり利用されない〔平井1996〕。

椀はブナ属が３点とトチノキが１点であった。漆器の木地には、全国的にブナ属とケヤキ、トチノキを多用する傾向があるが、中世以降の北陸地方ではブナ属が50％を超える〔久田2012〕。今回の分析でも漆器椀にはブナ属が多く、周辺地域の木材利用傾向と一致する。

数珠はモチノキ属であった。直径３㎜程の円形に削り出してあり、中央に孔があいている。数珠は、東京都の崇源寺・正見寺跡や三重県の桑名城下町遺跡、福岡県の宗玄寺跡などで出土例があり、モチノキ属やサクラ属が比較的多く利用されるが、他にもナシ亜科やハンノキ属、カキノキ属など様々な樹種が確認されている〔伊東・山田2012〕。樹種は多様だが散孔材が多い傾向がみられ、道管が小径で均質な散孔材が選択的に利用されたと推測される。

木製品全体では、スギやヒノキを主とした針葉樹が多いものの、器種によって用材傾向が異なる結果が得られ、用途に応じて樹種を選択利用していたと考えられる。北陸地方はスギ文化圏と呼ばれ〔鈴木2002〕、多用途でスギが多く利用される傾向があるが、戦国時代以降は城下町でヒノキ科の利用が増加する傾向が確認されている〔久田2012〕。本遺跡もスギとヒノキがほぼ同数であり、周辺地域の木材利用傾向と一致する。

炭化材はすべて広葉樹で、コナラ節とカエデ属は２点ずつ確認されたが、それ以外のクマシデ節、クリ、ブナ属、シキミ、フサザクラ、ツツジ属は各１点であった。炭化材で確認された樹種はすべて重硬な材であり、ツツジ属以外は素手では割れないほど硬く焼かれていた。用途は不明であるが、直径や残存径が小さいため燃料材の可能性が考えられる。なお、クリとブナ属は、木製品と炭化材の両方でみられたが、それ以外の樹種では共通する樹種はみられなかった。

引用文献

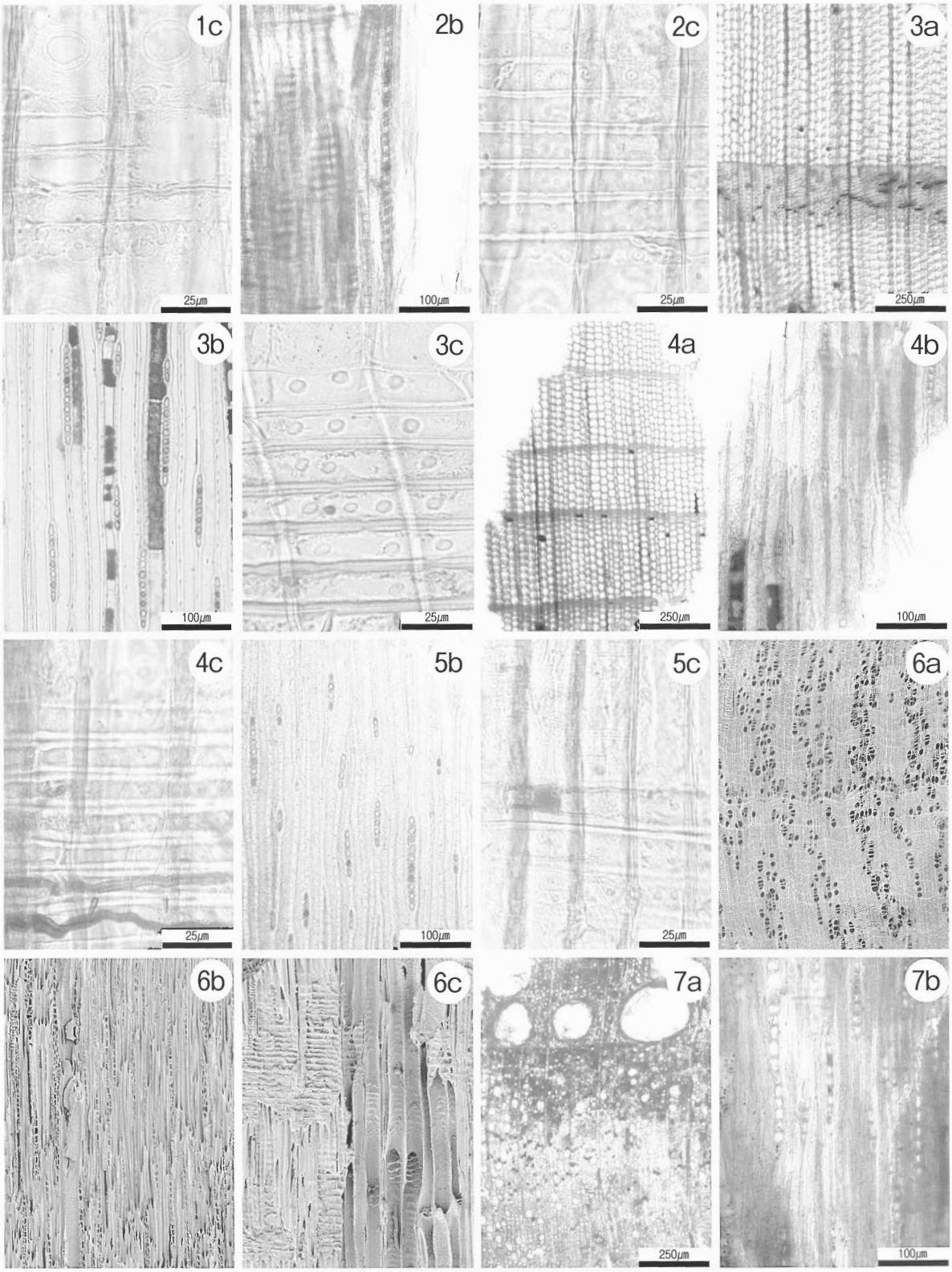
平井信二（1996）木の大百科．394p，朝倉書店．
久田正弘（2012）中部日本海側－福井県・石川県・富山県・新潟県－．伊東隆夫・山田昌久編「木の考古学－出土木製品用材データベース－」；210-223，海青社．
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－．449p，海青社．
鈴木三男（2002）日本人と木の文化．255p，八坂書房．

番号	遺構名	遺構の種別	器　種	樹　種	木取り	時　期
448	ＳＤ01	溝	楔	クリ	角材	18世紀
404	ＳＤ01	溝	桶側板	スギ	板目	18世紀
375	ＳＤ01	溝	箸	スギ	芯無削出	18世紀
468	ＳＤ01	溝	用途不明	ヒノキ	追柾目	18世紀
356	ＳＤ01	溝	椀	ブナ属	横木取り	18世紀
464	ＳＤ01	溝	部材	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	18世紀
413	ＳＥ02	井戸	連歯下駄	イヌガヤ	板目	18世紀
384	ＳＥ02	井戸	刷毛	ヒノキ	追柾目	18世紀
362	ＳＥ04	井戸	椀	トチノキ	横木取り	19世紀
365	ＳＥ05	井戸	底板	スギ	板目	19世紀以降
388	ＳＥ05	井戸	木錘	ツガ属	芯無削出	19世紀以降
416	ＳＥ05	井戸	刳下駄	ヒノキ	板目	19世紀以降
483	ＳＥ05	井戸	用途不明	ヒノキ	芯無削出	19世紀以降
361	ＳＥ05	井戸	椀	ブナ属	横木取り	19世紀以降
412	ＳＫ05	廃棄土坑（元井戸）	箱	スギ	追柾目	18世紀
380	ＳＫ05	廃棄土坑（元井戸）	箸	スギ	芯無削出	18世紀
430	ＳＫ05	廃棄土坑（元井戸）	鍬形木製品	スギ	板目	18世紀
410	ＳＫ05	廃棄土坑（元井戸）	栓	スギ	芯無削出	18世紀
390	ＳＫ05	廃棄土坑（元井戸）	刃物柄	スギ	芯無削出	18世紀
371	ＳＫ05	廃棄土坑（元井戸）	脚	ヒノキ	削出	18世紀
457	ＳＫ05	廃棄土坑（元井戸）	敷居端材	ヒノキ	角材	18世紀
366	ＳＫ07	廃棄土坑（元井戸）	膳	ヒノキ	追柾目	19～20世紀
359	ＳＫ07	廃棄土坑（元井戸）	椀	ブナ属	横木取り	19～20世紀
431	ＳＫ11	廃棄土坑（元井戸）	数珠	モチノキ属	削出	18～19世紀
417	包含層	江戸～近代の堆積層	露卯下駄（歯）	ブナ属	板目	18～20世紀
417	包含層	江戸～近代の堆積層	露卯下駄（台）	ミズキ	板目	18～20世紀

第23表　木製品の樹種同定結果

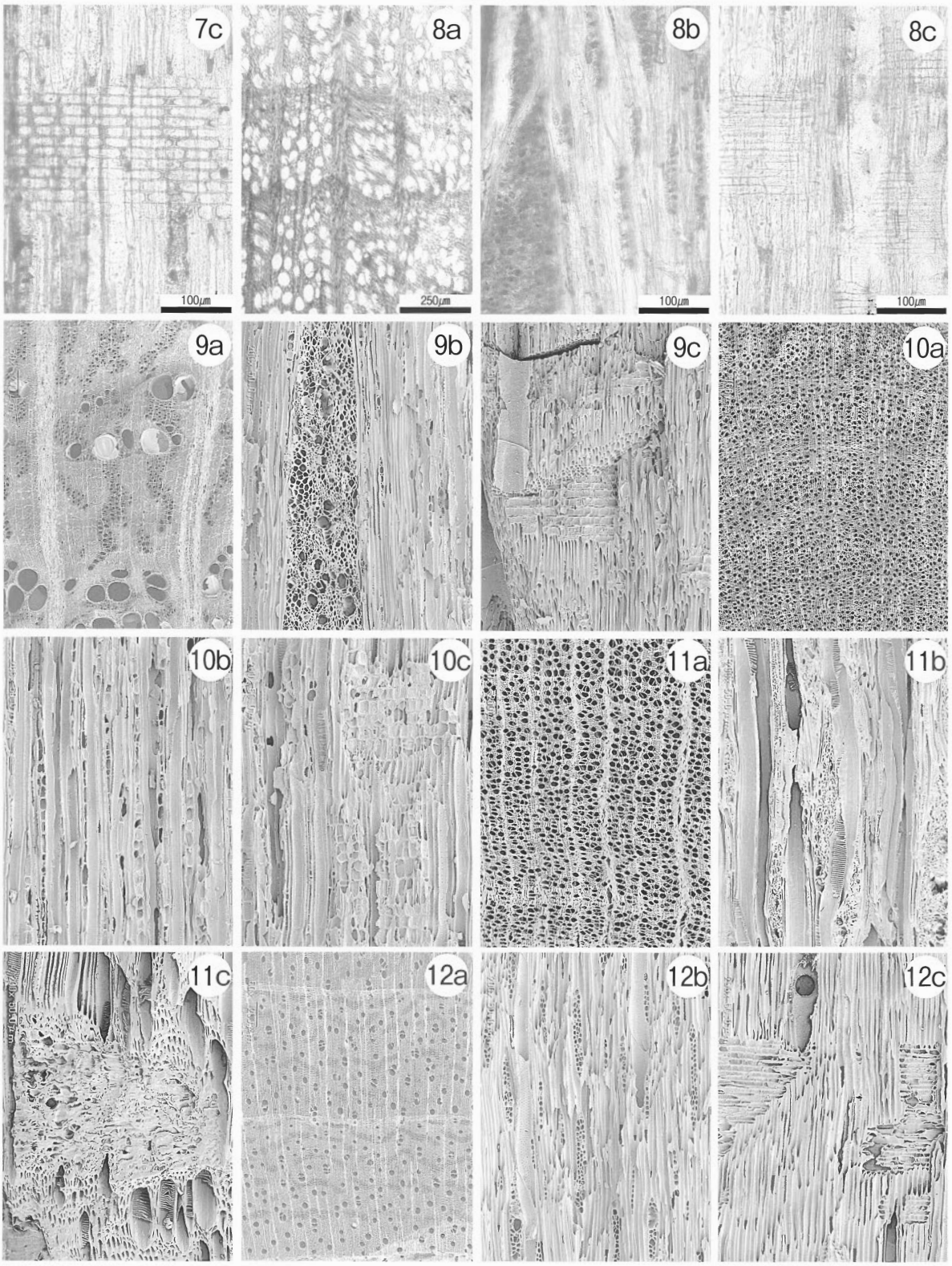
番号	No.	樹種	形状	残存径	年輪数	時期
ＳＤ01	炭化材１	クリ	芯持丸木	直径0.9cm	２年輪	18世紀
ＳＤ01	炭化材２	クマシデ属クマシデ節	みかん割り	1.6×1.2cm	不明（10年輪以上）	18世紀
ＳＥ02	炭化材３	シキミ	芯持丸木	直径1.5cm	10年輪	18世紀
ＳＥ02	炭化材４	フサザクラ	みかん割り	2.6×1.7cm	30年輪？	18世紀
ＳＥ02	炭化材５	コナラ属コナラ節	みかん割り	2.5×1.7cm	17年輪	18世紀
ＳＫ05	炭化材６	カエデ属	半割	直径3.7cm	20年輪	18世紀
ＳＫ05	炭化材７	カエデ属	みかん割り	1.8×1.7cm	15年輪	18世紀
ＳＫ05	炭化材８	ブナ属	割材？	0.8×1.4cm	６年輪	18世紀
ＳＫ11	炭化材９	コナラ属コナラ節	破片	1.0×1.0cm	４年輪	18～19世紀
ＳＫ11	炭化材10	ツツジ属	芯持丸木	直径0.4cm	４年輪	18～19世紀

第24表　炭化材の樹種同定結果



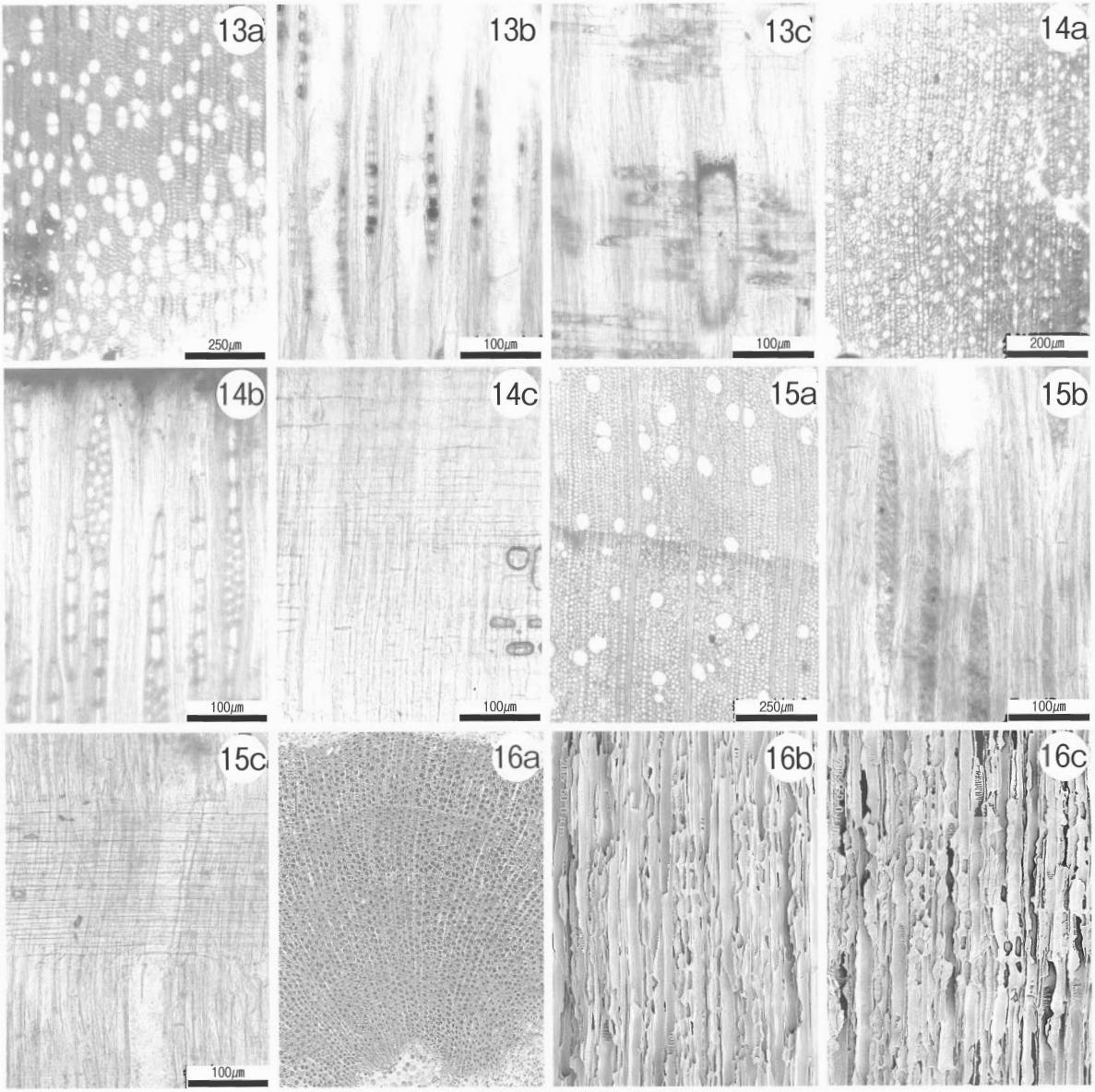
1c.マツ属福維管束亜属（部材）、2b-2c.ツガ属（木錘）、3a-3c.スギ（箸380）、4a-4c.ヒノキ（刳下駄）、5b-5c.イヌガヤ（連歯下駄）
6a-6c.クマシデ属クマシデ節（炭化材２）、7a-7b.クリ（楔）
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第66図　木製品および炭化材の顕微鏡写真〔１〕



7c.クリ（楔）、8a-8c.ブナ属（露卯下駄：歯）、9a-9c.コナラ属コナラ節（炭化材５）、10a-10c.シキミ（炭化材３）
11a-11c.フサザクラ（炭化材４）、12a-12c.カエデ属（炭化材６）
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第67図　木製品および炭化材の顕微鏡写真〔２〕



13a-13c.トチノキ（椀362）、14a-14c.モチノキ属（数珠）、15a-15c.ミズキ（露卯下駄：台）、16a-16c.ツツジ属（炭化材10）
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第68図　木製品および炭化材の顕微鏡写真〔3〕

第４節　漆器の塗膜分析

竹原　弘展・藤根　　久・米田　恭子（株式会社パレオ・ラボ）

１．試料と方法

分析対象は、18～20世紀の漆器椀４点と膳の一部と思われる漆器１点の計５点である（第25表）。塗膜片を少量採取し、分析試料とした。なお、椀本体の樹種および木取りについての詳細は、樹種同定の項を参照されたい。

分析は、表面の漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察、およびＸ線分析を行った。

赤外分光分析は、表面部分から一部削り取った試料を、押し潰して厚さ１㎜程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約７トンで加圧整形し、測定試料とした。分析装置は日本分光（株）製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計FT/IR-410、IRT-30-16を使用し、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム（＃2000）を用いて厚さ約50㎛前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-5900LV）による反射電子像観察を行った。さらに、主に赤色塗膜層を対象として、電子顕微鏡に付属するエネルギー分散型Ｘ線分析装置（同JED-2200）による定性・簡易定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム（＃2000）を用いて厚さ約20㎛前後に調整した後、偏光顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

２．結果および考察

以下に、塗膜分析結果について述べる。なお、第69図の赤外吸収スペクトルは、縦軸は透過率（％R）、横軸が波数（Wavenumber（cm^{-1}）；カイザー）である。吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す（第26表）。各塗膜の特徴は第28表にまとめた。

［分析№１（椀（356）内面）］

黒色塗膜層は、木胎a層、炭粉からなる下地b層、透明漆層c1層で構成されていた。これに文様部は赤色漆層c2層が加わる（第70図-1a、1b）。赤外分光分析では、生漆のウルシオールの吸収（第70図-1の生漆吸収№７と№８）が確認され、漆と同定された。赤色漆層c2層からは、Ｘ線分析で水銀（HgO）、硫黄（SO_3）が検出され（第27表）、水銀朱の使用が確認された。

掲載№	分析№	遺構	遺構種別	器種	木取り	特　　徴	時　代	樹　種	塗膜分析面
356	1	ＳＤ01	溝	椀	横木取り	外：黒、内：黒に赤で文様、塗膜薄い	18世紀	ブナ属	内面
362	2	ＳＥ04	井戸	椀	横木取り	内外：黒、光沢有り、塗膜厚い	19世紀	トチノキ	外面
361	3	ＳＥ05	井戸	椀	横木取り	内外：赤、光沢少し有り	19世紀以降	ブナ属	外面
359	4	ＳＫ07	廃棄土坑（元井戸）	椀	横木取り	外：黒に赤で文様、光沢有り 内：赤、光沢無い	19～20世紀	ブナ属	両面
366	5	ＳＫ07	廃棄土坑（元井戸）	膳	追柾目	片面：黒、光沢やや無い 裏面：赤、塗膜薄い、光沢やや無い	19～20世紀	ヒノキ	両面

第25表　分析対象一覧

［分析№２（椀（362）内面）］

黒色塗膜層は、木胎a層、下地b1～b4層、透明漆層c層で構成されていた（第70図-2a、2b）。赤外分光分析では、生漆のウルシオールの吸収（第70図-2の生漆吸収№７と№８）が確認され、漆と同定された。下地b層は、Ｘ線分析でケイ素（SiO_2）、アルミニウム（Al_2O_3）等が検出されており（第27表）、土が使用されていたと判断される。下地は、最下層のb1層では粗粒を含むが、上層になるにつれて粗粒がなくなり、きめの細かい土が使用される傾向がみられた。

吸収№	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

第26表　生漆の赤外吸収位置とその強度

［分析№３（椀（361）外面）］

赤色塗膜層は、木胎a層、炭粉からなる下地b層、赤色漆層c層で構成されていた（第70図-3a、3b）。赤外分光分析では、生漆のウルシオールの吸収（第70図-3の生漆吸収№７）が確認され、漆と同定された。赤色漆層c層からは、Ｘ線分析で鉄（Fe_2O_3）が検出され（第27表）、ベンガラが使用されていると考えられる。

［分析№４（椀（359）外面、内面）］

外面の黒色塗膜層は、木胎a層、炭粉からなる下地b層、透明漆層c1層で構成されていた。これに文様部は赤色漆層c2層が加わる（第70図-4a、4b）。赤外分光分析では、生漆のウルシオールの吸収（第70図-4の生漆吸収№７）が確認され、漆と同定された。赤色漆層c2層からは、Ｘ線分析で鉄（Fe_2O_3）が検出され（第27表）、ベンガラが使用されていると考えられる。

内面の赤色塗膜層は、木胎a層、炭粉からなる下地b層、赤色漆層c層で構成されていた（第71図-1a、1b）。赤外分光分析では、生漆のウルシオールの吸収（第71図-4の生漆吸収№７）が確認され、漆と同定された。赤色漆層c層からは、Ｘ線分析で鉄（Fe_2O_3）が検出され（第27表）、ベンガラが使用されていると考えられる。

［分析№５（膳（366）黒色面、赤色面）］

黒色塗膜層は、木胎a層、透明漆層c1層、c2層で構成されていた。下地にあたる層は観察されず、c1層の透明漆が直接塗布されていると考えられる。（第71図-2a、2b）。赤外分光分析では、生漆のウルシオールの吸収（第71図-5の生漆吸収№７）が確認され、漆と同定された。

赤色塗膜層は、木胎a層、透明漆層c1層、赤色漆層c2層で構成されていた。裏面の黒色塗膜層と同様に、下地にあたる層は観察されなかった（第71図-3a、3b）。赤外分光分析では、生漆の吸収は明瞭ではないが、炭化水素に由来する吸収（第71図-5の生漆吸収№１および№２）が確認されることから、漆の可能性が高い。赤色漆層c2層からは、Ｘ線分析で鉄（Fe_2O_3）が検出され（第27表）、ベンガラが使用されていると考えられる。

３．おわりに

富山城下町遺跡主要部から出土した漆器について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、分析№１、№４外面の黒色塗膜は、炭粉下地に透明漆層が観察され、その上の文様部からは分析№１は水銀朱の、分析№４はベンガラの赤色漆層が観察された。分析№３、№４内面の赤色塗膜は、炭粉下地にベンガラの入った赤色漆層が観察された。分析№２の黒色塗膜は、土の下地を４層塗り重ね、透明漆が１層塗られていた。分析№５は、両面とも下地が観察されず、透明漆を１層

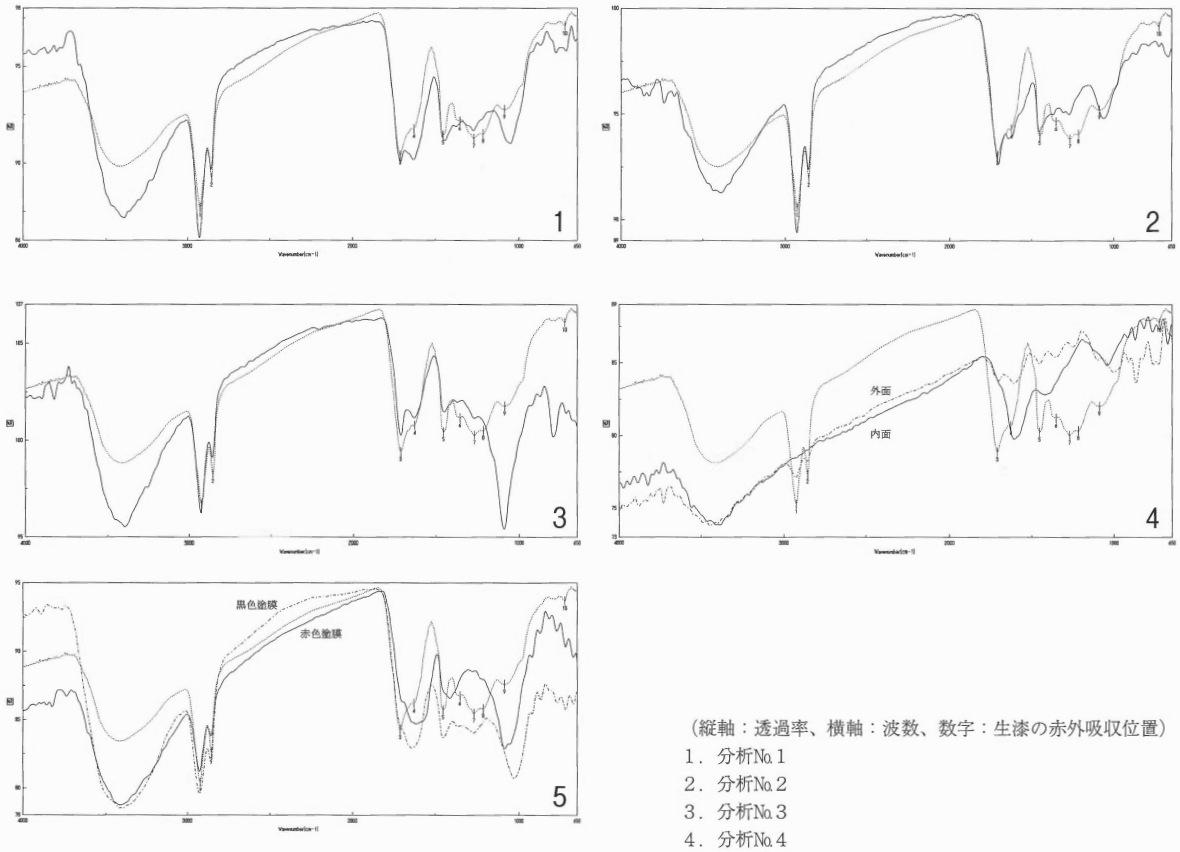
塗った後、黒色塗膜はさらに透明漆を１層、赤色塗膜はベンガラの入った赤色漆が１層塗られていた。

分析No.		塗膜層	C	Al_2O3	SiO_2	SO_3	K_2O	CaO	Fe_2O_3	HgO	total
1		c2層	59.19	—	1.77	8.31	—	—	14.5	16.2	99.99
2		b層	48.99	3.56	43.79	—	0.65	—	3.0	—	100.00
3		c層	55.44	—	16.96	—	—	—	27.6	—	100.01
4	外面	c2層	49.50	—	1.35	—	—	1.54	47.6	—	100.00
	内面	c層	40.86	—	1.59	—	—	0.65	56.9	—	100.00
5	赤	c2層	42.66	—	12.19	—	—	—	45.1	—	99.99

第27表　赤色塗膜層等のX線分析結果（mass%）

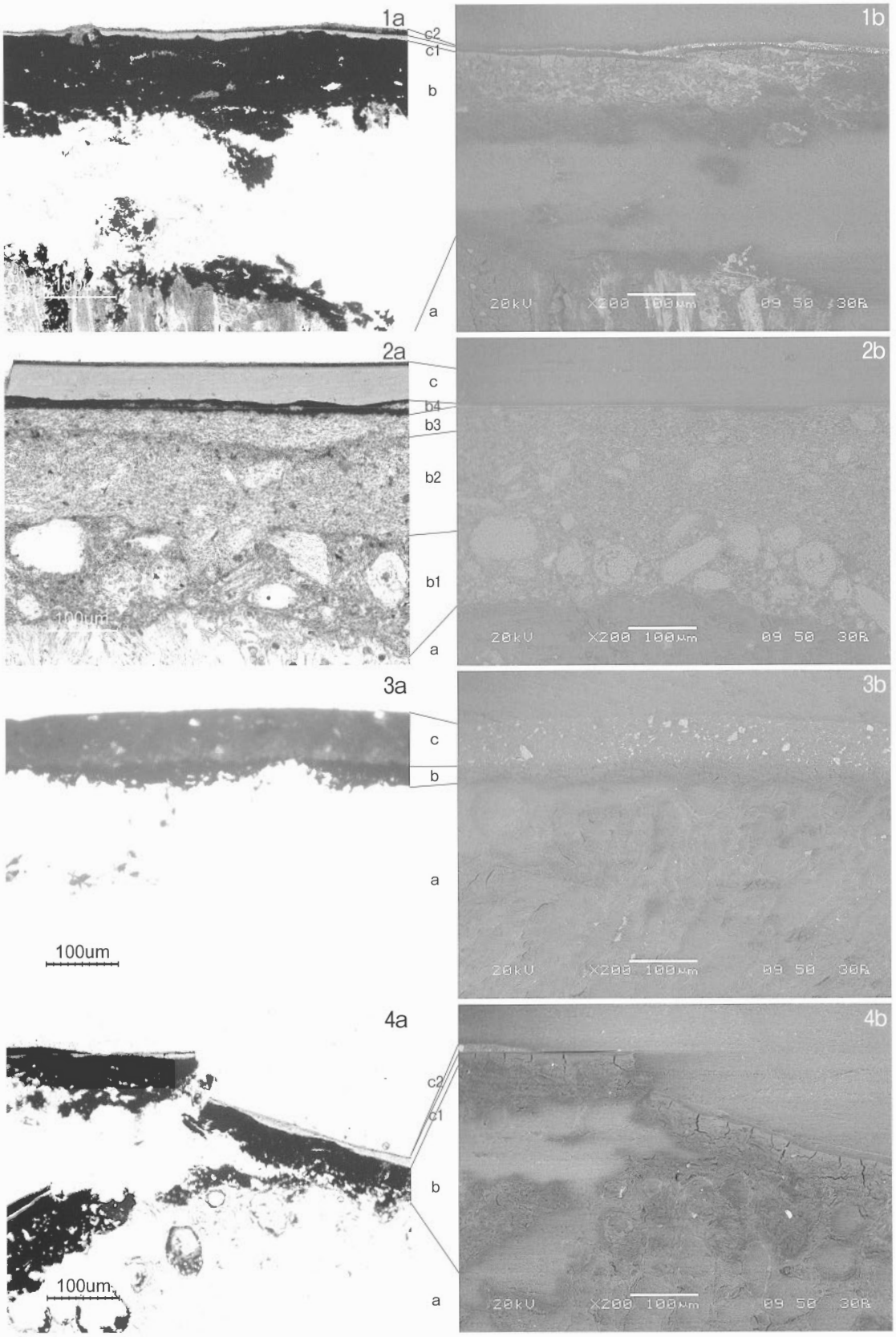
分析No.	採取塗膜	下地	塗膜層	
1	内面黒色塗膜＋赤文様	炭粉	２層	透明漆層、赤色漆層（水銀朱）
2	内面黒色塗膜	土４層	１層	透明漆層
3	外面赤色塗膜	炭粉	１層	赤色漆層（ベンガラ）
4	外面黒色塗膜＋赤文様	炭粉	２層	透明漆層、赤色漆層（ベンガラ）
	内面赤色塗膜	炭粉	１層	赤色漆層（ベンガラ）
5	黒色塗膜	—	２層	透明漆層２層
	赤色塗膜	—	２層	透明漆層、赤色漆層（ベンガラ）

第28表　塗膜分析結果



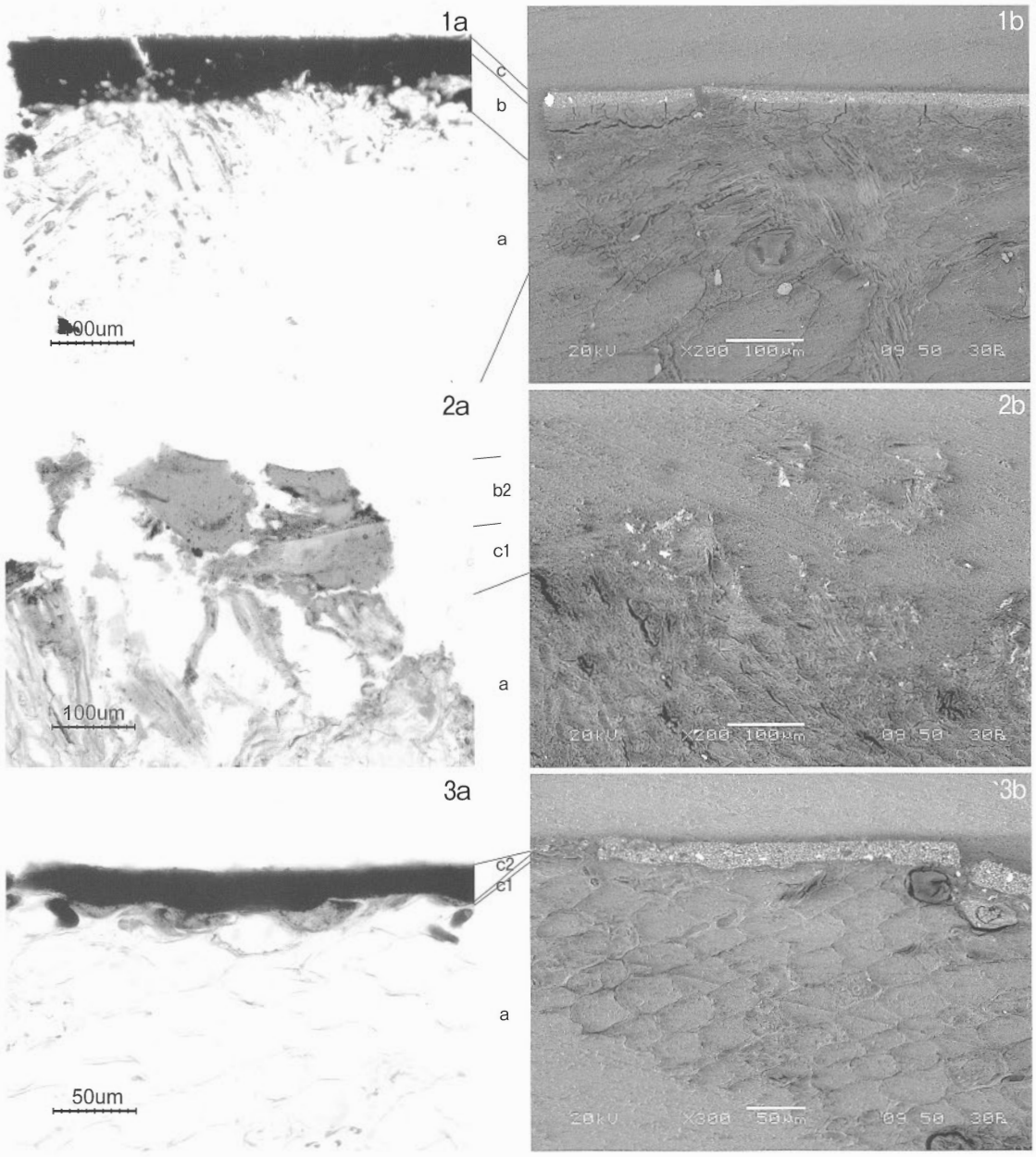
（縦軸：透過率、横軸：波数、数字：生漆の赤外吸収位置）
1．分析No.１
2．分析No.２
3．分析No.３
4．分析No.４
5．分析No.５

第69図　漆器塗膜表面の赤外吸収スペクトル



1．分析No.１椀①内面黒色塗膜＋赤文様　2．分析No.２椀②内面黒色塗膜
3．分析No.３椀③外面赤色塗膜　4．分析No.４椀④外面黒色塗膜＋赤文様

第70図　漆製品の塗膜構造（a）と反射電子像（b）〔１〕



1．分析№４椀④内面赤色塗膜　2．分析№５膳黒色塗膜　3．分析№５膳赤色塗膜

第71図　漆製品の塗膜構造（a）と反射電子像（b）〔２〕

第５節　繊維状遺物同定

小林　和貴・鈴木　三男（東北大学植物園）・株式会社パレオ・ラボ

１．試料と方法

試料は土坑ＳＫ05から出土した繊維状遺物である。大量に出土したうちの１本で、特段の加工等は認められなかった。

試料の小部分を観察試料とし、アセトンの上昇系列により脱水した後に、エポキシ樹脂（Agar Scientific社、Low Viscosity Resin）に包埋した。樹脂包埋した試料から回転式ミクロトーム（Microm社、HM350）を用いて横断切片（厚さ10～20㎛）を作成し、トルイジンブルーで染色した後に光学顕微鏡で観察同定した。試料番号は、東北大学植物園のプレパラート番号（TOM-1993）である。

２．結果

同定の結果、ヤシ科のシュロで、葉柄の繊維であった。以下に、観察された形状を記載し、同定の根拠を略記した。

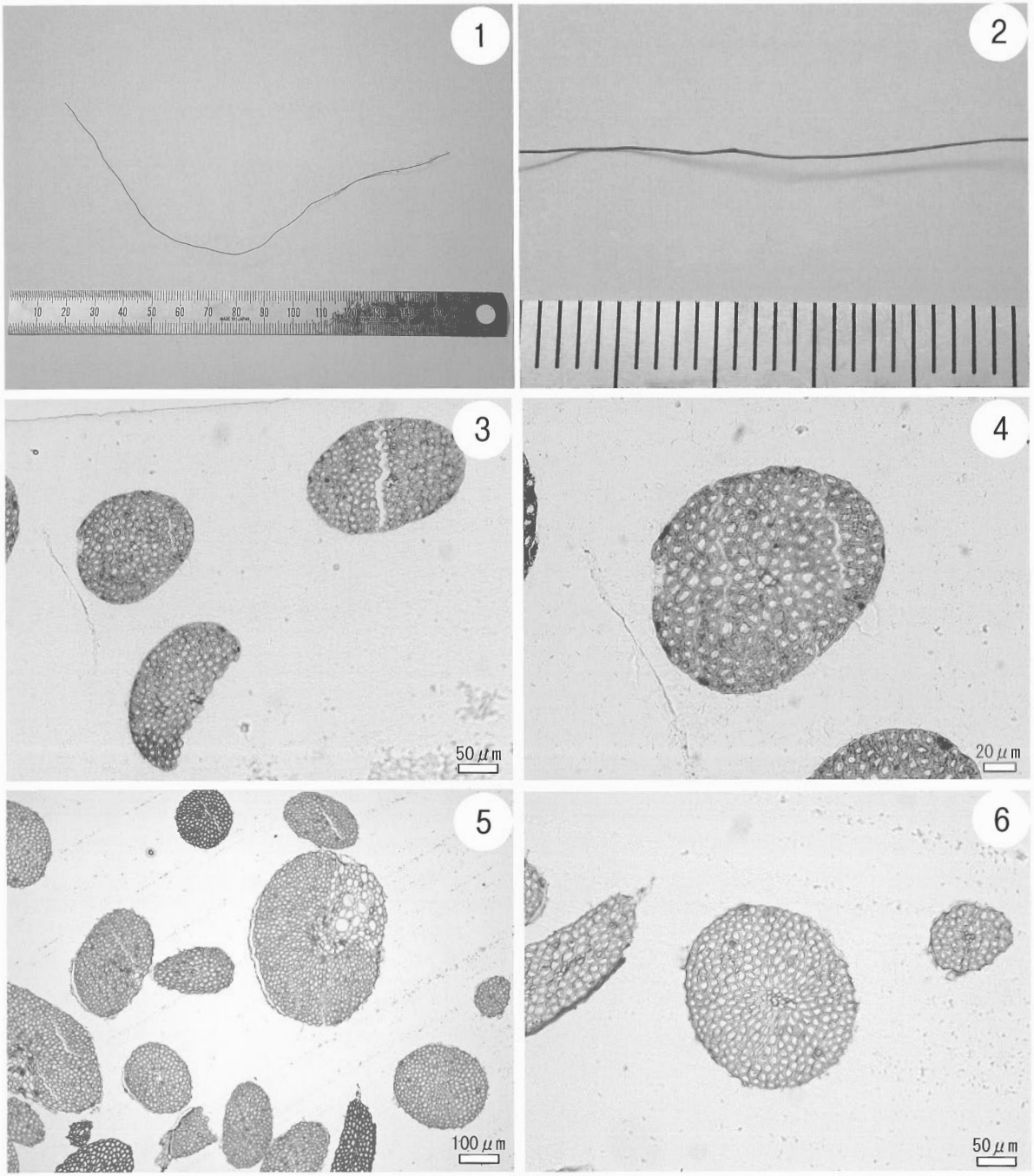
（１）シュロ　*Trachycarpus fortunei*（Hook.）H.Wendl.　ヤシ科　第72図　1-5

（試料番号　TOM-1993）

繊維状遺物の断面は、円形～楕円形で直径は0.3～0.5㎜程度である（第72図-3）。断面を構成している細胞は繊維細胞で、厚壁で細胞間隙なく密集している（第72図-4）。切片を作成した試料中には維管束を持つものはなかった。

第72図-5、6は現生の比較試料で、シュロの葉柄の下部に生ずる繊維（いわゆるシュロ縄の素材）の断面である。断面は円形～楕円形で直径は0.1～1.0㎜程度あり、太いものでは１本の維管束とそれを帽子状に取り囲む大きな繊維細胞束からなり、細いものでは維管束はなく繊維細胞のみからなる。シュロの葉柄の基部に生える繊維は、幹から葉柄に入った維管束の側方に位置するものが葉柄から「飛び出した」もので、これらが網目状になって幹を覆っている。この「飛び出した繊維」の基部では直径が太く、維管束がきちんと認められるが、この繊維の先端の方に行くと次第に直径が小さくなり、維管束がなくなって繊維細胞のみとなる（第72図-6）。遺物の試料はちょうどこの先端に近い部分なので維管束は認められない。

シュロはヤシ科の中で最も北まで分布する種の一つで、九州南部から中国大陸にかけて分布する。いつの時代からか庭園を中心に植栽され、江戸時代にも盛んに植栽されている。自己繁殖が旺盛で、現在では東北地方中部くらいまで分布域が拡大している。繊維はシュロ縄や漉過材などに利用されてきた。



1．試料写真（全体）　2．試料写真（拡大）
3．繊維状遺物（TOM-1993）の横断面　4．繊維状遺物（TOM-1993）の横断面（拡大）
5．現生シュロの繊維の横断面　6．現生シュロの繊維の横断面（拡大）

第72図　富山城下町遺跡主要部出土の繊維状遺物の試料写真および光学顕微鏡写真

第６節　大型植物遺体同定

佐々木由香・Bhandari Sudarshan（株式会社パレオ・ラボ）

１．試料と方法

試料と方法

18世紀から20世紀の遺構から出土した大型植物遺体を同定し、食用などとして利用された植物あるいは遺跡周辺における栽培状況や植生について検討する。

試料は、水洗済みの堆積物試料が11遺構分である。対象とした遺構は、溝であるＳＤ01、井戸であるＳＥ02～05、土坑または廃棄土坑であるＳＫ03～07・11である。考古学的な所見による遺構の時期は、いずれも18世紀から20世紀の範囲内で、各遺構の具体的な時期は第29表に示した。

水洗は、株式会社エイ・テックが行った。水洗量については、水洗した土嚢袋数を第29表に示した。土嚢１袋分の重量は20kg程度である。水洗では、浮遊選別装置（株式会社ユニオンプラスチック製）を使用し、浮遊物フルイ（φ2.0㎜、φ0.425㎜）と内蔵フルイ（φ1.0㎜）で回収された。その後、目視で種実が抽出された。なお、土嚢袋0.1以下とある試料は、遺物に付着していた堆積物から得られたものである。

大型植物遺体の同定は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。計数が難しい分類群については、おおよその産出数を記号（＋）で表記した。試料は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターに保管されている。

２．結果

同定した結果、木本植物では針葉樹のイヌガヤ葉・種子と、アスナロ葉、スギ球果、モミ葉、マツ属球果・葉・種子の５分類群、広葉樹のイチョウ種子と、オニグルミ核、ハンノキ果実、クリ果実・未熟果実、ツブラジイ果実、ブナ殻斗、コナラ未熟殻斗・炭化未熟殻斗・幼果・炭化幼果・炭化子葉、エノキ果実・核、クワ属核、フサザクラ核、アオツヅラフジ核、マタタビ属種子、ヒサカキ属種子、ウメ核、モモ核、アンズ核、スモモ核、サクラ属サクラ節核、バラ属果実、キイチゴ属核、アカメガシワ種子、カラスザンショウ種子、サンショウ果実・種子、センダン核、ムクロジ種子、ブドウ属種子、キブシ種子、ミズキ核、クマノミズキ核、カキノキ種子、カキノキ属種子、クサギ種子、ニワトコ核、ガマズミ属核の34分類群があった。

草本植物では、アサ核と、カラムシ属果実、ソバ果実、ミズヒキ属果実、ヤナギタデ果実、イヌタデ果実、ボントクタデ果実、サナエタデ－オオイヌタデ果実、タデ属果実、ギシギシ属果実、スベリヒユ属種子、ノミノフスマ種子、ウシハコベ種子、ミドリハコベ種子、ヤマゴボウ属種子、アカザ属種子、キンポウゲ属果実、キケマン属Ａ種子、キケマン属Ｂ種子、クサネム果実、ササゲ属アズキ亜属炭化種子、カタバミ属種子、エノキグサ属種子、ノブドウ種子、スミレ属種子、トウガン種子、スイカ種子、メロン仲間種子、ニホンカボチャ果柄・種子、ヒョウタン仲間種子、カラスウリ種子、ヒシ属果実、アリノトウグサ属核、セリ果実、オカトラノオ属種子、キランソウ属果実、シロネ属果実、イヌコウジュ属果実、エゴマ果実、シソ属果実・炭化果実、トウガラシ種子、ナス種子、ナス属種子、ゴマ種子、オミナエシ属果実、タカサブロウ果実、オナモミ総苞、キク科果実、ヘラオモダカ果実、オモダカ属果実、コナギ種子、ツユクサ種子、イボクサ種子、メヒシバ属果実、オヒシバ属種子、ヒエ有ふ果・炭化有ふ果・炭化種子、イネ炭化籾・籾殻・炭化種子、キビ有ふ果、スズメノヒエ属有ふ

果、エノコログサ属有ふ果、オオムギ炭化種子、ミクリ属核、スゲ属A果実、スゲ属B果実、ヒメクグ果実、カヤツリグサ属果実、ウキヤガラ果実、ハリイ属果実、サンカクイ－フトイ果実、ホタルイ属果実の70分類群、シダ植物ではワラビ裂片１分類群の、計110分類群が見いだされた。不明の芽は一括した。科以上に同定する識別点が残存していない一群は同定不能炭化種実とした。大型植物遺体以外には骨片と昆虫遺体がみられた。同定結果を第29・30表に示す。

以下に、産出した主な大型植物遺体について遺構別に記載する（不明芽と同定不能炭化種実、大型植物遺体以外の分類群は除く）。

ＳＤ01：草本主体の組成で、メロン仲間が900点以上と非常に多く、ヒエとイネが少量、ソバとモモ、トウガラシがわずかに得られた他は、産出数が10点未満であった。産出数10点未満の分類群のうち、栽培植物もしくは栽培植物の可能性がある植物は、ウメとアサ、ササゲ属アズキ亜属、エゴマ、ナス、キビ、オオムギである。

木本植物（括弧内は破片数）

遺構名		ＳＤ01	ＳＥ02	ＳＥ03	ＳＥ04	ＳＥ05	ＳＫ03	ＳＫ04	ＳＫ05	ＳＫ06	ＳＫ07	ＳＫ11
遺構の種別		溝	井戸	井戸	井戸	井戸	土坑	土坑	廃棄土坑（旧井戸）	土坑	廃棄土坑（旧井戸）	廃棄土坑（旧井戸）
土嚢袋（個）		4	8	0.1以下	0.1以下	4	2	2	8	3	0.1以下	1
分類群	時期	18C	18C前	19C後～20C	19C	19C	18C～19C	18C～19C	18C	18C	19C～20C	18C～19C
イヌガヤ	葉	(1)				1	(1)			4 (10)		
	種子	(1)				(5)	(4)					(1)
アスナロ	葉											1
スギ	球果		1									
モミ	葉		1 (5)			1	(1)					
マツ属	球果		1									
	葉		2 (1)									
	種子		6									
イチョウ	種子		1 (1)									
オニグルミ	核		2 (11)				(3)		(3)		(1)	(1)
ハンノキ	果実		5						2			
クリ	果実	(1)	(21)			(6)	(2)	(4)	(5)	(218)		(15)
	未熟果実									3 (1)		
ツブラジイ	果実						(1)					
ブナ	殻斗							1				
コナラ	未熟殻斗									6	1	
	炭化未熟殻斗						1					
	幼果	2				1	1	1	1	15		
	炭化幼果									5		
	炭化子葉	(1)										
エノキ	果実		4 (3)									
	核		24 (23)				1					
クワ属	核						8		1			
フサザクラ	核									1		
アオツヅラフジ	核	1										
マタタビ属	種子						2					
ヒサカキ属	種子		1						1	8		1
ウメ	核	1 (1)	43 (22)			2 (12)	10 (5)	1	14 (6)			1 (2)
モモ	核	1 (9)	7 (7)			3 (5)	(11)	(1)	18 (4)	1 (4)	(1)	3 (1)
アンズ	核		20 (3)			2 (1)	(1)		1			
スモモ	核		68 (10)						10 (1)			4 (1)
サクラ属サクラ節	核		(4)			2	2		1 (1)			
バラ属	果実					1						
キイチゴ属	核	1										1
アカメガシワ	種子		1									(1)
カラスザンショウ	種子		1			(1)			(2)			
サンショウ	果実									1		
	種子	9	32 (3)			4 (1)	9 (3)	9	5 (2)	242 (8)		3 (2)
センダン	核						(1)					
ムクロジ	種子		(1)									1
ブドウ属	種子		1							3		4 (2)
キブシ	種子											1
ミズキ	核		3			1	2	1	1			
クマノミズキ	核		7 (2)						2 (2)			
カキノキ	種子		3 (8)			6	5 (3)	3	(3)	1 (2)		(13)
カキノキ属	種子	2 (1)				2	2 (1)		3	5		3
クサギ	種子		1									
ニワトコ	核		3						1			
ガマズミ属	核									1		

土嚢袋１個＝約20kg

第29表　富山城下町遺跡主要部から出土した大型植物遺体〔１〕

草本植物（括弧内は破片数）

分類群		遺構名	SD01	SE02	SE03	SE04	SE05	SK03	SK04	SK05	SK06	SK07	SK11
		遺構の種別	溝	井戸	井戸	井戸	井戸	土坑	土坑	廃棄土坑（旧井戸）	土坑	廃棄土坑（旧井戸）	廃棄土坑（旧井戸）
		土嚢袋（個）	4	8	0.1以下	0.1以下	4	2	2	8	3	0.1以下	1
		時期	18C	18C前	19C後～20C	19C	19C	18C～19C	18C～19C	18C	18C	19C～20C	18C～19C
アサ	核		2				2 (4)	(1)		(3)	9 (8)		
カラムシ属	果実										1		
ソバ	果実		10	1 (1)			11 (8)	6 (3)		5 (6)	14 (5)		
ミズヒキ属	果実										1		
ヤナギタデ	果実		5 (1)				4	17			7		
イヌタデ	果実		4				2	2			9		1
ボントクタデ	果実												1
サナエタデ－オオイヌタデ	果実		3								8 (3)		1
タデ属	果実		1							1			
ギシギシ属	果実						57 (38)						1
スベリヒユ属	種子			11			1	2			1		4
ノミノフスマ	種子												3
ウシハコベ	種子			13				15		2			
ミドリハコベ	種子			16				1			2		2
ヤマゴボウ属	種子			8			1			(1)			
アカザ属	種子			39				7		6	34 (1)		15 (1)
キンポウゲ属	果実							2					
キケマン属A	種子			98			15 (2)	97	2	22	77		15 (1)
キケマン属B	種子			1			2 (1)						5
クサネム	果実		(9)					(1)			(1)		
ササゲ属アズキ亜属アズキ型	炭化種子		1	1							1		
カタバミ属	種子			6				2		1	1		7 (2)
エノキグサ属	種子			3				2		3	2		
ノブドウ	種子			(1)							4		
スミレ属	種子			1				1					1
トウガン	種子			113 (38)			20 (6)	114 (56)	3	533 (99)	2	4 (2)	
スイカ	種子			3			113 (26)			2200 (173)			101 (158)
メロン仲間	種子		903 (36)	1507 (318)	33		1181 (267)	796 (241)	11	5000+	40 (4)	1 (2)	184 (43)
ニホンカボチャ	果柄					(1)						1	
	種子			11 (3)			1 (2)	(4)		165 (7)			16 (9)
ヒョウタン仲間	種子						17 (8)	4 (8)					
カラスウリ	種子			(2)									
ヒシ属	果実						(1)			1			
アリノトウグサ属	核										1		1
セリ	果実		1										1
オカトラノオ属	種子										2		
キランソウ属	果実										1		
シロネ属	果実										1		
イヌコウジュ属	果実										1		1
エゴマ	果実		7 (2)	12 (1)				1			33 (3)		
シソ属	果実			2				8		2 (1)	2		10
	炭化果実												1
トウガラシ	種子		9 (1)	112			7	19					9 (1)
ナス	種子		1	3			44 (1)	29 (1)		2	12		1
ナス属	種子		20	10			8	25		8	2		69 (1)
ゴマ	種子						2			1	1		
オミナエシ属	果実										3		1
タカサブロウ	果実		1	1			28	2			9		
オナモミ	総苞										1		
キク科	果実							2			3		
ヘラオモダカ	果実		1										
オモダカ属	果実			1									
コナギ	種子										2		
ツユクサ	種子										1		
イボクサ	種子										2		
メヒシバ属	果実									2			
オヒシバ属	種子												1
ヒエ	有ふ果		12 (4)	3 (1)				4 (1)			44		198
	炭化有ふ果		1				1				2		
	炭化種子			1									
イネ	炭化籾		2					2			2		
	籾殻		6 (20)					2 (2)	(1)	10 (60)	1 (10)		
	炭化種子		10 (3)	9 (2)	1		1 (1)	6 (1)			16 (5)		(4)
キビ	有ふ果		3 (1)								1		
スズメノヒエ属	有ふ果		2					1					
エノコログサ属	有ふ果		5										
オオムギ	炭化種子		1	1			2	1	1		8 (1)		
ミクリ属	核									1			
スゲ属A	果実										2		
スゲ属B	果実										1		
ヒメクグ	果実										1		
カヤツリグサ属	果実			2									2
ウキヤガラ	果実						1			1	30 (3)		
ハリイ属	果実										(1)		
サンカクイ－フトイ	果実										2		
ホタルイ属	果実		4	2				3		6	69 (3)		
ワラビ	裂片										2 (2)		
不明	茅		12 (1)				16		3	+++			4
同定不能	炭化種実		(5)										
昆虫			(++)	(+++)			(+++)	(+++)		(+++)	(++)		(+++)

+:1-9，++:10-49，+++:50-99

土嚢袋1個＝約20kg

第30表　富山城下町遺跡主要部から出土した大型植物遺体〔2〕

ＳＥ02：メロン仲間が約1,500点と非常に多く、トウガンとトウガラシが多く、スモモとウメ、キケマン属Aがやや多く、クリとエノキ、アンズ、サンショウ、アカザ属が少量得られた他は、産出数が20点未満であった。産出数20点未満の分類群のうち、栽培植物もしくは栽培植物の可能性がある植物は、イチョウとモモ、カキノキ、ソバ、ササゲ属アズキ亜属、スイカ、ニホンカボチャ、エゴマ、ナス、ヒエ、イネ、オオムギである。

ＳＥ03：メロン仲間が少量、イネがわずかに得られた。

ＳＥ04：ニホンカボチャがわずかに得られた。

ＳＥ05：メロン仲間が約1,200点と非常に多く、スイカが多く、ギシギシ属がやや多く、ウメとソバ、キケマン属A、トウガン、ヒョウタン仲間、ナス、タカサブロウが少量得られた他は、産出数が10点未満であった。産出数10点未満の分類群のうち、栽培植物もしくは栽培植物の可能性がある植物は、モモとアンズ、カキノキ、アサ、ニホンカボチャ、トウガラシ、ゴマ、ヒエ、オオムギである。

ＳＫ03：メロン仲間が約800点と非常に多く、トウガンが多く、キケマン属Ａがやや多く、モモとウメ、サンショウ、ヤナギタデ、ウシハコベ、ヒョウタン仲間、トウガラシ、ナス、ナス属が少量得られた他は、産出数が10点未満であった。産出数10点未満の分類群のうち、栽培植物もしくは栽培植物の可能性がある植物は、アンズとカキノキ、アサ、ソバ、ニホンカボチャ、エゴマ、ヒエ、オオムギである。

ＳＫ04：メロン仲間が少量得られた他は、産出数が10点未満であった。産出数10点未満の分類群のうち、栽培植物もしくは栽培植物の可能性がある植物は、モモとウメ、カキノキ、イネ、オオムギである。

ＳＫ05：メロン仲間が5,000点以上、スイカが約2,400点と非常に多く、トウガンとニホンカボチャが多く、イネがやや多く、モモとスモモ、ウメ、ソバ、キケマン属Ａが少量得られた他は、産出数が10点未満であった。産出数10点未満の分類群のうち、栽培植物もしくは栽培植物の可能性がある植物は、アンズとカキノキ、アサ、ゴマである。

ＳＫ06：サンショウが250点、クリが約220点と多く、キケマン属Ａがやや多く、イヌガヤとコナラ、アサ、ソバ、サナエタデ－オオイヌタデ、アカザ属、メロン仲間、エゴマ、ナス、ヒエ、イネ、ウキヤガラ、ホタルイ属が少量得られた他は、産出数が10点未満であった。産出数10点未満の分類群のうち、栽培植物もしくは栽培植物の可能性がある植物は、モモとカキノキ、トウガン、ゴマ、キビ、オオムギである。

ＳＫ07：オニグルミとコナラ、モモ、トウガン、メロン仲間、ニホンカボチャがわずかに得られた。

ＳＫ11：スイカが約260点、メロン仲間が約230点、ヒエが約200点と多く、ナス属がやや多く、クリとカキノキ、アカザ属、キケマン属A、ニホンカボチャ、シソ属、トウガラシが少量得られた他は、産出数が10点未満であった。産出数10点未満の分類群のうち、栽培植物もしくは栽培植物の可能性がある植物は、モモとスモモ、ウメ、ナス、イネである。

次に、主要な大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

（1）イチョウ　*Ginkgo biloba* L.　種子　イチョウ科

茶褐色で、楕円体。やや扁平で、着点がわずかに突出する。平滑で光沢がない。側方全周に角がある。長さ19.2㎜、幅13.0㎜、厚さ11.0㎜。

（2）オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana*（Maxim.）Makino　核　クルミ科

黄褐色で、側面観は卵形～広卵形。木質で、壁は厚くて硬く、ときどき空隙がある。表面に縦方向の浅い縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。長さ26.0㎜、幅25.4㎜、厚さ11.0㎜。

（3）クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　果実　ブナ科

黒褐色で、側面は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。底面にある殻斗着痕はざらつく。果皮内面にはいわゆる渋皮が厚く付着する。高さ19.7㎜、幅20.9㎜。

（4）ウメ　*Armeniaca mume* (Siebold et Zucc.) de Vriese　核　バラ科

黄褐色～褐色、卵形で上面観は両凸レンズ形。表面には、全体的に不規則で深く小さな孔がある。着点は凹む。縫合線に沿って深い溝が入る。長さ17.7㎜、幅12.0㎜、厚さ9.7㎜。

（5）モモ　*Amygdalus persica* L.　核　バラ科

黄褐色～茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形～紡錘形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面には不規則な深い皺があり、片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。長さ32.3㎜、幅21.4㎜、厚さ15.4㎜。

（6）アンズ　*Armeniaca vulgaris* Lam. var. *ansu* (Maxim.) T.T.Yü et L.T.Lu　核　バラ科

茶褐色で、上面観は扁平、側面観は円形。一方の側面では縫合線が発達する。表面には網目状隆線がある。縫合線付近には不規則な縦皺がある。長さ20.8㎜、幅18.4㎜、厚さ14.0㎜。

（7）スモモ　*Prunus salicina* Lindl.　核　バラ科

赤褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観はいびつな楕円形。縫合線に沿ってやや深い溝が入る。表面は平滑だが、臍付近に縦方向の不規則な皺がある。長さ12.5㎜、幅9.8㎜、厚さ7.8㎜。

（8）サンショウ　*Zanthoxylum piperitum* (L.) DC.　果実・種子　ミカン科

果実は黒色で、上面観は凸レンズ形、側面観は倒卵形。不規則な網目状隆線がある。壁は厚い。長さ5.6㎜、幅5.4㎜。種子は黒色で、上面観は卵形、側面観は倒卵形。基部側面に稜線があり、内側には短く斜め下を向く臍がある。網目状隆線は低く、細かい。種皮は厚く硬い。長さ4.2㎜、幅3.4㎜、厚さ3.0㎜。

（9）ムクロジ　*Sapindus mukorossi* Gaertn.　種子　ムクロジ科

黒色で、球形。表面は平滑で木質。基部は残存しないが平らでやや凹み、果実着痕が縦方向の溝となってみられる。長さ12.3㎜、幅13.7㎜、厚さ12.6㎜。

（10）ブドウ属　*Vitis* spp.　種子　ブドウ科

黒褐色で、上面観は楕円形、側面観は下端が太く明瞭に尖る卵形。背面の中央もしくは基部寄りに匙状の着点があり、腹面には縦方向の２本の深い溝がある。種皮は薄く硬い。長さ6.0㎜、幅3.9㎜、厚さ3.0㎜。栽培種のブドウ属と考えられる。

（11）カキノキ　*Diospyros kaki* Thunb.　種子　カキノキ科

褐色～黒色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で基部がやや曲がり突出する。表面にはちりめん状のしわが見られる。明らかに大型の果実であったと想定される種子をカキノキとした。長さ17.7㎜、幅11.4㎜。小型の種子をカキノキ属とした。長さ8.0㎜、幅5.5㎜。

（12）アサ　*Cannabis sativa* L.　核　アサ科

褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で側面に稜がある。下端にはやや突出した楕円形の大きな着点がある。表面には脈状の模様がある。長さ4.9㎜、幅4.5㎜、厚さ3.6㎜。

（13）ソバ　*Fagopyrum sagittatum* Gilib.　果実　タデ科

黒褐色で、上面観は三稜形、側面観は先端がやや尖る紡錘形。稜の端部は翼状に突き出る。長さ6.7㎜、幅4.1㎜。

(14) タデ属　*Polygonum* spp.　果実　タデ科

黒褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は広卵形。下端には基部がある。表面は平滑で、やや光沢がある。長さ3.6㎜、幅3.4㎜。

(15) ササゲ属アズキ亜属　*Vigna angularis*　炭化種子　マメ科

上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。臍は全長の半分から２／３ほどの長さで、片側に寄ると推定されるが、残存していない。長さ4.8㎜、幅3.5㎜、厚さ3.9㎜。小畑〔2008〕に示された現生種と大きさを比較すると、栽培種と野生種双方の大きさを含む。

(16) トウガン　*Benincasa hispida* (Thunb.) Cogn.　種子　ウリ科

淡褐色で、倒卵形。表面は平滑。基部両側に薄い突出部がある。周囲を縁取る肥厚があり、中央部は窪む。長さ12.4㎜、幅7.5㎜。

(17) スイカ　*Citrullus lanatus* (Thunb.) Matsum. et Nakai　種子　ウリ科

黄褐色で、倒卵形。表面は平滑。基部両側に薄い突出部がある。周囲を縁取る肥厚がわずかに見られる。長さ12.1㎜、幅7.4㎜。

(18) メロン仲間　*Cucumis melo* L.　種子　ウリ科

黄白色～褐色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。表面は平滑で、基部は突出せず直線状の隆線となる。藤下〔1984〕は、種子の大きさからおおむね次の３群に分けられるとしている。長さ6.0㎜以下の雑草メロン型、長さ6.1～8.0㎜のマクワウリ・シロウリ型、長さ8.1㎜以上のモモルディカメロン型である。ＳＥ02の試料から任意に抽出した10点の大きさは、長さ7.1～9.4（平均8.3±0.7）㎜、幅3.4～4.1（平均3.9±0.2）㎜で、マクワウリ・シロウリ型とモモルディカメロン型双方の大きさを含む。

(19) ニホンカボチャ　*Cucurbita moschata* (Duchesne ex Lam.) Duchesne ex Poir.　果柄・種子　ウリ科

果柄は角張り、堅い。縦方向の条溝がある。果実との境に座がある。残存長40.4㎜、幅34.8㎜。種子は茶褐色で、上面観は扁平、側面観は肩が張る長倒卵形。周縁を毛が取り囲む。長さ17.5㎜、幅10.7㎜。

(20) ヒョウタン仲間　*Lagenaria* spp.　種子　ウリ科

淡褐色で、上面観は扁平、側面観は左右非対象の逆三角形。基部はW字状で、基部から先端まで、浅く広い溝が２本走る。ややスポンジ質。長さ17.5㎜、幅8.0㎜。

(21) エゴマ　*Perilla frutescens* (L.) Britton var. *frutescens*　果実　シソ科

暗褐色で、いびつな球形。端部にやや突出する着点がある。表面には不規則で多角形の低い網目状隆線がある。網目部分の周囲はわずかに凹む。長さ2.4㎜、幅2.1㎜。

(22) トウガラシ　*Capsicum annuum* L.　種子　ナス科

明褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。着点は明瞭に窪む。網目状隆線は周縁部に明瞭。着点近くに嘴状の突起がある。長さ3.5㎜、幅4.5㎜。

(23) ナス　*Solanum melongena* L.　種子　ナス科

赤褐色で、上面観は長楕円形、側面観はいびつな円形。着点は明瞭に窪む。種皮細胞の細胞壁が屈曲し、それが網目状隆線を構成する。長さ3.8㎜、幅4.1㎜。

(24) ゴマ　*Sesamum orientale* L.　種子　ゴマ科

灰褐色で、上面観は扁平、側面観は狭倒卵形。表面は平滑。縁に沿って浅い溝がある。長さ3.0㎜、幅1.8㎜。

(25) ヒエ　*Echinochloa esculenta* (A.Braun) H.Scholz　有ふ果・炭化有ふ果・炭化種子
イネ科

有ふ果は茶褐色で、楕円形。先端と基部はやや尖り、内穎は膨らまない。微細な縦筋がある。壁は薄く、光沢がある。長さ3.0㎜、幅2.0㎜。炭化有ふ果の大きさは、長さ2.3㎜、幅1.8㎜。種子（頴果）は側面観が卵形、断面が片凸レンズ形であるが、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広く、長さは全長の2/3程度と長い。臍は幅が広いうちわ型。長さ2.0㎜、幅1.6㎜。

(26) イネ　*Oryza sativa* L.　炭化籾・籾殻・炭化種子　イネ科

籾殻は黄褐色～淡褐色で、側面観は楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。炭化籾は長さ6.4㎜、幅3.8㎜、籾殻は長さ7.4㎜、幅3.1㎜。種子（炭化米）の上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。両面に縦方向の2本の浅い溝がある。長さ5.5㎜、幅3.6㎜。

(27) キビ　*Panicum miliaceum* L.　有ふ果　イネ科

黄褐色で、球形。先端は丸く、内穎側が膨らむ。表面は平滑で光沢がある。長さ2.8㎜、幅2.1㎜。

(28) スズメノヒエ属　*Paspalum* sp.　有ふ果　イネ科

茶褐色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。表面の顆粒状構造は窪みによって形成される。小突起は縦に配列する。護穎には稜がない。長さ3.6㎜、幅2.6㎜。

(29) エノコログサ属　*Setaria* spp.　有ふ果　イネ科

赤褐色で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形で先端がやや突出する。アワよりも細長く、乳頭突起が畝状を呈する。長さ3.0㎜、幅1.9㎜。

(30) オオムギ　*Hordeum vulgare* L.　炭化種子　イネ科

側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る１本の溝がある。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面は楕円形～円形となる〔Jacomet2006〕。長さ5.0㎜、幅2.9㎜、厚さ2.7㎜。

３．考察

18世紀前半から20世紀の11基の遺構から産出した大型植物遺体を同定した結果、多種類の栽培植物が得られた。産出した栽培植物は、木本植物ではイチョウとモモ、アンズ、スモモ、ウメ、カキノキの6種類、草本植物ではアサとソバ、トウガン、スイカ、メロン仲間、ニホンカボチャ、ヒョウタン仲間、エゴマ、トウガラシ、ナス、ゴマ、ヒエ、イネ、キビ、オオムギの15種類の計21種類であった。これらの分類群のうち、ソバ属とゴマは18世紀のＳＤ01において花粉化石でも確認されており、周囲で栽培されていた可能性が高い（第８節花粉分析の項参照）。メロン仲間は種子の大きさからマクワウリ・シロウリ型とモモルディカメロン型に分類され、少なくとも栽培種であったと推定される。ブドウ属は形状から栽培種の可能性が高い。ササゲ属アズキ亜属は栽培種のアズキと野生種のヤブツルアズキ双方の可能性があるが、いずれであったとしても、炭化して産出している状況から判断して、少なくとも利用はされていたと推定される。野生植物ではあるが食用あるいは他の用途に利用可能な種実としては、オニグルミとクリ、ツブラジイ、ブナ、コナラ、クワ属、マタタビ属、サクラ属サクラ節、バラ属、キイチゴ属、サンショウ、カキノキ属、ニワトコ、ガマズミ属、ヒシ属、シソ属などが見いだされた。種実の産状をみると、クリはすべて破片で産出しており、オニグルミも破片が多く、焦がして割ったと推定できる個体も含まれている点から、クリとオニグルミは利用されたと考えられる。その他の種実については、サンショウが18世紀前半のＳＥ02や18世紀のＳＫ06からまとまって産出する傾向があり、人間が意図的に集めた可能性がある。

自然に堆積したと考えられる種実から周囲の植生を検討すると、18世紀代には遺構の周囲にスギやマツ属などの針葉樹や、複数の部位が出土しているコナラ、エノキなどの広葉樹もある程度生育していたと考えられる。陽樹のアカメガシワやカラスザンショウ、ニワトコなどの産出から、周囲には明るい場所があり、落葉樹を主体とする二次林が発達していたと思われる。遺構のごく近くには、アカザ属やキケマン属など乾いた草地に生育する草本が生育していたと考えられる。ただし、19～20世紀代の遺構では、木本植物の産出があまりみられないため、林分が縮小した可能性がある。

草本植物では、畑作植物が多く、付近で栽培されていたと考えられる。特にメロン類が多産しており、メロン仲間やスイカ、トウガンなどが18世紀から20世紀にかけて栽培され、それらの種子が遺構内に流れ込んだか廃棄されたと考えられる。

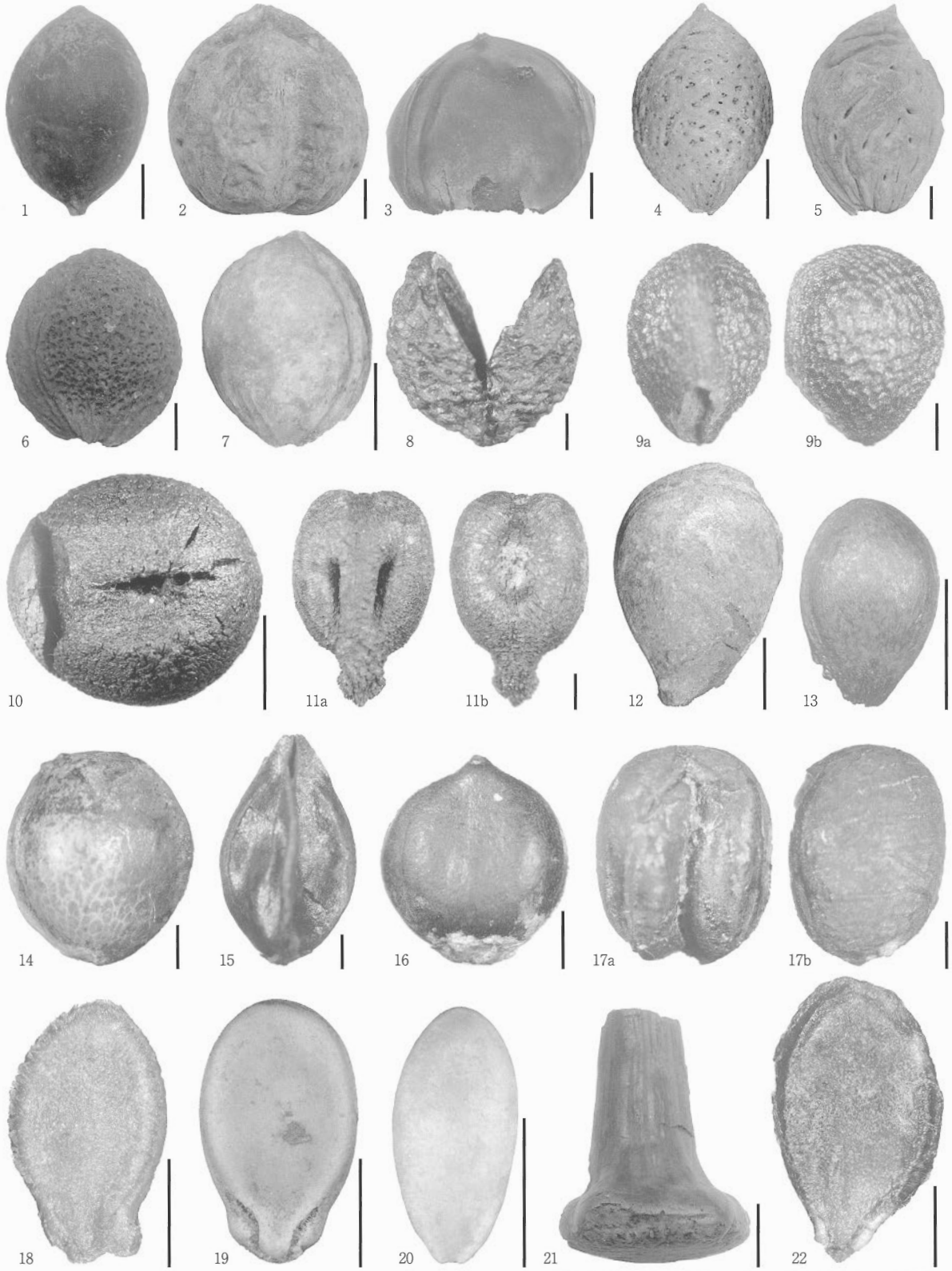
18世紀のＳＫ06では水田雑草でもあるコナギやツユクサ、イボクサなどとともにイネの産出が見られた。ＳＫ06からは抽水植物であるウキヤガラやホタルイ属なども多産しており、遺構周辺に存在した湿地や水田の堆積物が土坑内に堆積した可能性が高い。

引用文献

藤下典之（1984）出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法．渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文･自然科学―総括報告書」：638-654，同朋舎出版．

Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab.（2006）Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.

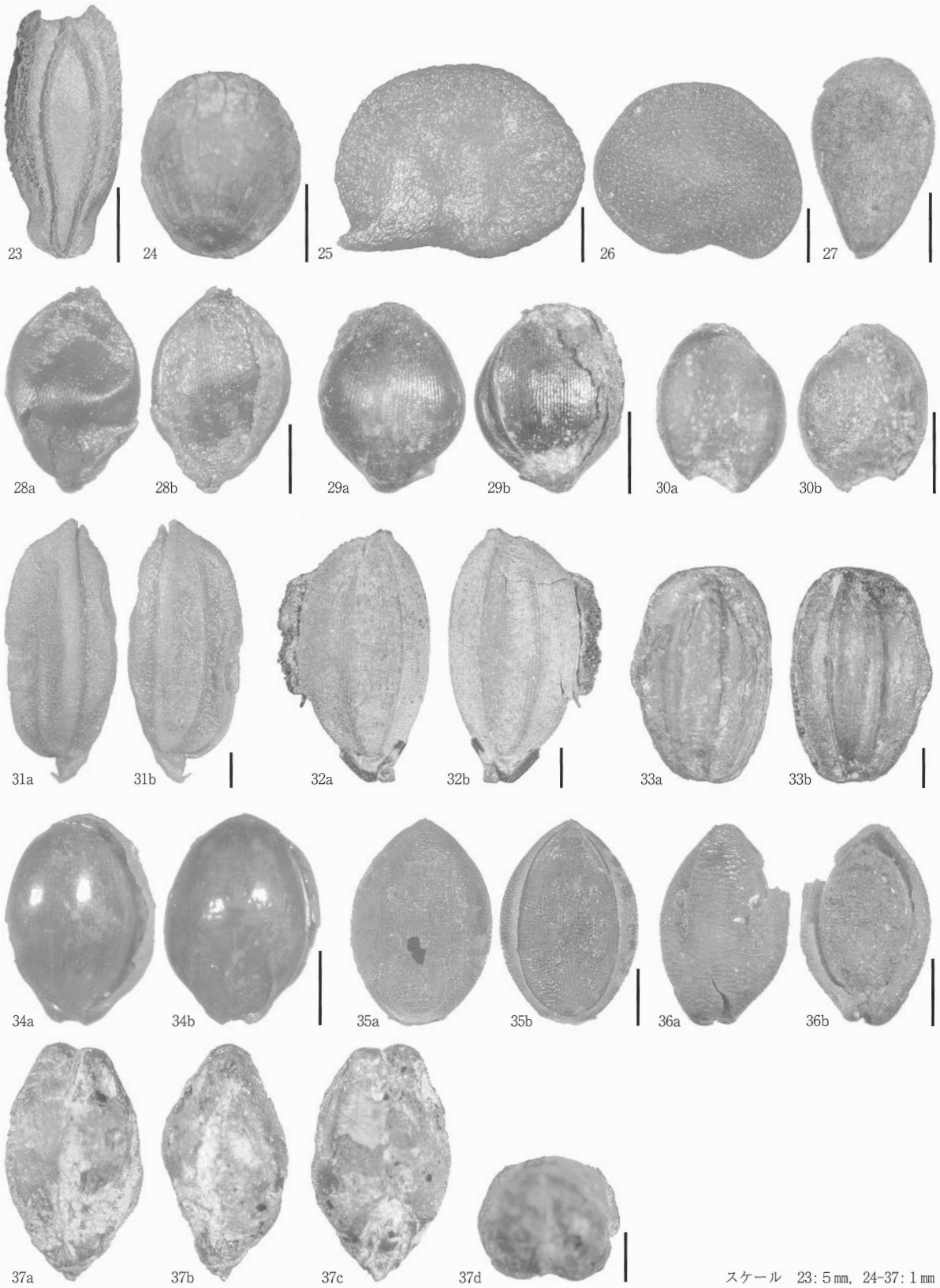
小畑弘己（2008）マメ科種子同定法．小畑弘己編「極東先史古代の穀物3」：225-252.



スケール　1-7,10,12,13,18-20,22: 5㎜,　8,9,11,14-17: 1㎜,　21: 10㎜

1．イチョウ種子（ＳＥ02）、2．オニグルミ核（ＳＥ02）、3．クリ果実（ＳＫ06）、4．ウメ核（ＳＥ02）、5．モモ核（ＳＥ02）
6．アンズ核（ＳＥ02）、7．スモモ核（ＳＫ05）、8．サンショウ果実（ＳＫ06）、9．サンショウ種子（ＳＥ02）
10．ムクロジ種子（ＳＫ11）、11．ブドウ属種子（ＳＫ11）、12．カキノキ種子（ＳＫ03）、13．カキノキ属種子（ＳＫ06）
14．アサ核（ＳＫ04）、15．ソバ果実（ＳＤ01）、16．タデ属果実（ＳＤ04）、17．ササゲ属アズキ亜属アズキ型炭化種子（ＳＤ01）
18．トウガン種子（ＳＥ02）、19．スイカ種子（ＳＫ05）、20．メロン仲間種子（ＳＥ02）、21．ニホンカボチャ果柄（ＳＫ07）
22．ニホンカボチャ種子（ＳＥ02）

第73図　富山城下町遺跡主要部から出土した大型植物遺体〔1〕



23. ヒョウタン仲間種子（ＳＥ05）、24. エゴマ果実（ＳＫ06）、25. トウガラシ種子（ＳＥ02）、26. ナス種子（ＳＥ05）
27. ゴマ種子（ＳＥ05）、28. ヒエ有ふ果（ＳＤ01）、29. ヒエ炭化有ふ果（ＳＤ01）、30. ヒエ炭化種子（ＳＥ02）
31. イネ籾殻（ＳＫ05）、32. イネ炭化籾（ＳＫ06）、33. イネ炭化種子（ＳＥ02）、34. キビ有ふ果（ＳＤ01）
35. スズメノヒエ属有ふ果（ＳＤ01）、36. エノコログサ属有ふ果（ＳＤ01）、37. オオムギ炭化種子（ＳＤ01）

第74図　富山城下町遺跡主要部から出土した大型植物遺体〔2〕

第７節　珪藻分析

藤根　　久（株式会社パレオ・ラボ）

１．はじめに

珪藻は、10～500㎛ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている〔小杉1988；安藤1990〕。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、富山城下町遺跡主要部の井戸や溝などの堆積物中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。

２．試料と方法

試料は、富山城下町遺跡主要部の井戸や溝などの堆積物４点である（第31表）。なお、１点は地山堆積物である。各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

（１）湿潤重量約１ｇを取り出し、秤量した後ビーカーに移して30％過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。（２）反応終了後、水を加え１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を５回ほど繰り返した。（３）懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下1,500倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。珪藻殻数の少ない試料は、プレパラート全面を観察した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。また、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物１ｇ当たりの殻数を計算した。

３．珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉〔1988〕および安藤〔1990〕が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種（W）として、海水～汽水種は不明種（？）としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明（？）として扱った。以下に、小杉〔1988〕が設定した海水～汽水域における環境指標種群と安藤〔1990〕が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

［外洋指標種群（Ａ）］：塩分濃度が35‰以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

試料№	遺構等	層位	時　期	堆　積　物　の　特　徴	備　考
1	ＳＥ02	覆土	18世紀前半	灰オリーブ色（5Y4/2）砂混じり粘土質シルト	
2	地山	第Ⅴ層	－	オリーブ黒色（7.5Y3/2）植物遺体混じり有機質粘土	
3	ＳＤ01	覆土	18世紀	オリーブ黒色（5Y3/2）砂混じりシルト	
4	ＳＫ05	覆土	18世紀	黒褐色（2.5Y3/2）砂質シルト	旧井戸

第31表　分析試料一覧

［内湾指標種群（B）］：塩分濃度が26～35‰の内湾水中を浮遊生活する種群である。
［海水藻場指標種群（C1）］：塩分濃度が12～35‰の水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。
［海水砂質干潟指標種群（D1）］：塩分濃度が26～35‰の水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。
［海水泥質干潟指標種群（E1）］：塩分濃度が12～30‰の水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。
［汽水藻場指標種群（C2）］：塩分濃度が4～12‰の水域の海藻や海草に付着生活する種群である。
［汽水砂質干潟指標種群（D2）］：塩分濃度が５～26‰の水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。
［汽水泥質干潟指標種群（E2）］：塩分濃度が２～12‰の水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。
［上流性河川指標種群（Ｊ）］：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。
［中～下流性河川指標種群（K）］：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。
［最下流性河川指標種群（L）］：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。
［湖沼浮遊生指標種群（M）］：水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。
［湖沼沼沢湿地指標種群（N）］：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。
［沼沢湿地付着生指標種群（O）］：水深１m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。
［高層湿原指標種群（P）］：尾瀬ケ原湿原や霧ケ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。
［陸域指標種群（Q）］：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

４．結果および考察

堆積物から検出された珪藻化石は、海水種が３分類群３属２種、海～汽水種が１分類群１属１種、汽水種が２分類群２属１種、淡水種が91分類群22属76種１変種であった。これらの珪藻化石は、海水域における２環境指標種群（C1、E1）、淡水域における４環境指標種群（K、N、O、Q）に分類された（第32・33表）。以下に、各遺構における珪藻化石群集の特徴と堆積環境について述べる。

ＳＥ02（分析№１）

堆積物１ｇ中の珪藻殻数は2.9×10^5個とやや多く、完形殻の出現率は36.6%である。概ね淡水種からなる。環境指標種群では、陸域指標種群（Q）が特徴的に出現し、その他湖沼沼沢湿地指標種群

No.	分類群		種群	1	2	3	4
1	*Cocconeis*	*scutellum*	C1	1			
2	*Denticulopsis*	spp.	?				1
3	*Diploneis*	*smithii*	E1	1			
1	*Navicula*	*salinicola*	?	1			
1	*Navicula*	*pygmaea*	?				1
2	*Nitzschia*	*levidensis*	?				1
1	*Achnanthes*	*exigua*	W				1
2	*A.*	*lanceolata*	K	1		1	2
3	*A.*	*linearis*	W				2
4	*A.*	*minutissima*	W				1
5	*A.*	*pusilla*	W				2
6	*A.*	spp.	?				6
7	*Amphora*	*montana*	Q	12		1	4
8	*A.*	*ovalis*	W		4		3
9	*Aulacosira*	*crenulata*	W		5		
10	*A.*	spp.	?	1	1	2	
11	*Caloneis*	*bacillum*	W	3	4	2	1
12	*C.*	*lauta*	W		4	1	
13	*C.*	*silicula*	W	1	3	3	
14	*Ceratoneis*	*arcus*	K				1
15	*Cocconeis*	*placentula*	W	2			5
16	*Cymbella*	*aspera*	O			1	1
17	*C.*	*cuspidata*	W			2	
18	*C.*	*naviculiformis*	W		1		
19	*C.*	*silesiaca*	W		2	1	3
20	*C.*	*sinuata*	K			1	5
21	*C.*	*tumida*	W	2		2	3
22	*C.*	*turgidula*	K	1		4	5
23	*C.*	spp.	?	2	2	3	1
24	*Diploneis*	*ovalis*	W	1		3	
25	*D.*	*parma*	W			1	
26	*D.*	spp.	?	1		1	
27	*Eunotia*	*formica*	W				1
28	*E.*	*praerupta* var. *bidens*	O		2	1	
29	*E.*	spp.	?		2		2
30	*Fragilaria*	*brevistriata*	N			1	1
31	*F.*	*constricta*	N			10	4
32	*F.*	*pinnata*	N	3		6	5
33	*F.*	*virescens*	N			1	1
34	*F.*	spp.	?	2		6	7
35	*Frustulia*	*vulgaris*	W				2
36	*Gomphonema*	*acuminatum*	O		1		
37	*G.*	*augur*	W				1
38	*G.*	*gracile*	O		3		
39	*G.*	*parvulum*	W	1	1	3	2
40	*G.*	*pseudoaugur*	W				1
41	*G.*	spp.	?	1		1	4
42	*Gyrosigma*	spp.	?				1
43	*Hantzschia*	*amphioxys*	Q	27	7	15	5
44	*Navicula*	*bacillum*	W	1	2	1	2
45	*N.*	*cincta*	W	6			2
46	*N.*	*confervacea*	W	1		4	1
47	*N.*	*contenta*	Q				1
48	*N.*	*cuspidata*	W	1	8	1	1
49	*N.*	*decussis*	W				2
50	*N.*	*elginensis*	O	2	1	2	4
51	*N.*	*lacustris*	W				3
52	*N.*	*mutica*	Q	3		2	2

第32表　堆積物中の珪藻化石産出表〔1〕

No.	分類群		種群	1	2	3	4
53	*N.*	*pupula*	W				2
54	*N.*	*soodensis*	W	2			
55	*N.*	*tokyoensis*	W		2		
56	*N.*	*veneta*	W	21		19	8
57	*N.*	*viridula*	W	1			
58	*N.*	spp.	?	11	2	2	16
59	*Neidium*	*affine*	W			1	1
60	*N.*	*ampliatum*	W		3		
61	*N.*	*bisulcatum*	Q	3		1	1
62	*N.*	*iridis*	O		4		
63	*N.*	spp.	?	2	7	2	1
64	*Nitzschia*	*amphibia*	W	2		2	7
65	*N.*	*palea*	W			4	2
66	*N.*	*parvula*	W	2			
67	*N.*	*sinuata*	W	1			
68	*N.*	*umbonata*	W			21	
69	*N.*	spp.	?	8	1	6	11
70	*Pinnularia*	*acrosphaeria*	O		6	3	
71	*P.*	*borealis*	Q	2		2	
72	*P.*	*braunii*	W		1		
73	*P.*	*cardinaliculus*	W		1		
74	*P.*	*divergens*	W	2	1		
75	*P.*	*gibba*	O		4	2	
76	*P.*	*hemiptera*	W		4		
77	*P.*	*interrupta*	W	1			
78	*P.*	*microstauron*	W		5	1	
79	*P.*	*subcapitata*	Q	41	1	9	4
80	*P.*	*viridis*	O		11	4	1
81	*P.*	spp.	?	17	42	21	8
82	*Rhopalodia*	*gibba*	W		1	5	
83	*R.*	*gibberula*	W	1	43	7	1
84	*Stauroneis*	*obtusa*	W	1			
85	*S.*	*phoenicenteron*	O		14	1	1
86	*S.*	spp.	?	2		2	1
87	*Surirella*	*angusta*	W	3		2	1
88	*S.*	spp.	?		3	4	
89	*Synedra*	*inaequalis*	K				3
90	*S.*	*rumpens*	W				1
91	*S.*	*ulna*	W	5	5	7	7
92		Unknown	?	7	5	3	19
1		海水藻場	C1	1			
2		海水泥質干潟	E1	1			
3		海水不定・不明種	?				1
4		海～汽水不定・不明種	?	1			
5		汽水不定・不明種	?				2
6		中～下流性河川	K	2		6	16
7		湖沼沼沢湿地	N	3		18	11
8		沼沢湿地付着生	O	2	46	14	7
9		陸　域	Q	88	8	30	17
10		広布種	W	61	100	93	69
11		淡水不定・不明種	?	47	60	50	58
12		その他不明種	?	7	5	3	19
		海水種		1			
		海～汽水種		1			
		汽水種					2
		淡水種		203	214	211	178
		合　計		213	219	214	200
		完形殻の出現率(%)		36.6	15.5	54.7	47.0
		堆積物 1g 当たり殻数(個)		2.9E+05	1.7E+06	1.2E+06	9.7E+04

(種群は、小杉 (1988) およびび安藤 (1990) による)

第33表　堆積物中の珪藻化石産出表〔2〕

（N）や沼沢湿地付着生指標種群（O）が僅かに検出された。こうした環境指標種群の特徴から、ＳＥ02の堆積環境はジメジメとした陸域であり、井戸壁に付着した苔類や岩石の表面など井戸内面特有の湿った環境が推定される。

基本層序第Ⅴ層（分析№２）

堆積物１ｇ中の珪藻殻数は1.7×10^{6}個とやや多く、完形殻の出現率は15.5%である。淡水種から構成される。環境指標種群では、地山堆積物において沼沢湿地付着生指標種群（O）が特徴的に出現し、陸域指標種群（Q）が随伴した。この地山堆積物は、植物遺体を含む有機質粘土である。環境指標種群の特徴においても、ジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境が推定された。

ＳＤ01およびＳＫ05（分析№３、№４）

堆積物１ｇ中の珪藻殻数は1.2×10^{6}個および9.7×10^{4}個、完形殻の出現率は54.7%および47.0%である。概ね淡水種から構成される。環境指標種群では、中～下流性河川指標種群（K）、湖沼沼沢湿地指標種群（N）、沼沢湿地付着生指標種群（O）、陸域指標種群（Q）が出現した。こうした環境指標種群の特徴からＳＤ01およびＳＫ05では、河川の流れ込みやジメジメとした陸域を伴う湖沼沼沢湿地～沼沢湿地環境が推定される。

５．おわりに

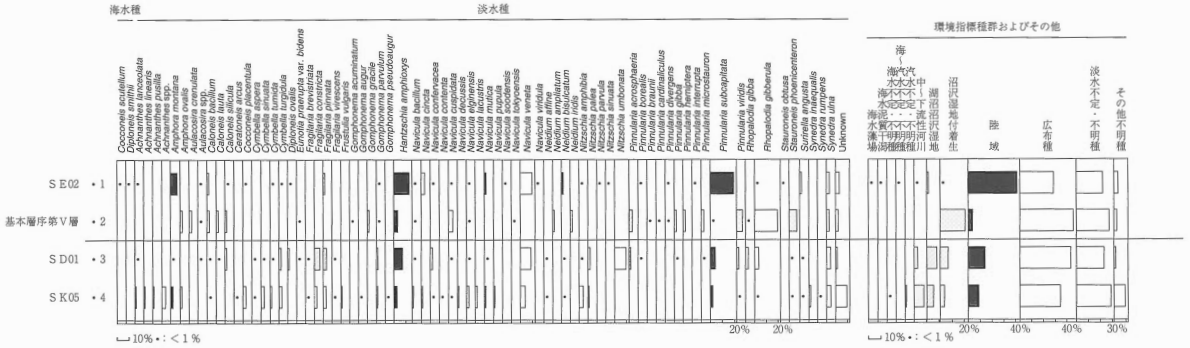
富山城下町遺跡主要部の井戸や溝などの堆積物について珪藻分析を行った。

ＳＥ02（分析№１）は、井戸壁に付着した苔類や岩石の表面など井戸内面特有の湿った環境が推定された。ＳＤ01およびＳＫ05（分析№３、№４）は、河川の流れ込みやジメジメとした陸域を伴う湖沼沼沢湿地～沼沢湿地環境が推定された。なお、基本層序第Ⅴ層（分析№２）は、ジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境が推定された。

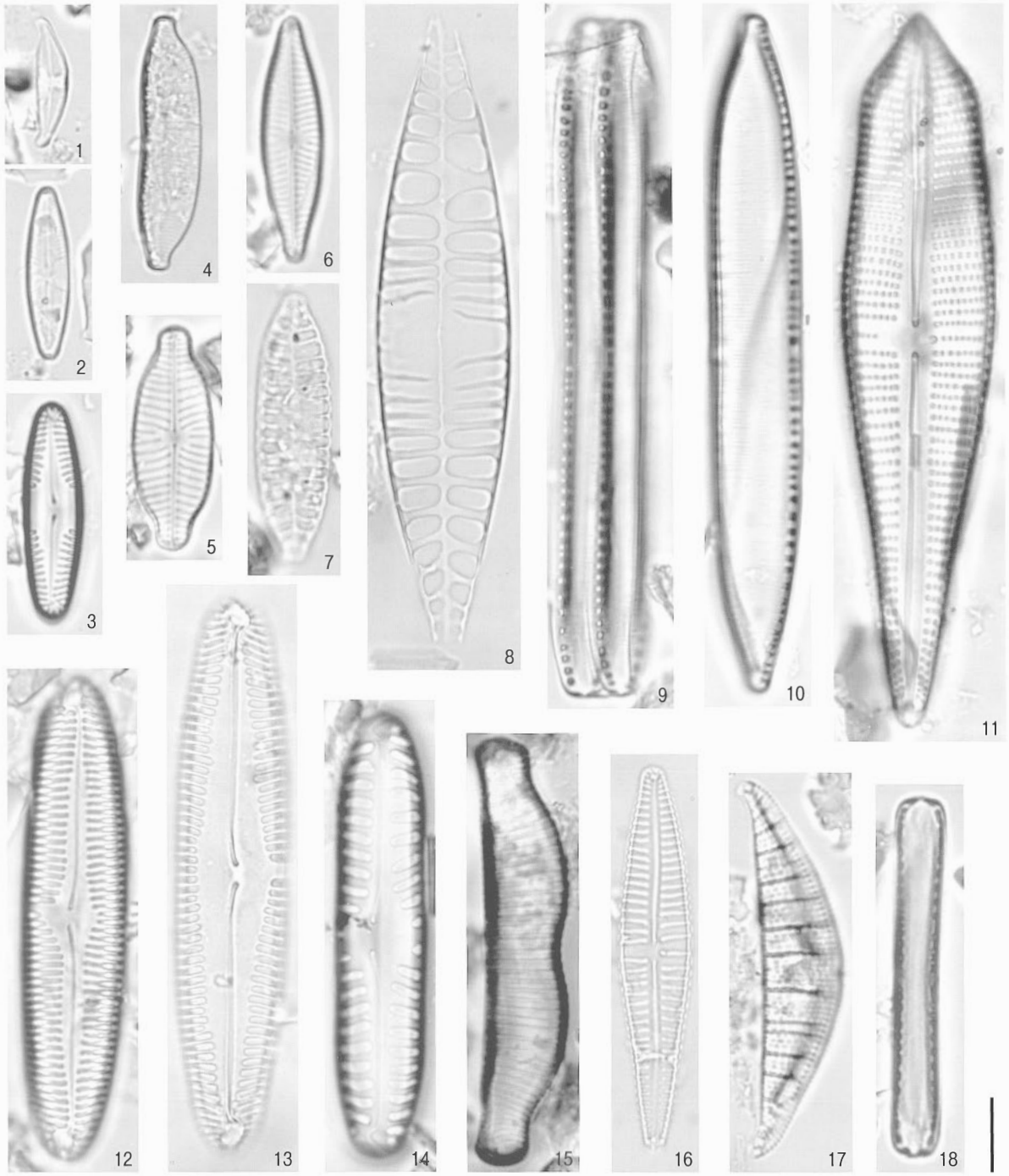
引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理，42，73-88.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27，1-20.



第75図　堆積物中の珪藻化石分布図（主な分類群を表示）



スケール：10μm

1．*Amphora montana*（No.1）　2．*Stauroneis obtusa*（No.1）　3．*Pinnularia subcapitata*（No.1）
4．*Hantzschia amphioxys*（No.1）　5．*Navicula elginensis*（No.3）　6．*Navicula veneta*（No.1）
7．*Surirella angusta*（No.1）　8．*Navicula cuspidata*（No.2）　9．*Nitzschia umbonata*（No.3）
10．*Nitzschia umbonata*（No.3）　11．*Gomphonema augur*（No.4）　12．*Pinnularia viridis*（No.3）
13．*Pinnularia gibba*（No.3）　14．*Pinnularia borealis*（No.3）　15．*Eunotia praerupta* var. *bidens*（No.2）
16．*Gomphonema gracile*（No.2）　17．*Rhopalodia gibberula*（No.2）　18．*Hantzschia amphioxys*（No.1）

第76図　堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真

第８節　花粉分析とプラント・オパール分析

森　　将志（株式会社パレオ・ラボ）

１．試料と分析方法

分析試料は、ＳＥ02、基本層序Ｖ層、ＳＤ01、ＳＫ05から採取された計４点である（第34表）。花粉分析は全ての試料で、プラント・オパール分析は２試料で実施した。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

（１）花粉分析

試料（湿重量約２～３g）を遠沈管にとり、10％水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46％フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え10分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。各プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉化石を選んで単体標本（PLC.1142～1150）を作製し、写真を第79図に載せた。

（２）プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30％の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、保存状態の良好な植物珪酸体を選んで写真を撮り、第80図に載せた。

２．結果

（１）花粉分析

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉30、草本花粉27、形態分類を含むシダ植物胞子３の総計60である。これらの花粉・胞子の一覧表を第35表に示し、花粉化石の分布図を第77図に示した。

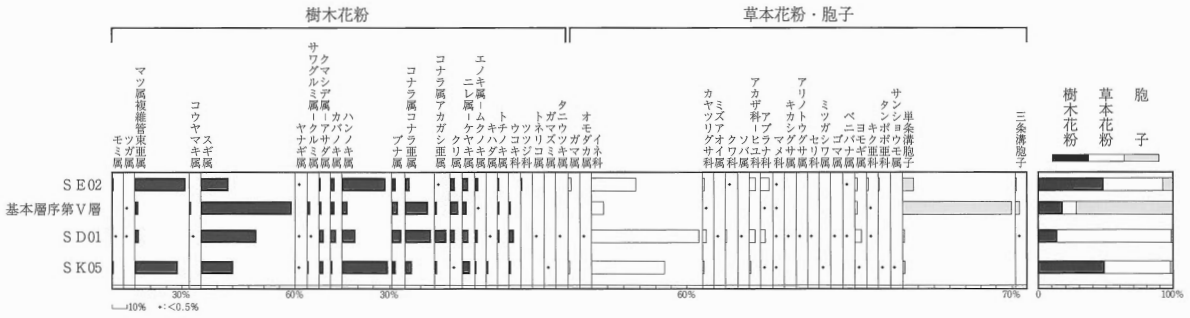
分布図において樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン(-)で結んだ分類群はそれらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科やマメ科、バラ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

試料No.	遺構等	層位	時　期	堆　積　物　の　特　徴	花粉分析	プラント・オパール分析
1	ＳＥ02	覆土	18世紀前半	灰オリーブ色（5Y4/2）砂混じり粘土質シルト	○	
2	地山	第Ｖ層	－	オリーブ黒色（7.5Y3/2）植物遺体混じり有機質粘土	○	○
3	ＳＤ01	覆土	18世紀	オリーブ黒色（5Y3/2）砂混じりシルト	○	○
4	ＳＫ05	覆土	18世紀	黒褐色（2.5Y3/2）砂質シルト	○	

第34表　分析試料一覧

学　　名	和　　名	ＳＥ02	第Ⅴ層	ＳＤ01	ＳＫ05
樹木					
Abies	モミ属	2	－	1	2
Tsuga	ツガ属	－	1	1	－
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	69	4	5	57
Sciadopitys	コウヤマキ属	－	2	1	－
Cryptomeria	スギ属	37	119	71	42
Taxaceae－Cephalotaxaceae－Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	1	－	3	2
Salix	ヤナギ属	1	－	1	1
Myrica	ヤマモモ属	1	－	－	－
Pterocarya－Juglans	サワグルミ属－クルミ属	－	4	1	2
Carpinus－Ostrya	クマシデ属－アサダ属	2	3	6	5
Betula	カバノキ属	5	5	7	2
Alnus	ハンノキ属	59	7	17	60
Fagus	ブナ属	5	8	12	5
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	6	30	33	9
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	1	3	15	3
Castanea	クリ属	6	10	6	1
Ulmus－Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	7	5	7	9
Celtis－Aphananthe	エノキ属－ムクノキ属	5	1	4	2
Phellodendron	キハダ属	－	－	1	2
Mallotus	アカメガシワ属	－	－	－	2
Rhus－Toxicodendron	ヌルデ属－ウルシ属	1	－	1	－
Aesculus	トチノキ属	2	2	2	－
Camellia	ツバキ属	1	－	－	－
Araliaceae	ウコギ科	－	2	6	2
Cornus	ミズキ属	1	－	－	－
Ericaceae	ツツジ科	2	－	－	－
Diospyros	カキノキ属	1	－	－	－
Fraxinus	トネリコ属	－	－	1	－
Viburnum	ガマズミ属	－	－	－	1
Weigela	タニウツギ属	－	－	1	－
草本					
Typha	ガマ属	8	－	－	4
Sagittaria	オモダカ属	－	－	1	－
Gramineae	イネ科	123	91	1006	197
Cyperaceae	カヤツリグサ科	5	1	38	3
Monochoria	ミズアオイ属	－	－	2	－
Liliaceae	ユリ科	－	－	－	1
Moraceae	クワ科	1	－	9	－
Polygonum sect. *Persicaria－Echinocaulon*	サナエタデ節－ウナギツカミ節	－	－	1	－
Fagopyrum	ソバ属	－	－	5	－
Chenopodiaceae－Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	20	－	61	3
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2	1	－	－
Brassicaceae	アブラナ科	25	4	48	1
Rosaceae	バラ科	－	1	－	－
Leguminosae	マメ科	2	1	4	1
Rotala	キカシグサ属	－	－	7	－
Haloragis	アリノトウグサ属	－	－	5	－
Apiaceae	セリ科	－	－	4	－
Menyanthes	ミツガシワ属	－	－	－	1
Solanum	ナス属	1	－	1	－
Sesamum	ゴマ属	－	－	1	－
Plantago	オオバコ属	－	－	1	－
Galium	ヤエムグラ属	－	－	8	－
Patrinia	オミナエシ属	－	－	1	－
Carthamus	ベニバナ属	1	－	5	－
Artemisia	ヨモギ属	6	16	57	2
Tubuliflorae	キク亜科	4	1	5	－
Liguliflorae	タンポポ亜科	3	－	－	1
シダ植物					
Salvinia	サンショウモ属	－	－	－	1
monolete type spore	単条溝胞子	30	817	14	6
trilete type spore	三条溝胞子	3	32	4	－
Arboreal pollen	樹木花粉	215	206	203	209
Nonarboreal pollen	草本花粉	201	116	1270	214
Spores	シダ植物胞子	33	849	18	7
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	449	1171	1491	430
Unknown pollen	不明花粉	5	2	5	8

第35表　産出花粉胞子一覧



樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。

第77図　富山城下町遺跡主要部における花粉分布図〔１〕

樹木花粉について見ると、ＳＥ02とＳＫ05ではマツ属複維管束亜属とハンノキ属の産出が目立ち、ＳＥ02のマツ属複維管束亜属が32％、ＳＫ05のマツ属複維管束亜属が27％、ＳＥ02のハンノキ属が27％、ＳＫ05のハンノキ属が29％の産出率を示す。ＳＤ01と基本層序Ｖ層では、スギ属とコナラ属コナラ亜属の産出が目立ち、ＳＤ01のスギ属が35％、基本層序Ｖ層のスギ属が58％、ＳＤ01のコナラ属コナラ亜属が16％、基本層序Ｖ層のコナラ属コナラ亜属が15％の産出率である。草本花粉では、いずれの試料においてもイネ科の産出が多く、ＳＥ02では27％、ＳＤ01では67％、SK05では46％、基本層序Ｖ層では８％の産出率である。また、ＳＤ01では、水田雑草を含む分類群であるオモダカ属やミズアオイ属、キカシグサ属、栽培植物であるソバ属やベニバナ属、ゴマ属などがわずかに産出している。また、基本層序Ｖ層では単条溝胞子が70％の産出率を示す。

（2）プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め（第36表）、分布図に示した（第78図）。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料１ｇ当りの検出個数である。

検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の６種類の機動細胞珪酸体が確認できた。

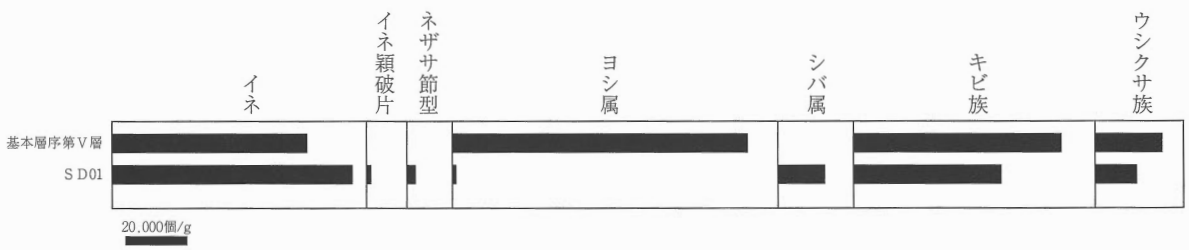
イネ機動細胞珪酸体は基本層序Ｖ層で61,300個、ＳＤ01で75,600個産出している。ネザサ節型機動細胞珪酸体はＳＤ01で2,700個産出している。ヨシ属機動細胞珪酸体は基本層序Ｖ層で93,000個、ＳＤ01で1,300個である。シバ属機動細胞珪酸体はＳＤ01で14,600個産出している。キビ族機動細胞珪酸体は基本層序Ｖ層で65,500個、ＳＤ01で46,400個である。ウシクサ族機動細胞珪酸体は基本層序Ｖ層で21,100個、ＳＤ01で13,300個である。それ以外では、イネ穎破片がＳＤ01で1,300個、ポイント型珪酸体が基本層序Ｖ層で2,100個、ＳＤ01で2,700個産出した。

３．考察

まず、地山と考えられている基本層序Ｖ層であるが、花粉分析の結果では、スギ属とコナラ属コナラ亜属が優占する樹木組成を示しており、この時期にはスギ林やコナラ属コナラ亜属などの落葉広葉

	イネ（個/ｇ）	イネ穎破片（個/ｇ）	ネザサ節型（個/ｇ）	ヨシ属（個/ｇ）	シバ属（個/ｇ）	キビ族（個/ｇ）	ウシクサ族（個/ｇ）	ポイント型珪酸体（個/ｇ）
第Ｖ層	61,300	0	0	93,000	0	65,500	21,100	2,100
ＳＤ01	75,600	1,300	2,700	1,300	14,600	46,400	13,300	2,700

第36表　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数



第78図　富山城下町遺跡主要部における植物珪酸体分布図

樹林が城下町周辺の丘陵地などに分布を広げていたと思われる。また、プラント・オパール分析では抽水植物のヨシ属が多量に産出しているため、遺跡周辺には湿地的環境が広がっていたと思われる。

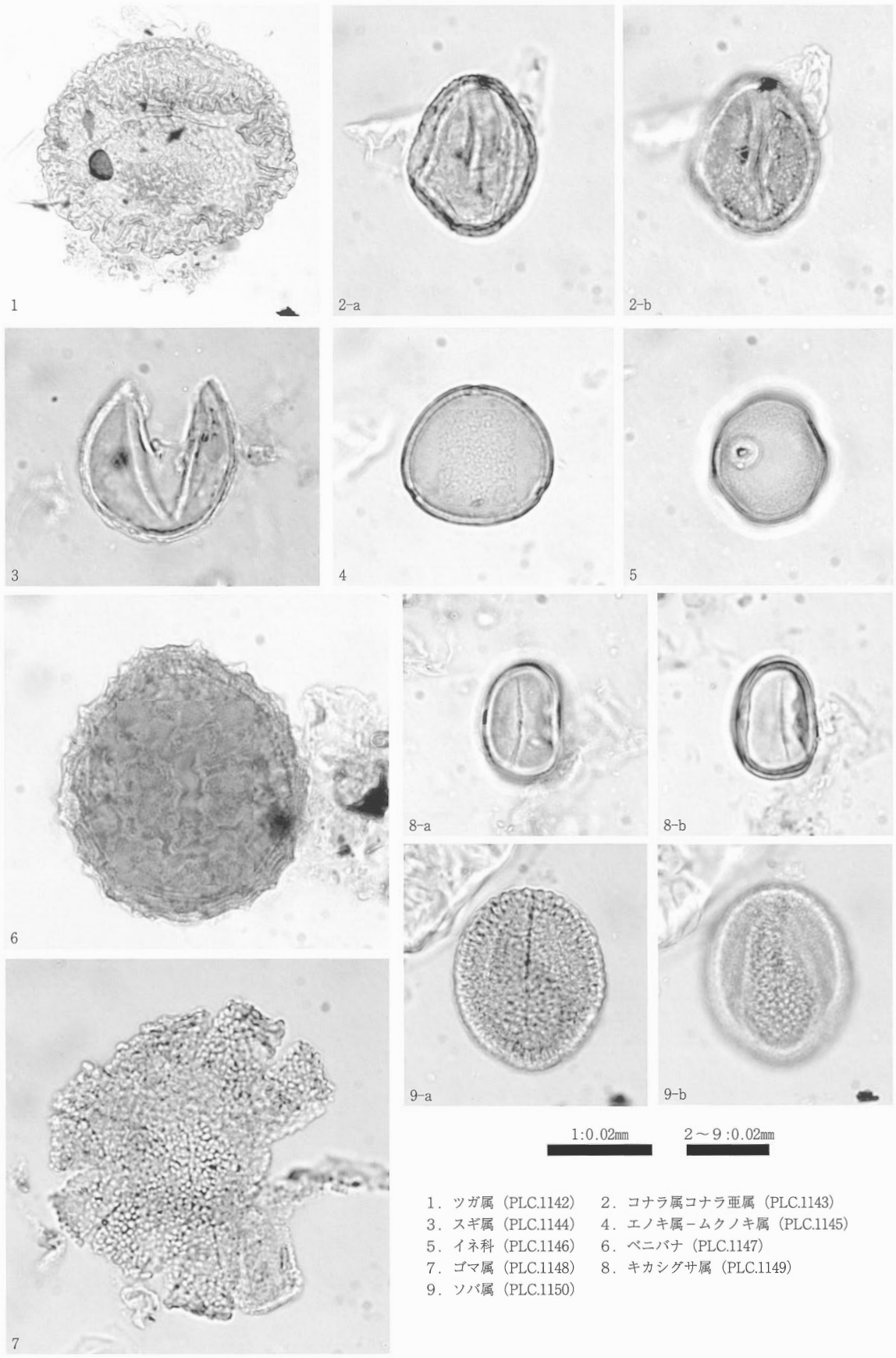
さらに、キビ族とウシクサ族の機動細胞珪酸体の産出も見られる。キビ族という分類階級には栽培種や野生種が含まれるが、機動細胞珪酸体の形態で両者を区別するのは難しいため、ここではキビ族が遺跡周辺に生育していたと指摘するに留める。ウシクサ族についてもススキやチガヤなど乾燥的環境に生育する種と、オギなど湿地的環境に生育する種が含まれるが、両者を機動細胞珪酸体の形態で区別するのは難しい。遺跡周辺にはウシクサ族も生育していたであろう。さらには、イネ機動細胞珪酸体が大量に産出した。また、Ⅴ層は上下層に比べると色調が黒く、花粉分析の検境を行う際に微粒炭が観察された。このように基本層序Ⅴ層では、栽培植物が産出し、人間活動を示唆する微粒炭も多く含まれる状況が推測されるため、何らかの人間活動があったのではなかろうか。

次に、18世紀と考えられているＳＥ02とＳＫ05、ＳＤ01について検討する。ＳＥ02とＳＫ05の花粉分析結果では、マツ属複維管束亜属とハンノキ属が優占している。よって、この時期は城下町周辺などにニヨウマツ類の二次林が分布を拡大しており、城下町周辺の低地などにはハンノキ属主体の湿地林も存在していたであろう。草本花粉では好湿性のガマ属（ＳＥ02、ＳＫ05）やミツガシワ属（ＳＫ05）、サンショウモ属（ＳＫ05）なども産出しており、湿地周辺に生育していたと考えられる。ＳＤ01については、ＳＥ02とＳＫ05の結果と異なり、スギ属とコナラ属コナラ亜属が優占する花粉組成であった。この様な相違が生じる原因については、遺構の形状が関係している可能性がある。すなわち、マツ属複維管束亜属とハンノキ属が優占するＳＥ02とＳＫ05は井戸や土坑であり、花粉の集積範囲が比較的狭いと思われる。一方で、スギ属とコナラ属コナラ亜属が優占するＳＤ01は溝であり、花粉の集積範囲が比較的広いと考えられる。射水平野の常願寺川や神通川などの扇状地上では、中世以降にマツ属が増加し、近世以降に優勢になるとされているが〔田中・千葉2007〕、富山城下町遺跡主要部周辺の丘陵地では依然としてスギ林が成立していた可能性が推測される。その他では、プラント・オパール分析でＳＤ01からシバ属やキビ族、ウシクサ族の産出が見られた。シバ属については、後述するように水田の畔などに生育していたと推測される。キビ族については上述したように、栽培種と野生種があるが、大型植物遺体分析ではＳＤ01から、栽培種のヒエやキビ、野生種のスズメノヒエとエノコログサ属が産出しており、ＳＤ01から産出するキビ族機動細胞珪酸体は、これらのいずれかから供給されたと思われる。

また、田中・千葉〔2007〕は射水平野の環境変遷の中で、中世以降は栽培植物の種類数が多くなると指摘している。栽培植物について検討すると、ＳＤ01からは大量のイネ科花粉とともに、水田雑草を含む分類群であるオモダカ属やミズアオイ属、キカシグサ属の花粉が産出した。プラント・オパール分析においても大量のイネ機動細胞珪酸体やイネ穎破片が産出し、大型植物遺体分析でもイネの籾殻や炭化種子が多く産出している（第６節大型植物遺体分析参照）。よって、ＳＤ01のすぐそばには水田が存在していた可能性がある。また、ＳＤ01ではソバ属やベニバナ属、ゴマ属といった栽培種の花粉が産出しており、溝周辺では、水田稲作だけではなく、これらの作物も栽培していたと思われる。ベニバナ属についてはＳＥ02においても産出しており、ＳＥ02周辺においても栽培されていた可能性がある。

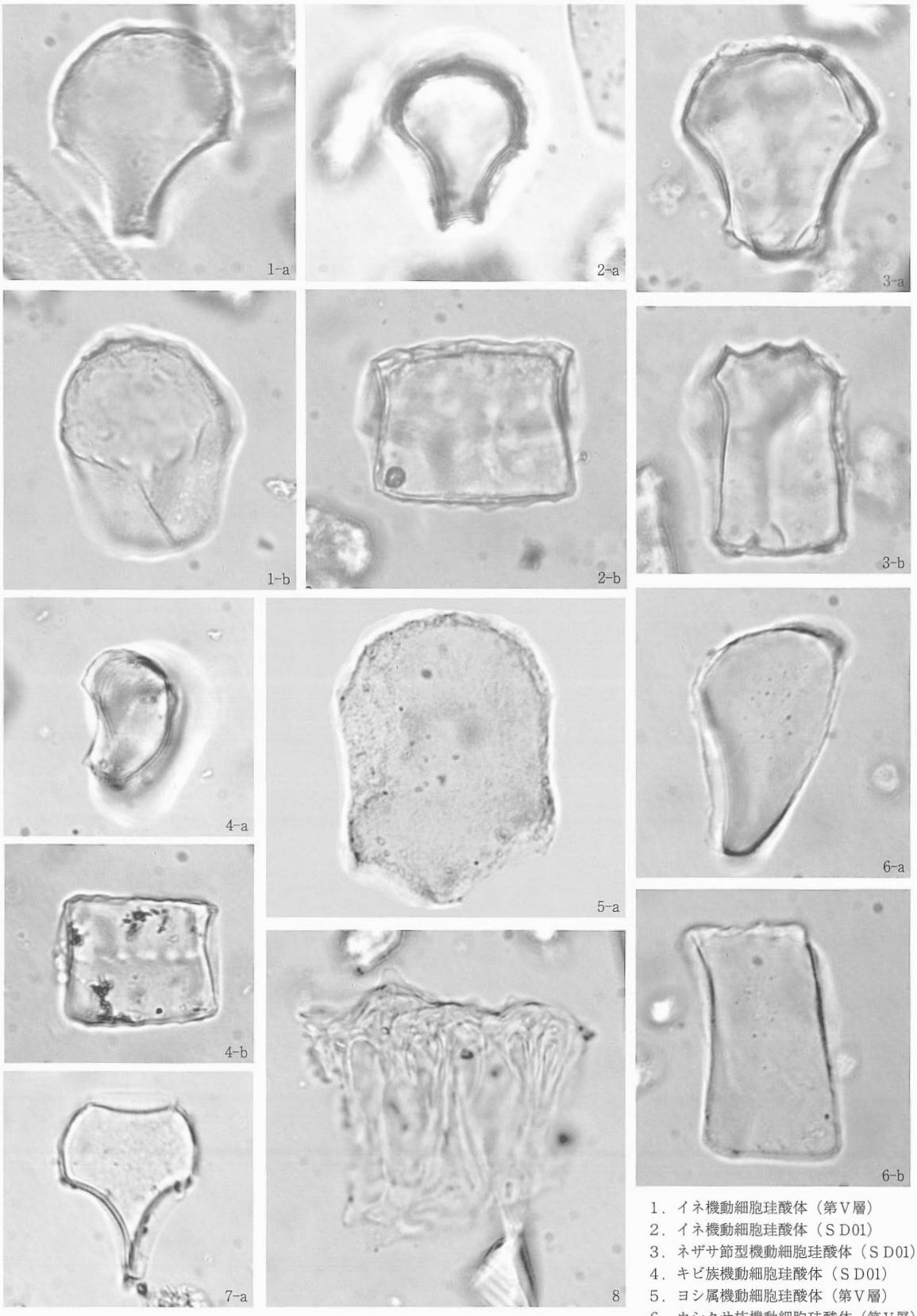
引用文献

田中義文・千葉博俊（2007）射水平野周辺の古環境変遷．PALYNO，5，34-47.



1．ツガ属（PLC.1142）　2．コナラ属コナラ亜属（PLC.1143）
3．スギ属（PLC.1144）　4．エノキ属－ムクノキ属（PLC.1145）
5．イネ科（PLC.1146）　6．ベニバナ（PLC.1147）
7．ゴマ属（PLC.1148）　8．キカシグサ属（PLC.1149）
9．ソバ属（PLC.1150）

第79図　富山城下町遺跡主要部ＳＤ01から産出した花粉化石



1．イネ機動細胞珪酸体（第Ⅴ層）
2．イネ機動細胞珪酸体（ＳＤ01）
3．ネザサ節型機動細胞珪酸体（ＳＤ01）
4．キビ族機動細胞珪酸体（ＳＤ01）
5．ヨシ属機動細胞珪酸体（第Ⅴ層）
6．ウシクサ族機動細胞珪酸体（第Ⅴ層）
7．シバ属機動細胞珪酸体（ＳＤ01）
8．イネ穎破片（ＳＤ01）

第80図　富山城下町遺跡主要部から産出した植物珪酸体

第９節　寄生虫卵分析

森　　将志（株式会社パレオ・ラボ）

１．試料と分析方法

分析試料は、18～19世紀と考えられているＳＫ03とＳＫ04から採取された土壌試料２点である。ＳＫ03は灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト、ＳＫ04は灰色（7.5Y5/1）シルトである。これらの試料について、以下の手順にしたがって寄生虫卵分析を試みた。

計量した試料に、10％の水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46％のフッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、この残渣に適容量のグリセリンを加えて計量した。この残渣からプレパラートを作製し、プレパラート全面に渡り検鏡した。また、保存状態の良好な寄生虫卵を選んで単体標本（PLC.1151～1153）を作製し、その写真を第82図に載せた。なお、試料１ｇ中の寄生虫卵含有数は、次式で求める。

$X = BD/AC$

X：試料１ｇ中の寄生虫卵含有数、A：分析に用いた試料の重量（ｇ）、B：濃縮試料＋グリセリンの重量（ｇ）、C：濃縮試料＋グリセリンのうち、封入に用いた重量（ｇ）、D：プレパラート中の寄生虫卵数

２．結果

計量し、検鏡した結果を第37表に示す。ＳＫ03において回虫卵と鞭虫卵、肝吸虫卵が試料１ｇ当たりそれぞれ90個、303個、11個検出できた。試料１㎤当たりでは計186個になる。ＳＫ04においては、寄生虫卵は検出されなかった。

３．考察

検鏡の結果、ＳＫ03から寄生虫卵が検出された。寄生虫卵数については、試料１㎤中に1,000個以上あれば糞便の可能性があると考えられている〔金原1997〕。ＳＫ03から産出した寄生虫卵は試料１㎤当たり計186個であるため、寄生虫卵数から判断すると、ＳＫ03の試料は糞便そのものではないと考えられる。しかしながら、比較的多くの寄生虫卵が産出していることから、糞便が混じり込んでいる試料といえよう。

ところで、トイレ遺構では食用や薬用となる植物の花粉が多産する例が知られており、今回の分析試料についても花粉分析を行った。その結果が第81図である。ＳＫ03の試料から産出した花粉化石で、食用や薬用となる植物はイネ科やソバ属、アカザ科－ヒユ科、

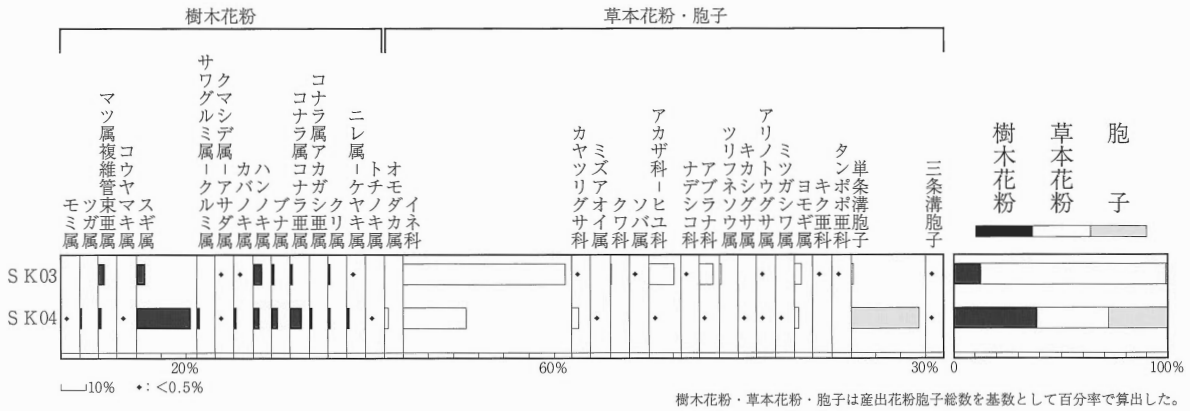
	ＳＫ03	ＳＫ04
分析に用いた試料（ｇ）	4.2625	4.1624
残渣＋グリセリン（ｇ）	1.0543	1.0933
封入に用いた量（ｇ）	0.0465	0.0566
試料の密度（ｇ／㎤）	0.46	-
回虫卵	17	-
（試料１ｇ当たりの個数）	90	-
鞭虫卵	57	-
（試料１ｇ当たりの個数）	303	-
肝吸虫卵	2	-
（試料１ｇ当たりの個数）	11	-
計	76	-
（試料１ｇ当たりの個数）	404	-
（試料１㎤当たりの個数）	186	-

第37表　寄生虫卵分析に用いた試量の計量値と寄生虫卵数

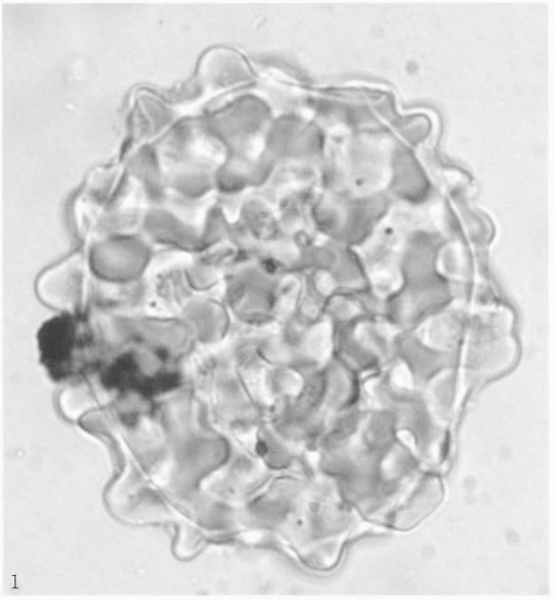
アブラナ科などが挙げられ、これらの分類群はＳＫ04に比べるといずれも産出率が高い。また、大型植物遺体分析においてもＳＫ03ではメロン仲間といった栽培植物が多く産出しており、人が食した植物が排泄された状況が推測できる（第６節　大型植物遺体分析参照）。よって、寄生虫卵分析や花粉分析、大型植物遺体分析の結果から考えると、ＳＫ03はトイレ遺構である可能性が高いように思われる。ＳＫ04については寄生虫卵が産出しておらず、花粉分析の結果でも食用や薬用となる分類群の産出も少ないため、分析結果からはトイレ遺構とはいえない。

引用文献

金原正明（1997）自然科学的研究からみたトイレ文化．大田区立郷土博物館編「トイレの考古学」：197-216，東京美術．



第81図　富山城下町遺跡主要部における花粉分布図〔２〕



0.02mm

1．回虫卵（PLC.1151）

2．鞭虫卵（PLC.1152）

3．肝吸虫卵（PLC.1153）

第82図　富山城下町遺跡主要部ＳＫ03から産出した寄生虫卵

第10節　動物遺存体同定

納屋内高史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）

1．はじめに

報告する資料は、2013年度富山城下町遺跡発掘調査、およびそれに先立って行われた立会調査に伴って出土した動物遺存体である。資料は主に、調査時に検出された溝や井戸、廃棄土抗の埋土から、水づかり状態で出土した。調査時に目視により取り上げられたもののほか、浮遊選別装置（株式会社ユニオンプラスチック製）を使用し、浮遊物フルイ（φ2.0㎜、φ0.425㎜）と内蔵フルイ（φ1.0㎜）で回収し、目視で分類した。。資料の帰属時期は、共伴した土器類などの年代から、おおむね18世紀から19世紀にかけてのものと考えられるが、一部20世紀まで下ると考えられるものも含む。資料の保存状態はおおむね良好である。分析は筆者所有の標本との比較を基本とし、奥谷編〔2000〕、上野・山崎〔2008〕、松井〔2008〕、安部編〔2009〕も参考にした。資料数は、総点数で4,928点に上る。このうち、綱よりも下位の分類群を同定できたものは769点である。なお、種類を同定できなかったものの内、2,811点は硬骨魚類の鱗であり、63点は幼貝を含む微小貝類である。同定できた資料は、シジミ属が340点と最も多く、マダイ、マダイ亜科を含むタイ科が116点、アジ類75点、タラ科46点とこれに続く。以下、同定できたものについて、資料の概要を述べてゆく。

2．分類群ごとの記載

（1）外肛動物

コケムシ類（Bryozoaord.,fam.,gen. et sp. indet.）；ＳＫ11から、骨が１点出土している。

（2）多毛類

カンザシゴカイ科（Serpulidae gen. et sp. indet.）；ＳＫ11から、殻が４点出土している。

（3）貝類

腹足綱

ニシキウズガイ科（Trochidae）；ＳＫ11から、イボキサゴ（*Umbonium moniliferum*）の殻が１点出土しているほか、チグサガイ類の殻が３点出土している。チグサガイ類の内、１点はコマイチグサ（*Momaitrochus pulcher*）の可能性が高い。また、この他にＳＫ11からはニシキウズガイ科の殻が１点出土している。

サザエ？（*Turbo cornutus?*）；ＳＫ11から、殻が１点出土している。殻頂部のみの出土であり、種を断定することは避けた。

ウミニナ（*Batillaria multiformis*）；ＳＫ11から、殻が３点出土している。

アラレタマキビ（*Nodilittorina radiata*）；ＳＫ11から、殻が１点出土している。

ザクロガイ属（*Erato sp.*）；ＳＫ11から、殻が１点出土している。

スズメガイ（*Hipponix trigona*）；ＳＫ11から、殻が１点出土している。

キリオレ類（Triphoridae gen. et sp. indet.）；ＳＫ11から、殻が１点出土している。

陸産貝類（Pulmonata）；いわゆるカタツムリ類。ＳＫ11から、オカチョウジガイ科（Subulinidae gen. et sp. indent.）の殻が１点出土しているほか、目以下の分類群を同定することができなかった殻が４点出土している。

斧足綱

イタヤガイ（*Pecten albicans*）；ＳＥ02から、左殻が１点出土している。

ホタテガイまたはヒオウギ（*Mizuhopecten yessoensis* or *Mimachlamys nobilis*）；ＳＥ03から、右殻が２点出土しているほか、破損が著しく、左右を判別できない殻が６点出土している。ほとんどの資料が熱を受けて白色もしくは暗褐色化しており、また破損も著しい。

イタボガキ科（Ostreidae）；いわゆるカキ類。イワガキ（*Crassostrea nipona*）が、ＳＥ02から左右の殻が各１点、ＳＤ01から右殻が１点、ＳＤ02から左右の殻が各１点、包含層および立会時出土資料から右殻が各１点出土している。また、遺存状態が悪く種を同定できなかった殻が、ＳＫ07から右殻１点および左右不明の殻３点、ＳＫ05から左右不明の殻３点、ＳＤ01から別個体の左右の殻が結合した状態のものが１点出土している。

トマヤガイ（*Cardita leana*）；ＳＫ11から、左殻が１点出土している。

シジミ属（*Corbiculidae sp.*）；ＳＫ11から左殻158点、右殻157点が出土しているほか、ＳＥ02から、左殻１点、右殻４点、左右不明の殻７点、ＳＤ01から左殻２点、右殻３点、包含層から右殻６点、左殻１点、左右不明の殻１点が出土している。遺跡の周辺環境から考えて、ヤマトシジミまたはマシジミの可能性が考えられるが、出土した資料からそのどちらかを判別することは難しい。

サラガイ（*Megangulus venulosa*）；ＳＫ11から、左右不明の殻が１点出土している。

ウチムラサキ？（*Saxidomus purpurata?*）；立会時出土資料から、左右不明の殻が１点出土している。

ハマグリ属（*Meratrix sp.*）；ＳＥ03から、左右不明の殻が１点、包含層および立会時出土資料から左殻各１点が出土している。ハマグリまたはチョウセンハマグリの可能性が考えられるが、遺存状態が悪く、そのいずれか同定できたものはなかった。

（４）顎脚類

フジツボ類（Balanomorpha fam.,gen. et sp. indet.）；ＳＫ11から、殻が11点出土している。遺存状態が悪く、種を断定することは避けたが、形状からオオアカフジツボの可能性が考えられる。

（５）甲殻類

カニ類（Brachyura fam. gen. et sp. indet）；ＳＫ05から、可動指または不可動指の先端部と考えられるものが１点出土している。

（６）硬骨魚類

ニシン科（Clupiedae gen. et sp. indet.）；ＳＥ02から、角骨が１点、ＳＫ03から椎骨が１点、ＳＫ11から主上顎骨、前鰓蓋骨、椎骨が計５点の総計７点が出土している。

カタクチイワシ（*Engraulis japonicus*）；ＳＫ11から、角骨、椎骨が計４点出土している。

マナマズ（*Silurus asotus*）；ＳＫ11から、擬鎖骨が１点出土している。

アユ（*Plecoglossus altivelis*）；ＳＫ05から椎骨１点、ＳＫ11から主鰓蓋骨１点の計２点が出土している。

サケ属（*Oncorhynchus sp.*）；ＳＤ01から、椎骨１点が出土している。

タラ科（Gadidae gen. et sp. indet.）；ＳＤ01から擬鎖骨、椎骨が計２点、ＳＥ02から椎骨を中心に計18点、ＳＫ03から方骨、椎骨が計８点、ＳＫ05から前上顎骨、椎骨が計８点、ＳＫ06から椎骨１点、ＳＫ11から前上顎骨、主上顎骨などが計９点の総計46点が出土している。このうち、ＳＥ02出土の歯骨１点は、スケトウダラに類似する。また、椎骨を中心に刃物による切断痕の見られるものが存在する。

サヨリ（*Hyporhamphus sajori*）；ＳＫ03から椎骨が３点出土している。

フサカサゴ科（Scorpaenidae gen. et sp. indet.）；ＳＫ11から、鋤骨、肩甲骨、椎骨が出土している。

キス属（*Sillago sp.*）；ＳＥ02、ＳＫ03から、椎骨が各２点出土している。

アジ科（Carangidae）；出土したアジ科魚類のうち、属以下の分類群を同定できたものには、ブリ属（*Seriola sp.*）がある。また、この他に科よりも下位の分離群を同定できなかったが、マアジやムロアジなど小型のアジ類（Carangidae gen. et sp. indet.）と考えられるものが出土している。

ブリ属は、ＳＥ02から椎骨２点、ＳＫ03から椎骨を中心に全身の部位が計13点、ＳＫ05から歯骨、肩甲骨各1点の総計17点が出土している。ブリ、カンパチ、ヒラマサの可能性が考えられるが、出土資料からそのいずれかを同定することはできなかった。ブリ属の中でもブリは出世魚であり、富山周辺では、体長35cm程度以下のものをツバイソ、体長35～60cm程度のものをフクラギ、60～80cm程度のものをガンド、80cm以上のものをブリと呼称する。出土した資料のうち、ＳＥ02、ＳＫ03から出土した椎骨の計測値を基に、ブリと仮定して相川他〔1938〕に基づいて体長を推定したところ、ＳＥ02から出土したものについては、体長80～100cm前後、ＳＫ03から出土したものについては、体長30cm前後と推定された。その為、ブリであるとするならば、ＳＥ02出土のものはブリに、ＳＫ03出土のものはツバイソに相当する相当する大きさであったと考えられる。また、ＳＫ03から出土した椎骨１点に、刃物による切断痕が見られた。

アジ類は、ＳＥ02から前上顎骨、主鰓蓋骨などの頭部の部位と稜鱗（いわゆるゼイゴ）を中心に計19点、ＳＫ03から椎骨と稜鱗が計12点、ＳＫ05から稜鱗３点、ＳＫ11から椎骨と稜鱗が計41点の総計75点が出土している。ＳＫ03、ＳＫ11から出土した資料については、そのほとんどが稜鱗である。

タイ科（Sparidae）；出土したタイ科魚類のうち、属以下の分類群を同定できたものには、マダイ（*Pagrus major*）がある。また、この他にマダイ亜科までは同定できたものの、マダイかチダイかの判別のつかなかったもの（Pagrinae gen. et sp. indet.）、科よりも下位の分類群を同定できなかったもの（Sparidae gen. et sp. indet.）がある[註1]。

マダイは、ＳＥ02から前頭骨、頭蓋骨、上後頭骨が計４点、ＳＥ05から頭蓋骨１点、ＳＫ04から前頭骨と上後頭骨各１点、ＳＫ07から前頭骨１点、ＳＫ05から上後頭骨１点、立会時出土資料から歯骨と主鰓蓋骨が各１点出土しており、総計11点を数える。

マダイ亜科まで同定できたものは、ＳＫ11から主上顎骨２点、ＳＤ02から主鰓蓋骨１点、ＳＤ01から主上顎骨１点、ＳＥ02から歯骨、角骨などが計10点、ＳＫ03から前上顎骨、方骨などが計７点、ＳＫ04から間鰓蓋骨１点、ＳＫ05から主鰓蓋骨などが計11点、ＳＫ07から前上顎骨、歯骨、主鰓蓋骨が計11点、包含層から歯骨と前鰓蓋骨が各１点出土しており、総計39点を数える。計測できるものが少なく、正確な大きさを推定できるものは少ないが、30cmから50cm程度の大きさの個体に由来すると考えられるものが多い。

科以下の分類群を同定できなかったものは、ＳＥ01から椎骨などが計６点、ＳＥ02から椎骨を中心に計26点、ＳＫ03から椎骨などが計５点、ＳＫ04から後擬鎖骨１点、ＳＫ05から歯、椎骨などが計16点、ＳＫ06から後擬鎖骨などが計６点、ＳＫ07から間鰓蓋骨、擬鎖骨が各１点、ＳＥ05から椎骨１点、包含層から同一個体に由来すると考えられる椎骨３点が出土しており、総計66点を数える。

これら出土したタイ科魚類には、頭蓋骨や椎骨などを中心に、刃物による切断跡の見られるものが多数存在する。

ニベ科（Sciaenidae gen. et sp. indet.）；ＳＫ03から、前上顎骨１点が出土している。形状から、シログチまたはニベ属の可能性が高い。

ハゼ科（Gobiidae gen. et sp. indet.）；ＳＥ02から前上顎骨が１点出土している

サバ属（*Scomber sp.*）；ＳＥ02から、椎骨が２点出土している。

マグロ属（*Thunnus sp.*）；ＳＥ02から椎骨１点、ＳＫ11から擬鎖骨１点の総計２点が出土している。このうちＳＥ02から出土した椎骨は、相川他〔1938〕の体長推定式に基づいて、クロマグロ、キハダ、ビンナガの場合を想定して体長を推定したところ、体長2.5～3.0m前後と推定された。ＳＫ11から出土した擬鎖骨は小型であり、メジやヨコワと呼ばれている小型の若魚に由来すると考えられる。

ソウダガツオ属（*Auxis sp.*）；ＳＫ03から、椎骨２点が出土している。

カレイ目（Pleuronectiformes）；カレイ科（Pleuronectidae gen. et sp. indet.）とヒラメ科（Paralichthyidae gen. et sp. indet.）が出土しているほか、目よりも下位の分類群を同定できないものが出土している。

カレイ科は、ＳＥ02、ＳＤ01から椎骨各１点、ＳＥ03から角骨、第１血管間棘が各１点、ＳＫ05から尾舌骨と椎骨が各１点出土しており、総計６点を数える。

ヒラメ科は、ＳＫ11から名称不明部位１点ＳＥ02から角骨、前鰓蓋骨、椎骨が各１点、ＳＫ03から椎骨５点が出土しており、総計９点を数える。

目よりも下位の分類群を同定できなかったものは、ＳＫ05から椎骨１点が出土している。

（7）鳥類

カモ科（Anatidae gen. et sp. indet.）；ＳＤ01から、上腕骨、手根中手骨など前肢の部位を中心に、計13点出土している。マガモやオナガガモ程度の大きさの個体に由来すると考えられるものが多いが、マガン程度の大きさの個体に由来すると考えられるものも３点出土している。出土した上腕骨について、江田〔2005〕の基準に基づき、属以下の同定を試みたところ、マガモ属に類似するものが１点、アカハシハジロ属に類似するものが１点見られた。また、肩甲骨、上腕骨、橈骨には、刃物により切断された痕跡やそぎ取られた痕跡を持つものが、それぞれ１点ずつ存在する。

キジ科（Phasianus gen. et sp. indet）；ＳＤ01から、尺骨や複合仙骨、脛足根骨など前肢、後肢の部位を中心に、計29点出土している。出土した部位のうち、烏口骨、上腕骨、大腿骨、脛足根骨について、江田・井上〔2011〕の基準に基づき、属以下の同定を試みたところ、キジと同定できるものが２点見られたほか、キジまたはヤマドリと同定できるものが６点、ニワトリまたはヤマドリと同定できるものが１点見られた。また、上腕骨と肩甲骨各１点に、刃物による解体痕が見られる。

タカ目（Accipitriformes fam., gen. et sp. indet.）；包含層から、足根中足骨が１点出土している。日本列島に生息するタカ目には、オオワシ、オオタカ、トビなどのタカ科の鳥類の他、ミサゴ科に属するミサゴが存在するが、標本との比較が十分でないため、詳細な同定は避けた。資料は、近位部が刃物により長軸直交方向に切断されており、何らかの用途に用いられたものと考えられる。

（8）哺乳類

ネズミ類（Myodonta fam.,gen et sp. indet.）；ＳＥ02から下顎、上顎の切歯が計３点、ＳＫ03から下顎切歯が１点、ＳＫ05から上顎切歯が２点出土している。

イヌ（*Canis familiaris*）；ＳＤ01から、橈骨、尺骨が各１点出土している。２点とも両骨端が癒合しており、成犬のものであるほか、関節部が良くフィットすることから、同一個体に由来すると考えられる。出土した資料の計測値を基に、西中川他〔2008〕の体高推定式に基づいて体高を推定したところ、体高40cm前後と推定された。現在の犬種と比較すると、シバイヌと同程度の大きさである。

ウシまたはウマ（*Bos taurus* or *Equus caballus*）；ＳＥ02から、歯が１点出土している。

３．考察

出土した資料は4,928点に上り、このうち魚類は4,223点と全体の約86％を占める。出土した分類群

は、微小貝類やタカ目、哺乳類を除き食料資源として利用可能な種がほとんどを占めるほか、切断痕や解体痕の見られるものも多数存在する。また、資料のほとんどは、井戸や廃棄土坑、溝の埋土から出土しており、廃棄されたものであることがうかがわれる。その為、今回、分析対象とした動物遺存体は、その大部分が食料残滓を廃棄した結果、生み出されたものと考えられる。

魚貝類は、貝類ではシジミ類が総計340点と最も多く、これ以外に食用と考えられる種は、イワガキやハマグリ属、サラガイなどが少量ずつ出土している。魚類では、マダイ、マダイ亜科を含むタイ科魚類が総計116点と最も多く出土し、アジ類75点、タラ科46点と続く。これ以外はブリ属やカレイ科、ヒラメ科、ニシン科などが出土している。出土した魚貝類は、ホタテガイを除き、皆周辺の河川や富山湾で獲得可能な種ばかりであり、その多くが、遺跡近傍の水域で獲得されたものと考えられる。また、シジミ類のほとんどを出土したＳＫ11から出土した貝類は、シジミ類を除くと食用とはならない微小な巻貝類や幼貝ばかりである。これらの微小貝類は、アラレタマキビやチグサガイ類など潮間帯付近の岩礁や藻上に生息する種が多くを占め、シジミ類の生息域である汽水や淡水に生息する可能性のあるものはほとんど見られない。その為、シジミ類の採取時に混獲されたものである可能性は、ほぼ考えられない。微小な巻貝類や幼貝は、テングサなどの海藻に付着するものが多く、同定できたものの中に藻上に生息するチグサガイ類が見られることから考えて、当地で利用された海藻に伴い、持ち込まれた可能性が考えられるだろう。

出土した魚類のうち、タイ科魚類や、タラ科、ブリ属、ヒラメ科には、刃物による切断痕が見られた。その部位は、椎骨が多いが、特にタイ科魚類については、前上顎骨や歯骨、前頭骨、上後頭骨、前鰓蓋骨など、頭部の骨にも多数見られた。タイ科魚類の頭部は、現在でも兜煮や鍋物の具などに用いられる。特に煮物に用いられる際には、出汁の出をよくするために頭部をいくつかに分割する兜割りが行われることが多い。おそらく、当地で、兜煮や鍋、吸物などのタイ科魚類の頭部を用いた煮物や汁物が作られていたと考えられる。

鳥獣類については、鳥類は、ＳＤ01からカモ科、キジ科がまとまって出土しているほか、包含層からタカ目が１点出土している。哺乳類は、ＳＤ01からイヌが計２点出土しているほか、ウシまたはウマの歯がＳＥ02から１点、ネズミ類がＳＥ02、ＳＫ03・05から計６点出土している。このうち、出土したカモ科、キジ科について、江田〔2005〕、江田・井上〔2011〕に基づいて、属以下の分類群の同定を試みたが、ニワトリなどの家禽と明確に見なせるものはなかった。その為、出土したカモ科、キジ科は、狩猟によって獲得されたものが何らかの形で持ち込まれたものである可能性が高い。また、今回の資料では、鳥類の出土量が多く、食料残滓や道具の素材と考えられるような哺乳類の出土は見られない。しかし、これまでの研究により、中近世においても獣肉や皮の利用が盛んに行われていたことが明らかになっているほか、富山城下町遺跡の過去の調査では、ニホンジカやイルカ類の出土例があり、城下町域での哺乳類の利用も確認されている。その為、当地点で哺乳類が利用されていなかった可能性だけでなく、獣肉や皮のみが搬入されていた可能性を考える必要がある。

今回、タカ目が出土しているが、出土した部位は、足先の部位である足根中足骨であり、近位部が刃物により切断されている。タカ目の足は、足先のみ切断して根付けや下げ物に用いられることがあるが、出土した資料もそのように用いられたのであろうか。

また、出土したイヌは、計測値から体高を推定したところ、体高40㎝前後のシバイヌ程度の大きさと推定された。これまでの近世富山城下町の調査では、紀州犬や四国犬程度の大きさと推定されるイヌが出土している。近世は、イヌの大きさが大型化、多様化することが指摘されているが〔茂原1991〕、今回出土した資料は、近世富山城下町でも複数の大きさのイヌが飼育されていたことを示す

といえる。

これまでの近世富山城下町から出土した動物遺存体は、イワガキ、ハマグリ、マダイ、クロダイ属、カモ科、ニワトリ、イヌ、ネコ、ニホンジカ、イルカ類が少量出土しているのみである〔パリノ・サーヴェイ2010、納屋内2010・2012〕。今回の調査では51種類に上る多様な動物種の出土が見られ、近世富山城下町における動物利用の多様性を出土資料に基づいて示すことができたといえる。

今回の分析結果を、周辺の近世遺跡の事例と比較してみたい。周辺の近世遺跡の事例としては、金沢城本丸の出土例がある〔黒沢2008〕。資料は城郭内から検出された近世前期の廃棄土坑からの出土例であり、今回、分析した資料とは出土状況がやや異なる。しかし、マダイを含むタイ科魚類とタラ科が多出するという点で、今回分析した資料と共通する。比較対象が少なく、断定的に述べることはできないが、このことは、近世期の加賀、越中にタイ科魚類とタラ科を多用する食文化が存在していたことを出土資料から示唆するものといえるだろう。

4．おわりに

今回、富山城下町遺跡出土の動物遺存体を分析した結果、魚類がそのほとんどを占めることが明らかとなった。資料は、その多くが食料資源として利用したものの残滓と考えられた。魚貝類は、遺跡近傍で獲得可能なものがほとんどを占め、その多くが遺跡近傍で獲得されたものと推測されるほか、出土した微小貝類から海藻の利用が示唆された。また、タイ科魚類については、切断痕のある頭部の骨が出土していることから、煮物や汁物の具として利用されていたことが考えられた。鳥獣類は、カモ科、キジ科については、狩猟により獲得されたものが何らかの形で持ち込まれたものと考えられたほか、哺乳類については、肉や皮のみが搬入されていた可能性を考える必要がある。タカ目の出土が見られたが、これについては、根付けや下げ物などに用いられた可能性がある。イヌは、これまでに富山城下町から出土したものと比べて小型であり、当時、様々な大きさのイヌが利用されていたことが明らかとなった。分析結果を、金沢城本丸の事例と比較したところ、タイ科魚類とタラ科が多出するという共通点が見られ、近世期の加賀、越中にタイ科魚類とタラ科を多用する食文化が存在していたことが示唆された。

今回分析した資料からは、魚類の鱗と微小貝類が多数出土したものの、比較標本や時間的な制約から十分な検討を行うことができなかった。今後、これらの分析を更に行うことにより、当地における動物利用を更に明確にできると考えられる。また、今回は他遺跡との比較を十分に行うことができなかったほか、共伴資料や文献資料の記載内容との対比を行うことができなかった。今後、これらを行うことにより、近世食文化における本資料の位置づけを明らかにできると考えられる。

謝辞

今回の分析では、貝類及び水生無脊椎動物の同定に際して、布村昇氏（富山市科学博物館元館長）からご教示を得ました。末筆ながら御礼申し上げます。

註

（1）富山湾に生息するマダイ亜科魚類マダイ、チダイが存在するが、両種は、各骨格部位の形状が近似しており、前頭骨、上後頭骨以外の部位で属以下の分類群を判別することが難しい。しかし、マダイは最大で体長120cm以上に達するのに対し、チダイは最大でも体長45cm程度にしかならないという違いがある。その為、前頭骨、上後頭骨以外の部位については、標本等との比較から、確実に体長50cm以上の個体に由来すると考えられるもののみ、マダイに同定し、それ以外のものはマダイ亜科の同定にとどめた。

参考文献

相川廣秋・加藤益夫（1938）「魚類の年齢査定（豫報Ⅰ）」『日本水産学会誌』7-2 pp.79-89

安部みき子編（2009）『鳥の骨探』,NTS,345pp.

上野輝弥・山崎京美（2008）『硬骨魚類の顎と歯』,アート&サイエンス工房Talai,322pp.

江田真毅（2005）「生活復原資料としての鳥類遺体の研究－カモ亜科遺体の同定とその考古学的意義－」『海と考古学』,六一書房,pp.387-406

江田真毅・井上貴央（2011）「非計測形質によるキジ科遺存体の同定基準作成と弥生時代のニワトリの再評価の試み」『動物考古学』28,動物考古学研究会,pp.23-33

奥谷喬司編（2000）『日本近海産貝類図鑑』,東海大学出版会,1174pp.

黒沢一男（2008）「金沢城跡本丸附段2004-1（2003-8）地点の動物遺体同定」『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ 金沢城史料叢書8』,石川県金沢城調査研究所,pp.253-264

茂原信生（1991）「日本犬に見られる時代的形態変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』29,国立歴史民俗博物館,pp.89-107

西中川駿他（2008）「イヌの骨計測値からの骨長並びに体高の推定法」『動物考古学』25,動物考古学研究会,pp.1-11

納屋内高史（2010）「富山城城下町（町人地）出土の動物遺存体」『富山市考古資料館報』47,pp.14-15

納屋内高史（2012）「近世富山城下町出土の動物遺存体－2006,2008 年度調査出土資料の紹介－」『富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報　富山市の遺跡物語』13 ,富山市教育委員会埋蔵文化財センター,pp.33-37

パリノ・サーヴェイ（2010）「第Ⅳ章　理化学分析」『富山城跡発掘調査報告書一総曲輪四丁目・旅篭町地区優良建築物等整備事業に伴う富山城下町の発掘調査報告』富山市埋蔵文化財調査報告39, 富山市教育委員会埋蔵文化財センター,pp.64-83

松井章（2008）『動物考古学』京都大学出版会,312pp.

種類		部位	左右	SD01	SD02	SE02	SE03	SE05	SK03	SK04	SK05	SK06	SK07	SK11	包含層	総計
腹足類	ニシキウズガイ科	殻	—											1		1
	イボキサゴ	殻	—											1		1
	コマイチグサ?	殻	—											1		1
	チグサガイ類	殻	—											2		2
	サザエ?	殻	—											1		1
	ウミニナ	殻	—											3		3
	アラレタマキビ	殻	—											1		1
	ザクロガイ属	殻	—											1		1
	スズメガイ	殻	—											1		1
	キリオレ類	殻	—											1		1
	オカチョウジガイ	殻	—	1												1
	陸産貝類	殻	—											4		4
	不明	殻	—			1								80		81
		蓋	—											2		2
斧足類	イタヤガイ	殻	L			1										1
	ホタテガイ／ヒオウギガイ	殻	R				2									2
			不明				6									6
	イワガキ	殻	L		1	1									1	3
			R	1	1	1									1	4
	カキ類	殻	L+R	2												2
			R										1			1
			不明								3		3			6
	トマヤガイ	殻	L											1		1
	シジミ属	殻	L	2		1								157	1	161
			L+R											2		2
			R	3		4								156	6	169
			不明			7									1	8
	サラガイ	殻	不明											1		1
	ウチムラサキ?	殻	不明												1	1
	ハマグリ属	殻	L												2	2
			不明				1									1
	不明	殻	R											1		1
			不明			15	1		1						2	19
同定不可		殻	不明	29		9	11				34			21	3	107
総計				38	2	40	21	0	1	0	37	0	4	438	18	599

第38表　出土動物遺存体集計表（貝類）

種　類	部位		左右	SD01	SD02	SE02	SE03	SE05	SK03	SK04	SK05	SK06	SK07	SK11	包含層	総計
ニシン科	主上顎骨		L											1		1
			R											1		1
	角骨		L			1										1
	前鰓蓋骨		L											1		1
	椎骨	腹椎	—						1					1		2
		尾椎	—											1		1
カタクチイワシ	角骨		L											1		1
	椎骨	腹椎	—											2		2
		尾椎	—											1		1
マナマズ	擬鎖骨		L											1		1
アユ	主鰓蓋骨		R											1		1
	椎骨	尾椎	—								1					1
サケ属	椎骨	尾椎	—	1												1
タラ科	前上顎骨		L											1		1
			R								1					1
	主上顎骨		L											1		1
	口蓋骨		L											1		1
	歯骨		L			1										1
	角骨		L			1								1		2
			R			1										1
	方骨		L			1										1
			R						2							2
	後側頭骨		L			1								1		2
	擬鎖骨		L	1												1
			R			1										1
	椎骨	腹椎	—	1		4			4		5	1		3		18
		尾椎	—			8			2		2			1		13
サヨリ属	椎骨	腹椎	—						3							3
フサカサゴ科	前鋤骨		—											1		1
	肩甲骨		不明											1		1
	椎骨	尾椎	—											1		1
キス属	椎骨	腹椎	—			2			2							4
ブリ属	前上顎骨		R						1							1
	主上顎骨		L						1							1
	口蓋骨		L						2							2
	歯骨		L						1							1
			R								1					1
	尾舌骨		—						1							1
	舌顎骨		R						1							1
	肩甲骨		L								1					1
	基鰭骨		R						1							1
	椎骨	腹椎	—			1			2							3
		尾椎	—			1			3							4
アジ科	前上顎骨		L			1										1
			R			1										1
	主上顎骨		R			1										1
	歯骨		R			1										1
	角骨		L			1										1
			R			1										1
	方骨		L			1										1
	前鋤骨		—			1										1
	前鰓蓋骨		L			2										2
	主鰓蓋骨		R			2										2
	椎骨	腹椎	—						2							2
		尾椎	—			2			1					2		5
	稜鱗		—			5			9		3			39		56
マダイ	歯骨		R												1	1
	前頭骨		—			2				1			1			4
	頭蓋骨		—			1		1								2
	上後頭骨		—			1				1	1					3
	主鰓蓋骨		L												1	1
マダイ亜科	前上顎骨		L						1							1
			R	1					1				1			3
	主上顎骨		L			1					1					2
			R											2		2
	口蓋骨		R			1										1
	歯骨		L										1			1
			R			2			1				1		1	5
	角骨		L			1					1					2
			R			1			1							2
	方骨		L										1			1
			R			1			2							3
	尾舌骨		—								1		1			2
	頭蓋骨		—								1					1
	主鰓蓋骨		L								2					2
			R		1						3		1			5
	前鰓蓋骨		L			1							1			2
			R												1	1
	間鰓蓋骨		L							1						1
			R										1			1
	上擬鎖骨		R			1							1			2
	擬鎖骨		L			1							2			3
			R								1					1
	椎骨	第一椎骨	—						1		1					2
タイ科	前上顎骨		R						1							1
	主上顎骨		R								1	1				2
	歯		—								3			1		4
	尾舌骨		—			1										1
	舌顎骨		L			1					1			1		3
			R								1					1
	前鰓蓋骨		L			1										1

第39表　出土動物遺存体集計表（魚類）〔1〕

種　類	部位		左右	SD01	SD02	SE02	SE03	SE05	SK03	SK04	SK05	SK06	SK07	SK11	包含層	総計
タイ科	間鰓蓋骨		L										1			1
	後側頭骨		R								1					1
	擬鎖骨		L									1	1			2
	後擬鎖骨		L									1				1
			R							1		1				2
	肩甲骨		L			3										3
			R						1		1					2
	椎骨	腹椎	—			6			1		2			3	3	15
		尾椎	—			11		1	1		4	1				18
	不完全神経間棘		—			1					1	1				3
	第1血管間棘		—			1			1					1		3
	名称不明部位		—								1					1
ニベ科	前上顎骨		L						1							1
ハゼ科	前上顎骨		R			1										1
サバ属	椎骨	腹椎	—			1										1
		尾椎	—			1										1
マグロ属	擬鎖骨		R											1		1
	椎骨	腹椎	—			1										1
ソウダガツオ属	椎骨		—						2							2
カレイ科	角骨		L						1							1
	尾舌骨		—								1					1
	第1血管間棘		—						1							1
	椎骨	尾椎	—	1		1					1					3
ヒラメ	角骨		R			1										1
	前鰓蓋骨		R			1										1
	椎骨	尾椎	—			1			5							6
	不明		不明											1		1
カレイ目	椎骨	尾椎	—								1					1
不明	鱗			24		186			651		1730	6	5	204	5	2811
	その他			2	0	15	0	1	28	0	10	0	3	27	1	87
同定不可				2		205		2	338		185	2	1	292		1027
総計				33	1	496	0	5	1078	4	1970	15	23	597	13	4235

第40表　出土動物遺存体集計表（魚類）〔2〕

分類群	種類	部位		左右	SD01	SD02	SE02	SE03	SE05	SK03	SK04	SK05	SK06	SK07	SK11	包含層	総計
外肛動物類	コケムシ類	骨		—											1		1
多毛類	カンザシゴカイ類	殻		—											4		4
顎脚類	フジツボ類	殻		—											11		11
甲殻類	カニ類	可動指／不可動指		不明								1					1
鳥類	カモ科	頭蓋骨		—	1												1
		烏口骨		L	1												1
		肩甲骨		L	1												1
		上腕骨		L	1												1
				R	2												2
		橈骨		R	2												2
		尺骨		R	2												2
		手根中手骨		L	1												1
				R	1												1
		脛足根骨		L	1												1
	キジ科	頭蓋骨		—	2												2
		胸骨		—	1												1
		鎖骨		—	1												1
		烏口骨		L	1												1
				R	1												1
		肩甲骨		R	1												1
		上腕骨		L	2												2
				R	2												2
		橈骨		L	1												1
				R	1												1
		尺骨		R	3												3
		手根中手骨		L	1												1
		複合仙骨		—	4												4
		大腿骨		L	2												2
				R	2												2
		脛足根骨		L	3												3
				R	1												1
	タカ科	足根中足骨		L												1	1
	不明				11					2						1	14
	同定不可									2							2
哺乳類	ネズミ類	歯	上顎I1	L			1					1					2
				R								1					1
			下顎I1	L			1										1
				R			1			1							2
	イヌ	橈骨		R	1												1
		尺骨		R	1												1
	ウシ/ウマ	歯		不明			1										1
	同定不可														1		1
不明	同定不可				1			1				1			3	1	7

第41表　出土動物遺存体集計表（その他）

1：マダイ頭蓋骨，2：マダイ前頭骨，3：マダイ亜科主上顎骨L，4：マダイ亜科前上顎骨L，5：マダイ亜科歯骨R，6：マダイ亜科角骨L
7：マダイ亜科口蓋骨R，8：マダイ亜科擬鎖骨L，9：マダイ亜科前鰓蓋骨L，10：マダイ亜科主鰓蓋骨L，11：マダイ亜科方骨R
12・13：タイ科椎骨（腹椎），14：マグロ属椎骨（尾椎），15：マグロ属擬鎖骨R，16：タラ科前上顎骨L，17：タラ科主上顎骨L
18：タラ科角骨L，19：タラ科方骨R，20・21：タラ科椎骨（腹椎），22・23:タラ科椎骨（尾椎），24：マナマズ擬鎖骨L，25：ブリ属歯骨L
26・27：ブリ属椎骨（尾椎），28：ヒラメ科椎骨（尾椎），29：カレイ科椎骨（尾椎），30：サケ属椎骨，31～33：シジミ属右殻
34：イタヤガイ左殻，35：ホタテガイまたはヒオウギ殻，36：ウチムラサキ？殻，37：イワガキ左殻，38：タカ目足根中足骨L
39・40：カモ科上腕骨R，41：カモ科尺骨L，42：キジ科烏口骨R，43：キジ科上腕骨L，44：キジ科脛足根骨L，45：イヌ尺骨R
46：イヌ橈骨R

第83図　出土動物遺存体

第11節　結語

岡田　一広（株式会社エイ・テック）
黒沼　保子・森　　将志（株式会社パレオ・ラボ）

大型植物遺体分析と微化石分析では、堆積環境や古植生、栽培植物、遺構の性格などについて、検討を行った。以下では各項目についてまとめる。

1．古環境

堆積環境について珪藻分析の結果を中心に検討する。珪藻分析を行った試料はＳＥ02と基本層序第Ｖ層、ＳＤ01、ＳＫ05の４点である。古代以前と考えられる基本層序第Ｖ層では、ジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地の環境が推察された。18世紀のＳＤ01とＳＫ05においてもジメジメした陸域や河川の流れ込みを伴う湖沼沼沢湿地～沼沢湿地の環境が推察され、湿潤な環境である。同一試料で花粉分析やプラント・オパール分析も行ったが、これらの分析においても、ヨシ属（第Ｖ属）やハンノキ属（ＳＫ05）、ガマ属（ＳＫ05）、ミツガシワ属（ＳＫ05）、サンショウモ属（ＳＫ05）などの好湿性の分類群が産出しており、湿地的環境が推測される。ＳＥ02については、珪藻分析により井戸内面特有の湿った環境が推察された。

古植生については、花粉分析と大型植物遺体分析の結果をもとに樹木植生を中心に述べる。18世紀以前と考えられる基本層序第Ｖ層の花粉分析結果では、スギ属やコナラ亜属が優占しており、遺跡周辺の丘陵地にはスギ林やコナラ亜属などの落葉広葉樹林が広がっていたと思われる。18世紀になると、マツ属複維管束亜属やハンノキ属の産出が目立ち、マツの二次林やハンノキ属の湿地林が広がっていたと思われる。しかし、依然としてスギ林や落葉広葉樹林も存在していた。大型植物遺体分析においても18世紀代にはスギやマツ属、コナラなどの産出が見られ、花粉分析で産出が目立つ分類群と一致する。さらに、大型植物遺体分析では、陽樹のアカメガシワやカラスザンショウ、ニワトコなどの産出も見られ、マツとともにこうした落葉樹も二次林を形成していたと思われる。19～20世紀代の遺構では木本植物化石の産出があまり見られなくなり、林分が縮小したと考えられる。

2．栽培植物と食用魚類

18世紀のＳＤ01ではイネ科花粉や水田雑草を含む分類群であるオモダカ属やミズアオイ属、キカシグサ属の花粉、イネ機動細胞珪酸体、イネの籾殻で形成される植物珪酸体、イネの籾殻、イネの炭化種子などが多く産出した。同じく18世紀のＳＫ06では、水田雑草でもあるコナギやツユクサ、イボクサなどとともにイネの産出が見られた。このような水田稲作に関わりのある植物化石の産出は、18世紀のＳＤ01やＳＫ06周辺における水田の存在を示唆していると思われる。

また、18世紀前半から20世紀の11基の遺構の大型植物遺体分析の結果では、多種類の栽培植物が産出しており、木本植物ではイチョウとモモ、アンズ、スモモ、ウメ、カキノキの６種類が、草本植物ではアサとソバ、トウガン、スイカ、メロン仲間、カボチャ、ヒョウタン仲間、エゴマ、トウガラシ、ナス、ゴマ、ヒエ、イネ、キビ、オオムギの15種類が得られた。花粉分析においても18世紀のＳＤ01においてソバ属やベニバナ属、ゴマ属の産出が確認でき、これらの栽培植物が18世紀～20世紀において遺跡周辺で栽培されていたと考えられる。

各遺構からは、動物遺存体を検出した。その大半は魚類である。その中でもブリ・アジ科、タイ類、タラ類など海生魚類を主体とする。17世紀以降に富山湾では定置網漁が発達しており魚類の安定供給

がしやすかったと推測でき、現在でも豊富で多様な水産物からなる富山の食文化に繋がるものが確認できた。

3．遺構の性格

ＳＫ03とＳＫ04では寄生虫卵分析を行った。ＳＫ03では寄生虫卵が産出し、花粉分析ではイネ科やアカザ科－ヒユ科、アブラナ科など、大型植物遺体分析ではメロン仲間やナスなど、食用や薬用となる植物が多く産出している。よって、ＳＫ03はトイレ遺構の可能性が考えられる。ＳＫ04については寄生虫卵が産出しておらず、花粉分析と大型植物遺体分析では食用や薬用となる植物の産出が少ないためトイレ遺構とはいえない。

4．遺物の年代と材質

遺物の分析では、放射性炭素年代測定と、木製品と炭化材の樹種同定、塗膜分析、繊維状遺物の同定を行った。

ＳＥ02とＳＤ05から出土したタケ製の導水管について放射性炭素年代測定を行った。２σ暦年代範囲（確率95.4%）において、ＳＥ02の試料は、17世紀後半あるいは18世紀前半～19世紀初頭、20世紀前半以降であった。ＳＤ05の試料は17世紀末～18世紀前半あるいは19世紀初頭～20世紀前半であった。いずれも江戸時代前期から近現代の暦年代に相当するが、較正曲線が平坦な範囲にあたるため、これ以上の暦年代の絞り込みは行えなかった。

漆器や漆塗りの木製品については、椀（356・362・361・359）と膳について樹種同定と塗膜分析が行われた。椀（356・361・359）は、木地の樹種はブナ属であった。椀（356）、椀（359）外面の黒色塗膜は、炭粉下地に透明漆層が観察され、その上の文様部からは椀（356）は水銀朱、椀（359）はベンガラの赤色漆層が観察された。椀（361）と、椀（359）内面の赤色塗膜は、炭粉下地にベンガラの入った赤色漆層が観察された。椀（362）は、木地はトチノキであった。黒色塗膜は、土の下地を４層塗り重ね、透明漆が１層塗られていた。膳は、木地はヒノキであった。塗膜は両面とも下地が観察されず、透明漆を１層塗った後、黒色塗膜はさらに透明漆を１層、赤色塗膜はベンガラの入った赤色漆が１層塗られていた。以上から、椀（356・362・361・359）では、椀（362）が木地も塗膜構造も他の漆器とは異なっていたことがわかった。

その他の木製品の樹種同定では、スギとヒノキが多く確認された。スギを多用するのは、北陸地方における木材の利用傾向と一致している。花粉分析でもスギが多く産出しており、遺跡周辺の植生を反映している可能性がある。一方、下駄や椀、数珠などでは広葉樹が使用されるなど器種によって用材傾向が異なっていたため、用途に応じて樹種を選択利用していたと考えられる。また、炭化材はすべて広葉樹であった。炭化材の用途は不明であるが、クリとブナ属は、木製品と炭化材の両方でみられた。それ以外のコナラ節とカエデ属、クマシデ節、シキミ、フサザクラ、ツツジ属は木製品では検出されなかった。

微細物分析では、土坑ＳＫ05から出土した繊維状遺物の同定を行った。その結果、単子葉類のシュロの繊維と同定された。この繊維はＳＫ05内から大量に出土したうちの１本で、シュロ縄などの用途が考えられる。

以上、自然科学分析の結果から、富山城下町遺跡主要部における周辺地域の古植生や、多様な植物利用を確認することができた。また、大型植物遺体分析・動物遺存体分析や寄生虫卵分析から、当時の人々の食生活についても検討することができた。

第Ⅴ章　総括

第１節　富山城下町遺跡主要部（西町南再開発地区）出土木簡について

鹿島　昌也・坂森　幹浩・浦畑奈津子・小松　愛子

はじめに

富山城下町遺跡主要部（西町南再開発ビル地区）の試掘・工事立会・発掘調査で出土した木簡について、その解釈と用途について若干の考察を行う。木簡は内容から江戸後期～明治期に記されたことが推測される。

本稿は、平成26年２月に富山市郷土博物館において、調査を担当した鹿島（試掘）及び㈱エイ・テック（発掘）が立会のもと、坂森・浦畑（市郷土博物館）、小松（東京大学埋蔵文化財調査室）が解釈した木簡の内容について、検討した結果を鹿島がまとめたものである。

木簡の釈読について

文字が記された資料は、将棋の駒や包丁の柄、断簡も含めると14点を確認したが、第42表に掲げた９点の木簡について検討した。

木簡１　屋号である㋕（かね）与から富山西町の久世伊平宛の荷物に付された荷札木簡である。西町の久世家は江戸時代には福澤屋の屋号を称した商家で、この木簡は苗字に変わった江戸幕末～明治時代に記されたとみられる。総曲輪フェリオ地区の発掘調査〔富山市教委ほか2006〕で「越中富山　福澤屋□兵衛」と記された木札が出土している。「久世家」については次節で述べる。中央左辺寄りに径0.4cmの穿孔がある。文書として完結しており、この大きさの荷札として、久世伊平宛に届けられた荷物に付されていたようである。

木簡２　多数の墨痕が認められ、重ね書きされている。台形を呈し、断簡となっているが、この形状の中に筆跡が収まっている。江戸時代後期以降となると文字を記すには紙が普及していることから、試し書きなどは紙で行うことが一般的である。木片を断簡として利用したのは、下駄などの木製の日用雑器を製作するような工房など、多数の木片を紙の代わりに利用できた環境があったと推測される。

木簡番号	報告番号	遺　構	解　　釈　　な　　ど	種別	用途など
1	503	試掘１Ｔ	「富山西町＼久世伊平様＼㋕与」	墨書	荷札
2	512	立会③	重ね書きが多く、不読	墨書	
3	504	ＳＥ02	不読	墨書	
4	505	ＳＥ05	不読	墨書	
5	511	ＳＤ01	「□　六十・入」	墨書	荷札
6	501	ＳＫ05	「卯十一月廿一日＼弐貫百十文ヵ＼中村屋与三兵衛＼五石之内」	墨書	荷札
7	513	立会⑥	「＜　＞＼大福帳　勝手本より　□（絵画ヵ）＼辰五月」	墨書	文書箱の一部ヵ
8	515	第Ⅲ層	「島屋」	焼印	
9	514	ＳＫ05	「猪口　拾入」	墨書	容器

記号凡例　＼改行　・表裏　□不明文字　〈　〉字数不明文字

第42表　出土木簡一覧

文字については、「七百円（あるいは匁）」や「伺」などの文字が判読できそうな部分もあるが、重ね書きが著しいことから不読とした。

木簡３　墨痕は明瞭であるが、上下が折損し、断片であるため、判読はできない。二次的な木材として利用された可能性がある。

木簡４　左右が折損していることから本来はもう少し幅の広い木簡だったと推測される。表裏に墨痕が確認した。片面には３文字以上の墨痕が確認でき、もう片面には三行にわたる文字列を確認したが、釈読することはできなかった。

木簡５　長方形の短辺の一端を尖らせる形状を取る。短辺のもう一端は折損あるいは折り取った痕跡を観察した。「□　六十」の□は〆の可能性がある。この形状で何らかの目的を持ったもの、備忘録的なものとして使用されたと推測する。尖らせた先端を荷物などに差し込んで目印とした荷札の可能性がある。六十という単位の物が納品された際の検収あるいは出荷の目印として使用されたことがうかがえる。

木簡６　三行目に「五石之内」と読めることから穀類に関係したもので、「中村屋与三兵衛」からの年貢あるいは小作料などに付された荷札木簡と推測する。上部に直径0.3㎝の穿孔がある。

木簡７　長方形を呈するが、長辺が２辺とも折損している。「大福帳」の文字の右側に年号のような文字、左側に「辰五月」の文字が見える。年号は「寛政〇年」あるいは「安政〇年」と推測する。寛政八（1796）年、安政三（1856）年は丙辰なので、「辰五月」の辰年の可能性も考えられるが折損部分が大きいため、不明としておく。「大福帳」については、紙に書かれることが一般的であることから、これを納めた木箱（例えば「倹飩式の文書箱」）に書かれた文字の可能性がある。「大福帳」の下の「勝手本」については、「大福帳」と同じ行に書かれているものの、ややずれて記されていることから「勝手本」の文字は追筆された可能性も推測される。右下の墨痕は、「之」が見え、作字の可能性あるが、上方の左右に手を広げた人物か何かを表す絵画と解釈した。

木簡８　「島屋」と焼印のある曲げ物の蓋板か底板である。総曲輪フェリオ地区の調査では、「車屋」や「酒屋」、「塩屋」、「宮成屋」などの屋号を焼印した曲げ物の蓋板や底板が多数出土しており、「島屋」も曲物容器に屋号を焼印したと推測される。

木簡９　「猪口　拾入り」は猪口が10点揃いで収められた容器の表面に書かれた墨書と推測する。

まとめ

今回検討した木簡の特徴として、木簡２のように通常は紙に書かれる試し書きのような行為を木片に記していること、調査地から木製品の部材と見られる木片が多数出土していることから、木製品を加工するための工房があった可能性が高くなった。飛騨街道の起点に当たることから、飛騨から富山町に運ばれた木材を加工して製品化した工房がこの地にあったことも十分に推測できる。

その一方で、木簡７の「大福帳」は出土した地区が北陸街道に面した商家であったことを裏付ける貴重な資料である。年貢・小作関係の穀物の納品を示すような荷札や六十と単位を表す木簡もあることから、この地が人や物の集まる物流の拠点であったことを物語る。

西町にあった久世家は乾物商でもあり、明治期には八百物も取り扱う問屋であった。城下町で最もにぎやかだった場所の一つ西町における工房や商家の実態が明らかになってきた。今後は、これら文字資料のさらなる解読や資料の増加によって北陸街道に面した城下町の町屋の実態解明が期待される。

木簡については、木本秀樹氏・鈴木景二氏から釈読などについてご意見・教示を得た。

第２節　出土木簡に記された「久世伊平」について

鹿島　昌也

はじめに

平成25年５月15日に実施した、旧大和デパート（鉄筋コンクリート６階建の百貨店宮市大丸富山店として昭和９年に増築）の基礎撤去工事前に実施された試掘で「富山西町＼久世伊平様＼かね与」と記された木簡が出土した。

ここに記された「久世伊平」の子孫にあたる「久世家」が現在も富山市内に続いていることが判明し、平成25年８月に市郷土博物館坂森幹浩専門学芸員とともに、その本家筋の方々や菩提寺である正西寺のご住職から話をお聞きすることができた。その内容とともに、発掘調査地点である富山市西町の古地図などから城下町の商家の変遷を辿ってみたい。

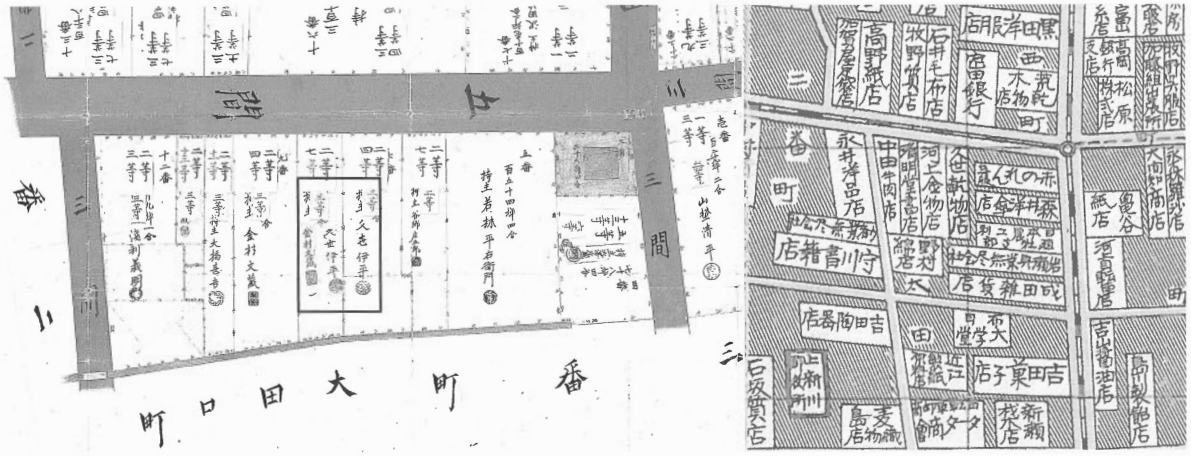
屋号「福澤屋」と「久世家」

久世家は、江戸時代後期に溯り、初代・２代目は福澤屋伊兵衛を名乗った。屋号の福澤屋は、福沢（大山地区）出身だったことによる。

平成18年度の総曲輪フェリオ地区の発掘調査で武家地の戸田邸内のゴミ穴から「越中富山　山イ福澤屋□兵衛殿」（□は伊カ）と記された短冊形の木簡が出土していた（富山市教委ほか2006）。福澤屋は戸田家出入りの青果商として商品を納入していたようである（古川・小川2008）。

明治９年に作成された富山西町古地図には西町七番に「持主　久世伊平」とあり、『寺院明細帳』の真宗本願寺派正西寺の項に「明治22年　富山市西町七番檀家総代　久世伊平」とある。この地に「久世伊平」がいた事を裏付ける。

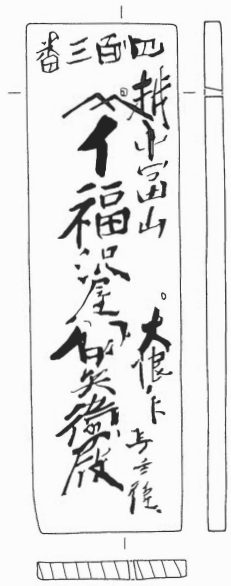
明治21年１月26日付の上新川郡役所報告第２号によると「商業仲間組合取締」に「八百屋物　久世伊平」が選ばれている。大正14年に作成された「大日本職業別詳細図之内」には「久世乾物店」の記載がある。久世家に伝わる昭和期のメモ用紙には「富山市西町＼山イ＼福澤屋　久世伊平」と印刷され、久世家の屋号が福澤屋であったことを伝えている。さらに久世家に伝わる昭和初期の写真に「丸



□の所に「持主　久世伊平」　　富山市立図書館蔵　　富山市郷土博物館蔵

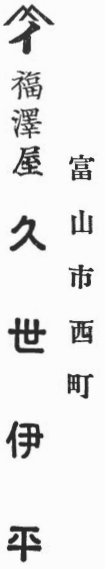
左；新川縣下第十大区小区新川郡富山西町（明治時代）、右；大日本職業別明細圖之内　富山市（大正14年）

第84図　明治時代と大正時代の富山西町古地図



総曲輪フェリオ地区で出土した「福澤屋□兵衛」の木簡（2006　富山市教委ほか）

「久世伊平」が記された木簡赤外線写真（撮影・画像提供：東京大学埋蔵文化財調査室）



久世家に伝わる昭和初期の印刷物

第85図　久世伊平に関する文字資料

八成青果問屋」（現在の富山中央青果株式会社）の半被を着た人物と中央に初代公選市長尾山三郎（明治20年生）と並んで青果問屋社長を務めた久世伊平が収まっている。久世家は北陸随一の問屋とも言われ飛騨神岡や能登、新潟方面とも取引を行っていた。

一方で久世家は、長岡御廟の下で「福澤屋レンガ工場」を営んでいた。明治32年北陸線呉羽トンネル用として県内で初めてのレンガ生産を始めたのは４代目「久世伊平」と推測される。５代目の「久世伊平」は明治22年生、昭和15年没であることから、発掘調査で出土した木簡に記された「久世伊平」は久世姓を名乗り始めた３代目と推測される。５代目の分家筋からは金融再生委員長を務めた元参議院議員「久世公堯」や演出家「久世光彦」を輩出した。

まとめ

久世家において、家系図を拝見した。２代目から３代目に福澤屋から久世姓に変わったことが裏付けられ、平成18年の総曲輪フェリオ地区の発掘調査で出土した「福澤屋」の屋号が入った木札は西町の商家から届けられたものであることがほぼ確実となった。

久世家が所在した西町は近世北陸街道に面し、飛騨街道も交差する交通の要衝でもある。近くには明治時代の絵図にも見えるが水場（井戸あるいは火防用水）や高札場も設けられ、近世富山城下町では最も賑わっていた場所の一つであった。木簡やその他の出土遺物は、これまで殆ど知られていなかった富山城下町の町屋に位置する商家の変遷や実態を物語る貴重な資料となった。

第３節　まとめ

岡田　一広

１．富山城下町成立以前

今回の調査区では、富山城下町成立以前の遺構は検出してないが、古代から近世までの遺物包含層である第Ⅲ層で、９世紀後半の土師器・須恵器や14世紀前半の珠洲が出土したことから、当該期の集落が当調査区周辺に存在する可能性がある。

９世紀後半の土器群は土師器は椀、須恵器は杯Ａ・杯Ｂ蓋・壺・甕類がある。そのうち、杯Ｂ蓋１点に墨書土器がある。欠損部が多く文字の判読はできないが、表面に「□□（未ヵ）」、裏面に「木」とある。周辺では、当調査区から北西側約750ｍの総曲輪遺跡（富山城跡）の西ノ丸広場からは「宅持」と記載された奈良時代の墨書土器が出土し、北西約120ｍのグランドパーキング地点では平安時代の遺構を検出した。墨書土器が出土していることから、当該期の集落は官衙関連施設であると推測する。

常願寺川左岸の扇状地には12世紀初頭に在庁官人の流れをくむ太田氏によって成立したとする太田（大田）保が存在する。この太田保のうち、応永５（1398）年５月３日の吉見詮頼寄進上に「越中国外山郷地頭職」とあり、同年12月17日の越中守護畠山基国遵行状に「東岩蔵寺領越中国□□保内富山郷太田小次郎入道跡」とあることから、富山郷が太田氏の根本所領とし、富山郷の位置は富山城下町の範囲とほぼ同じと推測される〔高瀬編1994〕。当調査区では珠洲のみの出土ではあるものの、周辺に集落が存在し、富山郷に関連すると推測する。

当調査区周辺は北陸街道が通り飛騨街道の起点となるほか、岩瀬・婦負郡・飛騨方面に延びる神通川・井田川や新川郡方面に延びるいたち川がありこれらの河川が交差する場所でもあるため、古代以来、水陸交通の要衝として重要な地点となる。

２．富山城下町成立以後について

はじめに

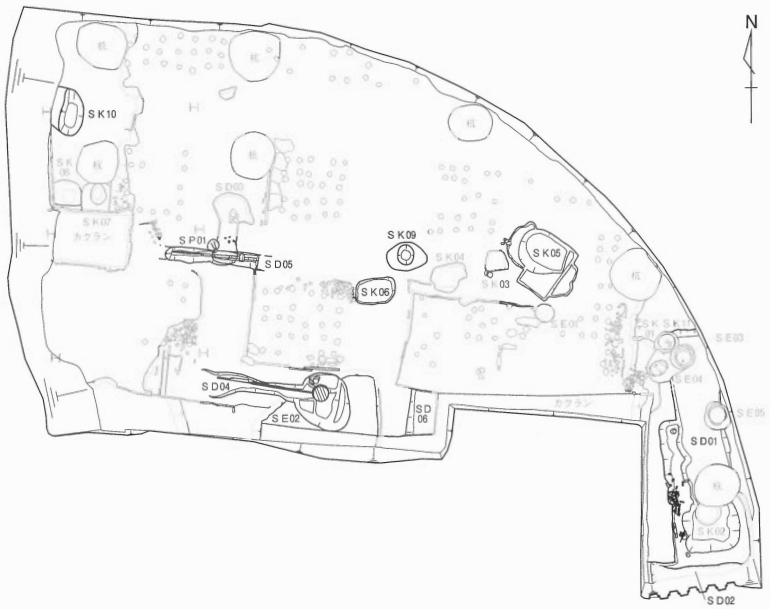
富山城は天文12（1543）年に神保長職が水越勝重に命じて築城したとする。16世紀後葉には織田信長による越中平定に伴い家臣の佐々成政が富山城下の整備を進めた。天正13（1585）年に羽柴秀吉が佐々成政を征伐し、同年に前田利長に礪波・射水・婦負の３郡を与え、天正15（1587）年には新川郡を加えて越中は前田氏の支配下となった。慶長２（1597）年に前田利長は守山城から富山城に移った。

慶長10（1605）年に前田利長は家督を弟の利常に譲り、富山城を隠居城として整備した。慶長14（1609）年に富山城は火事で焼失し、利長は一旦魚津城に移った後、同年に高岡城を隠居城として築城する。寛永16（1639）年に利常の次男利次に10万石を分け富山藩が成立した。当初は百塚に新たに城を築城する予定であったが、資金不足等から加賀藩領であった富山城を借用し城下の整備を始めた。

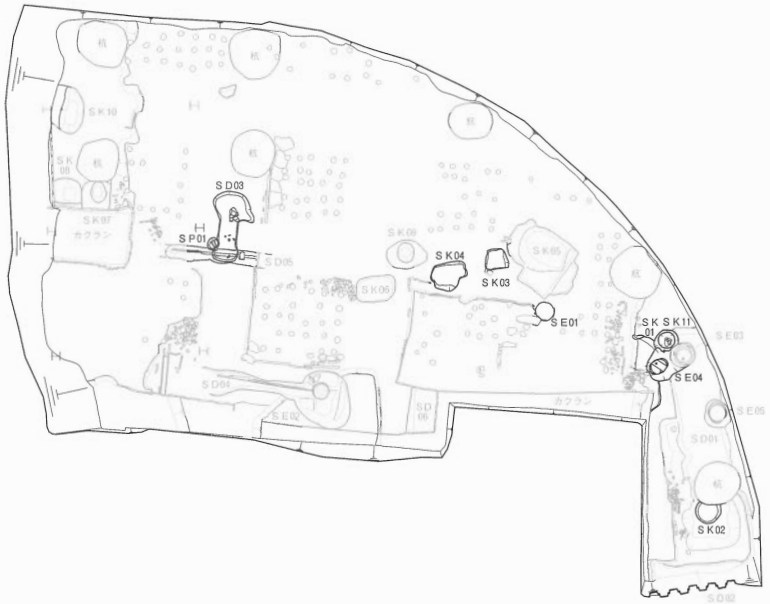
万治２（1659）年に富山藩の飛地となっていた新川郡の一部、加賀国能美郡の領地を加賀藩領である富山城周辺の領地と交換し、富山城と城下町の本格的な整備を開始した。この時、北陸街道は富山城の北東側を通る小島町－片原町－柳町－稲荷町から、富山城の西側に船橋を移し、七間町－平吹町－旅篭町－壱番町－弐番町－西町－中町－東四十物町－片原町－向川原町－柳町へ変更した。

この北陸街道沿いにある西町の西側辻は南方向に延びる飛騨街道の起点となり、東側辻は北陸街道が西から北方向へ折れ、ここに高札場が設置されるなど、富山城下町の要地となった。高札場の後には用心井戸が設置される。当調査区は西町東側辻の南西側に位置する。

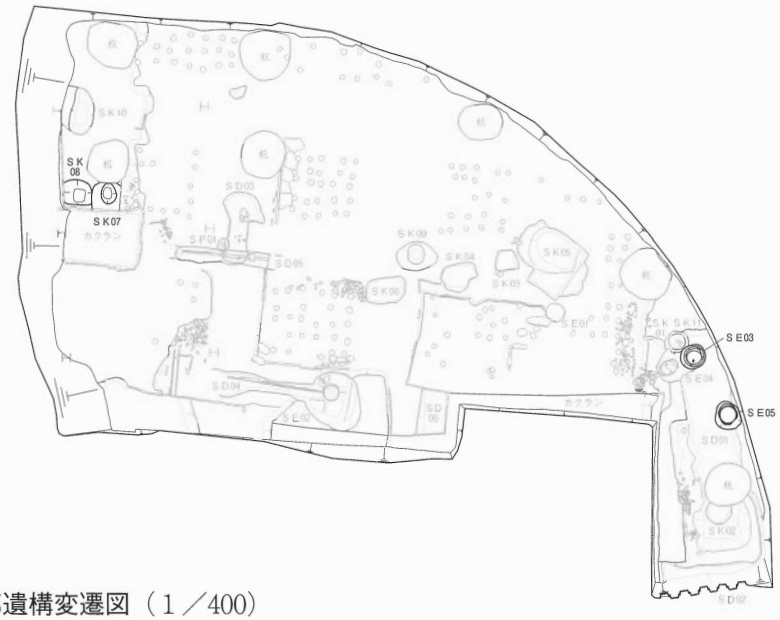
Ⅰ期（17世紀後半～18世紀後葉）



Ⅱ期（18世紀後葉～19世紀中葉）



Ⅲ期（19世紀中葉～20世紀前葉）



0　5　10m

第86図　富山城下町遺跡主要部遺構変遷図（1／400）

井戸の構造

当調査区から、井戸側をもつ井戸５基（ＳＥ01～05）、廃棄井戸（ＳＫ01・02・05・07・09～11）および導水管を埋設した溝（ＳＤ04・05）を検出した。井戸の構造は４つに分類できる。

Ａ類；木製の井戸側があり、導水施設がないもの。さらに井戸の掘削深度によって、標高8.0m前後まで掘削するもの（Ａ１類）と標高6.0m前後まで掘削するもの（Ａ２類）の２種類がある。

Ｂ類；木製の井戸側があり、竹製の導水管が水平方向に延びるもの。

Ｃ類；木製の井戸側があり、竹製の導水管が垂直方向に延びるもの。

Ｄ類；石製の井戸側があり、竹製の導水管が垂直方向に延びるもの。

Ａ１類はＳＥ01・ＳＫ01・02・05・09～10がある。Ａ１類は帯水層である第Ⅵ層まで掘削した後木製の井戸側を設置して周囲からの浸透により水を溜め汲み上げる。井戸側桶は２段以下である。時期は18世紀から19世紀中葉にかけて構築する。

Ａ２類はＳＥ05・ＳＫ07がある。Ａ１類よりもさらに深く掘削してより自噴により水を溜め汲み上げる。井戸側桶は３段以上積み重ねる。時期は19世紀中葉～後葉にかけて構築する。

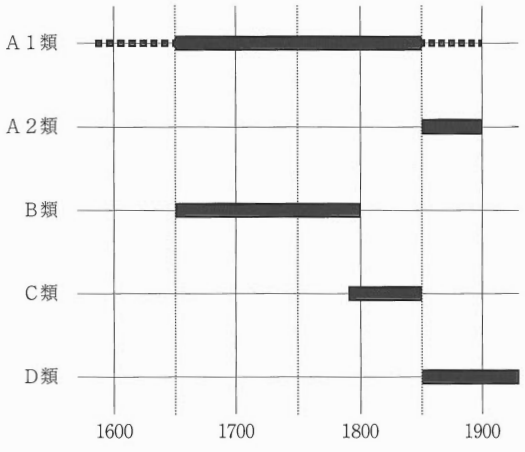
Ｂ類はＳＥ02であり、導水管を埋設する溝としてＳＤ04・05がある。帯水層である第Ⅵ層からの浸透と共に、外部から導水施設により水を溜め汲み上げる。導水施設は継手により延長する。時期は17世紀後半～18世紀後葉である。

Ｃ類はＳＥ04がある。井戸側が埋まるまで掘削して、竹筒を水が自噴できる深さまで打ち込み水を溜め汲み上げる。時期は18世紀後葉～19世紀中葉である。

Ｄ類はＳＥ03がある。構造はＣ類と同じで井戸側が石製である。井戸中には鉄パイプがあり近年まで使用する。時期は19世紀中葉～20世紀前葉である。

Ａ１類・Ｂ類は17世紀後半から18世紀中葉に出現する。Ａ１類は通有の井戸であり、各時期で検出できる。Ｂ類は井戸構築にあたり上水施設から引水したと推定する。江戸や金沢などの近世都市では都市部に上水道を布設することが既往の調査から判明している。今回の調査から17世紀後半に整備された富山城下町でも上水道を布設していた可能性が高い。導水施設であるＳＤ04・05は東西方向に延びており、ＳＥ02が終点となることから、飛騨街道である太田口通り方向から引き込むと推定する。こうした上水施設は他の近世城下町遺跡から類推すれば、飛騨街道や北陸街道等に上水施設を布設している可能性が高い。

18世紀後葉になるとＣ類が登場する。Ｃ類はＢ類のような上水施設がなくても採水できるため、この頃には上水施設が一部機能しなくなったと推測できる。この原因として水害や火災といった災害を想定する。ＳＥ04井戸側の変形が地震に伴うものとするならば、安政地震（1858年）であると推測する。ＳＥ04に隣接してＤ類のＳＥ03を構築する。金屋石は19世紀中頃より金沢城の樋石に用いるなどを盛んに使用する時期とも重なる。Ａ２類は明治時代に入っても使用していることから、Ｄ類と同じく、19世紀中葉以降に構築されたものと推測する。



第87図　井戸変遷図

なお、底板はＢ・Ｃ・Ｄ類は確認できるが、Ａ類

は井戸側が抜き取られる例がほとんどであり、今後検討する必要がある。

トイレ遺構

ＳＫ03の土壌を採取・分析した結果、回虫卵・鞭虫卵・肝吸虫卵の寄生虫卵を確認した。トイレ遺構の可能性が高い。平面形は台形で、内部は板状の木製品他を多量に含む中粒砂で埋没する。江戸時代から昭和の高度成長期頃の下水道が発達していない時期は、都市周辺の農民がトイレのし尿を下肥として活用するため汲み取りしており、当遺構も類例からは便槽があったと推測する。覆土から寄生虫卵が確認できることから、①トイレの内容物が便槽より漏れていた、②便槽を撤去する際に内容物が漏れたの２パターンが推定できるが、本例は②の可能性が高い。長さ10～14cm程度の棒材が出土しており、角を若干丸めていることから籌木とした。

土壌からは、花粉化石としてイネ科、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科等の食用植物、大型植物遺存体としてメロン類・トウガン・モモ・ウメ・サンショウ・トウガラシ・ナス・アンズ・カキノキ・ソバ・ニホンカボチャ・エゴマ・ヒエ・オオムギの種実、動物遺存体としてニシン科・タラ科・サヨリ属・キス属・ブリ属・アジ科・マダイ・マダイ亜科・タイ科・ニベ科・ソウダガツオ属・カレイ科・ヒラメを検出した。同定はできなかったが魚鱗も検出する。これらの食材は現在においても富山の伝統食として食用しており、現在に続く食文化の一端が窺える。

土師器皿と灯明皿

ＳＤ01から油煙が付着していることから灯明皿に用いられた土師器皿が出土した。土師器皿は非ロクロ調整である。土師器皿の口縁部は下記の２タイプに大きく分類できる。

Ａ類；口縁部をヨコナデし口縁端部を上方へ丸めるタイプ（24～16・49・50）

Ｂ類；上方からの押圧により口唇面を水平にするタイプ（47・48・51）

Ａ類は溝ＳＤ01等の18世紀代の遺構から、Ｂ類は19世紀中葉以降のＳＥ05から出土するため、大まかな年代感はＡ類が18世紀代、Ｂ類が19世紀前葉～中葉に位置付けできる。Ａ類は年代幅がある溝からの出土でありまた口縁部はさらに細分できるので、詳細な編年的検討今後必要となる。また、ロクロ整形で口縁部内部に３条の沈線を持つタイプ（53）は18世紀後半となる。

越中瀬戸の無釉の皿は18世紀から19世紀中葉にかけてのものである。また、越中瀬戸の無釉灯明皿以外に施釉灯明受皿や秉燭がある。19世紀になると、京焼系・信楽からの灯明皿や灯明受皿の搬入がある。こうした陶器製の灯明皿あるいは明治時代に入りランプ等の普及から灯明皿としての土師器皿は19世紀中葉頃には生産されなくなったと推測する。

遺構の性格

当調査区の各遺構からは木製品が多量に出土した。点数は2,300点程度出土した。特に曲物の側材に用いる薄い板材・端材が占める。また、箸等の棒状品は300点、下駄歯は47点出土した。製品よりは素材や端材が多く占めることから、当調査区周辺に木材加工場が存在したと推測する。ＳＫ05からは、木箱等の木材加工品のほか、樹皮も出土したことから、特に曲物を生産している可能性が高い。また、使用し目減りしている下駄歯も出土したことから、下駄歯を交換している可能性もある。

石製品には極小の留具や継手（331・332）があり部品の一部である。大型の砥石の他、小型で珪化木製（345）や砂岩製（346）のものもあり、石製小型部品の生産もしていたと推測する。

鞴の羽口、椀型滓が出土したことから、小鍛冶を行っていたと推測できる。このことは、各遺構の覆土から多量の鉄製釘が出土している。釘は頭巻釘を主体とするが524～526は頭部を巻いておらず生産加工直後と推測するものもあることから、古釘を鋳つぶして新しい釘を生産している可能性がある。

建物跡が検出されず、遺構が井戸、トイレであることから、建物は当調査区北側に位置する北陸街

道沿いに建築され、本調査区はこれらの庭にあたる箇所と推測する。こうした庭に木工を主体とする工場を設けたと考える。

本調査区南端で東西方向に走るＳＤ02を検出した。これは万治年間富山旧市街図をはじめとする絵図に西町と太田口町の境とする背割水路が記載しており、位置的にＳＤ02がこの背割水路であると推測する。ＳＤ01はＳＤ02に接続する溝で南北方向に延びる。このＳＤ01の延長線上は西町交差点となる。この西町交差点には高札場があり、その南側には用心井戸があったとされる。したがってＳＤ01は18世紀代の用心井戸もしくは用心井戸に導水する水路と推測する。

結語

今回検出した近世以降の遺構はおおよそ４時期に区分できる。Ⅰ期は17世紀後半～18世紀後葉、Ⅱ期は18世紀後葉～19世紀中葉、Ⅲ期は19世紀中葉～20世紀前葉、Ⅳ期は20世紀前葉以降である。現地調査で下層遺構としたものの大半はⅠ期、上層遺構はⅡ・Ⅲ期に該当する。

各時期の遺構は次のとおりである。

Ⅰ期　井　　戸；ＳＥ02
　　廃棄井戸；ＳＫ05・09
　　土　　坑；ＳＫ06
　　溝　　；ＳＤ01・02・04～06
Ⅱ期　井　　戸；ＳＥ01・04
　　廃棄井戸；ＳＫ01・02・11
　　土　　坑；ＳＫ03・04
　　溝　　；ＳＤ03
Ⅲ期　井　　戸；ＳＥ03・05
　　廃棄井戸；ＳＫ07
　　土　　坑；ＳＫ08
Ⅳ期　建　　物；旧大和富山店

Ⅰ期は万治２（1659）年以降に富山城を加賀藩から富山藩に譲り受け、本格的に富山城下町を整備した時期にあたる。16世紀末から17世紀前半代の遺構がなく、遺物もほどんど出土していないことから、当調査区周辺は、北陸街道を現在の平和通りに移した以降に開発されたと推測する。

Ⅰ期からⅡ期へは盛土造成等を行っていることから、水害や火災によって改変していったと推測する。富山城下町は常願寺川支流のいたち川、神通川およびその支流である井田川が合流する箇所であり、水害が多く発生する。寛政元（1789）年に神通川が氾濫し、富山城の堀や塀を破損した記録がある。明和７（1770）年に三番町から出火し20町896戸を焼失する蓮照寺焼きがある。今回の調査では災害の特定することはできなかったが、こうした災害に起因するものと想定する。

同じくⅡ期からⅢ期への変化は、火災は天保４（1831）年の浜田焼のほか、安政２（1855）年、文久３（1863）年など大火が相次ぎ、大地震として安政５（1858）年の飛越地震、そして飛越地震で崩れた鳶山による土石流災害等相次いで富山城下町は災害に見舞われており、災害復興に起因すると推測する。

Ⅳ期は富山市の都市計画により昭和９（1938）年に総曲輪線の道路拡幅が計画された。このとき、総曲輪線の南側を拡幅とし、道路沿いの建物は後方へ移転することとなった。この移転の際に、金沢に本社がある宮市大丸は西町７番地を久世家から購入し、宮市大丸富山店を開店させた。富山大空襲でも焼け残り、戦後は大和と名称を変更しても富山市街地の中心となりつづけた。

参考文献

穴水町教育委員会　1987　『西川島』
宇野隆夫　1982　「井戸考」『史林』第65巻第５号　史学研究会
江戸遺跡研究会編　1992　『江戸の食文化』　吉川弘文館
江戸遺跡研究会編　2001　『図説　江戸考古学研究事典』　柏書房
江戸遺跡研究会　2013　『江戸と木の文化　〔発表要旨〕』
鹿島昌也　2011　「富山市総曲輪遺跡出土の墨書土器「宅持」について」『大境』第30号　富山考古学会
鹿島昌也　2013　「「中世富山城推定地」から「千石町遺跡」へ」『富山市の遺跡物語』№14
富山市教育委員会埋蔵文化財センター
鹿島町教育委員会　1995　『史跡石動山環境整備事業報告書Ⅱ』
加藤達行・古川知明　2004　「中世富山城の考古学的調査に基づく考察」『富山史壇』第142・143合併号　越中史壇会
加藤達行　2006　「雑感　富山のまち」『富山市の遺跡物語』所報№７　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
金沢市教育委員会　2001　『醒ヶ井遺跡』
金沢市教育委員会　2001　『昭和町遺跡Ⅰ』
金沢市教育委員会　2001　『高岡町遺跡Ⅰ』
金沢市　2002　『木ノ新保遺跡』
金沢市　2003　『昭和町遺跡Ⅱ』
金沢市　2003　『高岡町遺跡Ⅱ』
金沢市　2003　『本町一丁目遺跡Ⅲ』
金沢市　2004　『久昌寺遺跡』
金沢市　2004　『昭和町遺跡Ⅲ』
金沢市　2005　『木ノ新保遺跡Ⅱ』
金沢市　2010　『東山一丁目遺跡』
金沢市　2012　『金沢城下町遺跡（本多町三丁目地点）』
株式会社大和　1972　『大和五十年のあゆみ』　北國新聞社
九州近世陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年』
久保尚文　1996　「中世の柳町」『富山柳町のれきし』
國香正稔　1995　「富山市内の微地形調査」『巡検研究』第３号　富山巡検研究会
公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004　『平安京左京北辺四坊』
財団法人新宿区生涯学習財団　2003　『行元寺跡』
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2000　『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2000　『開發大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告』
坂井誠一　1974　『富山藩』　巧玄出版
島原義三郎・中川達編　2004　『鼬川の記憶』　桂書房
島村昇　1983　『金沢の町屋』　鹿島出版会
清水建設株式会社　2003　『清水建設二百年』
定塚武敏　1974　「越中の焼きもの」『富山文庫』２　巧玄出版
新宿区市谷本村町遺跡調査団　1995　『市谷本村町遺跡　尾張藩徳川家上屋敷跡』
新宿区内藤町遺跡調査会　1992　『内藤町遺跡』
瀬戸市史編纂委員会　1998　『瀬戸市史　陶磁史篇六』
高瀬重雄他　1994　「富山県の地名」『日本歴史地名大系』第16巻　平凡社
田中善男　1993　『城下町富山の町民とくらし』　高科書店
東京大学埋蔵文化財調査室　1989　『東京大学本郷構内の遺跡　理学部７号館地点』
東京大学埋蔵文化財調査室　1990　『東京大学本郷構内の遺跡　法学部４号館・文学部３号館建設地遺跡』
東京大学埋蔵文化財調査室　1990　『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』
東京大学埋蔵文化財調査室　1990　『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』
東京大学埋蔵文化財調査室　2005　『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院外来診療棟地点』
東京大学埋蔵文化財調査室　2005　『東京大学本郷構内の遺跡　工学部１号館地点』
東京都埋蔵文化財センター　1997　『汐留遺跡Ⅰ』
東京都埋蔵文化財センター　2000　『汐留遺跡Ⅱ』
富山縣賣薬同業組合　1943　『富山縣賣薬同業組合沿革史』
富山市　1987　『富山市史　通史上巻』
富山市　1987　『富山市史　通史下巻』

富山市教育委員会　2004　『富山城跡試掘確認調査報告書』
富山市教育委員会　2005　『富山城跡発掘調査概要』
富山市教育委員会　2006　『富山城跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2009　『富山城跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会　2010　『富山城跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会埋蔵文化財センター　2011　『富山市の遺跡物語』所報№12
富山市教育委員会・富山市上下水道局　2012　『富山城跡発掘調査報告書』
富山市郷土博物館　2011　『特別展　街道を歩く―近世富山町と北陸道―』
都立文京盲学校遺跡調査班　2000　『小石川牛天神下』
西弘海　1986　『土器様式の成立とその背景』　真陽社
林寺巌州　1992　「富山城採集遺物について」『富山市考古資料館報』№23　富山市考古資料館
畑中英二　2003　『信楽焼の考古学的研究』　サンライズ出版
畑中英二　2007　『続・信楽焼の考古学的研究』　サンライズ出版
深井三郎　1985　『とやまの水』　北日本新聞社
深井甚三　1995　「要害に囲まれた富山城下」『金沢・北陸の城下町』　平凡社
古川知明　2007　「鼬川と富山城下町」『富山史壇』第152号　越中史壇会
古川知明　2014　『富山城の縄張と城下町の構造』　桂書房
前田英雄　1996　「江戸時代の柳町」『富山柳町のれきし』
宮田進一　1997　「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸』　北陸中世土器研究会
宮田進一　1998　「越中瀬戸の成立と展開」『情報と物流の日本史』　地方史研究協議会
みわしげを　1975　『石臼の謎』　技術書院
森本伊知郎　2009　『近世陶磁器の考古学　出土遺物からみた生産と消費』　雄山閣
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
米原寛　2001a　「多くの魚が運ばれた「ブリ街道」」『ふるさと富山歴史館』富山新聞社
米原寛　2001b　「概説　近世」『ふるさと富山歴史館』富山新聞社

米軍撮影空中写真（昭和21年撮影、縮尺１／10,000、上が北）

上層遺構全景（南西から）

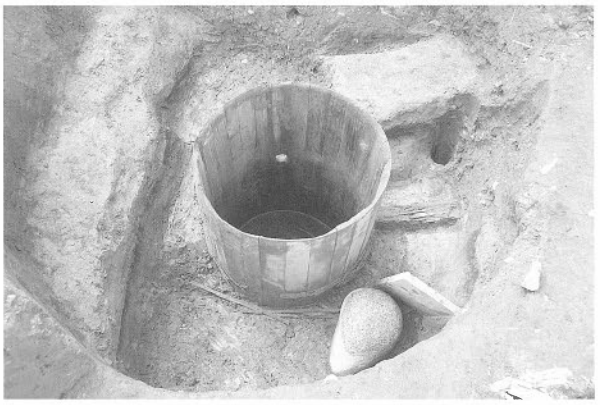
上層遺構全景（上方から、上が北）

下層遺構全景（南西から）

下層遺構全景（上方から、上が北）

ＳＥ02土層（北から）

ＳＥ02完掘（北から）

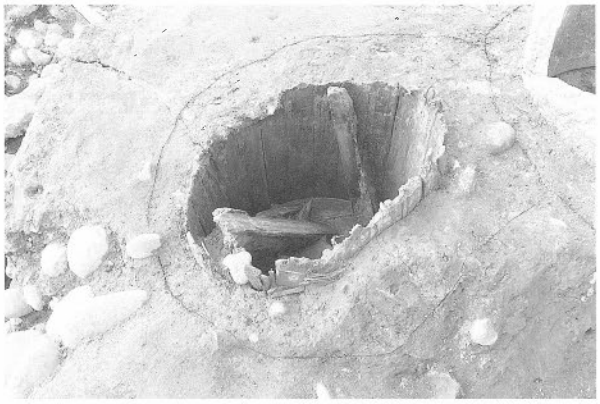


ＳＥ02井戸側下段（北から）

ＳＤ04断面（西から）

ＳＤ04全景（南から）

ＳＥ03全景（南から）



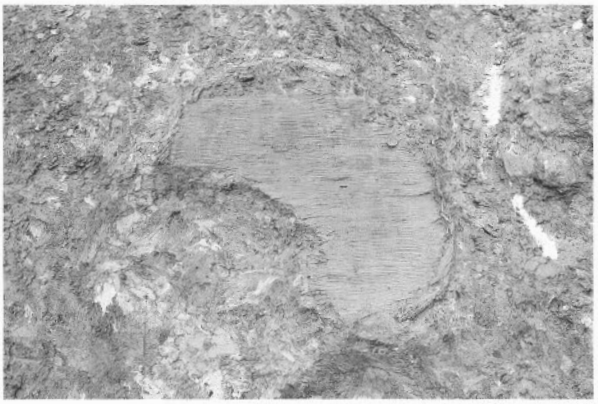
ＳＥ04検出状況（北から）

ＳＥ04全景（南から）

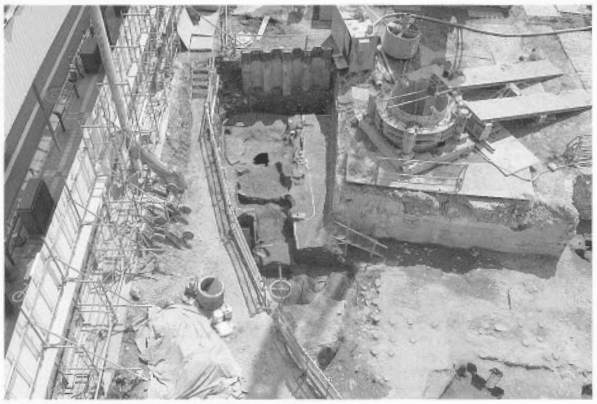
ＳＫ03全景（南から）

ＳＫ03土層（南から）

ＳＫ05全景（東から）



ＳＫ05ザル出土状況（東から）

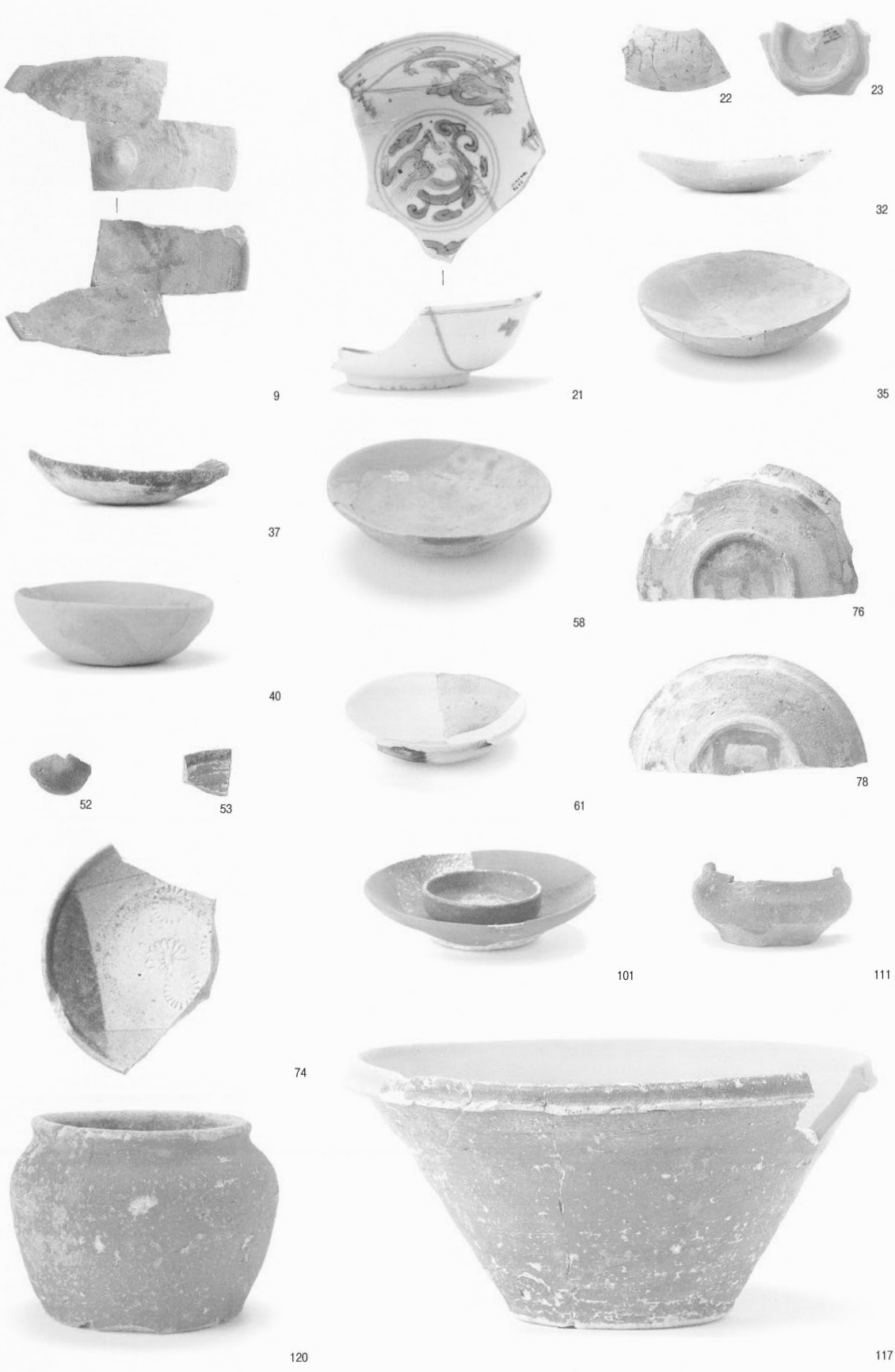


ＳＤ01全景（北から）

ＳＤ01土層（北から）

ＳＥ02・ＳＤ01土層（北から）

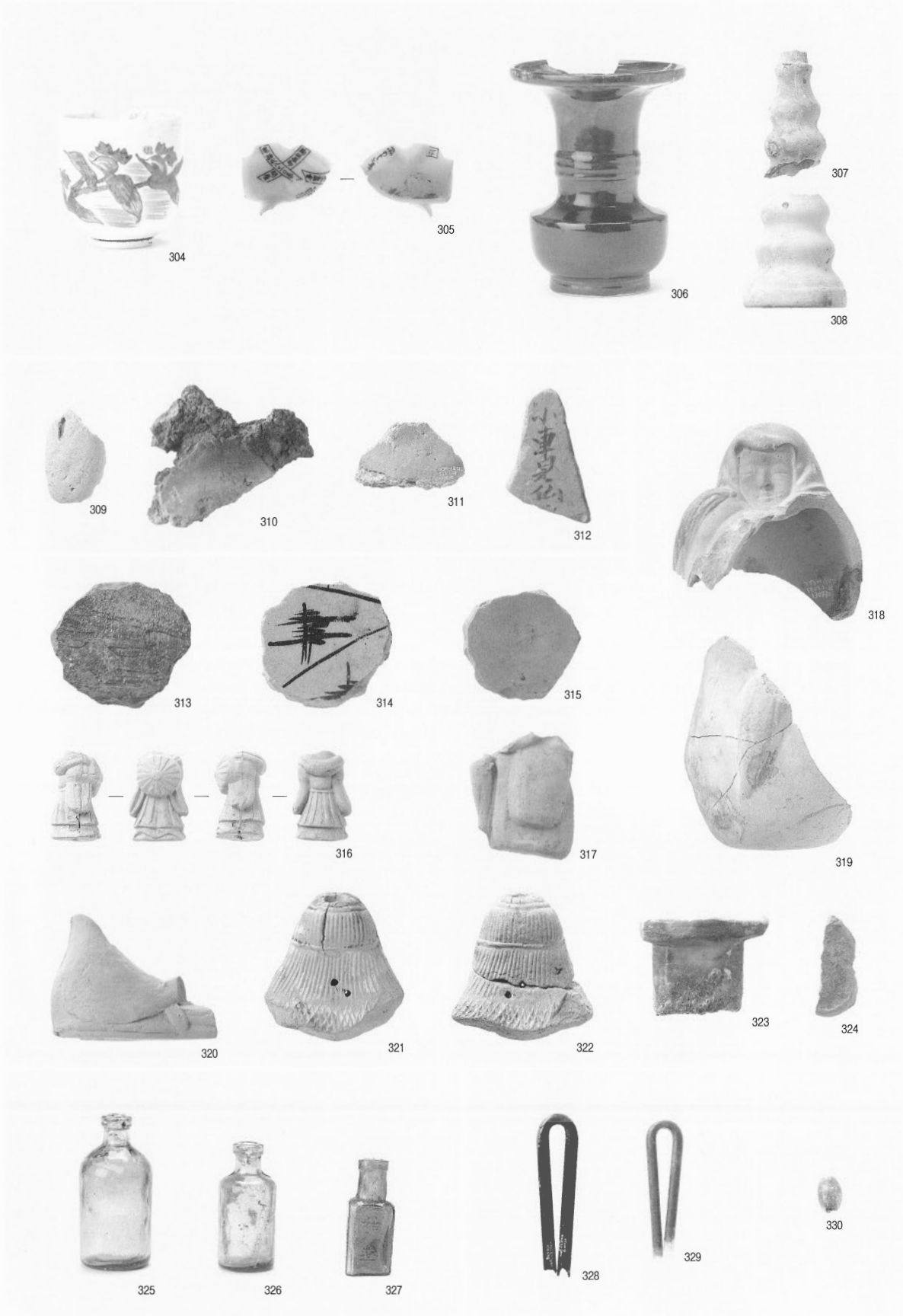
ＳＤ05全景（東から）



須恵器・青花・青磁・土師器・越中瀬戸（縮尺１／３）

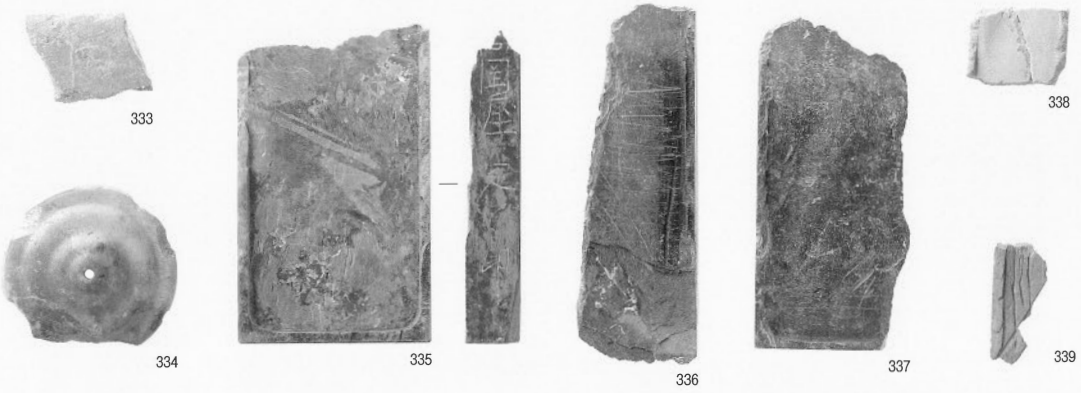
越中丸山・伊万里・唐津・京焼系・瀬戸美濃・瓦質土器（縮尺１／３・１／４）

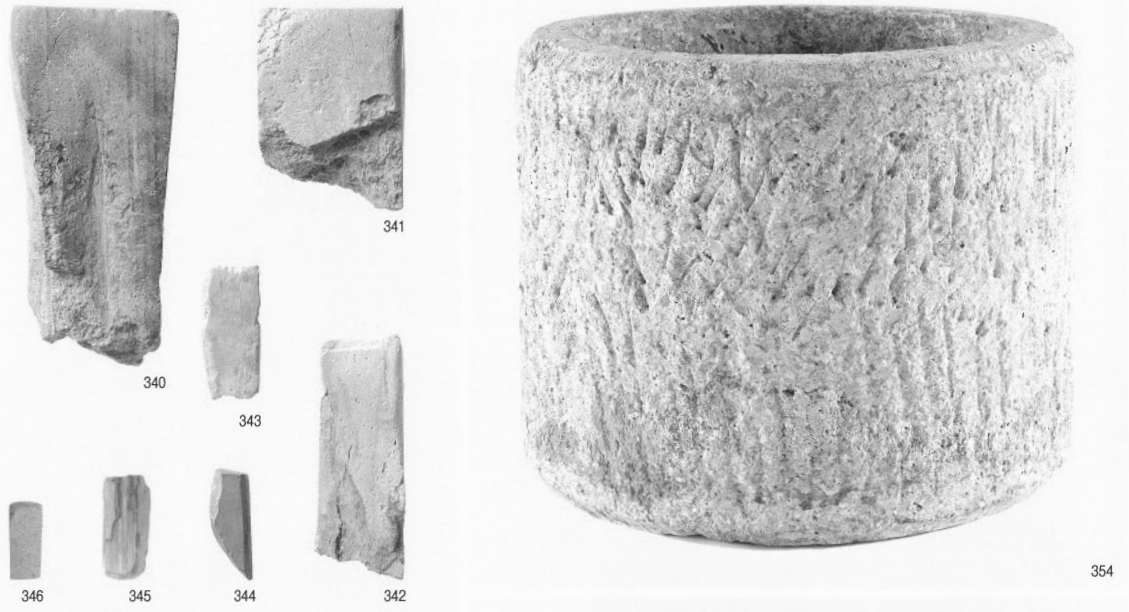
（１／３；129～133・136・139・145・155・166～168・176・229・239・240・243・261・264・294・302、１／４；301）



近代陶磁器類・土製品・ガラス製品（縮尺実大・１／２・１／３）

（実大；330、１／２；318～324、１／３；304～312・325～329）


333
334
335
336
337
338
339


340
341
342
343
344
345
346
354

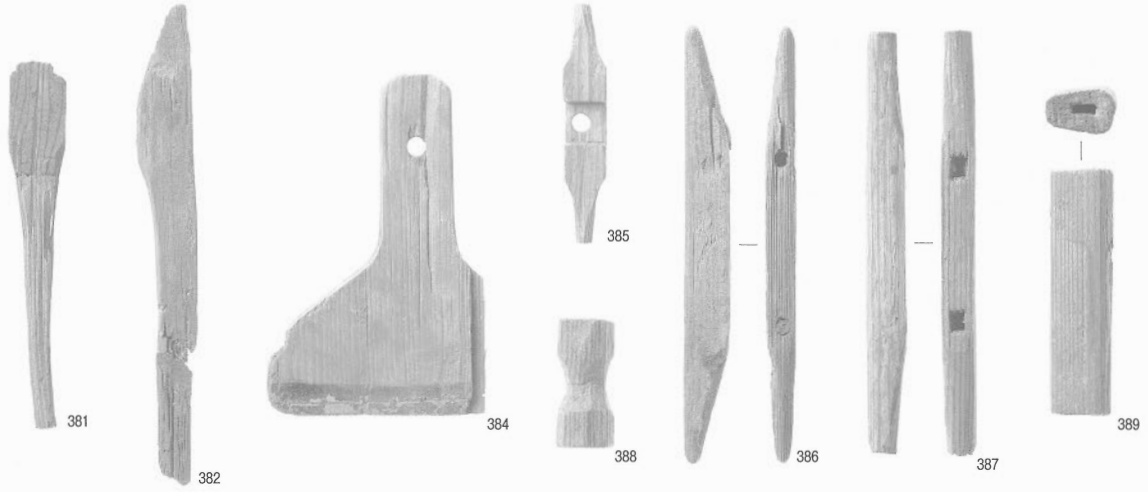
331
332
349
351
353

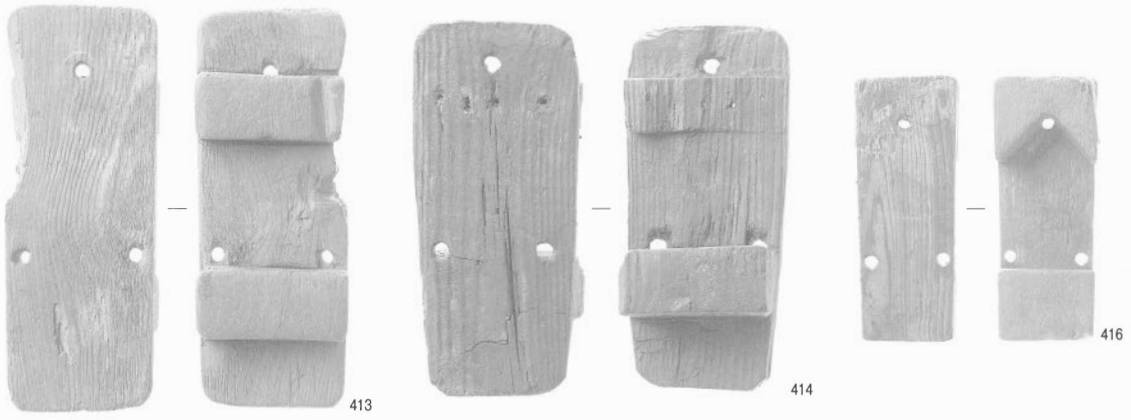
石製品（縮尺実大・１／２・１／３・１／10）

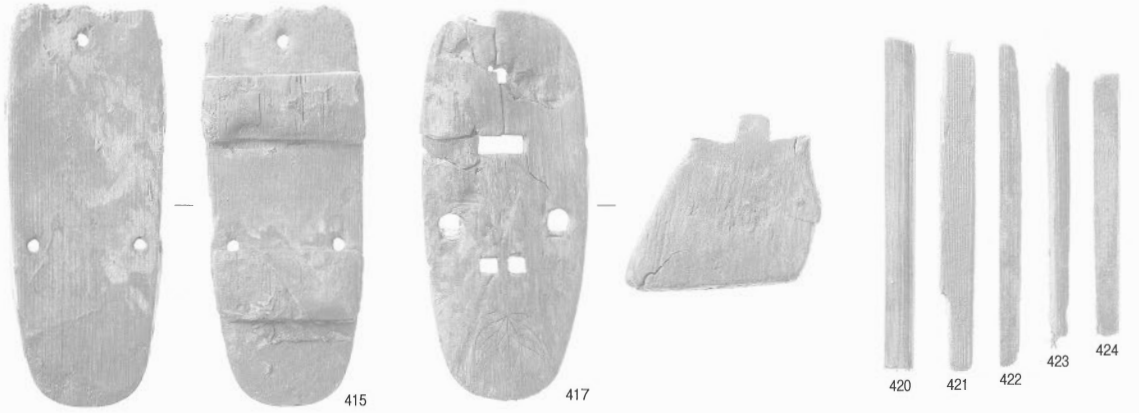
（実大；331・332、１／２；349、１／３；333～346・351、１／10；353・354）

木製品〔1〕（縮尺1／3・1／4・1／6）

（1／3；355・356・358・359・361・362・372～380、1／4；363、1／6；364～366・412）

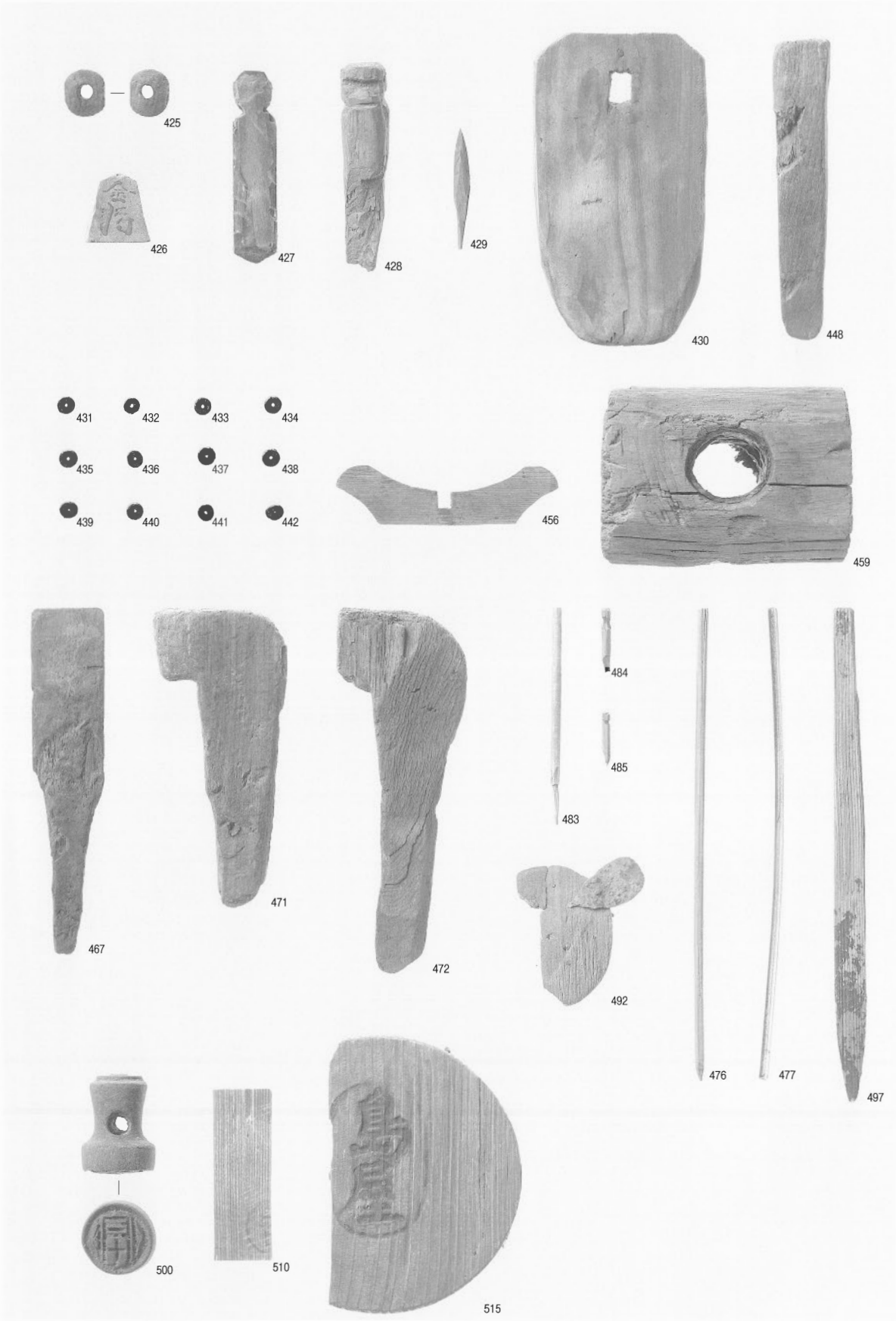






木製品〔2〕（縮尺1／3・1／4）

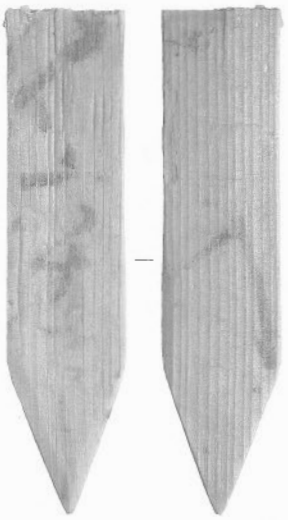
（1／3；381・382・384～389・420～424、1／4；413～417）



木製品〔3〕（縮尺実大・1／2・1／3・1／4・1／6）

（実大；431~442·500、1／2；425·426·510、1／3；427~430·448·456·476·477·483~485·492·497·515、1／4；471·472、1／6；459·467）

木簡・赤外線撮影〔1〕（縮尺１／２）



511

512

513

514

木簡・赤外線撮影〔2〕（縮尺1／2・1／3）

（1／2；511・512、1／3；513・514）

517
521
539
540
522
518
519
520
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
552
541
542
545
546
547
551
543
548
549
550
544

金属製品（縮尺１／２）

報　告　書　抄　録

ふりがな	とやまじょうかまちいせきしゅようぶはっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書
副書名	西町南地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	66
編著者名	近藤顕子（編）、鹿島昌也、納屋内高史、安昭炫、伊藤茂、浦畑奈津子、岡田一広（編）、黒沼保子、後藤浩之 小林和貴、小林紘一、小松愛子、坂森幹浩、佐々木由香、佐藤正教、鈴木三男、竹原弘展、廣田正史、藤根久 森将志、山形秀樹、米田恭子、Bhandari Sudarshan、Ineza Jorjoliani、Zaur Lomtatidze
編集機関	株式会社エイ・テック
編集機関所在地	〒939-1119　富山県高岡市オフィスパーク12番地　TEL 0766-62-0388
発行機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター
発行機関所在地	〒930-0091　富山県富山市愛宕町１－２－24
発行年月日	西暦2014年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
富山城下町遺跡主要部	富山市西町	16201	2011048	36度41分18秒	137度12分55秒	20130701～20130831	380.0	市街地再開発ビル建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富山城下町遺跡主要部	城下町	古代		土師器、須恵器	墨書土器が出土した。
		中世		珠洲	
		近世	井戸、土坑、溝、ピット	中国製陶磁器（青花・青磁）、土師器、越中瀬戸、越中丸山、伊万里、肥前、京焼系、信楽、瀬戸美濃、土製品（土錘・鞴の羽口・墨書土器片・面子・土人形・ミニチュア）、ガラス製品（数珠玉）、石製品（石鍋・紡錘車・硯・砥石・石臼・台石・火打石・行火・井戸側）、木製品（漆器椀・箸・匙・切匙・刷毛・糸枠・木錘・柄・蓋・底板・曲物・籌木・算盤玉・将棋駒・人形・鍬形・鍬形・数珠・印鑑・木簡）、金属製品（鉄製鍋・包丁・鉄製火箸・鉄製紡錘車・鉄製円盤・鉄製釘・鉄製鋲・金銅製キセル・銅銭・真鍮製針金・真鍮製鋲	井戸跡から多量の木製品が出土した。
		近代		九谷、近代陶磁器、ガラス製品（瓶・管）、木製品（木札）	久世伊平木簡が出土した。

要約	本調査区は江戸時代の北陸街道に面し、高札場となった西町東側辻の南西側に位置する富山城下町の重要な場所である。 検出面は２面あり、17世紀後半から19世紀にかけての井戸５基、土坑11基、溝６条、ピット１基を検出した。また遺物として近世陶磁器類の他、木製品の素材・端材、釘・砥石等の加工道具が出土した。以上のことから、当調査区は北側の北陸街道沿いに建築される建物の庭にあたり、曲物をはじめとする木材加工場があったと推測する。

富山市埋蔵文化財調査報告66

富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書

― 西町南地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 ―

発行日　2014（平成26）年３月31日
編　集　株式会社エイ・テック
〒939-1119　富山県高岡市オフィスパーク12番地
発　行　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒930-0091　富山県富山市愛宕町１－２－24
TEL 076-442-4246　FAX 076-442-5810
E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印　刷　中村印刷工業株式会社